異常性慾の分析

フロイド 著

林髞・小沼十寸穂 訳

ARS

フロイド精神分析大系

最近の學界を惡魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學説『精神分析』とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜任意識の摘抉である。

こは……神と惡魔とを同時に忌憚なく暴露し人間内奥の眞を示す新しき哲學である。

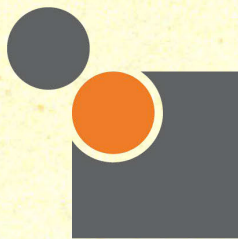
こは……勃起恐怖、中絶性交、潜在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徴、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪惡意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

Freud

Narzissmus Homosexualität Sadismus Masochismus und Infantile Neurose

Freud

異常性慾の分析

林髞・小沼十寸穂訳

フロイド
精神分析大系
15

アルス刊

譯序

フロイドの著作のうちで倒錯性慾を主眼としたもののうち、今まで譯出されなかつたものを主に選び、これを一種の順序に配列して一卷を編んだ。故に此の種のものを斯く選んだのも、亦倒錯性慾とせずに「異常性慾」なる題名を附したのも、尙亦、これを讀者の便宜を顧慮して目次に見られる如く各小篇に分けて配列したのも、共に譯者等のさかしらである。從來倒錯性慾とは、正常の性慾が軌道を外れて一方向にのみ異常に發育又は發達して行つたものと考へてゐたのに對し、フロイドは、正常なる性慾發育は既に極めて早期の小兒期から始まり、これが從來の考へからは倒錯性慾と名付けられるやうな道程を辿つて遂に正常性慾に迄發育し來るのであつて、從つて倒錯性慾の生ずるのは、一旦正常性慾に迄發育し來つたものが、何等かの理由に依り、この發育道程を逆行して、未發育の段階に退行して生じたものか、或は正常性慾迄發育し來らずして未

發育の段階に留まつて了つたものであるとなすのである。

この段階を大まかに分けて見ると、先づ吸啜攝食に關聯したる機能が性慾支配の位置を占める口唇帶性的統帥編成期から始まり、ついで貯糞放尿に關聯したる肛門の機能が性慾支配の位置を占める肛門帶性的統帥編成期を經過し、この間に、自己愛、同性愛、サディスムス、マゾヒスムスなどに陷る契機をはらみつつ、性的穿鑿心(好奇心)、エディプス複合觀念、去勢脅威、一種の罪悪意識等の諸觀念を克服し來り、早期の性慾發育は一先づ終つて、かなり長い性慾潛伏期が來る。やがて所謂思春期に至つて正常性慾、卽ち性器が支配的位置を占める性器的統帥編成期が來るのであるとしてゐる。

フロイド自身も言ふ如く、この早期の小兒期に旣に性慾ありと說く點及び神經症者や正常者の心理分析にあつて、性的事物を重視すること、との二つの點が、精神分析學の最も激しく世間から非難せられ反抗せられた點であり、これに對する反抗こそフロイド門下にも幾多の假說及び分岐を生じた點であるが、同時にこれぞフロイド思想の根本をなすもの、これぞフロイドの與ふる最も教訓的なるものでなくてはならぬ。故に「夢判斷」「超意識心理學」と共にフロイド主著の一

たる「性學說への三論文」は必ず一讀を要するであらうが、この第三の主著を、例證を以て、わかり易くせしむるものが、本書に編んだ諸論文であるから、本書はフロイド性慾學說への最も容易なる道として意義あるものと信ずる。

本書中「自己愛症序論」「フェティシスムス論」「或る小兒神經症の病歷から」の三篇は、共譯者の一人、林の手になるもの、他の諸篇は悉く他の一人、小沼の手になるものである。譯者等は所謂共譯の常套を脫して、互ひに責任を糊塗する事なく、各分擔論文を各〻自己の責任と好尙とに從つて譯出した。從つて一讀して氣附かれる如く、兩者の筆法によるはつきりした差異がある。

由來フロイドの文章は、名文ではあるが難解で、これを譯出するには相當の苦心が要る。其處で一は平明を旨として原文を碎いて讀者に親切ならんとし、他は原文に、より忠實ならんとして、讀者にフロイドの原著を讀むと同樣に文意を章句の間に探る心講へを課する事になつた。然し術語の統一、譯出の正確を期した點は、共に幾度か互ひに琢磨してある故、これは共通の責任である。これ等の意味に於て、本書は多彩なる一卷として讀者に見ゆる事が出來ると信ずる。

終りに、既に昨年の夏に出版すべかりし本書が斯くも後れたのは、譯者等の一人が、遠く歐露

に遊學し、通信も亦不便なりしに依ることを附記して、讀者諸君竝に出版書肆に詫ぶるものである。

一九三三年八月

東京四谷慶應義塾大學醫學部にて

譯者識す

目次

同性性慾

異常性慾序論

自己愛症序論

一九一四年「精神分析年鑑」第四卷に發表、ついで「神經症小論集」に蒐錄、一九一八年初版、一九二二年再版）、更に一九二四年小冊子として單行出版せられたもの。

一

自己愛症（ナルチスムス Narzismus）なる術語は臨床上の記載から出て來たもので、一八九九年、ネッケが次の如き態度を表現しようとして初めて用ひたものである。卽ち自己の身體を、まるで他の性的對象を取り扱ふ場合と同じやうに、性的喜悅を以て、ながめたり、觸つたり、或は愛撫したりして、遂に完全な滿足にまで達するやうな態度を意味する。自己愛症と言ふのは、斯くの如き形を有するものだから、その人の全性的生活を吸收して了つてゐる場合には、一種の倒錯性慾 Perversion としての意義を持つてゐる。從つて、總ての倒錯性慾の研究の場合に有すると同じ期待を持たぬわけにはゆかぬことになる。

然るに精神分析學的研究によると、自己愛症的態度の、個々の特徵は、他の種々なる障礙を有する人の場合にも見出されることがある。例へばサドガァによれば、同性性慾の場合にも見出されることが明らかとなつて來た。其處で遂に、自己愛症と名付けらる可きリビドのこの形は、更に廣い範圍に觀察せられるのではないか、更に又、人間の正しい性慾發育の途上の一時期として

證明されるのではなからうかとの推定がなされるに至つた。此の同じ推定は、神經症者を精神分析的に研究することが困難であると言ふことからも出てくる。*何故困難であるかと言ふに神經症者の有する自己愛的態度は、他からの影響に對して一限界を構成してゐるやうに見えるからである。自己愛症も、この意味に於ては何等倒錯性慾ではない。却つて自己保存の本能の主我的傾向をリビド的に補足してゐるものとなる。自己保存の本能の主我的傾向としてならば、總ての生物が少しは必ず所有してゐるのは當然である。

＊オットー・ランク、『自己愛症説補遺』精神分析研究年鑑、第三卷、一九一一年。

抑も、一次的の、即ち普通の意味の自己愛症なるものの概念を穿鑿せんとする、一切なる動機は、クレペリンの所謂早發性痴呆症 Dementia praecox、ブロイラアの所謂精神分離症 Schizophrenie をリビド學說から理解せんとして研究を始めた時であつた。此等の患者を、余はパラフレニイ症者と呼ぶことを提議してゐるのであるが、此の病氣は二つの根本的の特徴を有する。即ち一つには誇大妄想があることで、もう一つは外界に對する興味を全く失つてゐる（人事についても、事物についても）ことである。この後者、即ち外界に對する興味の喪失は、精神分析を受付

けず、從つて我々の努力にも拘らず治癒しない。此等パラフレニィ症者の外界からの轉向は更に精細に區別する必要がある。ヒステリィ症者でも、强迫神經症者でも、その病症が示してゐる所だけ見ると、現實に對する關係を捨ててゐる。然し分析して見ると、人事や、事物に對する性的關係を少しも放棄してはゐない事がわかる。彼は確かにこれ等の關係を空想のうちに把持してゐる。卽ち一方に於ては、現實の對象を、その記憶中の空想對象で置きかへてゐるか、或は現實と空想とを混合して持つてゐるかする。同時に他の一方に於ては、その對象によつて目的を達するやうに行動を起すことをも全く放棄してゐる。ユングは特別に區別を判然とさして用ひなかつたが、ユングの所謂**リビドの內向** Introversion と言ふ言ひ現しが、正に上記の如きリビドの狀態に對してあてはまる。ところが、パラフレニィ症者に於ては全くこれとは別である。パラフレニィ症者では、何等空想中の他物で置きかへると言ふ樣な事はなさず、實際に外界の人事及び事物からリビドを取り去つて了つてゐる。そして、若しもこの置き換へが行はれてゐることがあるとすれば、それは第二次的のものであるに違ひなく、且リビドを對象に返却しようとする、卽ち治癒の試みに屬するものであると考へられる。*

＊此の主張に關しては、元老院議長シュレーベルの分析中に述べてある「世界の滅却」の討議（一九一一年）を參照せよ（全集第八卷）。

更に、アブラハムの「ヒステリイ症者と早發性痴呆症者との間の性慾心理的の鑑別」（一九〇八年、精神分析學臨床、二三頁）を參照せよ。

さて、此處に問題がある。卽ち精神分離症の場合に、對象から奪取されたリビドは結局どうなるかと言ふ問題である。此の場合には、それは誇大妄想の中にはけ口を見出す。誇大妄想そのものが、對象リビドによつて成立するのである。斯くして外界より引き上げたリビドは自我に歸し、依つて自己愛症と名付く可き態度を成立せしめる。但し、斯くて生ずる誇大妄想それ自身は、新たに發生し來つたものではなく、旣によく知られる如く、從來持ち來つた或る狀態の、誇大となり、明瞭となつたものである。其處で此の場合に特に附記せねばならぬことは、對象充塡の轉じ來ることから生ずる斯かる自己愛症は第二次的のものと考ふ可きであると言ふ事である。この第二次的の自己愛症は、勿論第一次的のものを土臺として生じ來るもので、種々なる影響によつて第一次的のものが不明瞭となつて生じ來るのである。

更に注意を要す可きは、余は此處で、精神分離症について言ひ出したが、精神分離症の問題について何等説明し又は探究せんがためではない。自己愛症の研究を始めるために、既に他の場所で言はれたことを綜括して見たに過ぎないのである。

リビド學説を斯く發展せしめて來ると、余の意見では、當然、第三の成果が、小兒や、原始民族の精神生活についての余等の觀察、理解等から得來る事が出來る。原始民族の有する種々なる特徵を分解して見ると、誇大妄想に歸せしむ可きものが澤山發見せられる。例へば、祈願や、精神活動の力の過信、「念願の全能」、咒文を信ずること、外界に對する手法としての魔法、等は、正に誇大妄想を假定せしめ、且その假定の當然適用し得る事柄と考へられる。* 又、我々は全く同樣な、外界に對する傾向を、その發生の過程は、原始民族の場合より更に洞見し難いほどであるにはあるが、現代の小兒にも見出し得る。** 斯く考へて來ると、リビド充塡は、本來は自我に存するもので、後に對象に向つて與へられるものであると考へることが出來る。斯く外に與へられるが、然し根は尚自我のうちに殘つてゐるもので、恰も單細胞生物の體と僞足との關係のやうに、僞足が外に延び出てゐるが如くである。斯かるリビドの片付け方は、神經症の研究から發展

して來た我々の研究にあつても、初めはわからずに居つた。リビドが斯く發出すること、外へも出るし、再び內へも引込む對象充塡は、我々自身にすら甚だ珍奇と思はれたものである。尙我々は、自我リビドと對象リビドとは大體に於て相反するものであることを知つてゐる。卽ちその一方に澤山消費されると、一方にはなくなる。對象充塡にばかりリビドが入つて了つた狀態、卽ち自己の個性がすつかり無くなつて、唯對象充塡のみとなつて了つたと考へられる狀態は、惚れ込みの狀態 Zustand der Verliebtheit と呼ばれる。そしてこれに全く相反する狀態は、パラノイア症者の有する空想(自己認識)のうちに、世界の滅却となつて現れて來る。** さて最後に、心理的エネルギイの區別について次の如き推論を與へる。卽ち第一に心理的エネルギイは、初めは自己愛症の狀態で混合してゐて、簡單なる分析では區別し難い狀態にあること、第二に對象充塡が可能となつて初めて、心理的エネルギイは二つに區別せられ、一は性的エネルギイ、卽ちリビド、他は自我本能のエネルギイとに區別せられると言ふことである。

* 拙著「トーテムとタブー」(一九一三年)の同名の章を參照(全集第十卷)。

** フェレンチ「現實知覺の發生階段」國際精神分析學雜誌、第一卷、一九一三年、參照。

＊＊＊斯かる世界滅却については二つの動機がある。卽ち總てのリビド充塡が、愛する對象に流れ込んで了つても外界は滅却するし、總てのリビド充塡が自我に引込んで了つても外界滅却が生ずる。

更に進む前に、余は二つの疑問に觸れねばならぬ。これ等の疑問は、本題の最もむづかしい部分に屬するものである。第一に、現在吾人の論じてゐる自己愛症なるものは、旣にリビドの早期狀態として吾人の論じたことのある、自己色情 Autoerotismus とは如何なる關係にあるかと言ふこと、第二に、若しもリビドの第一次的の充塡を自我のうちに認めるとするならば、一體何故に性慾的のリビドと、自我本能の非性慾的エネルギイとを區別する必要があるか。唯一つの心理的エネルギイをその基礎に假定して置けば、自我本能のエネルギイと自我リビドの區別、自我リビドと又對象リビドの區別等はしなくても濟むのではないかと言ふことである。第一の疑問については次の如く答へよう。個體のうちに、自我に比較されるやうな單位は、ほかには初めからは存在してゐないのであるとの假定が非常に必要である。何故ならばそれは自我の發育によつてあとから出て來るのであるから。而も、自己色情的本能は初めから存在するものである。故に自己愛症となるのは、この自己色情的本能に、何か一つ新しい心理的活動が附け加はつたものと考ふ

可きである。

第二の疑問に對して、決定的の答へを與へよと要求されると、精神分析者は誰でも、明らかな不滿足を覺えねばならぬ。然し、空なる理論的闘爭のために、事實の觀察を捨て去るわけにはゆかぬ故、とも角も說明せんと試みることを避けてはならない。成程、自我リビドであるとか、自我エネルギイであるとか等の概念は、特に明瞭に理解し得るわけでもなく又內容豐富であると言ふわけでもない。此等の問題について、思索的の理論を打ちたてるためには、判然と限定せられた一つの概念を基礎として出發せねばならぬ筈である。然し、余は思ふ。斯くの如きは正に思索的理論と、實驗の解釋に打ち立てられた科學との間の相違である。後者は思索的研究の、平坦な、論理上非難なき基礎付けのある點を羨望してはならぬ。しかのみならず、寧ろ雲の如く一時的の、又表象するに困難な基礎思想をも喜んで取り入れ、これ等はその學の發達の途上で、漸次に明瞭に形づくつてゆき、或は時とすると全く別の思想になつて了ふこともあるかも知らぬが、それで滿足す可きである。此等の觀念は、勿論、依つてその上に一科學を建立す可き基礎要素ではない。寧ろ、觀察そのものであると考ふ可きである。此等の觀念は全建築の最下の基礎ではな

く寧ろ最表層のものである。何時でも、惜氣もなく他のものと代らば代り得るものである。同樣なことが、現代に至つて物理學に於ても經驗しつつあるではないか。物理學の基礎觀であるところの・物質、力の中心、引力及びその他は、精神分析學の基礎觀念と同樣に、今尙動搖してゐる觀念ではないか。

自我リビド、對象リビド等の諸概念の價値は、それ等が、神經症や精神症の深い特性を研究して出で來つた點に存する。リビドを、自我に固有するリビドと、對象に屬してゐるリビドとに區別することは、性的本能と自我本能とを區別すると言ふ第一の假定から導かれる、避け得ぬ假定である。少くとも純粹轉授神經症(ヒステリイ症及び强迫觀念)の分析に當つて、それが必要であつた。而も、余は、此等の病症を分析するために、他の方法をとると言ふ總ての試みが失敗に歸するものであると言ふことを知つてゐるのである。

現在、指導的の本能學の何等存在しない場合に當つては、先づ何か首尾相整ふ假說を立てて、これが遂に駄目になるか、或は好都合なるかを試みて見るのは許さる可き事であるのみならず、望ましい事でもある。斯くて、性慾本能と、自我本能とを初めに區別したのは、轉授神經症の分

析のために、是非共必要であり、且好都合でもあつたのである。然し、此の場合にそれが全く明瞭にあてはまると言ふわけではない。何故ならば、今は對象充塡をなして、初めてリビドとなるやうな、自由な心理的エネルギイを論じてゐるのであるから。唯、概念としての此の區別は、第一に通俗になしてゐる、食慾と性慾との二つの區別にも相當してゐるし、第二の生物學上の考察を試みて見ても正當と思はれるのである。個體は二重の存在を送つてゐるものである。一つは自身を目的として、もう一つは連鎖のうちの一環として、而も此の連鎖のためには、個體の意志によらずに奉仕せねばならぬのである。個體はその性慾性を自分自身の意圖の一つと考へてゐるが、他の見地から見ると、個體は唯單にその胚原形質の一附屬物で、この胚原形質のために自分の力を盡してゐる、ほんの僅かの快樂を報酬として受取るに過ぎない。言はば不死なる――不死と言うてよいであらう――本質の、死す可き運搬者であること、恰も世襲を受ける長子は實は自分に受け渡された財産のほんの一時的の所有者に過ぎぬやうなものである。性慾本能を、自我本能より區別するのは、個體の此の如き二重の作用を示すことになるであらう。更に第三に注意せねばならぬ事は、總ての吾人の心理的と名付けられるものも、遂には器質的の保持者を根據と

して考へねばならぬと言ふことである。斯く考へ來ると、性慾性を發動せしめ、個體の生命の存續をそれに依つて又助けてゆくものは、特別の物質、或は化學的過程と考へるのが眞實であらう。故にこの考へが正しとすれば、此の特別なる化學的物質を、心理的の力によつて代表せしめて考へると言ふことも亦正しいわけである。

余は正に、心理學よりは、總ての他の思考、勿論生物學的思考すらも排除せんと努力してゐるのであるから、此處で次の如く明らかに斷つて置かねばならぬ。即ち斯く區別せられた自我本能及び性慾本能も、勿論本質的には生物學的に支持せられてはゐるが、此處では、心理學的の根據に立つて言うてゐるのである。だから、精神分析學的研究自身のうちから、本能についての他の假定、更に適當と認められる他の假定が生れ出づる事あらば、上記の假定は捨てるに吝なるものではない。但し、今までの所はその必要はなかつたのである。性慾的エネルギイ、即ちリビドは、その深い根柢、その遠い源を尋ねれば――勿論心理的なるものに働いてゐる一般的のエネルギイから、分化して生じ來つたものであるかも知れぬ。然しから斷定して見たところで何にもならぬ。斯くの如き考へは、吾人の闘つてゐる問題からは甚だ遠いもので、これを攻撃して見たと

ころで、又贊成して見たところで無駄である程、何の得るところもない。この如く根源的には同一であるとの考へは、我々の分析學上の興味には全く無關係で、恰も總ての人種が、根源的には親族であると言うたところで、相續裁判上、その遺產者の親族であるとの證明とはならぬに等しい。此の樣な思索は一切やめにしよう。而も、他の科學領域から、本能學に決定を與へてくれる迄待つてゐるわけにもゆかぬ。だから心理學的の諸現象を綜合することによつて、この生物學的には根本的の謎であるものに如何なる光を投ずることが出來るかを試みて見た方がはるかに意義があると信ずる。我々とても誤謬に陷ることは可能である事は言ふ迄もない。然し我々をして、暫く、最初に選んだ、自我本能と性慾本能との對立の假定、卽ち轉授神經症の分析によつて斯く考へざるを得なくされたこの假定を矛盾なきものとして許さしめよ、そして、此の假定が撞着なく發展してゆくや否や、或は更に得るところ大であるかどうか、これを他の疾病、例へば精神分離症に應用して試ましめよ。

此の精神分離症については、リビド學說は失敗であるとの說をなす者がある。それはツューリ・ゲー・ユングが主張するところであるが[*]、この事あるがために、本來は余として好ましくないの

であるが、一言を要することになつて了つた。余は、シュレーベルの例を分析するに當つて取つた道については、その當初の假定を全然沈默に附して終り迄つづければよかつたのであらう。然し何れにしてもユングの主張は少しく尙早である。而も彼の根據は不十分である。彼はシュレーベル分析の困難に鑑みてリビドの概念を擴張しなければならぬ必要に迫られたと言ふ、余自身の言を楯にとつて、その事は正にリビドの性慾的の意義を捨てる事に當る、尙リビドをして一般に心理的興味と同じものにする事に當ると言うて攻擊したのである。此の誤解を是正するために言はる可き事は、フェレンチが、ユングの論文を根本的に批評してゐる論文のうちに言はれ盡されてゐる。[**] だから余はフェレンチの言ふところを裏書きし、リビド學說を放棄するやうな事は何處でも言うてゐないことを此處に繰返すに止める。ユングのもう一つの討議、即ち正常の現實活動の喪失は、リビドの引込みが生じてから後に初めて來るのであると言ふのは何等討議ではない。これは一種の指定 Dekret である。 it begs the question (假定を承認して了ふことである)。即ち豫め斷定を下して了ひ、討論の餘地無からしめるに當る。何故ならば、如何にして、又何故にそれが可能であるかと言ふ問題をこそ研究して定む可きなのだから。彼の第二の力作には、[***] 旣

に永い前から、余の提出して置いた解決に極く近づいて來てゐる。『此の場合に更にどうしても考へねばならぬことがある——フロイドがシュレーベル分析の例で言及してゐること——即ち性慾リビド Libido sexualis の內向 Introversion で、「自我」の充塡が行はれる。從つて現實喪失の結果が生ずるのは可能であらうと言ふ考へである。現實喪失の心理をこの樣に說明しようとすることは實際甚だ誘惑的の可能性を持つてゐる。』然し、ユングは此の可能性について更に進んで考へてはゐない。二、三頁の後、次の如く論じてこの考へを放棄して了つてゐる。即ち此の如き條件から『生じ來るものは、禁慾的隱遁者 asketischer Anachoret の心理であつて、決して早發性痴呆症 Dementia praecox の心理ではあり得ない』と。此の不適當な譬喩が、如何に役立たぬかは、斯くの如き隱遁者、即ち「性的興味の痕跡（此處では「性的」とは通俗的な意味である）すら排除せんと努める」隱遁者は、嘗てリビドの病的徵候すら示す筈が無いではないかと言ふ一節を見ただけでもわかる。隱遁者の如きは、その性的興味を全く人事からは引き取つて了つて、神、自然、動物等に對する、高められた興味のうちに昇華して了つてゐるもので、決してリビドを自分の空想のうちに內向せしめたり、自我のうちに退行せしめたりしてはゐないかも知れぬではない

か。故に此の譬喩は、色情的 erotisch な根源からの興味と、他の根源からの興味とを區別することすらも忘れてゐるものと考へられる。尙忘れてはならぬ事は、スヰス流の研究は、その功績は唯單に早發性痴呆症の病像にある唯二つの點、卽ち健康者にも神經症者にも存する複合の存在することと、その患者の空想形成が、民族の有する神話の形成に酷似してゐることとを說明したに過ぎず、何等此の病氣の生ずる機制については光を投じてゐはしないのである。從つて、リビド學說は、早發性痴呆症の說明として失敗した故に、同じ理由で神經症の說明にも不十分であるとなすユングの主張は、ユングに返へして了はねばならぬ。

＊「リビドの彷徨と象徵」、精神分析年鑑、第四卷、一九一二年、參照。

＊＊國際精神分析雜誌、第一卷、一九一五年、參照。

＊＊＊『精神分析學說の表現について』、年鑑、第五卷、一九一三年、參照。

二

自己愛症の直接の研究は特別の困難が存すると考へられる。故に自己愛症の研究への第一の道

は、パラフレニィ症の分析にあると思ふ。轉授神經症の研究によつてリビド的の本能活動を追及する事が出來た。同じやうに早發性痴呆症やパラノイア症の研究から自我の心理學への洞見をなすことが出來るであらう。逆に病氣による散亂や擴大から却つて正常人の單純さを推知することが出來る筈である。尙更に自己愛症の知見に近づくために、他の二、三の道も存してゐる。即ち器質的疾患の觀察、ヒポコンドリィ症(心氣症)の觀察、及び兩性の戀愛生活の觀察等であるが、これ等については後に順序に從つて述べるつもりである。

リビドの分配に對して器質的疾患が如何なる影響を與へるかと言ふことについては、フェレンチの個人的の示唆に從ひ度いと思ふ。即ち、器質的の苦痛や不快に惱んでゐるものは、外界の事物に關する興味は、それが自分の苦惱に關係ない限り、總て捨て去ると言ふ事はよく知られてゐることであり、且自明の事と思はれる。更に詳しく觀察して見ると、彼はそのリビド的の興味をも、彼が苦痛に惱んでゐる間だけは、その愛の對象から引き取つて了つて、愛することを止めてゐることがわかる。此の事實は極めて下らぬ事ではあらうが、これをリビド學說の表現方法で飜譯して見る事は必ずしも無駄ではない。即ち我々は次の如く言ふ。患者は、彼のリビド充塡を、

彼自身の自我に回收し、病が癒えてから再びこれを送り出す。齒痛に惱む詩人について、ヴェーブッシュは次のやうに言うてゐる。

唯、奥齒の孔のせまいところに
全靈が引きとめられてゐる。

此の場合には、リビドと自我興味とは同じ運命を持つてゐるのみならず、互ひに見分けが出來なくなつてゐる。病人の我儘はこの兩方から來てゐる。我々とても病氣になると同じやうに振舞ふことを確かに知つてゐるところから考へても、この事は自明である。ひどく惚れ込んでゐたものが、病氣になつて急に變ることや、急に相手に對して無關心になることは、喜劇には打つてつけであるから、多くの喜劇の主題となつてゐる。

疾患の場合と全く同樣に、睡眠も亦、リビドの所在が、自己愛的に自分自身のうちに引き込む現象である。更に詳しく言へば、リビドが睡らんとする願望に集まつて了つてゐる。夢が多くは主我 Egoismus 的であることは、この事に大なる關係がある。斯くのごとくこの二つの場合は、いづれも何處にも苦痛はないが、リビドの分配の變化、從つて自我變化の起る例である。

ヒポコンドリイ症は、器質的疾患と同様に、肉體上の苦痛及び苦惱の感覺を持つてゐる。從つてリビドの分配に關しても器質的疾患と同様になつてゐる。ヒポコンドリイ症者は、興味をもリビドをも——特にリビドに於て明瞭である——外界の對象から全く回收して、此の兩者を、彼に苦痛となつてゐる器官に集中する。ヒポコンドリイ症と器質的の疾患との區別は、唯次の如きところだけである。器質的疾患にあつては苦痛の感覺の源となる變化が確かに見出されるに拘らず、ヒポコンドリイ症にはそれが無いと言ふ點である。然し、神經症に關する多くの研究の埒內にこれも全く一致するから、少しく決斷を持てば次の如く言ひ得る。即ち、ヒポコンドリイ症と雖も恐らくは器質的の變化が缺如するわけはない筈であると。さらば如何なる器質的變化であるか。

此の事は我々の經驗によつて決定する外はない。經驗によると、ヒポコンドリイ症の不快に比較される可き、不快なる身體感覺は、他の神經症にも缺けてはゐない。余は、嘗つて、よほど以前に一度言はんとしたことがある。即ちヒポコンドリイ症は、神經衰弱症 Neurasthenie や、恐怖性神經症 Angstneurose と竝べて、第三の現實神經症 Aktualneurose となす可きものであると。換言すれば、凡そ神經症には、常に必ず、ヒポコンドリイ症の一片が入つてゐると言つて

も、過言ではないと言ふ意味である。これが最もよく現れてゐるのは、恐怖性神經症と、これより生じたヒステリイ症とである。さて、痛みあるほど感覺が鋭く、兎に角變化してゐる、然し、普通疾病と言ふ意味での疾病ではないが、變化してゐる器官の典型は、性器の興奮した場合である。此の場合には、この器官は充血し、膨脹し、濕潤し、多様なる感覺の座となる。一定の身體部分で、凡そ性的興奮の刺戟を精神生活に送り得るものの活動を、その身體部分の色情性 Erogeneität と名付けて見よう。そして、我々の性慾學説を參照して見ると、既に永き前より、一定の他の身體部分——色情帶 erogene Zone ——は性器の代表となり、性器と同様の態度をとるとの考へを持つてゐるのであるが、此處では、更に唯一歩を擴張して見よう。さうするとこの色情性と言ふものは總ての器官の有する一般的特性であると見做してもよいであらうし、然らば、一定の身體部分の色情性の高まつたり、低まつたりすることについて考へる事も出來るであらう。斯く器官に於ける色情性の此の様な變化に從つて、自我に於けるリビド充塡も平行して變化する。斯くの如き契機により、器質的の疾患に於ける場合と同様に、ヒポコンドリイ症の場合にリビド分配に既に述べたやうな影響を與へるものは何であるか、從つてヒポコンドリイ症の底に横はるも

のは何であるかを探求することが出來るだらうではないか。

斯くの如き考へを進めてゆくと、啻にヒポコンドリイ症のみならず、他の現實神經症、即ち神經衰弱症、恐怖性神經症等の問題にもつき當る。故に我々はこの位でとどめねばならぬ。もはや、純粹の心理學的研究の埒内に止まらず、廣く生理學的の研究にも及ばねばならぬほど範圍は廣くなつてゐるからである。然し注意す可きは、此處から次の如き推定に到達する。ヒポコンドリイ症が、パラフレニイ症に對する關係は、丁度他の現實神經症が、ヒステリイ症や强迫神經症に對する關係と同じやうである。前者等が自我リビドに關係してゐること、後者等が對象リビドに關係してゐるのと全く同じで、ヒポコンドリイ症の恐怖は、自我リビドより來てゐること、正に神經症の恐怖と反對のものである。更に、我々は既に、轉授神經症に於ける罹患及び象徵形成は、對象リビドの鬱滯から、この内向 Introversion が進んで退行 Regression に迄行つたものである、*との表象が正しいと考へてゐるところから見ると、自我リビドにも亦鬱滯があつてもよいと考へられるし、このことがヒポコンドリイ症やパラフレニイ症の諸現象に對して大なる關係があると考へることが出來るのである。

*『神經症の罹患型式について』、一九一三年、參照（全集第五卷、四〇〇頁）

勿論、此處で我々の知識慾は質問を提出するであらう。即ち何故に自我内に斯くリビドの鬱滯することが、不快感となるであらうかと言ふ疑問である。然し此處では次の如く答へるに止め度い。總て不快感は高い緊張狀態のあるところから生ずる。このことは物質的の現象で量的に然るのであるが、此處ではそれが、心理的問題とすれば、不快と言ふ質の問題となるのである。勿論不快の發生は、物質的過程の絶對値にのみに關係してゐるのではなく、此の絶對値の一定の函數である。この點から次のやうな疑問が生じて來る。一體初め自己愛として生じたものが、遂に自己愛を超えて、リビドを對象に充塡することが、精神生活のためにどうして必要なのであらうかと言ふ疑問である。我々の考へ方から出て來る答へは次の通りである。自我がリビドによつて或る程度以上充塡せられると、是非共此の必要が生じてくるのである。極端な利己主義 Egoismus の人は亦惱みに罹ることも少い。然し人は結局は惱みを持たないために愛し始めるやうになる。若しも人が、快樂を拒絶するために、愛する事が出來なくなると、その人はやはり惱むに違ひない。ハイネも亦斯くの如き典據から世界創造の心理的原因を表現してゐる。

創造の欲望は結局
病氣のやうなものだつた。
創造しつつわしは癒えてゆき
創造しつつわしは健康となつた。

斯く考へて、我々は人間の精神裝置のうちに、然らされれば苦痛と感じ、或は病源となるやうな興奮を征服す可き一つの手段があることを知るにいたつた。心理的の働きは、斯くて實に異常なことをなすことが出來る。卽ち直接に外部へと逃避し去ることも出來ないし、又その場合逃避が望ましくもないやうな興奮は、これを內部に於てうまく導き去ることが出來るのである。然し、斯くの如き內部的の働きは、それが現實の對象に對して起つても、空想の對象に對して起つても初めは同じ効果がある。此の區別は後になつて生じて來る。卽ちリビドの方向が、非現實的な對象（卽ち自我への方向）に向けられて、リビドの鬱滯が生じた時に現れて來る。パラフレニイ症に於ける誇大妄想は、自我のうちに歸つて來たリビドに、斯くの如き內的の働きが加はることに

よつて生じて來たものであるだらう。恐らくは、この事が失敗に終つた時に初めてリビドの鬱滯が生じ、これが病源的に働き、斯くて治癒過程を生じ始めるものに違ひない。然しこの治癒過程すら、我々には病症として見えるに違ひない。

さて此處で、パラフレニイ症の機制に對して、尙一歩つき進んで見よう。そして、今日のところ價値ありと見える考へを綜括して見よう。此のパラフレニイ症と、轉投神經症との區別は、次の點にありと余は考へる。卽ち、外界の對象から拒絶せられて、ゆく所の無くなつたリビドが、空想中の對象に止まらないで自我のうちに歸つて了ふことにある。されば誇大妄想は、此のゆく所のないリビドの一定量を征服せんために生じたもので、轉投神經症の場合に空想形成へと內向してゆくのと全く同樣である。其處で此の心理的の働きが失敗に歸すると、パラフレニイ症ではヒポコンドリイ的となり、轉投神經症では恐怖となつてくるのである。恐怖については我々は更によく知つてゐる。これが、更に心理的の働きによつて轉換 Konversionにより、反動形成 Reaktionsbildung により、或は防禦形成 Schutzbildung 卽ち恐怖症 Phobie 等により、解消してゆくことを知つてゐる。パラフレニイ症では、これが、著しい病狀と見える部分に當るが、實は

恢復の試みとして考へられねばならぬ部分である。だからパラフレニイ症は屢〻――大抵とは言へぬかも知れぬが――ほんの部分的にのみ、對象からリビドの分離してゐることがある。故にその呈する現象は、三群に分たれるやうな形狀を呈する。

(一)正常性が尙殘つてゐる場合、即ち神經症を有する場合(殘遺現象 Resterscheinungen)

(二)病症過程(リビドの對象から分離すること。從つて誇大妄想のあること。ヒポコンドリイ症のあること。情緖障礙のあること。總ての退行現象のあること。)

(三)恢復過程　これはヒステリー症と同一樣式で出てくるもの。(早發性痴呆症。眞性パラフレニイ症。)强迫神經症の樣式でくるもの。(パラノイア症)いづれもリビドは再び對象についてくる。

此の新たに出來るリビド充塡は、第一次のリビド充塡よりは全く他の水準、全く他の條件で現れて來る。此の如きリビド充塡の場合に生じて來る轉授神經症と、正常自我のリビド充塡の場合との區別は我々の精神裝置の構造に、深い洞見を導くことが出來るに違ひない。

自己愛症研究の第三の道は、人間の戀愛生活が、男女共に非常に樣々な違ひがある點に在る。我々の觀察にあつても對象リビドに氣をとられて、初めは自我リビドに氣付かないと同樣に、小兒の對象選擇（大人の場合も同じ）で先づ氣付くことは、性的對象を小兒が選ぶに當つても、滿足の經驗が嘗つてあつたものを標準としてゐる。小兒に於て初めて生ずる自己色情的な性的滿足は、やはり生命に必要な、自己保存に預かる機能に關係して生ずる。故に性的本能も先づ自我本能の滿足に依屬して生じ、後に至つて獨立する。この依屬して生ずる證據には、小兒の養育、扶助、守護等に關係ある人々のうちから、最初の性的對象が選ばれる。だから先づ、母親又はその代理者が小兒の性的對象となるわけである。此のやうな對象選擇は、**依屬型** Anlehnungstypus と呼んでよいものであらうが、この型の外に、我々は分析學的研究から、第二の、全く思ひがけなかつた型を發見する事が出來た。特に、そのリビドの發育に障礙の生ずるやうな人、例へば同

性愛者 Homosexuellen や倒錯性慾者 Perversen 等にあつては、後にその愛の對象として母親を典型として選擇せず、自己自身を典型として選擇をするやうな人がある。此のやうな人々は、明らかに自分自身を戀愛の對象として選ぶのだから、對象選擇について自己愛型 narzistisch と呼んでよいであらう。我々が自己愛症なるものを假定する必要に迫られた、最も强い動機は、此の觀察から來てゐるのである。

然し、此處で、人間は對象選擇に當つて、依屬型と、自己愛型との二つの群に必ず分類せられるのだと言ふわけではなく、唯人間には、對象選擇に當つて二つの道が開かれてゐて、どちらか一つが特に好まれ得るのであると言はうとするのである。卽ち人間は由來二つの性的對象を持つてゐる、と言ひ度いのである。自分自身と、自己を扶助して吳れた女性とである。而も我々は人間には別に第一次的自己愛症があることをも假定する。故に、對象選擇に當つても、時としては此の第一次的の自己愛症が優勢になつて、表面に現れて來ることがあり得るのである。

さて、男と女とを比較して見ると、對象選擇の型について根本的の、勿論全く規則正しく現れると言ふわけではないが、根本的の差異があることが判る。依屬型による完全なる對象愛は、男

性に固有なものである。この完全なる對象愛の場合は、著しい性的溺愛を示して來るが、これはその小兒が本來自己愛症を持つてゐて、その自己愛症が、性的對象に轉授されたことに相當する。此の如き性的溺愛こそは、あの獨得な、神經症的强迫にも類するほどな惚れ込み狀態の源となるもので、この狀態こそ自我はすつかり貧困となり、總てのリビドが對象に奪はれた狀態なのである。ところが、女性にあつては、同樣な型で、最も屢〻生じ恐らくは最も純粹な、眞の型である場合でも、その發生の模樣が男性とは異るのである。女性では、思春期が來て、それまで潛在してゐた女性の性器が成熟すると、却つて本來の自己愛症が嵩じて來る。このことは正當な性的溺愛となつて現る可き對象愛に對しては都合が惡い。殊に美しさが發達してくる場合は、女性では自己滿足が生ずる。このことが却つて、女性では、社會的に對象の自由選擇が面倒なやうな時でも、本人は少しも困らない。斯くの如き女性は、嚴密に言へば唯自己自身だけを愛してゐて、その愛の强さは、男が女を愛すると同じやうに强い。斯う言ふ女性は、決して自分の方から愛さうとはせずに、愛されることを要求し、この條件を滿してくれる男に氣に入らうと努める。女性の此の如き型は人間の戀愛生活のために高く評價される可きものである。男性にとつては、斯くの

如き女性は强い刺戟となる。それも唯單に審美的根據からばかりではない、斯くの如き女性の多くは中々美人であり、心理的の意味からも正に興味がある。卽ち次の如きことである。或る一個の人間が自己愛症を持つてゐると、恰も自分の自己愛症を全く放下し盡して了つて、正に對象愛に陷らんとしてゐるやうな他の人間に對しては甚だしい魅力を持つ事になる。小兒が人を引きつけるのも正に大部分は此の如き自己愛症、卽ち自己充足と、我儘とのためであるし、或る種の動物、例へば猫とか、その他猛獸等、我々に少しも注意を拂つてくれぬものの魅力も亦これである。同樣に、大犯罪者とか、諧謔家の詩的作物とかの場合我々の興味を强く引くのも自己愛的の影響で、彼等が身の廻りに何等自我を弱小ならしめるやうなものを持つてゐないからであると考へられる。これは、旣に我々の全く捨て去つて了つてもはや持つてゐない樣な、神聖なる心理的狀態、侵し難きリビドの位置を彼等がまだ保持してゐるので、羨んでゐるのに當つてゐる。故に遂には自己愛的の女性の有する刺戟も、反對の一面を有してゐる。卽ち惚れ込んだ男が不滿足に感じ、やがては女の愛を疑ひ、或は女の本性は遂に謎であると嘆ずる等のことは、多くは、對象選擇の型のこの如き特異に基いてゐるのである。

さて、余は女性の戀愛生活を斯くの如く描いて來たが、女を蔑めようとは決して考へてゐるのではないと言ふことを斷つて置くのは必ずしも無駄ではあるまい。余は凡そ特別の意圖などは持つてゐない。尙且尠くも種々の方向に發達してゐることは、正に甚だ複雜なる生物學的關係では、機能の分化に相當してゐるものであることを余と雖もよく知つてゐる。從つて、余は亦、世には、男性の型式に從つて戀愛をし、だから男性型に相應しいやうな性的溺愛を示す女性も存在することを十分承認するものである。

又、自己愛的で、從つて男性に對して冷淡であるやうな女性に對しても、完全な對象愛に至る道が一つある。卽ち子供を生むと、その子供は自己の身體の一部分が對象たる他物として、出て來たことで、從つてその自己愛症からも完全な對象愛を生じ得ることになる。他の女性では、對象愛、卽ち(第二次的の)自己愛症を發育せしむるに子供を生むにも及ばぬ。此等の女性は、思春期以前に於て、彼女自身男性らしく感じ、依つて一部分は男性らしく發育する。その後、この傾向は女性たることが成熟するに從つて破壞されるが、何處かまだ男性的の理想を追ふやうな傾きが殘るからである。そしてこれは正に、彼女自身嘗て一種の男兒的存在であつたと言ふ考への繼

さて對象選擇への道を通覽して、次のやうな概括をなす事が出來る。
（第一）　自己愛型に從つて愛するものは
(a)現在の彼自身
(b)過去の彼自身
(c)理想の彼自身
(d)自己自身の一部分であつた人、等である。
（第二）　依屬型に從つて愛するものは、
(a)養育して吳れた女性
(b)保護を與へて吳れた男性、等である。
右は何れも各〻に相當する代理者を愛することも出來る。右（第一）のうちに(c)の項を入れてあるのは、後に說明するところに依つて明らかとなるであらう。
男性に於ける同性愛に對しても、自己愛症的對象選擇があるが、この意義は他の關係で論ず可

き事に屬する。

小兒には、第一次的の自己愛症があるとの我々の假定は、我々のリビド學說の必要から生じた假定であるが、これは直接觀察では中々知るのに困難である。寧ろ、他の見地から、その遺殘物を確かめるより外はない。情愛深い兩親が、その子供に對する態度を見ると、既に久しい前から捨て去られた親自身の自己愛症が、再生し、且復活して來たものと考へざるを得ない。溺愛と言ふことは對象選擇に當っての、自己愛症的烙印 Stigma であるとは、既に論じたところであるが、この親の子供に對する感情關係は、人のよく知る如く正にそれである。斯くして我が子供に全く完全なもの、冷靜に觀察すれば、全く根據のないやうな完全さを、子供に歸せしめようとの强迫があるし、從つて總ての缺點は看過し、忘れ去ることになる。小兒に性慾がないとの考へも正に此の理由から生じてくる。更に總ての文化的成果、及びその認識にして本來自己愛症を否定するやうなものは、全く子供のためには考へなくなり、既に永き前から捨て去つてゐた特權を子供のためには新たに要求しようと言ふことに迄至るのである。だから親は子供は自分等より良くある可きだとなし、人生を支配してゐると親が認めてゐる避く可からざる事柄も子供は從ふ必要

がないと考へ、更に疾病も、死も、享樂の放棄も、自己意志の制限も、子供には許し難いものとし、自然の法則も、社會の法則も、子供の前には廢棄さる可しと考へ、子供こそあらゆる被造物の中心、中核である可きであると考へるやうになる。赤ちゃん天下 His Majesty the Baby は、嘗ての自分自身であつたのだ。兩親の實現しなかつた願望夢は子供によつて滿されねばならぬ。父親にはなれなかつたが、子供は偉人、英傑にならねばならぬ。母親には得られなかつたが、子供は王子のやうな婿を得なくてはならぬことになる。

自己愛症的體系の最も大切な點は、自我の不死と言ふことであるが、これは現實から最も危險にさらされる點である。而もこの現實からの攻撃を逃れるには子供へと逃げ込むことである。斯くして哀れなる、且その根柢の至つて兒戯に類する、親の愛なるものは、兩親の、再生した自己愛症の外何物でもない。卽ち、人間の本質が對象愛へと變形することによつて匿されるところなく露はとなつて來たものである。

三

小兒の本來の自己愛症は、如何なる障礙を受けるか、又、その障礙に對して如何なる反動を生じ、如何なる方向に抑壓せられるか、これ等の問題は重大なる研究素材であるが、尙研究の餘地の多いところであるから、此處には觸れない事にする。唯そのうちの一項で最も著しい部分、卽ち「去勢複合」(これは男兒では陰莖恐怖であるし、女兒に於ては陰莖羨望である)だけを取り上げて、これを早期の性的臆病の影響と關聯して論じて見よう。精神分析學的研究は、他の分野に於ては、いづれもリビド的本能が、自我本能と分離し、これと對立して如何なる運命を辿るかが追求することが出來るのであるが、今は、この二つの本能が、分つことが出來ぬ混淆狀態にあり、一緒に働いて、自己愛的興味として存在してゐる一時期、一心理的情況に逆行して見ねばならぬ。アドラアは此の如き關係から『男性抗議』männlicher Protest なる本能を創案し、性格形成に當つても、神經症形成に當つてもこの本能力が、殆ど唯一のものであると主張し、而もこの本能には自己愛的或はリビド的の努力を認めず、ひたすら社會的價値にのみ基いてゐるとなした。精神

分析學的研究に於ても彼の所謂『男性抗議』の存在及び意義は、初めから認めてゐたものであるが、アドラアの考ふるのと反對にこれは去勢複合から由來したもので、自己愛症的性質を有するものと考へてゐるのである。これは成程、性格形成には關係があるが、その起源に於ては、この要素のみならず、他の多くの因子が共同して働いてゐる。又アドラアは神經症の問題の說明についてもその說明が、自我興味にだけ都合がいい點を考へ、その外のことは何も考へてはゐないが、實際これで神經症の問題を論ずるのは無理である。余は却つて、神經症の起源は、去勢複合の如き狹い根柢からは起ることとは不可能であると考へる。唯男性の場合には、神經症の治癒に對する抵抗として出て來る位の强さはあるが、神經症の場合には、『男性抗議』、又は我々の意味では去勢複合は、何等病源的意味を有するものに非ず、寧ろ全く神經症とは無關係であるとすら考へるものである。

正常の大人を觀察して見ると、嘗て誇大妄想はあつたが、全く終つてゐる事、我々の小兒性自己愛症と呼びなす心理的特質は既に消失してゐることがわかる。然らば彼の自我リビドはどうなつたのであらう。自我リビドは全部對象充塡として出て行つて了つたのであるか？ 然しこのこ

とは我々の學說の全特質から考へて見て有り得可からざる事である。然し、壓迫現象の心理學からこの問題に對して別の答へが出來ると信ずる。

我々は既に、リビド的本能興奮は個人の文化的、倫理的の表象と衝突するに當つて病源的となり、依つて壓迫現象に陷る運命を有するものである事を知つてゐる。此の如き場合にも、その人が、單に智的の見地から、此の如き表象が自分のうちに存在することを知ることは決して出來ない。唯彼自ら自分のうちに斯くの如き標準があつて、彼は單にその要求に從つてゐることがわかるのみである。壓迫現象は、既に余等の主張する如く、自我から出て來るのである。更に詳しく言へば自我の自己尊重から來てゐる。全く同じ印象、經驗、衝動、願望衝動でも、或る人では認識せられ、或は少くとも加工を受けて意識せられるに拘らず、或る人にあつては、強く排擊せられ、或は意識に入る前に既に全く窒死せしめられる。此の二個の人間の區別、即ち壓迫現象の條件によつて區別せられるこの區別は、リビド學說に依つて得來つたところから、極めて容易に表現する事が出來るのである。即ち或る人では一つの理想を自分のうちに打ち建てて、現實の自我をこれで測るのであるが、他の人では斯くの如き理想の形成が存しないのである。この理想形成

こそは自我の側から言へば壓迫現象の條件なのである。

さてこの理想自我は、小兒時代に、眞の自我を占領してゐた自己愛 Selbstliebe に相當するものであつて、自己愛症は、この新しい理想の自我に移動して現れて來たもので、小兒時代は總ての完全無缺さを所有してゐたものである。人間は、此處でも、リビドの領域ではいつでもさうであるが如く、一度味つた滿足は決して諦め兼ねることを示してゐる。彼はこの小兒時代の自己愛的の完全無缺さを捨てようとはせぬが、生長するに從つて他よりの警告や、彼自身の判斷が醒めて來るために、これを保持することが出來なくなる。其處で新たに理想自我の形式に於て再びこれを獲得しようと試みるのである。故に彼が理想として自分の前に見てゐる理想は、小兒時代の失はれたる自己愛症、即ち彼自身を理想としてゐた自己愛症の代償物である。

此の理想自我形成と、昇華現象との關係を研究するは極めて容易である。昇華現象とは對象リビドに屬する一過程で、本能が、性的滿足からは全く遠ざかつて居る一つの他の目的に投げかけられる狀態である。この場合最も力點を置かる可きことは、性的の意味からの轉向に在る。理想作製も亦對象に關係する一過程で、その對象を通して、その本性を變へずに擴大し、心理的に高

められることに當るのである。故に理想作製は、自我リビドの領域に於ても、對象リビドの領域に於ても何れも可能である。例へば、性的溺愛の如きは對象についての理想作製そのものである。だから、本能については昇華現象となつて現れ、對象については理想作製となつて現れ、何れも概念としては區別せられねばならぬのである。

自我理想の形成は、屢〻本能昇華と混同せられてゐるが、これは理解の行きわたらぬ證據で遺憾な事である。自分の自己愛症を、高い自我理想を慕ふことに當ると誤り考へてゐる人には、そのリビド的本能を昇華せしめる必要がない。自我理想は、昇華を促進するものであるが、然し昇華を强ひるものではない。昇華現象は、成程理想によつて導かれて生じ來るものであり、理想に刺戟されることが絕對に必要ではあるが、然し理想とは全く異る一過程である。實際、神經症者の如きが、自我理想の形成とその原始的のリビド的本能の昇華の程度との間に、高い緊張狀態を保つてゐる好例で、從つて、理想家に向つてリビドが合目的に用ひられて居らぬと信ぜしめることはむづかしいが、單純な、大した理想を有して居らぬ人に信ぜしめるのは容易である。この理想形成と、昇華現象との間にどの位の比例がある時、神經症の原因となるかと言ふ問題は單純で

はない。既に論じた如く理想形成は、同時に自我の要求を高めることに當るので、壓迫現象に對しては至極都合のよいことである。この要求だけは滿され、尙且壓迫現象に陷らぬやうな出口が、卽ち昇華現象なのである。

自我理想から生ずる、自己愛的滿足を保證し、同樣の意味に於て現實の自我を不斷に監視し、理想の立場からこれを評價してゐるやうな役目を果してゐる、特殊の心理的法廷が人間のうちに在る可きであるとの考へに到達したが、これは驚くには當らぬことである。此の如き法廷が果して存在してゐるのであるならば、これを發見せずに置くことは不可能であつたに違ひない。卽ち我々は、それとしては確かに認めてゐなかつたかも知れぬが、所謂、良心 Gewissen と呼び來つたものが、この如き特質を具有してゐるものであると言ひ得るであらう。斯くの如き法廷を認めると、所謂注視妄想 Beachtungswahn、正確に言へば被觀察妄想 Beobachtungswahn の理解が容易となる。これ等の妄想は、妄想症性の疾患の症狀學のうちでは見遁す可からざるもので、轉授神經症にも時々現れて來るものである。此のやうな患者は、自分の知つてゐるところ竝に、行動が、總て人に注視せられ觀察せられてゐると訴へる。實際はこれは、上記の如き心理

的法廷よりの注視であるが、疾患では特徴として第三人稱の聲となつて彼に語ることになる。（おや、又あのことを考へてゐるね。さあ、今はその考へは止んだね）と言ふ風に言ひ聞かせるのである。この訴へは正しい。彼等は眞實を語つてゐるのである。即ち斯くの如く、我々の總ての意圖を知り、觀察し、批評する力は、確かに存在する。而も、我々正常人の生活にも總て存在する。被觀察妄想はこの力の退行的の形で示されたものであり、同時に、その患者が、何故にこの力について反抗するかの根據及びその起源を表に示してゐるものである。

自我理想の形成を刺戟するもの、即ち自我理想の常任監視者としての良心の源は、聲に依つて代表せられる兩親の批評的影響から源を發して、これに時の經過に從つて、養育者、教師、その他周圍の、見分け難き、一定せぬ群集としての多くの人々（同時代者、或は輿論）等の影響が加はつたものである。

本來は、同性愛的リビドの多量が、自己愛的自我理想の形成に用ひられ、又その導入や滿足の保持にも存在するのである。良心の構成は、根柢に於ては、先づ第一に兩親の批評の體現したもの、更に社會の批評の結果である。これは壓迫傾向が、先づ外部からの禁止、又は外部からの防

礙から生じ來るのと一般である。此等の聲は、測り知り得なかつたものと共に、疾患によつて前景に押し出されて來たので、これによつて逆に良心の發育史が、退行的に描き出されて來るのである。此の**檢閲法廷** zensorische Instanz に對する反抗は次の如き事情から來る。即ちその人間が、その疾患の根本的特徴に應じてではあるが、この兩親から始まつてゐる總ての影響から、逃れようとしてその同性愛的リビドを回收して了ふことより來てゐる。其處で、その良心は退行してもとの形となり、却つて外部よりの影響となつて、敵對者として現れて來るのである。

パラノイア症者の訴へも亦、根本に於ける良心の自己批評と、その良心が依つて立つ自己觀察とが、一致するものであることを示してゐる。この心理的活動、即ち良心の作用と認められる同じ活動が、同時に哲學者にその思考的展開の材料を與へるものである。この兩者は同じではないが、*これぞ、パラノイア症の思索的體系形成の根源ともなるものである。

＊唯單に推論からのみ附け加へるのであるが、この觀察法廷が、後年(主觀的)記憶の發生、及び無意識過程には編入されぬ時間的契機の發生として考へらる可きものであらう。

此の批評的、觀察的の法廷の活動についての意義を、――良心及び哲學的內省に迄及ぼしたの

は上記の通りであるが――更に他の領域に於て認めることが出來ると言ふことは意義深いことである。余は玆に、ジルベレルが、「機能的現象」funktionelles Phänomen と名付けた、夢學に對する一の小なる補足を引合ひに出さう。而もその價値は否定す可くもなく大である。ジルベレルは人は睡眠と覺醒との間の狀態で、思考が視覺像へと變化してゐる狀況を直接に觀察することが出來ることを示した。而もこの如き狀況では、多くの思考內容が現れてくるのではなく、睡眠と戰つてゐるその人のうちに見出されるその時の狀態（例へば熱心とか疲勞とか）が現れることが多い。其處でこの學者は、夢の結論や、夢の內容のうちにある附加物は睡眠及び覺醒についての自己認識を意味するものであることを示した。かくて同時に、自己觀察――パラノイア症者の被觀察妄想の意味に於ける――も夢の形成について證明することが出來ることを示した。勿論此の如き部分が常にあるのではない。余がこれを何故見遁したかと言ふに、恐らく余自身の夢ではこの部分はそんなに大なる役目を演じてゐないからであつたらう。哲學的の天才ある、內省に馴れた人にあつては、恐らくこれが明らかに働いてゐるのであらうと考へられる。

思ひ起す。夢の形成が、夢の思考が、どうしても一定の變形 Entstellung を必要とさせられ

る、一種の檢閲者の支配の下に於て行はれることは、我々の發見したところである。此の檢閲は、我々は何等特殊の力とは考へなかつた。唯自我を支配してゐる、壓迫傾向の側から夢の思考に向けられた一表現であると考へてゐた。然し、今や自我の構造のうちに深く入り込んで見ると、自我理想、及び良心の動的表現等をも亦夢の檢閲者として認めてよいであらう。若し斯くの如き檢閲者が、睡眠の間でも僅かながら眼醒めてゐるとするならば、その活動を假定すること、即ち自己觀察、自己批評、例へば、『今彼は思考することも出來ぬほど睡いのだ』――とか、『今彼は眼醒めようとしてゐるのだ』とかの內容を、夢の本來の內容に附加することは理解し易いところであらう。*

* 此の如き檢閲的法廷を他の自我から區別することは、哲學的に、意識と、自己意識とを區別してゐるのを、心理學から基礎づけるに富るかどうかは、此處で斷定することは出來ない。

さて此の處から、正常人と神經症者との自己感情の議論に入ることが出來るであらう。

自己感情 Selbstgefühl とは、先づ、自我の大さ、その合成狀態の表現であると考へるより外はない。其處で、原始的の全能感情の殘物で、經驗に依つて確かめられるもの、又人の現在所有

してゐるもの、過去に於て嘗て所有したものの總てが、自己感情を高めることになる。

性的本能と、自我本能とを區別する、我々の考へを此處に應用して見ると、自己感情なるものは、自己愛的リビドに、特別の内的の關係があることを認めねばならなくなる。この根據としては二つある。即ちパラフレニイ症では自己感情が高まつて居り、轉投神經症では低まつてゐると言ふこと、及び戀愛生活に於て、愛せられてゐないものは自己感情は低下して居り、愛されてゐる時はこれが高まつてゐると言ふことである。旣に述べた如く、愛されてゐることは、自己愛的對象選擇として正に目的を遂げ、滿足を得てゐることである。

更に容易く觀察されることは、對象へとリビド充塡を行へば自己感情は高まらないことである。愛してゐる對象に依屬してくると、低下的に作用し、惚れてくると人は謙虛となる。人に惚れると、卽ち自己愛症の一部を投與することになり、これが惚れられると初めて歸つてくるのである。總てこれ等の點に於て、自己感情は、戀愛生活に於ける自己愛的部分と關係があることがわかるのである。

精神的又は身體的障礙から來た、固有の愛することの出來なくなる狀態、卽ち不能者たるの自

覺は、非常に高度に自己感情に影響する。余の考へによると、轉投神經症者の、常に告白する、劣等感 Minderwertigkeitsgefühl の原因の一つは正にこの不能者たる自覺に存する。勿論此の主なる原因は自我貧困である。この自我貧困は非常に多量のリビド充塡が自我から奪はれたことにあるが、同時に、その影響としても、やはり、性的活動の障礙からも來てゐるのである。

アドラアが、自身の器官劣等を自覺することから發して寧ろ精神生活の活動力を增し、超代償の方法に依つて、更に力を增すことが生ずると言うてゐるのは正しい。然し、此の條件に依つて生ずる活動力の增多が全く器官劣等に歸せしめ得るとすることは餘りに言ひ過ぎである。總ての畫家が、眼病から發奮したとは言ひ兼ねるし、總ての雄辯家が、吃音者より出たとは言へない。優秀な器官を先天的に與へられた爲に、優れた活動をなした例も澤山ある。同樣に、神經症の病因としては寧ろ、器官の劣等、不完全は大した役目を演じてはゐない。恰も夢の形成に當つて現實で認識した材料が大した役目を演じてゐないのと一般である。寧ろ神經症では、何でも役に立つものは口實とするが、この器官劣等も口實となつてゐる場合が多い。若しも、或る女の神經症者が自分は美しくなく、不具で、從つて魅力もなく、誰も自分を愛してくれないので病氣になつ

たと言うたとするに、別の神經症者は、一般的に考へて見て確かに美人であり又魅力もあるに拘らず神經症に陷り、性的拒否をなしてゐるのを見れば、必ずしも一概には信じられぬのである。ヒステリイ症者の女は大抵は美しく、大抵の女のうちでは魅力のある方の女には多いが、他方我我の下層社會には醜い、不具な、畸形な女が多いに拘らず、必ずしもこの社會に神經症者の多くないことでもわかる。

自己感情と、色情的感情 Erotik（對象のリビド的充塡）に對する關係は、概括的に次の樣に言ふ事が出來るであらう。卽ち二つの場合を區別す可きで、一は戀愛充塡が、自我によつて正當ichgerecht と認められてゐるか、或は第二の場合は、これと反對に壓迫現象に陷つてゐるかの二つである。第一の場合では（卽ちリビドの投出を是認してゐる場合）、戀愛も亦、自我の他の活動と同じやうに價値づけられてゐる。故に戀愛そのものは、憧憬が節制と同じやうに自己感情を低下せしめるが、愛されること、相惚れ、愛する對象を我がものとする事等によつては再び高められる。第二の場合、卽ちリビドの壓迫される場合では、戀愛充塡は、自我の甚だしい縮小として感じられ、戀愛の滿足は不可能であり、自我の再起はどうしても對象からリビドを回收する事

より外には不可能である。即ち對象リビドの自我への復歸は、自己愛症へと變化してゆくことであり、從つて他の場合では幸福なる戀愛を得た時に等しい。他方に於ては亦、眞の幸福なる戀愛は、對象リビドと自我リビドとの見分け難く混合してゐるもとの狀態にあると言ひ得るのである。

此の問題は重要であり、且概觀するのに困難であるから、尙二三の説明を、雜然としてではあるが、附け加へ度いと思ふ。

自我が發育すると言ふことは、第一次的の自己愛症から遠ざかることを意味してゐる。然し尙發育してゆくと、再びこれを得んとして非常な努力をするのである。此の遠ざかることは、外界からの影響で生じ來つた自我理想に、リビドが移轉することに依つて生じ來り、此の理想が滿されることに依つて滿足を得ることになるのである。

これと同時に、自我はそのリビドの對象にも充塡する。故に斯く自我理想を生ずること、及び對象充塡をなすこと等により自我そのものは貧困となる。然し、理想の實現及び對象滿足によつて再び豐富となるものである。

だから自己感情の一部は、第一次的の、小兒時代の自己愛症の殘りであるが、他の一部は、經

驗に依つて確かめられた全能（卽ち自我理想の實現）であり、更に第三の部は對象リビドの滿足であつて、この三つのものから成立してゐる。

自我理想は、對象についてのリビド滿足を得ることは困難である。それは、彼の所有する檢閲者によつて、兩立し難いものとして禁じられるからである。故に斯くの如き理想の發育してゐない人では、これに相當する性的努力が、倒錯性慾としてその人格のうちに入つてくることになる。何故ならば、性的努力と雖も、小兒時代に於けると同樣に、人が幸福にならうとして到達せんと望むものは、やはり彼自身の自我であるに違ひないから。

惚れ込みの狀態は、自我リビドが對象に向つて過剩に流れ込んだ狀態である。だからこれは壓迫現象などは止めて了ひ、從つて倒錯性慾を再び生ぜしめる力を有してゐる。そしてこの力は、單なる性的對象を性的理想に迄高めて了ふ。對象型であつても、依屬型であつても何れも小兒時代の愛の條件を滿すことを基礎として生じて來たものであるから、此の如き愛の條件を滿すものを直ちに理想化するのであると斷定することが出來る。

性的理想は自我理想に對して興味ある補助關係を持つてゐる。自己愛的滿足が、現實の障礙に

つき當ると、その代償滿足として、性的理想が用ひられることがある。斯くの如き場合には各人は自己愛的對象選擇の型に從つた愛し方をするやうになる。卽ち嘗て自分がさうであつたが、今や放棄して了つたやうなもの、又は、嘗て一度も所有したこともないやうな特徵あるもの（上記c型を參照せよ）を愛するやうになる。これ等の場合は何れも同一の公式に歸し得るもので、卽ち、自我のうちの理想に照して見て缺除してゐるやうな特徵を所有してゐるものが愛せられることとなるのである。斯くの如く、補助手段として愛することは、神經症者に對しては特別の意味がある。それは、神經症者では、過剩なる對象充塡のために、自我の中は貧困になつて了ひ、依つて自我理想を滿す事が出來なくなつてゐる。其處で彼はその對象に存するリビドを用ひて、自己愛症に復歸しようと試みる。これが性的理想として、自己愛型を選ぶ理由で、この自己愛こそ彼自身決して到達し得ないほどの特徵を有するものを選ぶのである。斯くの如きが戀愛による治癒で、これは分析上の規則とも言ふ可きものである。然り、斯くの如き人は、他の機轉では決して治癒することが出來ぬと信ずる。そして療法に期待をかけてゐる間に、自分を治療して吳れる醫師に期待をかけるやうになる。勿論、彼の壓迫現象は廣く及んでゐるがために、戀愛をなす

ことが出來ぬから、此の如き治癒の方法もまた成功しない。治療によつて此等の患者を或る程度迄よくしてやつた時に、屢〻豫期しない結果を經驗する。卽ち患者は、これ以上治療を受ける氣にならず、寧ろ戀愛に逢着し、その愛人と同棲しさへすれば、それからあとは治癒すると考へるやうになる。斯うなつて來れば、まあ滿足す可きであらう。尤も患者が、危險の起る度每に、醫者をその救ひ手として求めて來て、常に醫者に賴るやうな工合でさへなければそれでよい。

自我理想より出發して、集團心理學の理解に對して甚だ意味ある道が開けて來る。此の理想は唯單に個人的のものではなく、社會的の連帶の一部をなしてゐる。卽ちこれは一家族の共通の理想であり、又一の階級の、一の民族の共通の理想である。斯くして此の場合には單に自己愛的リビドのみならず、個人の同性愛的リビドの大きな量が關係してゐる。そしてこの逆によつてやはり自我に歸してゐるのである。此の理想の充實せしめることの出來ぬ事によつての不滿足は、同性愛的リビドを自由ならしめて、これが結局、罪惡感（社會的恐怖）に變つてゆくのである。この罪惡感なるものは、本來は兩親の叱責に對する恐怖で、詳しく言へば、兩親から愛される事を失ふ恐怖である。後に兩親の代りに同時代者の不定なる數が入り來るのである。斯くて、パラノ

イア症の原因は、多くは自我の疾病、自我理想の領域に於ける滿足の拒否等であることがよくわかる。又自我理想に於ける理想形成と、昇華現象とが合一すること、昇華現象の退行形成と、理想の偶然的變形が、パラフレニイ症の場合にあることも亦はつきりわかるのである。

ヒステリイ症の空想と兩性關係

一九〇八年「性慾學雜誌」第一卷に發表、次いで「神經症小論集」の第二輯に再錄せられたもの。

あまねく知れ亙つてゐるのは、自分自身の偉大さと苦惱とをその妄想の內容とし、それが全く定型的な、それこそ千篇一律な形を執つて現れるパラノイア症者 Paranoiker の妄想凝厚 Wahndichtung と言ふものである。しかもさう言ふ單調なものの他に、特殊な機制に從つて、或る倒錯性慾 Perversion が、その性的滿足を——考へでのみか、或は實行に移してか、孰れかで——舞臺にかけるといふ樣なものもある事が、數多くの報告から知られて來た。處が之に反して、全く相同じな精神的造構が、總ての精神神經症 Psychoneurose、その中でも殊にヒステリィ症 Hysterie に必發すると言ふこと、そしてこれ——所謂ヒステリィ症性空想 hysterische Phantasie ——がその神經症症狀 neurotische Symptome の由來に重大な關係をもつてゐるのを知つたのは、一新知見として人々の耳朶を打つた事である。

扨て總てこの空想創造の共通の源となり、且正常のお手本となるのは、青春期の所謂白晝夢 Tagträume と言ふもので、これは不十分ではあつたが既に文獻で注目されてゐる處のものである。*

* (一) ブロイエル並にフロイド共著、「ヒステリー症に關する研究」、一八九五年(第四版は一九二二年)、

〔全集では第一卷〕を參照せよ。

（二）ペー・ヂヤネエ、「神經症と固定觀念」、(Les rêveries subconscientes)、一八九八年。

（三）ハヴエロック・エリス、「性慾と羞恥感」（キエッチエルの獨逸譯あり）、一九〇〇年。

（四）フロイド、「夢判斷」、一九〇〇年、第七版は一九二二年〔全集では第二、三卷〕。

（五）ア・ピック、「病的夢想とヒステリイ症との關係に就て」、精神病學並に神經病學年鑑、第十四卷、一八九六年。

この白晝夢は兩性とも同程度に生ずるらしいが、少女や婦人では全然色慾的な性質を帶び、男性では色慾的な性質を帶びるか、或は名譽に汲々たりといつた樣な性質を帶びてゐるか孰れかの樣である。しかし男性の場合でも、この色慾的な色彩を二の次に考へてはならないもので、男性の白晝夢をつき入つて觀察して見ると、一人の女性に氣に入られようが爲、且彼女に他の男共の中からとりたてて認めて貰ひたい爲にこそ總ての英雄行爲が遂行され、總ての成功が達せられるのだといふ感を深くするのが普通だ。一體この空想は、不滿とあこがれから發足した願望充足 Wunscherfüllung であつて、それは「白晝夢」なる命名にふさはしく、夜間の夢の解釋に解決

の鍵を與へるものである。なんとなれば夜間の夢の形成の核心をつくるものは、さういふ複雜な、歪められた、そして有意識精神に誤審された白晝夢以外の何物でもないからである。

* フロイド「夢判斷」、第七版、三三五頁參照。

この白晝夢は大いなる關心を持たれ、注意して育まれ、そして大抵非常に羞しげにもてあつかはれて、それは宛も人格の祕奧の寶であるかの狀を呈する。途上において白晝夢に襲はれた人間が、突然にやにやと北叟笑み、獨りごち、或は夢幻の極いきなり馳け出したりするのを見かける事がよくある。私が今迄手がけたヒステリィ症性發作は實にさういふ無意識的 unbewusst にいきなり襲つて來た白晝夢である事が判つた。仔細に觀察する時は、疑ひもなくさういふ空想は意識されてゐる事、意識されてゐない事相半ばし、それが意識されないものになるや、病を惹起す力を得て、種々な症狀や發作となつて形貌をあらはして來る。好都合な狀況では、さういふ無意識性空想を猶意識の力で取り抑へてゐる事が出來る。私の患者で、私がその空想を摘發した一婦人が私に物語つた處によると、彼女がある時突然途上で淚にくれた事があるといふのであるが、一體全體何の爲に泣いたのか急速に思ひ巡らして見たら、自分が町で知名な（しかし彼女は個人

的には知らぬ）ピアノの名手と情愛的關係に陷つてゐて、彼との間に子寶を得（彼女は石女だつたのだが）、そして彼によつてその子供諸共困窮に陷れられたといふ空想の結果で、このロマンスがこんな事になり果てて玆に涙がせきあへなくなつた譯であつたのだといふ事を把捉し得たといふのである。

此等の意識されない空想は前から意識されないでゐて無意識の中に形づくられたものか、或はそれらが嘗て意識された空想卽ち白晝夢であつて、それから故意に忘れ去られ、所謂「壓迫現象」Verdrängung の力によつて無意識の中に押し込められた處のものか孰れかであるが、後者の場合の方が遙かに屢〻である。そこでその內容もその時と同じものとして殘るか、或は變化を受けて現在の無意識性空想が嘗て意識された空想の末流たる事を示すか、どつちかである。この無意識性空想こそ個人の性生活と甚だ重要な關聯を有してゐるので、それは人が手淫に際して性的滿足に資するために頭に浮べるあの空想と正に同じものなのだ。手淫行爲 masturbatorische Akt（最も廣義に言へば自瀆行爲 onanistische Akt）は、その際二つの要素から成つて居るので、先づ第一は空想の生起であり、第二は自瀆の頂點に於ける自己滿足への積極的手戱である。しか

し、要之この合成もつぎ合せである事は自明の理で、* この手戯はもともとある一定の、色情帶erogene Zone なる名を負つてゐる部位で快感を得るための自己愛的 narzistisch な企圖である。後になると、この手戯は對象愛の領域からの欲望觀念と融合して、この空想が頂點となつてゐた前の雰圍氣を部分的に實現するのに資せられたのだ。若し人がかういふ方法による手淫的空想的滿足を潔しとしない場合には、かかる手戯は廢棄せられ、この空想は有意識から出でて無意識の中に沈淪するに到る。處がこの際これに代るべき性的滿足の他の方法が出現しない時は、この個人は禁慾の中に止り、そのリビドを昇華 sublimieren せしめる事、つまり所謂性的興奮を更により高い一つの目標にそらせる事が出來ないので、この無意識性空想は新しく攪き立てられ、育ち、そして少くともその内容の一片に存在してゐる性愛要求 Liebesbedürfnis の全力を鼓して病的症狀として溢湧する素地を作るのだ。

＊フロイド「性理論への三論説」、一九〇五年、第五版一九二二年、本全集本卷參照。

かうしてヒステリイ症の症狀の全部に對して、この無意識性空想が最も間近な心理的前階段であるといふ事になる。ヒステリイ症の症狀とは、「轉換」 Konversion によつて風貌を現した無

意識性空想たる以外の何物でもないので、それが身體的症狀である限りは、その症狀はその當時意識されてゐたあの空想と元々伴つてゐたものと同じ性的感覺領域竝に運動司配領域から出て來るのが全く屢々である。こんな風にして自瀆禁斷は實際に退行を餘儀なくされる。しかも全病的現象の終極目標、即ちその當時の始初的な性的滿足の實現する事は遂にないのであるが、しかしこれは常にその近隣に浮動し牽制してゐるのだ。

ヒステリイ症を研究するものの興味は、やがてその症狀論より離れて、その症狀が出で來る處のこの空想といふものに向けられる。精神分析手技とは、その症狀からこの無意識性空想を推測し、そしてそれを患者に意識せしめるにある。斯ういふ風に説いて來ると、ヒステリイ症患者の無意識性空想といふものは、彼の性慾倒錯者 Perversen が意識して行ふ願望充足の狀勢と內容的に全く相應じてゐるのが判る。もしさういふ種類の例に乏しいといふならば、彼のローマ皇帝の世界史的處斷を思つて見るがいい。彼の狂暴さは勿論單に空想製造者の權力のはばまれざる充足によるものである。パラノイア症者の妄想形成 Wahnbildung は先づ丁度それと同じものではあるが、しかも直接に意識された空想で、その空想は性慾のマゾヒスムス的、サディスムス的

masochistisch-sadistisch な要素によつて齎されるもので、ヒステリイ症患者の或る無意識性空想とは對蹠的なものである。なほその他ヒステリイ症患者がその空想を、症状としてではなく、意識して實現する。そこでつまりその空想を暗殺だとか、虐待だとか、性的攻勢だとかに假託して舞臺にのぼせて來る事のあるのは、實際的に意味の多い例として周知の事である。

精神神經症者の性の樣態について經驗し得る總ては、かのまざまざしい症状から、この掩蔽された無意識性空想へ通ずる精神分析的研究のかういふ道を辿つて解決されるので、これによつて又この緒言的小論でその報告に眞先に目をくれなければならない「事實」も解釋されるのだ。

無意識性空想が何とかして意識に浮び出ようとする努力に邪魔が入るためか、この空想の症状に對する關係といふものが、決して一通りなものではなく、幾重にも複雜したものになるのであらう。* 定型的には、といふのは卽ちこの神經症が完全に熟して了ひ、且永く持續された後には、一つの症状は唯一つの無意識性空想に對應するのではなく、さういふ空想の多數の群に對應するので、正にその對應たるや任意的ではなくちやんと定つた仕組によるのだ。病症の初期には未だ總ての斯ういふ仕組は出來上つてゐない。

＊これと同じ事は「潜在的」夢思考と「顯在的」夢内容との間の關係にも通用する。なほ著者の「夢判斷」中の「夢を作り出す營み」の項參照。

一般的便宜のため、私は玆でこの小論のつづきあひや纏りを無視してヒステリイ性症狀の本質を更につき進んで言ひ盡すために一系列の方式を附け加へよう。この方式は相互に背馳するものではなく、一方、完全なより突込んだ認識に、他方、種々なる觀點の應用に資するものだ。

一、ヒステリイ症症狀は或る作用的 wirksam な（つまり精神に外傷を與へた）印象竝に經驗の追憶象徴である。

二、ヒステリイ症症狀はかかる精神外傷性經驗の聯想的歸來に對して、所謂「轉換」によつて生じた補償である。

三、ヒステリイ症症狀は——他の精神的產物がさうである如く——願望充足の表出である。

四、ヒステリイ症症狀は願望充足に資する無意識性空想の實現である。

五、ヒステリイ症症狀は性的滿足に資せられ、個人の性生活の片鱗を示すものである（その個人の性慾の要素中の一つに對應して）

六、ヒステリイ症症狀は幼時期生活に於ては實在し、後になつて壓迫に委せられてゐたある性的充足の手だてが再び歸來したのに相當する。

七、ヒステリイ症症狀は二つの對蹠的な情緒感動Affektregungen即ち二つの本能衝動Trieb-regungenの妥協として生ずる。對蹠的な二つの情緒感動とは、一つは部分本能たる性特質の一要素を表出しようとするものであり、他はそれを壓抑しようとするものの二者である。

八、ヒステリイ症症狀は數多の無意識的な、しかし性的ではない感動の代理をも買つて出るが、しかも性的意義を缺くものではない。

上述の如く種々定義したが、その中でヒステリイ症症狀の本質を一つの無意識性空想の實現なりと最も端的に言ひ盡して妙なるは第七の項で、第八の項は性的素因の意義を最も正しい方法で評價してゐるものである。

症狀と空想との間のこの關聯があるがために、私が「性理論の三論說」Drei Abhandlungen zur Sexualtheorieに於て述べた如く、症狀の精神分析によつて、個人を支配してゐる性慾の要素の認識に成功するのはさう難かしい事でもなくなつたのである。しかもこの研究は多くの例に

或る思ひもかけぬ結論を與へてゐるのである。つまり多くの症狀に對して、その闡明は無意識性性的空想によつて遂げられるものにあらず、又假令その中の一つ、最も意義深く最も根基的なものが、性的性質を帶びてゐようが、さういふ一系列の空想によつて滿足に解決されるものにあらず、實はその症狀の解決には二つの性的空想が必要なので、その一は男性的特質を有するものであり、その二は女性的特質を有するものである。つまりこれ等の空想の一つは同性愛的衝動homosexuelle Regung から發するものである事を示してゐる。第七の項に擧げられた處のものはこの新事象に觸れてゐないので、そこでは、だからヒステリイ症症狀は、リビド性衝動 libidinöse Regung と抑壓衝動との餘儀なき妥協で、その際對蹠的性的特質の兩リビド性空想が結合したものに相當するものであるといふ事になつてゐる。

　私はこの項目に例證する事は控へよう。經驗の敎へる處に從へば、短い、抽象された分析結果などといふものは、そのために引證してゐながら、人をして納得せしむるに足らないものである。そこで完全に分析された病症例の報告は他の個處で述べる事にして、ここでは差控へて置かうと思ふから、私は項目を擧げてその意義を敷衍するに止めよう。

九、ヒステリイ症症狀といふものは、傍ら男性的な、しかも傍ら女性的な無意識性性的空想の表現である。

玆ではつきり言つて置きたい事は、私がこの項目には他の項目に要求したと同樣な普遍妥當性を歸し得ないといふ事である。私の觀る限りに於ては、この項目は一つの例の總ての症狀に恰當すると言ふ譯にも行かないし、且總ての例に妥當するといふ譯にも行かない。處が逆に正反對の性的衝動が夫々の症狀的表現を見出して、そこでつまり異性愛と同性愛の症狀を、彼等の後に潛んでゐる夫々の空想と同樣に、はつきり辯別し得るといふ樣な例を示す事は難くない。しかも第九項目に主張されてゐる樣な關係で說明が十分である事が屢〻あつて、この項目があれば、特にさういふ事物の注意を喚起するがためには正に意義がある。ヒステリイ症の一症狀の決定は最高程度の複雜性に達し得るものだが、第九項目はその複雜性の最高の階程のものを意味づけるものである樣に思はれる。そこで又一つの神經症が永く存在した場合だとか、或はその神經症內に大なる構成變化が起つた際には期して見るべき項目である。*

＊上に端的に述べた項目を、精神分析上の自家經驗例によつて見出してゐるイ・サドガアは、實に其の普

遍性を保證してゐる。（フロイドの精神分析法の意義、神經病竝に精神病中央雜誌、第二二九號、一九〇七年）。

常に多數の例に於て示されるヒステリイ症症狀の兩性的 bisexuell な意義は、確かに私によつて打建てられた主張、卽ち人間に窺はれる兩性的根基といふものが、精神神經症患者では精神分析によつて特にはつきり認められるといふ主張*に興味ある例證を與へるものだ。同じ領域に於て、これと寸分違はぬ相同な經緯を示す例は、かの手淫者が彼の意識性空想の中の觀念上執る位置を男性にも女性にも同時に自らの身を擬さうと努めるが如きはそれで、これを移して以て更に進めば、ヒステリイ症發作も又それで、この際患者は根柢に橫はつてゐる性的空想の兩方の役割を同時に勤める。例へば私の見聞した一例で、一方の手では着物を身にひきよせ（女性的）、他方の手ではこれをはねのけようと努めた（男性的）如きは之である。この矛盾に充ちた同時的竝存といふものは、發作の際に甚だきちんとした形をとつて示されるこんな狀態の說明を不可解ならしめる主因であり、一方、これは正に實際に無意識性空想を解明するに適する鍵ともなるものである。

＊性理論への三論說。

精神分析療法に於ては一つの症狀の兩性的意義に構へを具へて置く事が甚だ重要な事である。そこで一つの症狀がある時、それの性的意義の中の一つの方の絆を解き放してやつたに拘らず、猶ちつともその症狀が減らないで存在したにしても、上述の意味合から、それは驚くにも當らないし、その試みが間違つてゐるのでもない。それは多分まだ見當をつけられてゐない對蹠性の性的なものにひつかかつてゐるからであらう。またさういふ例の處置の場合に觀察される事であるが、ある性的意義を精神分析してゐる間に、丁度車が隣りの軌道に踏みこんだ樣にして、急の想ひつきでそれと反對の意味を有するものの領域に進んで踏み入つた時、如何に患者が安慰を感ずるものであるかとはこの經緯を雄辯に物語つてゐる。

エディプス複合の衰滅

「國際精神分析學雜誌」第十卷（一九二四年）第三號に發表せられたもの。

近來益〻エディプス複合 Ödipuskomplex といふものは、早期幼年性性慾期 frühkindliche Sexualperiode の中核的現象として、その價値を顯して來た。やがてそれは衰滅する。言はば排しのけられて失墜し、それに續いて性慾潛伏期 Latenzzeit と言ふものが來る。しかしこのエディプス複合は衰滅して果して何處に行くか――これは猶分明しないが、精神分析の結果はどうも、突然に生じて來る苦惱に滿ちた失望といふものに墜ちて行くらしい。父の寵を被つてゐると自任してゐる幼女が、一度何か父によつて冷かにあしらはれると見るや、一朝にして九天より墜ちた態になる。母を自らのもの〻なりと觀じてゐる幼兒は、母が愛と慈しみとを彼から去つて、新しく生れ來つたものにふり向けると言ふにがい經驗をする。熟考すれば益〻かかる作用の然る可きこと、この複合の含む處と背反するかういふ正に悲しい經驗は避け得ざるものである事を愈〻思ひ知るのである。上に試みに述べた樣な特別な出來事が突然起らないときは、結局この複合觀念の希望した滿足が實現しないし、獨占的寵兒たる事も續いて否定されるので、行く行くこの幼き愛人は彼の望みなき愛情からそれて行く。エディプス複合はかくの如くにして、その失敗に終り、その內部的に身のつまりに陷るのである。

しかし他の觀點に從へば斯うも言へよう。エディプス複合は、丁度成齒が芽生えて來た時に乳齒が脫落すると同じに、それが消滅すべき時が來ればなくなるのだと。大多數の幼兒にこの觀念複合が個々に經驗されるにしても、しかもこれは遺傳によつて決定され、遺傳に基いた現象であつて、豫め定つてゐる發生過程上の次の時期がとつて代るまでプログラムの一つとして經過するのであると。しからばそれが如何なる動機で生じたりや、又特にその動機をとりたてて穿鑿すべきやは、かなりどうでもいい事柄になる。以上兩觀點のいづれに軍配を上ぐべきかその取捨に迷ふ。が兩者はしかし又相俟つて一をなし、廣い宗族發生的觀點に個體發生的觀點が相伍すべきである。總ての人にその生れるや旣に壽命が定つてゐ、その器官は多分その壽命に應ずるだけしかその根基を有してゐない。がしかしどうこの壽命のプログラムが進行するのか、又どんな風に偶然の障礙がこの素質を蝕むのか穿鑿して見るのは興味のあることである。我々の知識は、子供の性發育を、さういふある一時期に性器 das Genitale が旣にその主役を演じ始めてゐる事に迄遡つて言爲すべきだといふ點に目をつけてゐる。この性器と言つても單に男性のもの、詳しく言へば陰莖 Penis の事で、女性のものは猶氣にとめられないでゐるのだ。この男根愛の時期 phal-

ische Phase —同時にエディプス複合のさういふ時期は、更に進んで終局の性器作用にまでは發達しないで、性慾潛伏期にとつて代られる。その結末は定型的方法で、そして規律正しく繰りかへす出來事に關聯して行なはれる。(男の)子供がその興味を性器に向けた時には、それをかれこれと手で弄る事でその興味を表白する事になるのだが、その際成人といふものはかういふ行爲になづまないものだといふ事を經驗するに相違ない。そこで幾分はつきりと、そして幾分むごい氣持でこの彼のとても大切な部分を切り取られて了はれるかの如き脅威を感じ始めるのである。去勢脅威 Kastrationsdrohung で子供を脅すのは多くは婦人で、お父さんに、或はお醫者さんに言ひ付けますよ、そして懲罰をして貰ひますよ、と言うて自らの權威を强めようと試みることから來るのである。多數の例では婦人達はこの脅威を象徴的に軟げる手段をとり、此の場合受動的な陰部をもぎとる云々と言はずして、能動的にこの罪惡を行ふ手をもぎとる云々と諷るが如き場合もある。次のやうな場合は特に屢〻ある。つまり男の幼兒が手では陰莖を弄ばない故に去勢脅威には脅されないが、毎晩床を濡し、床を汚すことから脅威を生ずることである。お守りの人達はこの毎度の寢小便を熱中して陰莖を弄んだ結果であり、證據であるやうに取扱ふが、多分それ

も正しからう。兎に角この引き續いての寢小便は成人の遺精竝みと認められ、斯かる時期にも小兒を驅つて手淫せしむる陰部興奮があることを示すことになる。

論旨は今や小兒の男根愛的性器統帥編成 phallische Genitalorganisation が凋落してかかる去勢脅威に落ちて行くといふことに到つてゐる。しかしながらゆくゆくは更に進んだ作用が起らずにはゐない。小兒はやがてこのおどかしに信を置かなくなり、從はなくなるからである。精神分析は新しく更に二つの經驗に價値を認めてゐる。その經驗はどんな小兒にもされなくては濟まないもので、且その經驗によつて貴重な身體の一部が失はれる經驗に慣れるためのものであるが、第一のものは、初めは假にそして後には斷乎として行はれる乳離れ、第二のものは、毎日腸の内容を手放さざるを得ないこと、これである。しかしこの經驗が去勢脅威を經驗せしめる動機であるや否やについては知る處がない。この一つが新しく經驗された後に初めて去勢の可能性を推し測り始め、それからひたすら躊躇しながら、不與げに、少からず苦心をしつつ、自己の觀察の見積りの射程を縮め始めるのである。そして去勢脅威に對する小兒の不信を終局的に壞滅せしむるのは、女性の恥部を觀察した時である。彼が陰莖を有する事をほこりかに感じてゐる男兒が、何

處かで一度幼女の恥部に見參するや、この彼にかくの如く酷似してゐる存在に陰莖が缺除してゐるのだと確信せざるを得ない。それによつて又自己の陰莖の喪失を想像出來る樣になるので、結局去勢脅威といふものは功を奏する事になる。

我々はかの去勢を以て脅すのをこととしてゐるお守りの人々の如く短見であつてはならぬし、又小兒の性生活といふものはこの時代に決して手淫 Masturbation に終始してゐるものではないといふ事を見逃してはならない。彼等の兩親に對するエディプス複合に於て、手淫といふものはこの觀念複合に屬する性的興奮のはけ口を性器に求めたに止る。しかし後來の手淫の意識といふものは遠く源をここに發してゐるのである。エディプス複合は小兒に二つの滿足――能動的なるものと被動的なるものと――を與ふべき可能性がある。男兒が父の位置に入り母と交渉を持たうとするが、この際父はやがて邪魔物に感じられる樣になる。逆に女兒が母にとつて代つて父に愛されようとする時は、母といふものが餘計ものに感じられる。この滿足を齎す戀情交渉が何處にその本質を存するのか、それに就ては小兒は唯甚だ漠然たる觀念きりもつてゐないが、陰莖は器官感情 Ongangefühl を持つてゐるから、その際陰莖が一役買つて出た事は確かだ。然し女に陰

莖の存否をいぶかしむ――さういふのはまだ動機となつてゐなかつた。去勢される事があり得るといふ推想竝に女性といふものは男性が去勢されたものだらうといふ見方は、玆にエディプス複合から生ずる二つの滿足の可能性に埒をあける。つまり兩者共陰莖喪失 Verlust des Penis を生ずるのであつて、男性のは懲罰 Strafe の結果として、女性のは假定 Voraussetzung としてである。若しエディプス複合を基としての戀情滿足が陰莖を犧牲に供しなければならぬとせば、この身體部位への自己愛性興味と兩親を對象とするリビド充塡との間に葛籐が生じなければならない。この葛籐では普通前者が勝を占めるので、小兒の自我はエディプス複合から離れてゆく樣になる。

どんな風にしてこれが行はれるかを私は他の場所で詳述した。對象をとる事は止めにして、同一視 Idnetifizierung といふ事をやりだすのだ。つまり自我に浸み込んだ父の權威 Vaterautorität 卽ち親の權威 Elternautorität といふものは、超自我 Ueber-Ich の核を形づくり、父からその嚴格さを獲てこれを具へ、彼の近親相姦の禁止 Inzestverbot を永久的にし、自我をしてリビド性の對象獲得を再びなささらしめる。そしてこのエディプス複合に屬するリビド性のいとなみは

一部分はその性的色彩を奪取されて昇華 sublimieren する(昇華は多分、同一視に變改される時は常に起るものであらう)。一部分はその目標を阻まれ、情愛的衝動 zärtliche Regung に變化する。かういふ事が起るために一方、彼の陰部が免かれて、彼からもぎとられる危險が遠のけられ、他方、この葛籐がやみ、この現象の機能がなくなる。斯くしてそれと共に性慾潛伏期が到來し、今や小兒の性的發達は一先づ終熄する。

エディプス複合よりの自我のこの轉向を目して、「壓迫」Verdrängung なる名を與へるのを斥ける何ものもない——後來の壓迫も多くここに初めて芽生えた超自我の關與によつて生ずるのだが。しかし上述の過程は壓迫と呼ばれる以上のもので、それが理想的にその權能を恣にした時は、この觀念複合の壞滅竝に終熄を來すといふに等しい。我々は健常と病的との間に、決して截然たる區別を置いてゐない。そこで若し實際にこの自我が、その觀念複合の壓迫を受けたに止つてゐるとしたならば、これは無意識の中に止つて殘り、時あつてかその病的作用を現すに到るであらう。

男根愛的性器統帥編成、エディプス複合、去勢脅威、超自我形成竝に性慾潛伏期の間のさうい

ふ關聯は精神分析的觀察にして初めて認識し、言葉をかへれば言ひあて得るのだ。そしてエディプス複合の落ちつく先は去勢脅威にありてふ語に盡きる。しかしながらそれで問題は解決したのではなくして、この獲られた結果を鋤き返し、或は又新しき生命をふきこむ處の理論的考察の餘地がある。しかし我々がその道に踏み込む前に、一つの疑問に眼をむけざるを得ぬ。この疑問は我々の今までの論議の間に生じて來てゐたのだが、のけものにされてゐたもので、卽ち今まで記載した經過といふものは、はつきり斷つて置いた樣に單に男兒に關するものであつた。そこで女兒にはそれに對應する樣な發展が如何にしておこるのか？ といふ事である。

事一度茲に到ると、遙かに茫漠の地を行くが如く我々の材料も隙間だらけだ。女性にも亦エディプス複合、超自我並に性慾潛伏期といふものが發育する。が然しそれに男根愛的性器統帥編成竝に去勢脅威なる事柄を當嵌めてよいものであらうか。答へに曰く、然りと、がそれは男兒のものと同じものではあり得ない。兩性は同價だといふ事からの女性の要求はここでは通らない。形態的差異は精神的發展をもその現れを異にせしむる。ナポレオンの言つた言葉を變用すれば、「體制は運命なり "die Anatomie ist das Schicksal"」である。女兒の陰核は先づ全く男兒の陰莖と

その振舞ふ處を一にするが、女兒はその遊び友達と比較して、それがあまりに短く生れついてゐる事を認め、この事實を損耗なり、劣等價値の證據なりと感ずる。しかし暫くの間は、後にこれが育つて來て男兒のものと同じ大いさを得るに到るだらうといふ期待で慰められてゐる。玆で女性の男性自覺複合 Männlichkeitskomplex が分岐する。女兒はこの現實的の缺除を性徵なりと觀ぜず、嘗て前には男兒のと同じ位大きいものを持つてゐたのだつたが、去勢によつて失つたのだといふ見界をとつてそれを說明する。この結論を自らより轉じて他の成長した婦人に押し及ぼす樣な事はないやうで、これを全く男根愛期的意味で、大きいそして完全な、要之男性的な陰部に假托してゐる樣に見える。つまり女兒は去勢を旣に行はれた事實として見、少年は去勢遂行の可能性の前にをののくといふ事實的差異が生ずる。

去勢恐怖の廢棄と同時に超自我の確立竝に幼兒性性器統帥編成の壞滅を導く一つの力强い原動力が生ずる。この變化の起るのは、男兒に於ては敎育の効果竝に愛される事をされなくなるぞとばかりに脅す處の外部的恫愒に遙かに先立つてゐる如く思はれる。女兒のエディプス複合は、彼のいとけなき陰莖所持者よりも遙かに文字通り一義的なもので、私の經驗に依ればそれが母にと

つてかはる意圖や父に對して女性として嵌合しようとする意圖を超えるのは甚だ稀な事である。陰莖を見棄るなどとはそれに對して何か補償がなくては到底堪へ得られるものではない。そこで女兒は——强ひて言へば、ある象徴的類似 symbolische Gleichung によつて——陰莖から子供に乘り換へ、彼女のエディプス複合は、永い間こびりついてゐた望み——父から子供を贈物として獲、父に子供を生んで上げるといふ希望が頂點に達する。處がこんな望みは到底充されないのだから、この觀念複合はそれから徐々に揚棄されるといふやうな印象を受ける。そこで陰莖を所持したい、子供を持ちたいといふ二つの望みは、無意識界に强く根をはつて保たれ、女性の後來の性的役割に對して用意を構へるに役だつものだ。性慾にサディスムス的な加味の强さの少い事は、陰莖に關する苦慮と關聯するのだが、直接の性的動向をして目的を矯められたやさしげなものに變化し易からしめる。兎に角これを通觀すれば、少女に於けるこの開展過程に對する我々の見界は不滿足で、缺陷だらけで、不明の陰影が濃い。

玆に記載されたエディプス複合、性的恫愒 Sexualeinschüchterung（去勢脅迫）、超自我形成 Ueber-Ichbildung 竝に潛伏期の發來との間の時期的竝に因果的關聯が定型的のものである事は

疑はない。がしかしこの定型が生じ得べき唯一のものなりと主張する心算はない。この經過の時期の前後する事竝にその結びつき方の變る事等の變化は個人の發育上甚だ意味の深い事になるに相違ない。

ランク O.Rank の「出產の外傷」Trauma der Geburt に關する興味ある研究の發表以來、エディプス複合は去勢恐怖に落ち行くといふこの小研究の結果をも無下には斥け難からう。しかし今日この討論に深入りする事は時期尙早の樣に思はれるし、又多分ランクの考への批評又は價値の上下を斯樣な處で論ずるのは失當である樣に思はれる。

精神分析學說に背馳せるパラノイア症の一例

「國際醫事精神分析學雜誌」第三卷（一九一五年）に發表せられ、次いで「神經症小論集」に再錄せられたもの。

數年前ある有名な辯護士が、合點の行かないある一事例の判斷方を懇願して來た事があつた。ある若い婦人であるが、彼女が戀愛關係を契つて來たある男の追及からの保護を彼に賴み込んで來てゐたといふのである。彼女の主張する處では、この男は彼女の柔順さにつけ込んで、姿を現さぬ影辨慶を使つて彼等の喃々ぶりの姿を寫眞に撮らせようとしたのだ。そしてこれはこの寫眞を示して彼女を羞しめ、かうして强引によつてこの戀愛關係をあきらめさせる手管で、それに旣に彼は手を下したといふのである。この辯護士は斯う言つた訴への病的特色を見破り得ない處でない十分な經驗家であつたが、一體信ずるに足らないと思ひたい事も、一應精神病學者の判斷を煩はせれば、貴重な何物かを得る樣な事も世の中には數ある事であらうと考へたので、この次この告訴者と一緒になる機會に彼の處を訪ねて吳れる樣にと賴んで來た。

私が此の報告を續ける前に、斷つて置きたいのは、私がこの硏究せんとする事例の外貌を初めはぼやかしてゐる嫌がある事であるが、實は何も難かしい意圖がある譯ではなく、それだけのものなのだ。普通は假令それが最良の用意から出た事であるにしても、報告中の病歷をあるが儘に素直に述べない事は、獨自に判斷する讀者がその事例のどういふ點を把捉したのか判らないし、

かうしてかかる讀者を過誤に陷らしむる危險が生ずるから甚だいけない事だと思つてゐるのであるが。それから軈て私が知る樣になつたその患者は人竝以上愛嬌があり美しい三十才の處女で、年より遙かに若く見え、かつ全く女らしい印象を與へた。醫師に對しては全幅の信頼を寄せて振舞ひ、患者の不信頼を先づ取り除く苦心をちつともしなくてもよかつた。勿論その座に唯彼の辯護士が立ち合つてゐるといふだけの抑壓の下に次の樣な事の顚末を物語つた、これは後に述べようとする問題を私に課した事であつた。彼女の顏貌も感情の表出も初めての聽手に對して羞しさにへどもどするといふ風な氣配すらもなかつた。つまり徹頭徹尾この度の經驗から味つた心配に捉はれてゐるからであつた。

彼女は數年來ある大きな官廳の雇として、其處である責任のある地位にあつて自らも滿足してゐたし、且上長の氣にも入つてゐた。男共との戀愛關係などといふものは未だ嘗て求めた事もなく、心靜かに老母にかしづき、老母の唯一の賴りであつた。兄弟姉妹もなく、父は數年前既に歿してゐる。處が近來同じ官廳に勤めるある男の役人が彼女に言ひ寄つて來たのである。それは甚だ敎養のある心の惹かれる樣な男で、彼女も又その心を委ねざるを得なかつた。彼等の間の結婚

といふ事は外的狀勢から出來なかつたが、その男はこの結婚不能のために交際をもあきらめようなどとは考へなかつた。彼等二人ともが望み、疑ひもなくその權利を有し、且生活の向上を齎す以外何ものでもないもの、それの總てを社會的便宜の爲に否定するなどは如何に下らない事であるかを彼は彼女に說いた。決して窮地に陷らしめる樣な事はしないと約束したものだから、彼女も到頭彼を彼の獨身アパートに晝間訪れる事に同意した。さてそこで接吻と抱擁に及び、且肩を竝べて橫になつた事であつたのだが彼は今更乍ら彼女の一部分露出された美に眩惑を感じた。この戀人同志の誓しの戲れの間に、彼女はたつた一回ではあつたがチクッとかカチッとか言つた音に痛く驚起した。それは斜に前にあつた書物机のあたりからして來た。その机と窓との合間の個所は一部重いカーテンが降りてゐたのである。彼女が物語るには、自分はこの男友達に直ぐ今の音はどういふのかと質ね、彼から、それは恐らく書物机の上の小さな置時計から發した音だらうといふ說明を受けたといふのである。私は彼女の報告のこの部分に後で少しく註釋を加へる餘地を殘して置きたいと思ふ。

彼女がその家を後にした時、そこの階段で二人の男に行き逢つた。その男達は彼女を見てお

互ひに何か囁きかはしたといふ。二人の見も知らぬこの男達の中一人は何か包んだ小箱の様なものをもつてゐた。この會遇がまた彼女の心を捉へ、歸るさの途々様々な想像を廻らさしめたのである。あの小箱はきつと寫眞器であつたに違ひない、あれを持つてゐた男はきつと寫眞師で、彼女等がその部室にゐた間中あのカーテンの裏にひそんでゐたんだ、彼女が聞いたあのチクッといふ音は、彼が寫眞に撮らうと思つた特別に魅惑的なポーズを見定めて押したシャッターの音だつたのだなどと。彼女の愛人に對する疑心はそれ以來沈默を守らせては置かなかつた。彼女は彼に口づから又は書面で自分にその釋明を與へ納得を行かしめよと要求し非難してせまつた。彼が自らの感情の正明さを保證し，且又彼女の疑ひの根據なきを告げても釋然としてそれを容れようとはしなかつた。遂に辯護士を訪れて、その顚末を物語り、彼、卽ちこの嫌疑者より受取つてゐた手紙を擧げて彼に委した。私は後にこれ等の手紙の二三を披見する事を得たが、その手紙は私に最もためになる印象を與へた。その內容の要點より見れば、かくの如き美しい二つの心のなごみが、この不幸な病的觀念 unglücksselige krankhafte Idee によつて打ちこはされてゐるのが悼まれるのである。

私も又かの被疑者の判斷（彼女を精神異常者なりとする）を揺つて以て我が判斷に擬した事は今更解釋を要しない處であらう。しかもこの例は私にとつてはさういふ單なる診斷上の興味のみに止まらざる他の興味をも齎した。精神分析の文獻には、パラノイア症者 Paranoiker（男の場合として）は、その根柢に於て自己愛的對象選擇 narzistische Objektwahl を反影してゐる處の同性愛的渇望の増强に對抗して鬪ふものだといふ事が主張してある。そして迫擊するものは根本に於て愛人（男）か、然らずば嘗て愛人たりしもの（男）であるてふ事も意味されてゐるのだ。この二つの條件を組み立てると、迫擊者 Verfolger も被迫擊者 Verfolgter も共に同じ性のものでなければならぬといふ理窟になる。がしかし同性愛によるパラノイア症者の條件の條項をば、これで普遍妥當性あるものだとしては居ないのだ。つまりそれは我々の觀察例が十分の數でないためにさう言ひきれないのだ。だからこの條項は、ある連繫を得て初めて意義を生じ、そこで普遍性を要求し得るものの類に屬する。精神病學の方の文獻にも、患者が異性の家人によつて迫擊 verfolgen されるやうに信じたといふ樣な例に缺けてはゐない事は確かだ。がしかしその場合さういふ例について讀むと、正にその例それ自身を髣髴せしめるとは異つた印象が殘つたものであ

る。私並に私の友達がこれ迄に觀察し、且分析し得たものは、パラノイア症の同性愛への關係を大した難色なしに確定し得たのであつた。處がここに述べ來たつた例は、てんでそれ等と背馳してゐるのである。その女は愛人を直接に迫擊者にして了つて、その男との戀愛を廻避する樣に思はれた。女性の影響、同性愛的結合に對する反撃に就ては何等見出し得るものはなかつた。かういつた譯合であるから、彼の同性愛の迫擊妄想へ一般的に當嵌る事態と關係をもたせる事、引いてそれに結び付いてゐるもの總てを見込み違ひとして棄てて了へば多分最も面倒臭くない事であつたらう。此方ではこんな風に期待からはづれたので、これをその辯護士の手元に委讓し、彼が又かういふパラノイア症云々にかかづらはないで、他に何か正當な解釋を見出したといふ事にでもなれば、私の方はそのままになつた事であらう。處が私は玆に一つの道を打開したので、そこで先づその處斷を延したのであつた。私は次の事に氣がついた。患者を深く立ち入つて十分に研究しないため、つまり彼等に就て經驗する事が餘り少い爲に、患者を精神的に誤つて判斷する危地に立ち到る事が如何に多いかと。そこで私は、判定を下す事は今日は私に出來ません、どうぞ再びお出で下されて、唯今多分見のがされたであらう附帶事情の總てを具して詳細な

既往顚末を物語つて戴きたいと申し述べた事であつた。その辯護士の斡旋によつて、さうでなければ不承知なこの患者の同意をやつと得たのである。彼は、二度目の會談の時は自分が立ち會ふ必要はあるまいと述べて私の思ふ壺にはめて呉れた。

その患者の第二回目の物語も、前に述べた處を覆へしはしなかつた。その上總ての疑間、總ての難點を取り拂ふに足る程話の補ひを齎した。先づ第一に、彼女はその青年を一回ではなく、二回その宿に訪れてゐる。そして第二回目に一緒になつた時に、例の疑ひをかけしめたあの音の妨礙が起つたのである。第一回の訪問をば、最初の物語に當つては抑へてぬかしてゐたのであつたが、これは彼女に意義がある樣に思はれなかつたからである。第一回の訪問は何等目立たしい事を齎さなかつたが、恐らく事はその翌朝以後の事に屬するのであらう。彼女が躍起になつてゐるこの重大な企てもこれを手繰つて見ると、實はある年とつた婦人と關聯してゐたのである。その婦人は彼女の言葉を借りれば、その女の人は私の母と同じ樣に白髪頭でした、といふ。

彼女はこの上役老婦人に至極心濃かに扱はれ、時にはなぶられる事さへもある位で、彼女の特別なペットになつてゐた。彼女が彼の若い官吏を最初訪れた翌朝の事、彼がその老婦人に何か職

務上の事で報告するためにその事務机の處に現れた。そして彼が、小聲でこの老婦人に話してゐる間に、彼女の心に突然、彼は昨日の火いたづらの話をしてゐるのだ、そして自分こそは今の今まで氣がつかなかつたが、彼がその老婦人と永い間款を通じてゐたのだらうといふ確信が生じた。この白髪の、母代りの老女は今や總てを知つたのであらう。その日のそれ以後のその老婦人の言動から彼女は自分のこの疑ひを强めたのであつた。彼の裏切りの辯明を求むべく彼女は次の機會を捉へた。彼は勿論力强くその然らざるを力說し、それを一つの馬鹿馬鹿しい想像だと言つた。結局彼女を兎に角その妄想から去らしめる事にやつと成功し、彼女もしばらく經つて——私は數週後と信ずるが——後に彼の棲所への訪問を再びする程十分信頼を恢復したのである。これより先の事は患者の第一回の物語から我々が知つた處のものである。

我々が新たに知り得た處で、先づさういふ疑心の病的性質に關する疑ひに結着が與へられた。つまりこの白髪の上長こそは母親代理であり、且この愛人は、若くこそあるが、父親を代理したものである事、そしてこの患者を驅つて、この似つかはしからぬ、二人の役者に戀愛關係を振り當てしめたとは噴飯ものだが、これは實に母性複合 Mutterkomplex の權力の致す處であつた事

は察するに難くない。斯ういふ譯合になつて見ると、精神分析學敎義に培れた期待、卽ち餘りに强すぎる同性愛結合は、一つの迫擊妄想 Verfolgungswahn の開展への條件として作用するものだといふ期待に表向き背いて見えた處のものが雲散霧消する事になるではないか。患者がそれの影響からのがれようと思ふ初めの迫擊者、卽ち審判者はこの例でも亦男性ではなく、實に女性である。で、その心理經過を推し量つて見ると、この眼上の老婦人が彼女の戀愛關係を知つてゐる、そしてそれに不同意で、祕かな啓示によつて彼女にその不可なる事を知らしめる、一方同性への執著が、異性の同僚を戀愛の對象として獲ようとする努力に抵抗する、母への愛は「良心」Gewissen といふ役割を演じて、この婦人が新しい、そして多くの點から言つて危險な路に第一歩をふみ込まうとする時、正常の性的滿足の方へ抑へて置かうとする總ての努力の代辯者になるであらう、處が之は又男性への關係をも妨げる事になる譯だ。

若し母が娘のこの性的營みを抑壓したり妨礙したりすると、娘は幼小期的關聯によつて指圖せられる正常の作用を現して强い無意識の原動力を得て了ひ、かくて社會的の制裁を發見するのである。娘としてはこの影響から脫して、廣い合理的な口實を基として、性的享樂を認めるか、將

又これを否定するか、その程度を決めるのが當面の問題となる。彼女がこの解放の試みに失敗して神經症的疾患 neurotische Erkrankung に墮すると、定例として強過ぎる、そして確かな、支配し得ない母性複合が生じ、これと新しいリビド性潮流との間の葛籐が起り、その組しやすき素質に應じて、あれこれの神經症の形で結了される。總ての場合にこの神經症的反應が現れるのは實在の母への當面の關係によるといふわけでなく、原始母型への幼兒的關係によつて決められるのだ。

扨て我々の患者であるが、彼女が父を亡つてより永年になつてゐる事が判つてゐる。そこで若し母への強い感情結合といふものが、彼女に一つの堤を築いてゐなかつたならば、彼女がこの年(三十才)になる迄男氣も知らないで濟まう筈がなかつたであらうと認めねばなるまい。この堤、つまり保護が仇になつて、却つて物憂い枷となるのである。何となれば彼女のリビドは男を切實に獲んとする要求にうづき始めたからである。彼女はその同性愛的結合より解放さるべくもがいた。そして彼女の素質――それに就ては茲に言及しない――は、これがパラノィア症的妄想形成 paranoische Wahnbildung の形をとつて現れる事を許したのである。母は茲に於て彼女にとつ

では、敵意をもつてゐる、煙つたい觀察者にして、かつ迫擊者と化したのである。しかし若し母性複合がその意圖に有してゐる處の男性よりの乖離を遂行する權力を保たなかつたならば、彼女はさういふ破目にいきなり陷込んで行つた事であらう。だからこの葛籐の第一期の終りには、彼女は母からも遠ざかり、さうかと言つて男性にも身を屬せしめてはゐなかつたのだ。兩者とも正に彼女を向ふに廻して共謀した形になつた。扨てさうかうしてゐる中に男性の力强き努力が遂に彼女を決定的に自分の方に引きつける事に成功したのである。つまり彼女は母の要求に打ち勝つて、今や旣に愛する男と新しい交會を契るに到つたのである。母は最早これからの出來事には登場しない、しかし我々は次の事は確定して置かなければならぬ、卽ちこの期に及んでかの愛人がいきなり迫擊者になつたのではなく、母を通してであつて、母への彼の關係によつてである、母にこそ彼女の最初の妄想形成に於ける重大な主要役割が割り振られたのである。

扨て、この抵抗も結局は打ち克たれ、今迄母に執著してゐた少女が、一人の男を愛するに到つたといふ事は信ずべきであるが、然し第二回の交會の後には更に新しい妄想形成が生じ來つたのである。これは二三の偶發事が巧妙に利用された事によつて、この戀愛を破壞する樣に働き、か

くして母性複合の目圖が効果を得て推進し來つたのである。しかし女性が男性への戀愛をパラノイア症的妄想の補足によつて制するに到らうとは、どうも我々にはつかぬ考への樣に見える。我我がこの關係を更に詳しく檢照する前に、かの偶發事に一瞥を投げて見よう、この偶發事を核として第二の妄想形成――これは男に對してのみむけられたのだ――が行はれたのだ。

半裸體で褥の上に愛人と竝んで横はりながら、彼女はチクッといふ、或は敲つ樣な、或は叩く樣な音を聞いたのである。その由來をばその時彼女は知らなかつたのだが、これは後にその家の階段で二人の男に出會ひ、しかもその中の一人が何か蔽ひかぶせた小箱の樣なものを持つてゐるのに逢つてから、後に意味づけたのである。そして彼女は自分が喃々としてゐる間に覗はれて寫眞を撮られたのは、愛人の命令によるものだといふ確信を得た。勿論の事、もしこの不運なる音が起らなかつたならば、又この妄想も生じなかつたであらうになどの考へは及ばざる事遠きものである。我々は寧ろこの偶發事の裏に、この愛人とあの母性代理に選ばれた上長の女との間に戀愛關係があらうと想像したのと同樣な强迫的性質をもつてゐる何かある必要事を認めるのだ。兩親の性交 Liebesverkehr der Eltern の觀察は、無意識の空想の寶庫に缺けてゐる事が殆どない

處のものであつて、これは總ての神經症患者 Neurotiker 、多分總ての人間の子供達に精神分析によつて見出し得る處のものである。私はこの空想形成、即ち兩親の性交の觀察の空想形成、誘惑の空想形成、去勢の空想形成等を始原空想 Urphantasie と名づける。それは他の個所でその由來並にそれの個人的體驗への關係といふものを深く掘り下げて研究して見よう。そこでこの偶然の音といふものは、この兩親複合 Elternkomplex の中に保たれてゐた、定型的な空想を模糊の中から活氣づける挑發の役割を演ずるのみである。然り、我々がそれを「偶發的のもの」としるしてもいいものかどうかは疑はしい。ランクが眞に注意した樣に、それは寧ろ漠然たる空想の缺くべからざる須要物で、兩親の性交を示す音か、或は聽耳を立ててゐる子供に洩れるのを恐れる音か、いづれかが再現するものであらうか。扨て然しもう一度立ち歸つて、話の見當をつけたい。この例ではその愛人は正に父性であつて、その母性の位置に彼女自身が入込んでゐるのだ。だから竊はれたのは、ある第三者によるものとせられねばならぬ。玆に於てどんな風にして彼女が母への同性愛的交聯より解き放れたのか、見通しがつく樣になつた。それは正に一片の代償によるものである、卽ち母を戀愛對象に擇る代りに、自分自身を母と同一視 identifizieren し

て、自ら母になつて了つてゐるのである。この代償が可能であつた事は、とりもなほさず彼女の同性愛的對象選擇 homosexuelle Objektwahl が自己愛的起源に因するものなる事、且又その故に彼女にパラノイア症への罹患素質が存在してゐた事を指示する。そこである一つの考へ方「若し母がこれをするなら、私もする、私は母と同じ權利を持つてゐるのだ」とかういふ同一視からして、さういふ結果に導かれるのだといふ樣な考へ方は放擲せずばなるまい。

扨て例の偶發事の話はやめても、話は更に一歩を進め得るかも知れない、しかしそれでは讀者が歩調を合せては呉れまい、何故ならかういふ點を捉へてこそ更に精神分析的研究を深く掘り下げ得るので、これをやめたのでは、蓋然の域を超える事が出來ない。患者は私達の最初の話し合ひの際には、彼女は直ちにその物音の因由を尋ね、そしてそれは恐らく書物机の上にある小さな時計がチクタクした音だらうとの返辭を得たと述べてゐる。私はこの報告を一つの記憶錯誤 Erinnerungstäuschung と解する自由さにつく。彼女が先づその時その音に對する如何なる反應をもなさないでゐて、階段の處で二人の男に出會つてからこれが初めて意味を持ち出して來たといふ方が遙かに眞に近い樣に思ふ。その愛人の方は恐らくきはだつてその音が聞えてゐなかつた

のであらうが、その少女の疑ひが彼を當惑させたので時計のチクタクだらうとの說明遁辭を突差に敢てせしめたのであらう、「私は何をお前が一體聞いたのか判らない、が間々ある事だから多分時計のチクタク言つたのを聞いたのであらう」と。印象の利用にさういふ附け足しをする事や憶起にさういふずれを生ずる事は正にパラノイア症に屢〻ある事で、又パラノイア症に特有な事でもある。私はしかしその男と一度も話した事もないし、その少女の精神分析をそれきり續ける事が出來なかつたので、この私の想定は證明し得ない。

私は彼女によれば實際にあつたと稱する「偶發事」を吟味して更に數步を推し進め得たと思ふ。私はどうしたつて、置時計がチクタクしたのだとも信じなければ、又何かある音がその際聽えたものとも思はない。彼女の執つてゐた姿勢から、それを陰核 Klitoris に於ける敲叩の感覺なりとするのが正しいとする。これを彼女は後になつて外界の對象よりの感覺として抽出して投射したのであつたのだ。丁度これと同じ事が夢の中でもある事が、私の取扱つたあるヒステリイ症患者 Hysteriker で、外からの投射の材料がありようもない覺醒夢について、嘗て告げたのがある。その夢は「敲く音がする、そこで眼が覺めた」といふのであるが、誰も戶を敲きはしなかつ

たので、實は彼女がその前に幾晩も遺精 Pollution の苦痛な感覺によつて眼が覺めて來てゐたのが、今度は性器の興奮の最初の印があらはれるや否や眼が醒めるといふことに興味を有する様になつて來てゐたのである。これも陰核に敲叩を感じたのである。これと同じ投射の仕方をば、私はこのパラノイア症者にも、あの偶發的物音に當て嵌めたいと思ふ。勿論この患者が私とは一寸した淺い近づきで、しかも餘り好ましくないあらゆる强制的指示の下に、私に兩者の餘韻嫋々たるランデヴーの顚末に就て正直な報告をなしたとは、理の當然から保證はしない。がとりはなれて陰核の收縮 Kontraktion といふものの起つたであらう事は、その際性器的媾合 Vereinigung der Genitalien が行はれなかつたといふ主張によく一致するのである。つまり男を忌避する事が今に現れて來たのには、確かに「良心」の他になほ性慾が滿されなかつたといふ事が一枚加はつてゐるのである。

扨てここでその患者が男への戀愛をばパラノイア症的妄想形成の介助によつて制したといふ目立たしい事實に目を轉じよう。それを了解する鍵をばこの妄想の發生史が與へる。この妄想は我我が推量して期待するが如くんば、もともと女性に對して向けられたものであるが、今やパラノ

イア症を基地として、對象を女性から男性へ移す事が遂行されたのである。かういふ移行はパラノイア症ではありきたりのものではない。我々の普通見る處では、被迫撃者は彼がパラノイア症へ轉向する前に彼の戀愛選擇に與つた人、つまり同性の人に偏執するものである。而も彼は神經症的情緒 neurotische Affektion から閉めだしを食つてはゐないので、我々のかういふ觀察は多くの他のものの手本になるのである。今迄にこの見地の下に統一要約はされてゐないが、パラノイア症の外にも、さういふ種類のものとして甚だ知明な多くの同樣な現象がある。例へば所謂神經衰弱症患者 Neurastheniker にしてからが、彼の近親相姦的 inzestuös な戀愛對象への無意識な執著の爲に女といふものを戀愛對象に擇ることを抑壓されて、彼の性的營みを空想に閉ぢ込められながら慰めてゐるといふのがある。しかし彼に拒まれた方向への歩みも、空想培地の中では、實現して、母や姉妹を他の對象で代理するのだ。しかしこれらでは檢閲の抗議といふものが發展するから、この空想中の代理人物の選擇は彼には意識されるものである。

この新しい、多くは退行的に獲られた地盤を土臺として試みられた進み方は、既に一度は手に入れながら、今は失つて了つたリビドの地歩を奪回しようと多くの神經症で企てられる苦心を押

しのけて了ふ。この二系列の現象は概念的に殆どお互ひに相離れないものである。そして我々は神經症の底にわだかまつてゐる葛籐は、症狀形成によつて結着がつくといふ意見につく。實際鬪爭は又多樣に症狀形成を追うて進む。そして鬪爭の當事者各〻に新しい部分本能が生じて來て鬪爭を更に續ける。そこで症狀それ自體がこの鬪爭の目的になり、症狀を貫かうとする努力は、そいつを止めさせて、そして失地を恢復しようと努力してゐるものと相競ふ。失はれた處のもの、並に症狀に拒絕された處のものを他のはけ口から獲得しようと努めて、この症狀を貶價するために屢〻はけ口が探り求められる。この關係は彼のユングの主張に開明的光を投げかけるものである。彼によれば變化並に進行に抵抗する處の特有な心理的惰性 psychische Trägheit といふものこそは神經症の根本條件であるといふのである。この惰性は實際甚だ特有なものである。それは決して普遍的なものではなく、最も特殊なもので、且又その領域に於ける獨裁者ではなくして、神經症の症狀形成が終つた後でも靜まる事を知らない進行傾向並に失地恢復傾向といふものと鬪ふのだ。この特異な惰性の出發點を追つて行くと、非常に早期に遂げられて、非常に解け難くなつてゐる本能と印象との結合並にその印象の中に與へられてゐてそれによつてこの部分本能が靜

諡に歸せられる處の對象との結合の表現として貌を現す。換言すれば、この特異化された「心理的惰性」は、我々が精神分析に於て定着 Fixierung と呼びならはしてゐるものの他の表現——餘りよい表現とはいへないが——である。

同性性慾

同性愛に陷つた或る女性の心理成生に就て

初め「國際精神分析學雜誌」第五卷（一九二〇年）に發表せられ、次いで「神經症小論集」の第五輯に再錄せられたもの。

一

女性同志の同性愛 weibliche Homosexualität といふものは、確かに男性同志の同性愛 männliche Homosexualität に勝るとも劣らず存在し乍ら、しかも後者より喋々される事の遥かに少いものであるがため啻に法網より洩れ易いのみならず、精神分析學的研究からも等閑に付せられて來た。そこで假令それが大して耳目を聳動せしめる程の例でなくても、その心理成生を殆ど洩れる處なく、且十分正確に認識せしめ得る様な一例報告があつたら注目に値するものであらう。この例はその提示がさう言つた同性愛の經緯の一般輪廓を示すに止り、且この例から得られただけの見界を述べるだけで、總ての特質的な、それにこそ意義の存する個々の細目は全く沒却してあるが、これは尙生々しい例については、醫師として守らねばならぬ祕密に屬することだからであると斷つて置くより外はない。

これは上流階級の芳紀正に十八歳の美しいそして賢い令孃が、十歳も年上の所謂「その道」の女に慇懃を呈して、兩親の不興と心痛とを買つたといふ例である。兩親はその婦人が上流の女で

ありながら結局男たらしに過ぎないのだと主張する。彼等に判つてゐる處では、彼女はある既に結婚した女友達と同居してそれと款を通じて居り、しかも同時に數多の男性にもどうやら氣を持たせてゐるといふ。この令孃は決してかういふ惡い噂に就てはあらがひはしないが、それだからと言つてこの婦人を尊敬する事では毫もゆるがなかつた、尤もこの令孃には決して正純と言ふ點で缺ける處がなかつたせいもあるが。いかなる禁遏を加へても、如何に監視を嚴にしても、毫末の暇さへあれば逃さずに愛する人と飽く事を知らずに共にゐ、自分の日常の行藏を巨細なく告げ知らせ、將又愛人に花を贈らんが爲には何時間も愛する人の門前に、電車の停留所に彼女を待つ等々の事を妨ぐるに由なかつた。兎に角かういふ關心が令孃の全幅をひつつかんで了つた事は明らかだ。で彼女は自分のその後の教育に介意もしないし、社交や令孃らしい滿足などにも目も呉れずに、ひたすらにこの自分には賴もしい人、力の藉し手として値し得る唯一の人たるこの女友達との交際を固執した。この疑はしい婦人との間が何の程度まで突き進んだ關係になつてゐるのか、一體情愛的の熱中さといつた程度以上の限界を越してゐるのかどうかは兩親は知らない。若い男性への關心だとか、彼等の求愛に迎合するとかは、この令孃に氣ぶりも見えない、それ處か

實は、現在その婦人に心を投じてゐるが、これは今に始まつた事でなく、數年前にも他の女性に傾倒した事があるが、さういふ心持が今や昂じて今日を達したのであつて、その當時父の疑心と嚴戒を買つたものであつた事は兩親の記憶に猶新たな處なのだ。

彼女の行藏の中で一寸見にはお互ひに背反してゐる様に見える二つの仕草が兩親の心證を惡くした。第一は兎や角の評のある愛人と共に公然と最も繁華な街すぢに面をさらすのを何とも考へず、自分の噂などに風馬牛であつた事で、第二はその女との婞曳を遂げるためには如何なる欺瞞も、如何なる口實も、如何なる虛言も敢て恥としなかつたことである。即ち前者では餘りにも公然さを示し、後者では又餘りにも陰避さを示してゐるといふ譯である。或る日の事、これはかういふ振舞ひの下には當然起るべき事であつたのであるが、父が彼の見知越しのこの女と娘とが連れ立つてゐるのに街で出會した。父は顏に人なつこさを示す處か、怒つた樣な一瞥を兩人に與へて擦れ違つた。かうして擦れ違ふや否や、令孃はつつと放れて柵を越えてそこに近い市街線路の切目に身を投げた。結局此の時は果さなかつたが彼女はこの疑ひもなく思ひつめた自殺企圖を長期の病臥によつて贖ふ事になつたのであるが、幸ひにして少し許り病臥したばかりであつた。彼

女が癒つてから見出した事は、狀勢が自分の願望に對して前よりは好都合に展開してゐた事である。兩親は最早さう遮二無二には彼女に立ち入つて來ないし、その相手の女は女で、それ迄には彼女の求愛には手控へして廻避的態度に止つてゐたのが、一度さういふ迫眞な熱情の一義的な表白にあふや感動を受けて彼女により友情的に振舞ふ樣になつたからである。

この不詳事の後半年程して、兩親は醫師の處に鷲を枉げて、彼女を常態にひきもどされん事を依賴した。家庭の訓育の力に訴へても、この現在の狂ひをどうにもする事が出來ないのだといふ事が、かの自殺企圖で兩親にはつきり判つたのである。扨て玆に父の、そして母の態度を紹介して云爲するもよからう。父といふのは眞摯な尊敬に値する人で、その心の底には優しさを湛へ乍ら、表だつては嚴格な爲に子供等になぢまれる事の幾分薄い人である。その一人娘に對する擧措は甚だしく彼の妻、卽ち彼女の母の思惑を察してなされた。彼が初めて娘の同性愛傾向に就て知るや、憤激の極、威赫してこれを抑へつけようとした。その當時彼は、娘に淫蕩的なもの、變質的なもの、或は精神病的なものさへも認めるのではないか等と、種々な、そしてどれ一つとして非痛でないものはない察し方にあれこれと思ひ惑つたに違ひない。我々の醫者仲間の一人が、彼

自身の家庭で、これとどこか似た不幸を味つた時に、「なあに、これも一つの不幸には違ひないがね」といふ挨拶でその苦衷を舒した樣な、ああいふ熟慮したあきらめの骨頂には彼はこの不幸のあつた後に到り得なかつたのである。娘のこの同性愛は彼の滿腔の苦々しさを挑發するに足る何物かを抱いてゐた。兎に角彼は何とかしてそれを打ちのめさうと決心したのである。當時ウイーンでは精神分析といふものが蔽ふべからざる不評判に沈湎してゐたが、溺者把藁の例へに洩れず、それにもすがらざるを得なかつた。それさへ駄目であつたら、彼に殘されてゐたものは、正に最後的な對抗法だけであつた——とり急いで結婚させさへすれば、少女の自然的な本能を喚び覺ましてさういふ不自然な傾きを抑壓しもしようぢやないかと。

この少女の母親の意向はさうたやすくは見通しのつくものではなかつた。彼女は猶若い婦人で、自ら美しさにひたらうとする心構へを隱さうなどといふ氣持はてんでなかつた。そこで娘のこの言はば淫蕩をさう悲しむべき事とも思はなかつたし、且決してそれに就て父親の樣に怒りもしなかつた。それどころか隨分永い間といふもの娘のあの婦人への惚れ込みに當つて餘り立ち入らないので、寧ろ娘には信望があつたのである。處で勢ひこの事件に介與しなくてはならなくな

つたのは、實に娘が例のはつきりと自らの戀情を世間にさらけて了つたまづい結末からである。母親自身にしてからが、永年の間神經症的で、夫から大いにちやほやされて喜び、子供のあつかひぶりが不公平で、娘に對しては實際に冷かでありながら、しかも三人の男の子は——その中の一番幼いのは末子で、三歳にきりなつてゐないのだが——甘やかし放題といふ工合である。彼女の性格についてこの上もつと決定的の事を知らうとする事は容易くなかつた、といふのは後述する處から初めて判るある動機があるために、患者は母に就て物語るに當つて常に忌憚があつたからである。これに就ては父の項では言及してゐない。

扨てその令孃の精神分析處置を引き受ける事になつた醫師は、種々の根據から當惑を感じた。精神分析を進めるにはそれが要求する情況 Situation が必要なので、その情況の下でのみ實効を得るのであるが、この場合どうもその情況がなかつた。一體情況とはどう言ふものであるかといふと、例へば人が今までは自分を自分で支配することが出來てゐたのに、一朝にして覆沒に會ひ內的葛籐に惱むに到つて、而もそれを處置し得ないので、精神分析者の許に參じてそれを訴へて加勢を請ふといつた事がそれだ。醫師はそこで初めて病的に分裂した人格の一方に組して、葛籐

の他方の相手に抗するに力を致すといふ順序になるのだ。斯ふいふ風でない情況では精神分析に對して多少不都合なので、その症例の内部的難色に更に新しきを加へるてふ事態になつて了ふのだ。家を建てようとする人が、彼の趣味と實用に叶つた別莊をたてる事を建築家に注文するとか、或は聖像の揮毫を畫家に囑した眞摯な勸請者が、その圖の片隅に禮拜者としての自分の肖像を畫き加へてもらふと言つた樣なさういふ意圖とは、この精神分析の條件は根柢に於て一致しないものである。實際毎日の樣に、「私の妻は神經質で、なんともはやもやり切れません。どうかお癒し下すつて、再び幸福な夫婦生活が送れる樣にして下さい」などと訴へて來る夫がゐる。しかしさういふ委託の御相談には乘れない場合が多々あるのが判る。醫師がその夫がそれが爲に治療を希望して來たといふその事物をはつきり見究め得ないからである。そんな譯でその夫人が精神分析處置によつて彼女の神經症的抑壓から解放されるや、その神經症といふはけ口があつてやつと保たれて來た夫婦生活を破つて離婚を敢行したりする事が起る。或は兩親が自分の子供が神經質で始末におへないから健全にして呉れと望んで來たりする事がある。彼等に言はせれば、健全な子供とは、親にはてんで手數がかからず、而も唯それから喜びをのみを汲み得らるべきものだと

思つてゐる。それや醫者にはさういふ子供を叩き直す事が出來るかも知れない。處が子供は我々の方から言ふ所謂快癒の後には、前より一層決定的に自己の好む道を踏み行ふに到るであらうから、親達にとつては所謂籔をつついて蛇を出した樣なもので、その期待に反する事以前より更に甚だしくなるであらう。これを要するに、一人の人間が自分自ら努めて精神分析を求めに來たのか、他人がその人を强ひて來たらしめたのか、つまり彼自身が自我の變換といふものを待望したのか、將又彼を愛する、或は愛されたいと望む家族が賴み込んだのか、これは決してどつちでもいい事ではないのだ。

扨て例の話で、更に都合の悪い點として擧げねばならぬ事實は、その令孃が決して患者ではなかつた事で、彼女が決して內的根據から惱んでゐるのでもなければ、自分の狀態を困つて訴へてゐるのでもなく、更に、一體今齎された問題といふのは神經症的葛籐 neurotischer Konflikt を解くにあるのではなくして、正に性器的統帥編成 genitale Sexualorganisation の一變常を轉轍しようといふのである。この性的倒錯 genitale Inversion 即ち同性愛の驅除と言ふ事は私の經驗によれば決してさう簡單とは思へない。私は特別に好都合な條件の下に於てのみそれが成功

して、同性愛で料簡の狹ばまつた人間に、それまで沮まれてゐた異性への道をひらいてやる事が出來て、彼等の完全な兩性的機能 bisexuelle Funktion を整復せしめ得た事が度々ある。社會から認められてゐる常態を荒廢に委さうが委すまいが、それは彼女の勝手であるが、個々の場合彼女は正に常道を無爲に委してゐた。扨て性的常道とは、對象選擇 Objektwahl の限定に存するといはねばならぬが、一般に完全に熟して了つた同性愛を異性に轉じようとする企ては、その逆の場合よりもつと見込みのあるものだとは言へない。尤もこの逆の場合、つまり異性愛を同性愛にかへる方は、十分な實際的根據から言へば絶對に試みられた事はないのだが。

兎に角非常に多角的な同性愛の處置に當つての精神分析療法の効果といふものは治驗例からすれば實際大したものではない。常則として同性愛者は彼の享樂の對象をあきらめ得るものではない。玆で彼が斷念した快樂を、彼が他の對象に轉向した曉にも再び見出し得るものであるといふ事を彼に納得させようにもとても納得せしめ了せるものではない。若し彼がてんからこの治療に身を委せたとするならば、それは先づ外的動機によるもので、つまり彼の對象選擇が社會的に不利であり、かつ危機を孕んで彼をそこまで逐ひつめたからであつて、この際個體維持本能 Selbst-

erhaltungstrieb のさういふ要素は、性といふものの押しの强さにあつてはまるでいくぢのないものである事を示す。こんな工合であるからやがてこの試みがてんで不成功に終つて、「自分はこの特殊なものに對しては出來るだけの事はやり盡したので、あとはもう彼女自身のなり行きに委せる他はあるまい」といふひそかな氣休めに逃避する事にもならう。處が一體兩親や家族の都合を顧慮する事が、この快癒への試みを動機づけてゐるとすると話は又別になつて來る。それは實際にはリビド性のいとなみといふものがあつて、同性愛對象選擇 homosexuelle Objektwahl に對抗するエネルギイを發展せしめ得るには違ひないが、その力が十分である事は稀である。唯この同性愛對象への定着が未だ十分强くなつてゐない場合か、或は異性對象選擇 heterosexuelle Objektwahl へ强く組してゐたり、その餘燼が未だ消えやらぬ場合、つまり兩性統帥編成 bisexuelle Organisation が猶中腰でゐる場合か、或ははつきりと兩性的に統帥編成がなつてゐる場合にあつては、精神分析療法の豫後は良的なりとせられる。

　そこでこの見地から、兩親の希望を充すのを目標に置くことを私は徹底的に避けた。私は、その令孃を數週間なり數箇月なり細心に研究して、一體精神分析を續行せしめて影響を與へられる

見込みがあるかどうか見當をつけて見たいと豫め斷つて置くだけに止めた。症例の大多數では、精神分析は二階程に分れるものだ。第一の階程とは醫師が患者に就て必要な知識を形づくり、彼に精神分析の意圖と要求とを知らしめ、そして彼の惱みの生ひ立ちの輪廓、これはその精神分析の結果獲られた材料に基いて是認せらるべきだと信じられるものだが、その輪廓を目前に髣髴せしめるにある。第二階程では、患者自身が彼の目の前にさらけ出された材料を手がけて、壓迫されてゐたと考へられる觀念——最早彼はこれを憶ひ起し得るのだが——を憶ひ起し、然らざるものはこれを再びまざまざと經驗する様な工合に狙ひ處を定める事にある。斯うしてこそ、彼が醫師の陣構へを强め補ふ事にもなり、且又これを正しきに置き得るのだ。先づかうやつてゐる間に、既に彼は抵抗に打ち勝つて、望むが如き内的變化を經驗し、最早醫術の權威に頼らなくてもいいといふ確信を得るに到る。さうはいふものの必ずしも常に、この二階程が精神分析的治療の進行中はつきりと互ひに分れて存在してゐるといふものではなく、抵抗がある條件を保つた場合にのみさういふ事になるのである。まあ例を上げて言へば、ある旅立ちの二つの手續にひきくらべるがいい。第一のものは、總ての必要な用意、といつても今日では中々面倒で、さう全部を滿す譯

には行かない用意であるが、それを濟して、最後に旅行圖を案じ、プラットホームに到り、車の中に席をとる迄がこれである。かうして遠國に旅立つ方策がつき、行ける許りに迄はなつたのであるが、しかもこれのみを以てしては目的地へ一粁も近づき得ないので、更にこんどは自ら一驛より他驛へと旅をおしすすめて行かなくてはならぬのである。これが上述した第二階程に對比されて妙なりである。

扨て私の患者の精神分析であるが、この二階程主義に從つて分析を行ひ始めた處が、第二階程の初期につまづいて、それを超えて更に押しすすめられなくなつた。それでもその抵抗が特殊な狀況を示したので、私の考への組みたてに確證を與へたし、彼女の倒錯の發生機轉に就てそれだけで十分な見界を獲しめた。この精神分析の結末を述べる前に、既に自ら一寸觸れたとも思ふが、最初の興味の向け處として讀者に迫つたでもあらう二三の骨子を述べてしまひたい。

私はこの場合の豫後を、その令孃がその激情の滿足にあたつてどこ迄踏みこんだかに幾分關聯せしめて決定した。この精神分析中に得た材料は、この點に關して好望を示した。彼女の曲事の對象たる婦人とは、どれとも接吻、抱擁を享樂したに止つて、言ふべくんば「貞操」は汚さずに

止つてゐる。その中で最も若くて、そして彼女に最も強い激情を挑發したそのそれしやは、全く彼女に木で鼻をくつた樣な態度を示し、その手に接吻を許したのが關の山で、それ以上の好意は惠んでも呉れなかつた。その令嬢としても常に自らの愛の純潔と性交に對する精神的嫌惡とを高調してゐたので、止むを得ずまあさう言ふ一つの道德性に止つてゐたのでもあらう。彼女にも無理がないので、自分は上流の出で、ただ氣にむかない家族關係から現在の様な狀勢に陷つたのだとでも、自分の高尙さをほのめかしでもしたら、玆に滿腔の尊敬を得た事であつたらうに。こんな譯であるから、その女は彼女に會ふ度毎に、自分竝に婦人達への同性愛的惑溺から遠ざかる様、とりたてて語り聞かせるのが常で、あの自殺企圖に到るまでは彼女に無愛想さを持して振舞つたのである。

私がやがて闡明しようとした第二の點は、實にその令嬢の固有の動機であつて、そこに精神分析的處置が據り處を求めたものであつた。彼女は同性愛から解き放たれる事が自分にとつては焦眉の急であるなどと言ひ張つて私を惑はせようなどとはしなかつた。彼女としてはそれ處か、同性愛以外の他種の戀愛をば觀念にのぼせる事が出來なかつたのだ、がしかし——と彼女は氣をも

たせてゐる――兩親の爲にこの療法を尊敬して受けよう、自分としても兩親にさういふ心配をかけるのはけう、、とい、、事であるからと言つた。私はこの宣明を先づ好都合な事と解した。これはこの際何か無意識的情緒傾向 unbewusste Affekteinstellung が潜んでゐるのではないかと見當をつけ得なかつたからでもあるが。處が扨て玆に形貌を示し來つたものは、思ひがけなくも治療の樣態とその不時の行き詰りを及ぼすに決定的に作用したのである。

精神分析に馴染まない讀者は、永い間、二樣の疑問への解答を耐へきれぬ程待構へてゐた事であらう。この同性愛に陷つた少女が、はつきりした異性的の身體特徴を示したのではなかつたか、そして又、先天的の同性愛であつたのか、或は獲得的の（後になつて發達した）同性愛であつたのかといふ點である。

私はこの第一の疑問に存してゐるものの重要性を見誤るものではない。一體この重要性を誇張してはいけないものだし、異性の個々の第二次性特徴は、健常な個人にも甚だ屢〻交雜して存在するといふ事實、そしてある個人に非常にはつきりした身體的異性的性特徴を認め得るに拘らず、その人の對象選擇が倒錯といふ意味での變常を決して示してゐない事實があるのに、これを

爲にする爲に有耶無耶にしてはいけない。そこで換言すれば、男女兩性では身體的半陰陽 somatischer Hermaphroditismus といふものと精神的半陰陽 psychischer Hermaphroditismus といふものが高度に相關を保つものではないといふ事になる。上述の兩項には猶制限を加ふべきで、男性に於てはその不相關の度が女性に於けるよりも遙かに高いといふ事を附け加へて置かずばなるまい。況んや女性では、對聽的な性特徵 Geschlechtscharaktere の身體的並に精神的刻印が寧ろ定つて合致するものである事を思ふ時は思ひ半ばに過ぎるであらう。私は未だこの第一の疑問をこの例に就て十分に解答する狀勢に立ち入つてゐない。一體精神分析學者は、一定の症例に就ては彼の患者の身體的現證を立ち入つて檢するのを拒むのを常とする。この場合女性の身體型からきはだつて偏倚してゐるといふ事は兎に角なかつたし、又月經異常もなかつた。その美しいよく育つた少女が、父に似て丈が高く、少女的といふよりも幾分鋭い顏容をもつてゐたから、そこに身體的男性の片貌を認めるかもしれない。男性的な處として、彼女の智的な特質の二、三を指摘する事も出來たらう、つまり彼女が激情の支配に慴伏した際でない限りに於て、彼女の悟性の銳敏さ、彼女の思考の冷かなる透徹さ等がこれであつた。而もこれ等の區別と雖も、科學的

な、といふよりは寧ろ便宜的なものであるのであるが、一朝その戀愛對象に關しては、徹頭徹尾男性型を執つた事は注目に價するので、戀愛に陷つた男性の、あの謙恭さと大いなる性的過評價Sexualüberschätzungとを示し、如何なる自己愛的narzitischな滿足をも否定し、愛されるより愛する事を選んだのである。彼女はかういふ譯で、單に女性の對象を選んだに止らず、かつ又男性的にそれに對して振舞ふ事を求めたのである。

一體彼女の場合が先天的のものか、獲得的のものかといふ第二の疑問は、彼女の倒錯の全體的發生史に於て答へる事にしよう。そこでは、如何にこの質問がそれ自らその體をなしてもゐないし、かつ適合してもゐないかが示されるであらう。

二

こんなに尻尾を擴げて了つた緒論に續いで、扨て今度はこの症例の全く乏しい、そして見逃されんばかりのリビド史の敍述をしようか。この少女はその幼兒期に餘り目だたぬ程度に女性的エディプス複合*weiblicher Edipuskomplexの健常な成立を經驗し、後になつて、自分と餘り年

の違はない兄に父を乘りかへる事を始めたのである。

* 女性的エディプス複合と言ふ代りにエレクトラ複合 Elektrakomplex なる用語を用ひてもよいが、何等新味もなければ、それを使つたからといつて便宜を得る譯のものでもない。總じて私はこれを支持しない。

早期少女期の性心理的外傷は記憶もされもしなければ、精神分析によつて發見されもしなかつた。先づ潛伏期（五才か、それより幾分早く）の初めあたりに起つた例の自分の陰部と兄弟の陰部との較べ合せは、彼女に强い印象を殘し、その後作用ははるかに後までその面影を殘した。早期幼兒期自瀆 frühinfantile Onanie については殆ど特記すべくもないが、これは或は精神分析がこの點まで闡明すべくメスをつき入れなかつたせいかも知れない。彼女の五才から六才の間に第二番目の弟の誕生があつたが、これは彼女の發育に殆ど特別に影響する處がなかつた。學童期竝に破瓜前期 Vorpubertätsjahre に於ては漸次性生活の事實を知るに到り、普通ともいふべき、そして量に於ては度を超えた程度ではない浮いた心と一方愕然として目をふさぎたい氣持とでこれを受けた。一體にこの方面の敍述が全く乏しかつたのであるから、私は事實がこれつきりだとは保證しない。多分その少女期史はもつと內容の豐富なものであつた事であらうが、それは私は

確かめ得なかつた。前にも言つた樣に、精神分析はやがて中止した、然しどうやらこの症例に就て一つの既往歴が判つたのだが、これにした處で、他の同性愛者の尤もな理窟で拒まれて、曲りなりになつた他の場合の既往歴より、多く信憑すべくもなかつた。兎に角その少女は決して神經症ではなく、精神分析にヒステリー症の症狀を提げてお目見得するといふ風にさう思ふ壺にも嵌らなかつたので、彼女の少女期史を深く究明する機會は直ぐ樣には手に入らなかつたのである。

十三才乃至十四才の頃、彼女を圍繞する人々の判斷によれば、過大に强い、そして優しい偏愛Vorliebeを、子供遊園地に定つて見かけた三才にもならない子供に示したといふ。彼女はその子供を心から面倒を見た、そしてそれをきつかけにその子供の親と永い親しい知合ひとなつた。この出來事から、その當座、彼女は自ら母となり子供を持ちたいといふ一つの强い願望に動かされてゐたと結論するもよからう。處がそれから幾何もなくして、その子供に執著しなくなつて、今度は成熟した、而も若い婦人に關心を示し始めた。その關心が色に現れ始めてやがて父親の側から嚴しいお叱りを受けたのである。

この轉向が、丁度家庭の或る出來事とぶつかつてゐるから、それでこの轉向の說明がつきさう

だといふ事は、總て疑ふべくもない。前には彼女のリビドは母性として成立し、後に己より成熟した婦人に溺れる同性愛者となり、そして今にこの位置に止つてゐるのだ。かういふ我々の話の筋道上、その樣に意義のある出來事とは、實に母の新しい姙娠で、續いて第三番目の弟の誕生であつた。これが彼女の先づ十六才の頃の事であつた。

私が今や次に暴露しようと思ふ一條の關係は、決して話の筋道を立てんがために誣ひたものではなくして、それに客觀的な信憑を置く事が出來る程信用の出來る精神分析材料によつて配置されたものである。特に組合はさつてゐて、容易にその意味を判ずる事の出來た一聯の夢が、それに對して決定的な結論を與へた。

この精神分析によれば、この戀された婦人は一議に及ばず、正にその母の代償だつたことが知られる。勿論のこと、その婦人自身は決して人の母ではなかつた、しかも彼女がその少女の最初の戀でもなかつた。彼女の戀情の最初の對象は、一番下の弟の誕生以來、實に母達、それも三十から三十五才位の年配の母達で、避暑地や都會で、家のつきあひからその子供ぐるみ知合ひになつた人達である。處がこの母性といふ條件は後にはかなぐり棄てられた。これは實は漸次その

力を得て來た他の事象と實際に於て兩立しなくなつたからである。この最後の愛人、所謂「それいいしや」に特に強く惹きつきられる樣になつたのは、猶もう一つの根據があつたので、これはその少女が或る日の事、問はず語りに我々にそれと察せしめたのである。その婦人のすらりとした樣子、がつしりした美くしさ竝に生のままの樣態で、まあ自分の兄を偲ばせられたのである。さういふ譯で、この最後に選ばれた對象は、唯に彼女の理想とする女性であつたのみならず、同時に理想とする男性であつた事になるので、つまり同性愛の願望傾向の滿足と異性愛のそれとが玆に合致した事になつたのである。男の同性愛者の精神分析も多數の例では、これと同軌相求めてゐるのは周知の事で、倒錯性慾の本質と成生とを餘りに簡單に片づけてはならぬ事と、人間に汎く通ずる二股的な兩性關係 Bisexualität、非常に碎いて言へば、精神的半陰陽の傾向といふものを眼界からはづしてはならぬといふ事を暗示する。

しかしこの少女が既に成熟して、自分としての強い願望を有つ樣になつてゐた際、末弟の誕生を契機としてこの子供の生みの親、即ち自分の母親に自らの激情的情緖を纏綿せしめ、この母の代行者たらん事を表明する樣に動かされたのはどう解釋すればいいといふのか。一體普通とすれ

ば、先づそれと正反對な事が期待せらるべきものであらう。母といふものは、さういふ場合、婚期に近づいた自分の娘に氣兼ねするのが常であり、娘達は娘達で、母に對して懸みと侮りと嫉みで混み入つた感情を構へ、母に對するやさしいの感じを高めるなどとはしないものなのだ。我々の觀察してゐるこの少女は、自分の母に根が氣安く感ぜられる處ではなかつた。自分でも青春の名殘猶覺めやらぬこの母には、この急に大人めいた娘こそは一人のしんき臭い競爭者になつた譯で、それだけに娘を、子供にして出來るだけ押し退け、娘の獨自性に與ふる限り軛を與へ、娘が父親から遠退いてゐる樣に、特に熱心に氣を廻らしてゐたといふ事になる。扨てそこで本當に愛するに足る母を要求する事が、かうしてその少女に、その時から正當づけられて來たのであつた。しかし何故それがこの時期に、そして燃えるが如き熱情の形をとつて烽火をあげたのか、心得難い事である。

その說明は斯うである。かの失望落膽が彼女を襲つた時が、丁度あの幼兒期のエディプス複合の思春期復新 Pubertätsauffrischung の時期にあつたが爲なのだ。彼女にははつきりと子供、それも男の子を得たいといふ願望が意識されてゐるのだ。だがそれが父との間に出來た子か、或

は少くともそれとそつくりその儘のものでなくては氣が濟まぬといふ樣な事は、彼女は意識的には經驗してゐない。然るに皮肉な事には、子供を得たのは彼女ではなくて、實に無意識の中に於て憎んでゐた彼女の競爭者――實に母であつたのだ。かうした苦汁を嘗め、擾亂の極、彼女は父から、然り、男といふものから反撥して了つたのである。この最初の大いなる不首尾から一轉して、自らの女性をかなぐり棄て、そのリビドのはけ口を他に求めたのである。

つまり彼女はこの時に當つて、多くの男が、最初の失戀に心を蝕まれた後には、反轉して今度は女の價知れぬ性といふものに背をむけて、報いるに永く白眼を以てして、遂に婦人の敵となるといふのと同じ轍を踏む事になつたのである。これは最も感興をそそられる例ではあるが、しかも當人としては不幸極りない我々の時代の公爵の話であるが、心を傾け盡した許嫁が、彼に背いて彼と面識のない同族と相携へて彼を棄て去つたのを動機として、それからといふものは同性愛に轉向したといふ事がある。この話が歷史的に何處まで眞實性があるかは詳かにしないが、一齣の心理的眞理がこの噂の陰に宿つてゐる。我々の總てのリビドは、正常な場合、一生涯男性對象と女性對象との間を浮動してゐるものであつて、若者が結婚するといつしか自分の友達への友情

を忘れ、しかも一朝にして彼等夫婦の愛情に罅が入るや、歸來して再び友達と交情を新たにするが如きはこれである。勿論の事、この浮動狀態そのものがしかく徹底的で、しかく最後的である場合には、何かある特別な動機があつて、それが孰れかを決定的に好條件づけてゐて、結局は多分その組せられた側が對象選擇を自分流に押し貫くに恰適な時期を待ちかまへてゐたものだと想像される。

斯うして我々のこの少女もあの思惑はづれを轉機として、子供を欲しいといふ望みだの、男への愛だの、女の務めだのをきはだつてシャットアウトして了つたのである。今や明らかに極めて種種雜多な事が蜂起せんばかりの危機を孕んでゐたのであつた。そして實際に生起し來つた處ののは、實に極端の極みであつた。彼女自らは男性に化身して、父に代へるに母を以てその愛の對象としたのである。* 彼女のその母に對するや初めから徹頭徹尾、對立兩存性 ambivalent で、母への昔の愛に再び活を入れて、その力に俟つてこの母に對する現在の敵意を補塡して餘りあるに到る事が、實にすらすらと運んで了つたのである。扨てかうなつて見た處で、現實の母とは殆どうまくそりが合はふ道理がなかつたので、上述した樣な感情變換から、ある母の代りになるもの

を求める様になつたのであつた。かくしてこれにあの様な激情的な優しみを示したのは、既に先刻御存知の通りである。**

母との現實の關係から出たも一つの實際的動機が、この「病症利得」Krankheitsgewinn のわき役として加はつてゐた。この母は、まだ男達に媚られ、もて囃される事を關心事としてゐたので、娘がかうして同性愛に耽つて、男達をば母に委せきり、自分は所謂「身を躱 ausweichen し」て了つたので、今迄母の嫉妬を買つてゐた道から幾分それた事が、これである。**

* 一體、戀愛の對象と自分とを同一視して――これは自己愛 Narzissmus への一種の退行にあたるものだが――そのために戀愛關係を破局に導いた例はさう稀な譯のものではない。かかる破鏡の極は、新規の對象選擇に當つては今度は前のものと對蹠した性で自己のリビドを占居せしめ得る。

** ここに記載されたリビドの移行は、あらゆる精神分析學者には、神經症者の病歴研究から確かに周知の事實である。處がそれ等はいとけない小兒期か、或は戀愛生活の芽ぐんだ時期に出來たものであるが、この我々の例では、神經症の些の影もさしてゐない少女で、實に破瓜期後の初期に生じたものである。その他の條件は同樣で、之が完全に無意識に止つてゐるのである。一體この時期の問題から言つたら、

その動機は先づ第一に非常に深長な意味を齎してゐるものではないであらうか。

＊＊＊さういふ所謂「身を躱す」、退身 Ausweichen といふものは、今までにリビド定着の機制の項でも、同性愛の原因の條下でも特に論及されてゐないので、私は特別な樣態を示して興味のある類似の精神分析觀察の一つをここに附け加へて置かう。私は嘗て二人共强いリビド性本能に惠まれた雙生男兒を手がけた事がある。彼等の中の一人は女に甚だもてて、數知れぬ女共との交情を恣にしてゐた。他の一人の方も、矢張初めはその道に嗜んだのだが、女共をものにするに當つて、どうも自分がその同胞と似てゐる爲に取違へられる事が多いので、何方が何方だか判らず、かくては結局同胞の繩張りを侵す事になるので、それを快しとしないで、自分が同性愛に轉向して自ら死れたのである。彼は同胞に女といふものは讓つて、所謂「身を躱し」たのである。又或る時私は、美術家で、元々蔽ふべくものもなく兩性愛的基根をもつてゐる男であるが、仕事の上で或る障礙が生ずるや、これを轉機として同性愛が風貌を現したといふ青年を手がけた事もある。彼は女か製作か、その孰れか一つに逃避してゐたのである。精神分析で、その經緯を明らかにし得たが、その結果によると、父親を憚つた事が、色事と製作の兩者を亂し、兩者を放棄するの止むなきに到らしめた最も重要な精神的動機であつたのである。彼の心象によれば、總ての女は父に屬するといふので、彼は父と女といふものについて爭鬪する事を避けて、玆に服從

の意味合から、男へ逃避して同性愛になつたのだ。同性愛的對象選擇のかういふ動機構成は屢〻見出されるに違ひない。人間の性生活の原始時代には、總ての女は父に屬し、その群の主長に屬してゐたのだといひ得る。

雙生兒でない同胞では、さういふ退身といふものは、獨り戀愛對象に關する場合のみに止らず、他の領域でも大きい役割を演ずるものだ。例へば兄貴が音樂をやつて、而も認められるに到ると、弟としては假令音樂的才能に更に惠まれてゐようとも、やがて音樂への憧憬を擲つてその精進をやめて、樂器に手を觸れる事さへもなくなるが如きである。これは世上に頻々として見る事例の中のたつた一つの例に過ぎないが、相競ふ事をやめて身を退くといふ事に導く動機の研究には、甚だ複雜な精神的條件を檢討する必要がある。

斯うして獲られたリビド設定 Libidoeinstellung が、この少女がその父に何ともしつくり來ないのに氣がついた時に、正に定着したのである。女に全く情愛をよせたために、あの最初の懲治を買つて以來といふもの、彼女は何が一體父を惱まし、どうしたら彼に讐を報い得るかを知つた。そして玆に父に對する反抗から同性愛に留つたのである。父に何とかして一泡ふかせ、その心を

裏切るのを屁とも思はなかつた。母には、止むを得ない場合に限り不正直であつたといふ程度に止つてゐたので、父はこれについては何等氣付く處はなかつた。私は彼女が、タリオン Talion の教義――「お前が私を欺いたからには、私がお前を欺く事もお前の氣に入る事に違ひあるまい」といふ教義に從つて、行動したかの樣な印象を與へられた。普斷は狡猾に頭の働く少女のこの目立たしい不用意さをば、かやうの他判斷の仕樣がなかつた。そして父にこの女との交情をちらちら見せつけねば止まなかつたのであるが、これはさうしなければ焦眉の急である復讐滿足の機會が逸し去つたかも知れぬからである。そこでこの傾倒した女と共にゐる事を公然と見せつけ、父の勤務先の近くの街路を遊歩するといつた樣な事に意を用ひた。しかしから言ふまづい手だても、まんざら見込薄ではなかつたのである。兩親が、彼女のこのひそかな心理を了解したかに振舞ひかけたのは、やはり注目に値する事である。母親は寧ろこの娘の退身を嘉みすべき事に買つて寛容を示し、父は彼自らにむけられた復讐のもくろみを感じた時には沸然と怒つた。

彼女自らの異性愛的リビドで、猶その兄に執してゐる點に同時に滿足を與へて呉れる節々をそのそれしやの中に尋ねあてた際、正に彼女の性的倒錯が最後の强化を示したのであつた。

二

かういふ直線的な記載は、この錯雜した、しかも種々な精神層で去來する精神現象の敍述にはどうも適しないのである。この例を討議する事は暫く措き、上述された處に就て二、三を敷衍しかつ少しく掘り下げて見ざるを得ない。

私はこの少女が、その傾倒した婦人と款を通ずるに當つては、戀愛の男性型をとつて對した事は旣に申し述べた通りである。彼女の謙恭、感傷的な謙讓、「いと少く望み、決して强請せず」"che poco spera e nulla chiede"、嫌がられない限りは少しでも遠くその婦人と道伴れとなり、そして別れに臨んではその手に接吻するのに心をときめかし、その婦人が人に美しいと賞められるのを聞いては喜ぶ、しかもその反對に自分自身の美しさを他人からかれこれ言はれる事にはてんで介意せず、愛人の曾遊の地を訪ねて廻り、しかも總ての更に立入つた感覺的欲望には三猿主義をとつた等、總てこれら上述したこまかしい行狀は、先づある尊敬すべき閨秀畫家を自らより高きに位すると信じ、そしておづおづと、それでも勇を鼓して眼を擧げて彼女

を見るといつた樣なあいふ最初の息づまる樣な熱情と相通じてゐるではないか。私が前述した「男性的對象選擇の型 "Typus der männlichen Objektwahl"」といふものとの合致が玆にその一々に就て見られる。ここできはだつて見える事は、彼女がその愛人達の惡評に毫も動かされず、假令自分でそれを目擊して、その惡評が當つてゐるのを認めた場合でも、猶かつ驚かなかつた事である。彼女はもともと教養のある純潔な乙女で、本音としてはさういふ性的な冒險は避けて來たし、野卑な滿足をば本懷としなかつたのであるが、何ぞ計らん彼女の最初の激情は、しつかりした躾などてんでありさうもない女達に特にそそぎかけられたのである。かうして先づ父の最初の抗議をば避暑地で、ある映畫女優と交りを結ぶに頻りであつた目に餘る彼女の執拗さのために招來した譯である。この際、同性愛と取沙汰されてゐて、彼女のさういふ滿足のもくろみにはもつて來いの女達には目も吳れないで、寧ろ沒理的な氣味があつたが、普通に言ふ意味の所謂魅惑的な婦人を得たのである。同性愛に傾いてゐる、彼女と同年輩の、そして諸々として彼女の氣儘になる樣な女友達は一議に及ばず之を排擊した。その「それしや」だとの惡評は、しかしとりもなほさず彼女としては一つの戀愛條件であつたのだ。これは如何にも不可解な事の樣である

が、しかし對象選擇の男性型で母親から轉向したものにもやはり、愛人といふものは、どこか「性的に香しくない」"sexuell anrüchig"ものであり、もともとコケットと呼ばれて然るべきものだといふ條件が存立する事を想ひ起せば、この謎は霧消する譯だ。後になつて、彼女が心を傾けてゐるこの女がどれだけその道で凄腕であるか、そして媚を賣つて身過ぎせざるを得ない女である事を知つた擧句は、彼女の反應は、大いなる同情と如何したら彼女の愛人をこのいとはしい泥沼から足を洗はせる事が出來るかといふ空想と決心に及んだ。これと丁度同じ救ひ出しの努力といふものは、前に記載した型の男性に目立つて認められる事なので、私はその箇所で、この努力の精神分析的解説を與へようと努めた處のものであつた。

それ故にこそ茲で自殺企圖——これを私は止むに止まれぬ突きつめたもので、爲に自分の狀勢が兩親にも將又その女に對しても著しく好轉したと認めなければなるまいと思ふ——の精神分析は、また全然別な領域の說明になつて來る。彼女は或る日の事、事務所から歸つて來る父と會遇するのが强ち思ひがけない事であり得よう筈のない場所と時間に、例の女と相携へて散步したのである。父は彼等と擦れ違つて、擦れ違ひ樣、怒つた一瞥を彼女並にその見知越しの同伴者に投

げつけた。その直後、彼女は市街鐵道をその墓所たらしめようとしたのだつた。彼女のこの決心の直接の動機についてその說く處を聞くと、全くさもありなんと思はれる節々がある。彼女はその連れに、二人を今あんなに憎々しげに見遣つて行つた紳士は實は自分の父で、かういふ交りをてんから嫌つて目にも耳にも入れたくないと思つてゐるのだと白狀したのである。その女は忽ち怒りを發して、さつさと行つて了ひなさい、これから後もう二度と話しかけたり、待合せたりして下さるな、貴女とのこの思ひ出ももうこれで終りです、と彼女におつかぶせて言つたといふ。彼女はかくして愛人を永遠に失はんかと惑つて遂に死を決したといふのだ。この精神分析はこれだけの話の奥に、更にもう一つの、しかも更に深く根差してゐる意味を嗅ぎだす事が出來、それを彼女自身の夢でその然る事を確かめ得るのだ。この自殺企圖は、期待に違はずその他に猶二樣の意味がある。一つは懲罰充足 Straferfüllung (自家懲罰 Selbstbestrafung) であり、一つは願望充足 Wunscherfüllung である。後者としての自殺企圖は、自らの願望が裏切られたるが爲に、彼女を驅つて同性愛に陷らしめたもので、つまり父によつて子を得んとするあの願望の遂行を意味する、何となればかくして父の咎めを負つて、(鐵路に)身を落とした niederkommen =

産み落とした）のである。* この深い意味合と、この瞬間に、その女が父の意圖すると丁度同じ事を言ひ、つまりは父と同じ防遏を加へたといふ意識的な、表面的な意味合との合致が生じてゐる。第二の自家懲罰としては、兩親の中の孰れか一方に對抗して、強い死の願望が彼女の無意識の中に發育してゐたといふ事をその行爲が十分に證明してゐる。それは多分彼女の戀路を妨げた父に對してか、將又彼女の小さい弟を妬んだといふ廉で――これの方が遙かにさもありさうな事だ――母に對してか、一つの復讐企圖からでもあらうか。なんとなれば精神分析は自殺の謎について次の樣な解釋を下してゐるからである。如何なる人と雖も、先づ第一に、彼がその時に當つて自らとそれと同一視したある對象を共に殺して了はなければ、そして第二に、初め他人に向けられてゐた死の願望を、自分自らに轉向せしめるにあらざれば、多分自らの精神的エネルギイを抹殺するに到るものではないのであると。自殺者に定り切つてさういふ無意識の死の願望を見出す事は、別に不思議がるに當らない事だし、又我々の推論の確證の爲に注意を喚起する必要もない事である。何故なら、生きとし生けるものの無意識は、常日頃は愛する人々に對してさへも、さういふ死の願望に溢れてゐるものであるから。** 彼女（娘）には生む事を差し控へさせられ

たこの末弟を母が分娩するに當つて、母が死んで呉れればいいと願つたその母と自らをが同一視identifizieren すると、この懲罰充足はその儘とりもなほさず願望充足であるといふ事になる。扨て最後に、我々のこの少女の樣なある行爲を可能ならしめるには、實に枚擧に遑ない程の數々の强い動機が、共同して作用しなければならなかつたといふ事は、正に我々の期待に背かないものである。この少女の行爲の表面の動機づけには父親があらはれてゐない、そして彼の怒りに震へた事にも一度も言ひ及んでゐない。處が精神分析によつて忖度された動機の中では、主役が父親に割振られてゐるのだ。父とのこのひつかかりが、實は精神分析療法といふよりは、寧ろこの穿鑿の經過竝に豫後に關してかかる決定的な意義を持つてゐたのである。彼女が、兩親を安んずる爲に轉向の試みに力添へしようといつた口實上の兩親への思惑の陰には、實は彼女を驅つて同性愛に定着せしむるに到つた父に對する反抗竝に復讐の燒刃が押しかくされてゐた。さういふうまい伏兵のお蔭で、精神分析的檢索の大部分は、「抵抗 Widerstand」から解き放たれてゐた。そこでこの精神分析は、殆ど抵抗の氣配も見えずに、且被分析者たるこの少女の活潑な理智の手助けにより、しかもその際完全な情緒の安靜の下に遂行された。私が或る時この說の特に大切な彼女

に概當してゐる部分を説明して聽かせた處が、彼女は殆ど眞似の出來ない樣な力强い語勢で次の樣に申し述べた。「ああ、これは實に面白いお話です。丁度當世風の婦人が博物館の中を引廻はされて、自分には全然どれがどれだか差別のつかない品物を、眼鏡で識別する事が出來た時の樣な氣持です」と。彼女の精神分析の運びの工合は、抵抗が手も足も出ない處まで退却して、その虛に乘じて目的を達する處のあの催眠術療法に近似した印象を受けた。强迫神經症の例では、實に屢〻、この——言はば露西亞式の戰法——に從ふので、これに依つて暫く經つと、最もはつきりした効果を齎して、症狀の成因に一つの深い省察を與へしめるものである。扠てさうすると次には、何故精神分析的理解のさういふ大いなる進歩も、患者の强迫や抑壓に對して聊かの變動をも齎さないのであらうかにいぶかしむであらう。しかし聽て、總て成功した例では、どういふ保護壁の陰にかくれて、その神經症が身の安きを感じてゐるのかといふ疑ひに惱まされたからこそであるといふ事が判つて凫がつく。「それは全くその通りかも知れない」——患者の心中ではさうつぶやく、それも屢〻それを意識してゐる事がある——「それも貴方の言ふ事を假りに信じて見たとしたらの話ですよ。處がそんな心算はないし、さてさうだとしても、私は何も今迄通りでいい

のですよ」と。軈てこの疑ひのかういふ動機が知られさうになると、斷然その抵抗との鬪爭が眞劍に始まるのだ。

＊性的願望充足によつて、自殺の方法に意味づける事は前から總ての精神分析學者に信じられ來つた處のものである。（毒を仰ぐ vergiften＝姙む schwanger werden、溺れる ertränken＝產む gebären、高所から身を落す von einer Höhe herabstürzen＝分娩する等）

＊＊戰爭と死に就て時機に投ずる事共、參照、一九一五年〔全集第十卷に集錄〕

處が、この少女に冷かな心構へを裝はしめ、その精神分析をくつきりと二期に分割せしめて、第一期の成果を甚だ完全に、そして非常に見通しのつく樣にさせたものは、實はこの疑問からではなくて、父に復讐するといふ情緖的動機からである。玆に、又この少女の場合、醫師への寄託が比類なかつたかの樣な外見を呈してゐた。しかしもしさういふ言ひ方をするならば、それは勿論沒理な言ひ方で、さなくとも少くとも目先のきかない言ひ方である。醫師に對する何らかの意向がどつかで示されるに違ひないし、而もそれが先づ幼時期の經緯から轉導され來るものである。實際、彼女は私に對するに、父によつてあの思惑放れを來たして以來、彼女の全幅を占めて

ゐた處のあの徹底的男性白眼視を以てした。男性に對する憤懣をば、矢張り移して以て醫師にも恣にする事常の如くにした。別に激しい感情表出を惹起するがものはなく、唯その力の及ぼす處、醫師の總ての努力を潰滅せしめ、そしていつまでも病的狀態に定着して動かないのに止つた。私は經驗上、被分析者に正にこの默せる症狀論を理解せしめ、さういふ、潛んでゐながら而も屢〻度を超えて大きい敵意といふものを、治療を危殆に頻せしめることなく、意識せしめる事の如何に難いかを知つてゐる。そこで私は、この少女のその父に對する意圖を覺るや、男たる自分はこれを止めて、それに價値を認める限りはかかる治療的試みは女醫に移管して更に續けたらどう言ふものであらうかと勸めた。かれこれしてゐる間に、その少女は、少くともその女との交際は差し控へるといふ約束を父にしてゐたといふ。そしてその動機がしかく明白である私の忠告が、その後用ひられるに到るかどうか私には判らない。

たつた一度この精神分析の間に、激情的な、父親への本來の惚れ込みをそれこそ非常に影うすくではあるが再現して、私をしてこれこそ積極的轉授 positive Uebertragung で、愈〻精神分析の手に乘つて來たなと頷かせた事もあつた。處がこの表示に、も一つ他の動機を附加して考慮

せざるを得なかつた。私はそれに言及しよう、これは他の方面から言つて精神分析の技術上興味ある問題を齎してゐるから。この療法を始めてからさう日數が經つてからの事ではないが、或る時彼女は一聯の夢を持ち出した。それは相當に歪められてはゐるが、正しい夢言葉 Traumsprache で作成されてゐて、容易に確實に意味を汲み取り得るものであつた。それ處か、その意味する内容は著しいものであつた。その内容は、この療法でこの性的倒錯が癒るべき事を豫見せしめ、今や彼女に開かれるに到つた生活企圖に關しての喜びを表現し、男の愛への憧れ、子供への憬れを白狀してゐて、あれやこれやで期待に滿ちた轉向への喜ぶべき準備が出來たといふ挨拶を示してゐた。これは實際覺醒時に於けるその頃の彼女の態度と比較すると、撞著する事極まれりと言はねばならなかつた。自分は實際結婚しようと考へてはゐるが、兎に角父の專斷からは逃れて、亂される事なく、自分の本眞の好尙に從つて生活したいものだと考へてゐるのだと明らさまに私に言つたものである。そして更に幾分自嘲的に言ふ事には、自分は男といふものの「程」を知つて了つてゐるが、あの厭はしい女の例にも洩れない樣に、男とも、女とも、同時に性的關係をば結び得るものだ云々と。この話のどこかからうかすかな眉唾的な感じから警戒して、私は或る

日の事、彼女に斷つて見た、私にはこの夢が信じられない、お前は嘘つきで僞善者だ、いつもお父さんを瞞しつけてゐる手で、私をも欺からうとする心算だらうと。これは實に圖星をさしたものであつた。ああいふ種類の夢は、そんな說明では直ぐ足が出て了ふのだ。が、この夢の中には、滿更僞瞞の思惑許りでもなく、幾分探るに足る點もあつたのを私は信ずる。その夢は私の興味をそそり、私の歡心を買はうとした手管であつて、それだけに又てんから背負投げを食はされるに到つたものだ。さういふ僞瞞的な迎合夢 Gefälligkeitsträume のある事を示すと、精神分析者 Analytiker といふ程の人士に、眞にやるせない憤懣の嵐を爆發せしめるであらう事に想倒し得る、「斯くの如くしては、この無意識――我々の精神生活の實際の核心たり、我々に於て、かの惠み勘き有意識より遙かに神に近きこの無意識にしてすら且猶欺き得るのだ。果して如何にして精神分析の說明に、そして我々の認識の確實さに信賴し得ようや」と。逆に、さういふ欺瞞的な夢のあるのを知るのは、吃驚する程耳新しい事ではないのである。私は、人間が神祕を追ひ求める事は根絕し得べからざる事であり、「夢判斷 Traumdeutung」によつて神祕から裂きとられた領域を再び神祕に取り戻すといふ不斷の試みを爲してゐるといふ事は正に知つてゐるのであるが、

この私達をかかづらはせてゐる例では、そんな手の込んだものでなく、もつと簡單極まるものなのである。夢といふものは決して「無意識 das Unbewusste」ではない、それは前意識 das Vorbewusste から、否、覺醒時生活の有意識 des Bewusste からさへもとり餘された考へが、睡眠狀態の好都合に乘じて、違ふ鑄型にそそぎかへられて出來た形である。睡眠狀態に於ては、夢は無意識な願望感動の支持を得て、そしてその際、「夢の仕事 Traumarbeit」によつて、無意識的なものに當て嵌る機構によつて決定される歪み Entstellung といふものの洗禮を受けて來たのだ。我々のこの夢見た少女では、父に對していつもやつてゐた樣に、私をも惑はさうとした意圖は、彼女が先づ全く意識してゐなかつたとしても、確かに前意識から因由したものである。今や、彼女は父（又は父親代理 Vaterersazt）に迎合せんとする願望衝動と手を繫ぎ、そしてからいふ欺瞞的な夢を形作つて、結局自らの意向を貫いたのだ。父を欺き、しかも父に阿ねようとするこの相反するが如き二つの意圖は、同じ觀念複合から派生するのである。前者は後者の壓迫より逃れて育ち、後者は「夢仕事」によつて結局前者に歸せしめられるのだ。そこで無意識の芳しからぬ品隲、我が精神分析の成果に對して鼎の輕重を問ふが如きは正に措くべしだ。私は、人

間といふものが、その愛慾生活の甚大な、しかも意識深き節々に就て、多く顧慮する事もなしに、然り、往々、それに就てこれっぱかしの豫測もなしに通して行く、或は又、假令それが意識に上されたにしても判斷が根本的に誤つてゐるといふ樣な場合があるのに、驚愕の嘆を發する機會をばここに逃すまい。これは、獨りさういふ現象のあり得べく信じられる神經症の條件の下のみではなく、又全くありきたりのものの樣にも思はれる。我々の例では、一少女が同性に溺れたのだが、これが初め、兩親に苦々しく感じられこそすれ、殆ど大事だとはされなかつたのである。彼女自身にしてからが、事の重大性は多分知つてゐながら、ある彈壓を下されて全く過大な反應を示すに到る迄は、ついぞ自分の强い惚れ込みの感覺に就ては、殆ど感ずる處がなかつたのである。しかるにその過大な反應たるや、生の儘の强さをもつた蝕み盡す樣な熱情と關聯した事は凡ゆる節々で示された。さういふ精神的嵐の爆發には缺けない處の前兆に就ても、その少女は何等氣付く處がなかつた。或る時、强度の憂鬱症 Depression に陷つた少女達や婦人達に、その疾病狀態の由つて來たつた、あり得べき動機原因を尋ねたら、確かにある人にある興味を感じてゐた、がそれなり深い關係には立ち入らないで、諦めねばならぬ時が來た時に、それつきりにして

了ひましたといふ答へを得た事がある。だがしかし、かう言ふ風にうはべは、無雜作に忍ばれた諦めこそ、實は後々の重い障礙の原因となるのだ。これを男に就て見ても、女と極く上つ調子の戀愛をやつた心算であつても、さて分れて見ると、自分ではそれ程とも思つてゐなかつた女に實は熱情を灑いでゐたのだつたといふ事に思ひ當る事があるものだ。實際、何の悔いもなく、何の慮りもなく無雜作にかう決心した、いはば人工的な流產、愛の姙兒を降して了ふ事が、如何に不測の作用を齎して來るものであるかは驚くに堪へたものがある。玆に到つて、戀してゐようと知らずに戀し、つまり自らの戀を知らず或は自ら愛しながら嫌つてゐるものだと信じてゐる樣な人人を好んで描寫する彼の詩人の考へこそ、正しいとうけがはざるを得ない。我々の意識が、我々の愛慾生活から受け取る情報といふものが、特に幾分不完全で、ちぐはぐであつたり、或は見當が違つてゐたりする事もないとは限らない譯である。かういふ論議をすすめる上で、私は勿論、後々の忘却といふ點をば、顧慮してこれを割引きして考へる事に吝ではなかつた。

四

扨て前に中斷してゐたこの例の論議に戻らうか。こゝ迄はこの少女のリビドを健常のエディプス複合から驅り立てて同性愛のリビドに逐つた力に就て、そしてその際踏み込まれた道といふものに就て鳥瞰した譯だ。既に述べた事だが、この拍車的な力の配下に、彼女の末弟の誕生といふ動機が潛んでゐるので、この例は略後天的に獲得された性的倒錯に組み入れていい樣だ。しかしここで、精神過程の精神分析的説明上、毎度ぶつかる或る情勢に注意して見よう。一體我々が、物事の開展の後を尋ねるのに、その終末結果から出でて、逆に之を追求する限り、結局目の前に展開するものは、鋍のちつともない情景で、その見界を完全に滿足なものとなし、それで萬事足れるものと考へられる。處がこれと丁度逆な方法をとつて、精神分析から見出された豫想といふものから出發して、これを結末まで追ひ詰めるときは、必要な、そしてそれ一條の鎗輪とも思はれるものを手放して了ふ事になる。だから我々はいつも、こいつはまだ何か嗅ぎ出せさうだ、別のこの決著だつて得心が行くし、説明がつけられさうだとばかり、あれもこれもと腦裡に浮び出

て來るのである。そこでかういふ綜合のやり方は分析程十分なものではない。語を換へて言へば、豫想の智嚢からは、結末の性質を豫め言ひ得なからうといふのである。この曖昧な知識をその由つて來る處にひき戻す事は至極簡單だ。ある一定の結果を規定する原因的要素が完全に分明してゐるにしても、我々は唯それの性質上の特質を知つてゐるのみで、決してその相對的强度relative Stärke を知つてゐるのではない。だから、その中にあるものは、人並に顏を出してゐてもあまり弱いから、いざとなれば結局他のものに壓迫されてその終末効果から言ふと問題にならなくなるものもあらう。處が結末を決する動機の中、どれが弱いのか、どれが強いのかそれを豫め知るよすがないのである。我々は唯總てが濟んで了つてから、これがより强いものであつたのだと指呼し得るのだ。つまり精神分析の方向の手掛りは常につくが、それを綜合の方面で豫め云爲する事は不可能だ。

そこで、破瓜期のエディプス成立 Oedipuseinstellung から由來した戀の憧れが、既述した様な思惑違ひにぶつかつたからといつて、少女が皆が皆、定つてかういふ風に同性愛に沈湎する様になるのであらうなどと主張する心算はない。寧ろこの精神的外傷に對して他種の反應を呈する事

の方が屢〻あるのだ。するとこの少女では、さういふ精神的外傷より他の動機、多分内部的な性質の動機が事を決したに違ひあるまい。こいつを摘發する事は、又決して難事ではない。

御承知の如く、健常な人でも、その戀愛對象の性の決定に、最後的な斷案を下して了ふには幾分の時日を要するものだ。同性愛に熱中し、過度に强い、感覺的の色彩を帶びた友情といふものは、破瓜期に入つた一寸の間といふものは、男女兩性にあり來りのものだ。この少女もその例に洩れなかつたのだが、この傾向が彼女には疑ひもなくより强く示され、そしてそれが他の者より、より永く保續されたのだ。その上、後來の同性愛のこの前觸れは、常に彼女の有意識生活を占居し來つたもので、一方エディプス複合から發芽した成立狀態の方は無意識に止り、小さな男の兒に氣を惹かれるといふ位の事でその片鱗を現すに過ぎなかつたのだ。その學童時代には、ある近づき難い嚴格な女敎師に永い間心を傾けてゐたが、これは明らかに母性代償 Muttereersatz と認むべきであつた。そして末弟の誕生に廻り會つて、ここに父ありと最初に父といふもののはつきりした存在を否應なしに見せつけられる迄は、可成り永い間であつたが、その間世の多くの若くして母となつた婦人に對して特に生き生きした興味をそそいでゐたのだ。つまり彼女のリビ・

ドは、非常に早期から既に二つの潮流をなして流れてゐたので、その上層の潮流こそは、疑ひもなく同性愛的のものと言つて然るべきで、これは多分、母への幼兒期的執著が直接に、而も粧ひを變へないで推移したものであつた。恐らく我々の精神分析からは、ある恰適な時期に會して、深層の異性愛的なリビドの潮流も亦、顯はな同性愛的な潮流に遷移したといふ過程の他は何等認むべき事がなかつた。

更に、この分析で教つた事は、この少女が、その童女期 Kinderjahre 以來といふもの、强く調子づけられた「男性觀念複合 Männlichkeitskomplex」を把持してゐた事だ。活潑で、爭ひ好きで、直ぐ上の兄などに對しては、その後塵を拜しようなどとは、てんで思はないといふ風で、例の陰部目擊 Inspektion der Genitalien 以來といふものは、强硬な陰莖嫉妬 Penisneid が發展して來て、その餘波が常に彼女の考へを浸してゐた。彼女は元から女權論者 Frauenrechtlerin で、少女が若者と同等の自由さを享受し得ないなんていふ法はないとして、特に婦人たるが爲の宿命といふものに逆つた。精神分析をした頃には、自分が姙娠するとか、子を生むなんて言ふ事は彼女には好ましからぬ觀念であつた。これは思ふに、それによつて身體の歪みを來すからであ

つたからだ。それは唯自らの美を誇示したに過ぎないものであつたにしろ、この自らをいたはる氣持は、實は少女的な自己愛からである。* その他種々の男性徴として、前には甚だ强かつた見たがり Schaulust 見せたがり Exhibitionslust を擧げ得る。この例の成因上、後來性獲得といふものの領分を狹めて考へたくない人は、この少女の上述の樣な狀況が、丁度、母性の輕蔑と兄弟の陰部と自分のとの較べ合せとが一致して作用した爲に、强い母性定着 Mutterfixierung に決めつけられねばならなかつたといふ風になつてゐたとばかりに注意を喚起する事だらう。扨て茲に又、好んで體質性特性なりとせられて來たかも測られぬあるものを、昔作用を及ぼした外的影響による印刻に歸して考へるといふ一つの考へ方もある。そして又この後天的獲得――若し實際獲られたものとすれば――の幾分は、招來された體質の中に算へ込まれるであらう。そこで我々がこの説で、一對の對立――後天性と獲得性と――として示したい處のものは、ここで觀察して見ると、常に相纏ひ、相和してゐる。

* ニイベルンゲン歌曲 Nibelungenlied 中のクリームヒルデ Kriemhilde 姫の告白參照。

この例は同性愛の後期性獲得に關するものなりと、精神分析からの早まつた暫定的な決論が下

されたとしたならば、この材料から再檢討した擧句、もともと先天性の同性愛といふものがあつて、普通の場合の樣に、それが破瓜期後の時期に定着して、まぎらしくなく風貌を現して來たのだと異論を申し立てるかも知れぬ。兎に角、この分類の孰れもが、それぞれの觀察によつて確定された一部の事情のみには正鵠を得るが、しかも他をば閑却してゐるといふ憾みがある。いづれにしてもさういふ質疑の價値を一概に蔑視して了はない限りは略正しきを得よう。

今迄の同性愛の文獻は、一方には對象選擇の問題、他方に性的特徵 Geschlechtscharakter 竝に性的態度 geschlechtliche Einstellung といふ問題を、十分はつきり區別してゐないのが常で、その狀は、恰もある一點で分けようとすると、續々として他のひつかかりを生じて來るので、孰れを孰つて區別すべきやに迷つた傾きがある。處が經驗の敎へる處に從へば正に逆だ。きはだつて男性的特質を享有し、その戀愛生活に於ても男性型を示す男性が、しかもその對象に關しては倒錯を生じて、女性の代りに男性を戀愛する事もあり得る。逆に、ここに一人の男性があつて、その性格の中に女性的特質が目立つて蟠踞し、しかもその戀愛に於て女性的に振舞ふ人があつたとすれば、かういふ女性的態度をするからには、てつきり男性がその戀愛對象としてさし

示さるべきものとばかり思はれたのに、それにも拘らず實際には、この男性が異性愛たり得、對象に關しては決して倒錯を示さず、結構健常人として通り得るのだ。これと同じ事は又女性にも當て嵌る。彼女等に於ても、心理的性格と對象選擇とは、そんなに强い關係に結ばれてはゐないのだ。そこで同性愛の神祕といふものは、人口に好んでのぼされる樣に、「女ごころ、然りその爲にこそ男を愛さざるべからざる女ごころが、不幸にして男性の身體に迷ひ込み、男ごころ、そはへたへたと女に引きつけられる男ごころが、これ又悲しいかな女の身體に宿つた」ためだといふが如く、しかく簡單なものではない。寧ろそれは三列の性格に關聯するのだ。卽ち

——身體的性的特徵（心理的半陰陽）

——心理的性的特徵（男性的 女性的態度）

——對象選擇の仕方

で、これ等はある一定の程度迄、お互ひに自儘に變動し、各個人個人で多種多樣な配置を呈するのだ。近來の文獻は、この關係への洞見を沮礙して、素人にのみ特に目立つて見えるこの第三の樣態、卽ち對象選擇上の仕方を第一列に拉し來り、そしてこれと第一のもの（卽ち身體的性的特

徵）との間の關聯の緊密さを誇張して來た、これは精神分析的研究が見出した二つの基本的事實と反噬して、今迄劃一的に同性愛として記して來たものの總てに更に深く透見せしめる道をも沮礙する。その第一の基本事實は、同性愛の男性は母への特別に强い執著を經驗して來てゐるものである事、第二は、總ての健常者にも彼等の炳乎たる異性愛の他に、實は非常に强度の潛在的・卽ち無意識的同性愛が認められるものだといふ事實である。この發見に從ふならば、先づ、大自然の大それた氣まぐれからつくられたとされる「第三性 drittes Geschlecht」といふものを認めるなどといふ事は、てんで愚の骨頂だ。

精神分析は同性愛の問題を解く事を以て任とするものではない。それは對象選擇に際して意を決せしめた心理機構を解明し、その機構から出で、本能素因へ通ずる路を追求するを以て本懷とせざるを得ない。精神分析はこれだけで戈をさめ、他は生物學的研究にゆだねる。これは丁度今、シュタイナッハ Steinach の實驗で[*]、上記第二（心理的性的特徵）竝に第三系列のもの（對象選擇の仕方）の、第一系列のもの（身體的性的特徵）による被影響性に關する意義深き開明を招來してゐる處のものだ。精神分析は生物學と共通の基礎の上に立ち、人間（動物と同斷）の個人

の始原的な兩性愛 Bisexualität といふものを豫想してゐるのだ。しかし乍ら、方便的又は生物學的意味で、「男性的 männlich」とか「女性的 weiblich」とか呼稱してゐる處のものの本質を、精神分析學はこれを說明し得ない。精神分析學は兩つながらの概念をとり上げ、それをその仕事の基礎としてゐるのだ。更に立ち入つてその歸屬を云爲しようとすると、男性とは積極性のもの、女性とは消極性のものだといふ位の事に解消して了ふ。これではあまりに內容が貧弱ではないか。精神分析の範圍に屬してゐる闡明的硏究の領域から、倒錯を轉換する處置が獲られるといふ期待が、どの程度まで許容され得るか、將又、既にどの程度迄經驗によつて確定されてゐるかは、私が前に詳述しようと試みて來た處のものである。處が私の方の影響性の度を、シュタイナッハが個々の例に就て手術的介入でめざした大層な變換と比較して見るならば、多分先づ決して目立つた印象を與へまい。我々が今性的倒錯の一般に用ひ得る「療法」といふものに既に期待したとしたなら、それこそ早まつた事であり、或は審惡的な誇張となるであらう。シュタイナッハが効果を得た男性同性愛の各例は、あまりにはつきりしすぎた身體的「半陰陽」の、必ずしも恒在しない條件を滿したに過ぎないのだ。アナロヂカルな方法による女性的同性愛の療法も、先づ

全く不明である。その療法たるやこれは恐らく半陰陽性の卵巣だらうなどと見當をつけてこれを除去して、他人の、望むらくは單性のものを植ゑつけるにありとしたならば、それは實際的に應用される見込みが極めて少からうといふものだ。男性的に物を感觸し、男性的振舞ひで戀愛をして來た一人の女性ありとするに、これをして女性の心理的役割を果させようとしてシュタイナッハによつて事を計つて見るにしても、この絕對的に有利なりとはせられない變換を贖ふに母性の役割を放棄してかからねばならぬとなれば、そいつは肯じられなからう。

* リプシュッツ、「破瓜腺 Pubertätsdrüse とその効果」一九一九年、參照。

嫉妬、偏執、同性愛に於ける二、三の神經症的機構に就て

初め「國際精神分析學雜誌」第八卷（一九二二年）に發表せられたもの。

一

嫉妬 Eifersucht といふものは、悲哀 Trauer といふものと似て、正常なものとして記載されていい情緒狀態に屬するものである。嫉妬が一人の人の性格や行藏に缺けてゐる樣に見える場合には、それは强い壓迫の足下に踏まへられて、從つて無意識性精神生活の中でそれだけ大きい役割を演じてゐるものだといふ結論が是認されるのだ。異常に强勢された嫉妬で、精神分析が關與する樣な例では、これが三樣に層づけられてゐる事が判る。嫉妬の三層、換言すればその三段階とは、一、葛籐してゐる konkurrierend 從つて正常の嫉妬、二、投射された projiziert 嫉妬三、妄想的 wahnhaft 嫉妬の名を負うてゐる。

正常の嫉妬に就ては、精神分析上言及すべき處が尠い。このものは實質的に、悲哀とか、旣に掌中から失つて了つたと信ずるその戀愛對象にからまる懊惱とか、將又それを別にとり立てるとすればあの自己愛性苦惱であるとか、更に又目ざす戀仇に對する敵愾感情、進んでは自分が到らなかつたからだとばかり自身を失戀の當面の責任者たらしめようとする自己批判が多少加味され

て來る等色々なものが複合されて成つてゐる。この嫉妬は、假令これは正常なものだと呼びならはせてゐるにしても、決して一から十まで合理的なものではない。つまり現實の經緯から生れ出たものであつて實際の狀況に應じて居り、そして餘す處なく意識性自我に支配されてゐるといつた處で、實はそれは深く無意識の中に根を下ろして居り、小兒期性情緒の中の最も早期の衝動を引き繼ぎ、かつ最初の性期のエディプス複合乃至は同胞複合 Geschw.sterkomplex から派生してゐるものであるからである。ここで常に注目に値する事は、この嫉妬が多くの人士に兩性的bisexuell に經驗されてゐる事で、つまり男としたら愛する女にからまる懊惱とその戀仇たる男への憎しみは勿論乍ら、その他に、實は無意識的に愛してゐるその戀仇の男にまつはる悲哀と今度は戀敵として見るその戀人たる女への憎しみとが前者の情緒に拍車を加へてゐるといふ工合に兩性的なものである事である。私の知つてゐる例で、ある男が途轍もなく嫉妬衝擊に惱み、彼の訴へる最も傷心な苦艱をば、意識的にその不實な女に轉じておつかぶせる事を敢てしたのがある。彼がその時身も世もない感じと、それから恰も彼が、プロメテウスの樣に、禿鷹の貪食に賭けられ、或は又がんじがらめにされて蛇の巢に投げ込まれたかとばかりにも思はれつべき現在の慘狀

とをば、彼が嘗て少年の日に嘗めた毎度の同性愛的苦汁のあの印象に自ら關係をもたせてゐた。

第二層の嫉妬、つまり投射的嫉妬は、男であらうが、女であらうが一律に、その生活に働いてゐる持前の不實、或は既に壓迫の手中に陷つてゐる不實の衝動から生じて來るものである。特に結婚生活で要求される實(まこと)と言ふものは、常にさしまねく誘惑の手をはらひのけつつ保たれ得るものであるのは日常經驗する處である。扠てこの誘惑を自らの中に斷つ者は誰でも、その壓力を强く感ずるので、好んで一つの無意識性な機構を要求してそこにはけ口を求め、それを輕減しようとする。彼が、不實へ傾かうとする自分の衝動を、實(まこと)を誓ふ責を感ずるその相手に投射するときは、荷が輕くなつて、つまり良心から釋放されることになるのだ。この强い動向は、自分のその相手だつてこれと同じ無意識性感動を持つてゐるのだといふ認識材料に資せられ得るので、相手(男又は女)だつて滿更、自分より行ひすましてゐる譯のものでもあるまいといふ様な考へまはしから、さういふ動向も曰くづけられる事にもならう。*

* デスデモナの歌詞の一齣、
I called him thou false one, what answered he then?

If I court more women, you will couch with more men.

私が彼を、この不實ものが！　と呼ばつたら、彼が何と受け流した事か！　俺が乙女を物色するが惡けれや、お前だつて若い燕にながしめを呉れるであらうが。

社會の習俗といふものは、この一般的な實情に最も巧みに應じてゐるので、結婚した夫人のほれられたさとその夫の征服慾とに、或る緩衝地帶を存して、この不實への否み難い慾向にはけ口をつくり、これを無難にしようと期待してゐるのである。で、この便宜は、兩者ともこの不實へのあゆみかけをばお互ひに齒牙にかけない樣にし、そして第三の對象に對して燃しつけられた慾念を、昔ながらの對象への實へ反轉せしめて滿足せしめるといふ譯になる。處が嫉妬者といふものは、この便宜上のゆとりといふものを知らないので、一度踏み込んだ道に佇立してゐたり、往き還りしてゐるのを氣づかず、世間の「いちやつき "Flirt"」といふものが、實際の不實に對する一つの安全瓣になつてゐる事を信じない。さういふ嫉妬者を取り扱ふに當つては、彼が自分で據り處にしてゐるからういふ材料に就て彼と論爭して見たつて始まらない。唯さういふ材料を別樣に品隲する樣に彼を導いて行かうとするに止むべきだ。

さういふ投射によつて生じた嫉妬は、實際にまるで妄想性性質を持つてゐたにしろ、精神分析の働きかけには抗し得ず、忽ちにして馬脚を現して來るのである。これにも增して厄介なのは第三層の嫉妬、卽ち本來的に妄想性な嫉妬である。これも御多聞に洩れず、壓迫された不實動向から生じ來るものではあるが、この空想の對象は同性的種類のものである。この妄想性嫉妬は、醱酵した同性愛に當るもので、パラノイア症の定型の中に當然その座を占むべきものである。强烈すぎる同性愛的感動をはぐらかす試みとして、この嫉妬(男性では)を公式で代辯させて見れば、次の樣になりもしようか。

私が彼を愛してゐるもんですか、彼女が彼を愛してゐるんですよ。*

* シユレーベルの例―自傳的に記述されたパラノイア症(妄想性痴呆)例の精神分析〔全集第八卷に輯錄〕―の說明參照。

嫉妬妄想の例では、上述三層を通じての嫉妬は見出されるが、決して第三層のみからのものは見出されるものでない心算だ。

二

パラノイア症。ある知明な理由からパラノイア症の例といふものは、大抵精神分析研究の手から免れてゐる。而も私はつい最近、二人のパラノイア症者を徹底的に研究して、私には全く初耳であつた二、三の新知見を得た。

第一例は若い男性であるが、すつかり出來上り切つて了つた嫉妬妄想症 Eifersuchtsparanoia で、その對象といふのが、實は一點の非も打ち處のない實のある彼自身の夫人であつた。妄想が絶間なしに彼を襲つてゐた狂亂期は、既に過ぎ去つてゐて、私が彼に會つたときには、ちよくちよくなほ相當きはだつた發作を起すのみだつた。處がこいつの面白い事には、この發作といふのが數日以上も引き續いたもので、而も雙方共に堪能する程性行爲が滿足に行はれた翌日から定つて起つたといふのである。つまり、いつでも異性愛的リビドが滿足された後には、それと共同刺戟された同性愛的要素が嫉妬發作として、その全貌を露出して來るのだといふ結論が是認される譯だ。

扨てその發作の據つて生じ來る材料は何かといふと、夫人に極く些細なひらめきがあつて、このひらめきから、他人には判らない位なその夫人の完全に無意識性な媚といふものが、彼には感知されるといふ事からである。彼女が自分の傍に腰を下してゐる紳士に何の意圖もなく手を觸れたり、自分の顏をあまりに他人の方にむけ過ぎたり、夫と唯二人でゐる時よりももつと親しげな笑顏を浮べたりしたとか、彼女の總て斯ういふ無意識の表現に異常な注意をむけるといふ工合であつたが、それでゐながら彼女から常に正しくその意味を汲み取る事を知つてゐた。といふのはつまり、彼の言ふ事が元來常に正しかつたので、精神分析の力を俟つても彼の嫉妬を是認する破目となつて了つた。結局する處、彼の異常といふものは、彼が彼の妻の無意識界をば、他人が氣づく以上に鋭敏に觀察し、且より高く買つたといふ點に存したのだ。

我々が玆に於て想起する事は、例の追跡妄想のあるパラノイア症患者も、これと全く同様に振舞ふ事である。彼等も又、他人の中に決して自分に無關係なるものを一つとして認めず、彼等に、他の人達、見知り越しならぬ人々がほのめかした質に問題にならぬ程の些細なきざしさへも、彼等の「關係妄想 Beziehungswahn」の中では重きをなすのである。彼等の關係妄想の本音は、彼

等が総ての見知らぬ人々から何か戀愛の様なものを待ちまうけてゐるといつた様なものだ。處がこの人達は、彼等の期待に反して何等それらしい氣配も見せず、その前を笑つて過ぎるとか、ステッキを振りまはして通るとか、或はゆきづりに地に唾するとかするであらう。これは、もし傍にゐるその男に、何でもあれ何か親しげな關心をもつたとしたらしない事であらうが、もしこの人々が彼等に全然無關心で、てんで空氣を相手にする様に振舞ひ得るとしたら、かういふ行ひもする事であらう。そこでそのパラノイア症者が、彼の求愛に酬いるに斯くの如き無關心さを以てせられたことをば敵意ありとして感ずるとしたら、「空々しい fremd」とか「敵意をもつてゐる feindlich」とかいふ概念と親類筋の概念に執したからとてこれは間違ひではあるまい。

扨て彼等パラノイア症者は、自分自身の中に認識しようと思はないものを發して他人に投射するものだと言ふ様な論の建て方では、嫉妬妄想症者乃至追跡妄想者の消息を傳へる事著しく不十分なものにならうと推測される。

それは確かにそれもある。がしかし、彼等は類似のものが何等存在してゐない處に、所謂漠然と投射するのではなくして、無意識の彼等の知識に導かれて、他人の無意識に、自分の無意識か

ら奪つた注意をむけるのだ。そこで我々の嫉妬者では、彼自らの不實の代りに、妻の不實をば認める譯なのである。しかも彼は妻の不實をば非常に大袈裟に意識するので、自分自身のものは、無意識に放置する事が出來るのだ。彼の例を規準に品隲するならば、追跡妄想者が、他人の中に認める敵意といふものは、實は他人に對する自分の敵對感情のてりかへしであると結論してよからう。我々も知つてゐる樣に、パラノイア症者では、最も好愛する同性の人間が追跡者といふ事にされる譯なのであるから。それから一體この情緒反向といふものは、何處に由來するものかといふ疑問が起きて來る。それの手頃な答へとして、次の樣にも言ひ得ようか。つまり常に存在してゐる感情對立兩存性 Gefühlsambivalenz といふものが憎しみの下地を作つてゐて、そして好愛要求が滿されなかつた爲に、その憎しみを强めるのであると。そこで對立兩存性といふものは我が嫉妬妄想者に嫉妬が果した樣な役目を追跡妄想者に示して、その同性愛を防護するのだ。

我が嫉妬者の夢が又、私に一つの大いなる驚異を與へた。この夢は例の發作と同時に現れたものではなかつたが、猶その妄想の支配下にあり、しかも完全に妄想より解放されて居り、且その底流をなしてゐる同性愛性感動をばまづ世間なみの强さの粉飾で示してゐた。パラノイア症者の

夢に關する私の僅少な經驗では、パラノイア症といふものは、夢の中にまで突入して來るものではないと一般に認めても、當らずといへども遠からずの槪があつた。

同性の狀況は、この患者では一目して瞭然であつた。彼は友情だとか社會的關心だとかを造り上げてはゐなかつた。そこで、恰も初めてこの妄想が、男性との彼の闘り合ひのその後の進展を何かを償はうとする樣に、引き繼いだといつた樣な印象を受けざるを得なかつた。その家族上の父の意義が薄かつたことと、早期兒童期に羞しむべき同性愛性外傷を受けた事とが協同的に作用して、彼の同性愛をば壓迫に委し、それの昇華して友情だとか社會的關心に化する事を妨げて了つてゐた。彼の全靑年期を通じて、母への强い結びつきが彼を占めてゐた。つまり多くの息子達の中で、彼は文句なしの母ツ子で、從つて母に對しては普通の型の强い嫉妬を形成した。後年、彼が嫁選びをするに當つて、本質的に母といふものの內容を豐かにしたいといふ動機に支配されて、花嫁の處女性に就て强迫的に疑惑をもつて處女性母 virginale Mutter を求めたいてふ無理な要求を持つてゐた事を表白したものである。結婚後の一、二年は嫉妬の色も見當らなかつた。それからそろそろ妻に不實になつて來て、他のある婦人と永い間の關係に陷つたのである

が、これでもやはりある疑惑に脅かされて、この戀情關係を見限つてから、初めてここに第二の、卽ち投射型の嫉妬が生じて來て、それによつて彼の不實故の非難を宥める事を得たのである。それは、その男を對象とする同性愛性感動の擡頭によつて複雜化し、玆に全き嫉妬妄想症になつたのである。

私の第二の例は多分、精神分析の力を藉りなかつたら追跡妄想症 Paranoia persecutoria として分類されなかつたであらうが、私はこの靑年を、この疾病になるべき候補者なりと思はざるを得なかつたものである。彼には、父に關しては背反の度が異常に大きい感情對立兩存性が存してゐた。彼は一面に於て、最も際だつた叛逆兒で、父の希望だとか、理想だとか、總てさういふものに叛いて育つて來た程であるが、他方その內層では常に最も恭順な息子で、父の死亡後、感傷的な罪障意識から女への好みを絕つた程であつた。男に對する實際上の關係はどうかといふと、明らかに男達を信用せぬ面持があつたのであるが、彼の强い理性で斯ういふ立場を合理化することを知つてゐて、彼が知合ひや友達から欺かれ、且惡用されるからだといふ工合に辻褄を合はせる事が出來た。私が彼より學び得た新知見は、典型的の追跡妄想性の考へといふものが、そ

の考へを信用したり、それに價値を置いたりしないでも存在し得るといふ事であつた。追跡妄想性の考へが精神分析中に時にはきらめいても、彼はそれに一顧の價をも置かず、且定つてそれを嘲るのを常とした。これはパラノイア症の多くの例でも同様に起る事象だが、こんな工合であるからさういふ疾患が急に起ると、その時表白される妄想觀念を、それが隨分永い間存在してゐたらうにも拘らず、今に始つたものだと思ふのだ。

次の様な見界は重要なものの様に思はれる。一定の神經症的形成が存在してゐるといふ質的な要素は、量的な要素、つまりどれだけの注意を惹きつけるかといふこと、正しく言へばどれだけの役割をこの構成體がひき受けるかといふ事より、その意義が薄い事である。第一の例、即ちあの嫉妬妄想症論議からしても、その異常とせられる處は、實は他人の無意識の行藏の意味づけを過度にやつつけてやきもきする點なのだが、これから見てもやはり量的要素といふものを同様に評價すべき事を要求してゐた譯である。ヒステリイ症の精神分析からも、とつくの昔にこれと相同な事實が判つてゐる。病源的空想、つまり壓迫された感動の申し子たるこの空想は、永い間正常の精神生活の傍に隱忍させられてゐて、それがリビドの配置の變動に乘じて、一役買つて出る

までは病源的には働きかけないのである。こいつが頭を擡げて來ると初めて葛籐が起つて來、症狀形成に及ぶのだ。そこで我々は我々の認識を進めて行くにつれて、益々量的見地を前景に齎さざるを得なくされる。私は又、ここに强調された量的要素は、ブロイラア Bleuler 竝にその他の人々が、新たに「連結 Schaltung」なる概念を導入しようと欲した現象を言ひ表すに足らないものなりやといふ疑問を投じたい。心理過程の或る方向に於ける抵抗の昂進は、他の方向の路のもの迄も過度にひき受ける破目になるから、その過程の中に、これが介入して行く事に結局なつて了ふのだと想定せざるを得ない。

甚だ示唆に富んだ矛盾を、我が二例のパラノイア症が夢に關して示してゐる。第一の例では、既に述べた樣に、その夢が妄想から解放されてゐるのに、第二の例の患者は、大多數被追跡的夢を作り出したのである。之は同じ內容の妄想觀念の前觸か或は代償形成と見做され得るものだ。彼が大いなる不安に戰き乍ら辛じて身を躱し得たその追跡者は、定つて牡牛だとか、或は彼が屢々その夢の中で自分でこいつは父性代償 Vatervertretung だなと目利きした男性象徵であつたのである。或る時の事、彼は非常に特色のある妄想性轉嫁夢 paranoischer Uebertragungstraum

を見たのを知らせた。それは私が彼の居る處で髯を剃つたといふ夢なのだが、その際、その臭ひから私がその時彼の父が使ひつけてゐる石鹼を使つてゐるのに氣がついたといふのである。かうした事は、彼が私へ父性を轉嫁せしめた爲なのだ。特にとりたてて夢みられた夢の內容的布置から見ると、患者が自分の妄想性空想を輕視して居り、且それに心を傾けてもゐないのは蔽ふべくもない、何故なら每日目にとめる處から推しても抑〻私が彼を前に置いて、髯剃石鹼を使ふ樣な事がありよう筈もなく、從つてこの點で、彼の父性轉嫁に何の據り處もあたへてゐる譯もない事は判り切つた事だからである。

然し我々のこの二人の患者で、その夢を比較して見ると、一體パラノイア症（或は何か他の精神神經症でも）も亦、夢の中に入り込み得るやといふ設問は、夢を正しく了解しないがために なされたものだといふ事を敎へられる。夢といふものの覺醒時の思考と違ふ點は、夢は、覺醒時の思考には現れまじき內容を（壓迫されたものどもの巢窟から）ひつぱり上げて來るといふ點に存する。この點を除外して考へれば、夢だつて思考の一形式に過ぎないので、前意識性思考要素 vorbewusster Denkstoff が夢仕事 Traumarbeit とその條件によつて變形されたものに止る。

壓迫されたもの das Verdrängte には、神經症上の術語が當て嵌らない、ヒステリイ症的とも、强迫神經症的とも、パラノイア症的とも、何とも名付けやうのないものである。これに反して、夢形成に身を委せる部分の思考要素、前意識的思考 vorbewusste Gedanken は、健常であるか、或は何かある神經症の性質を帶びるのである。前意識的思考とは、我々がある神經症の本質をその中に認識する樣な、總てあいふ病因性過程の歸結であるかも知れない。さういふ病的觀念が全部が全部、變形を經て夢にならねばならぬといふ譯のものでないのは何故か、そいつは判らない。そこで、夢は畢竟するにヒステリイ性空想 hysterische Phantasie、强迫觀念 Zwangs-vorstellung、妄想觀念 Wahnidee に値し得るのだ。つまり夢判斷によつてさういふものが手繰り出されて來るのである。二人のパラノイア症者を觀察して我々の見出した事は、一方の男は發作に沈湎してゐるに拘らずその夢が健常であり、他方の男は自らの妄想を嘲笑してゐるに拘らずその夢は妄想的內容を持つてゐるといふ事である。そこで夢は兩者の例とも、覺醒生活ではその當時壓迫されてゐたものを攝り込んでゐるのだ。しかしこれが定律なりとされる譯のものでもないのだ。

三

同性愛、同性愛の器質的要素を認知したにしても、その成生に當つての心理的過程を吟味する責務がなくなる譯のものではない。定型的な、つまり無數の症例で既に確認された過程は、今迄強く母に惹かれてゐた青年が、破瓜期に入つて二、三年の後に一つの轉向をとつて、自分自ら母と同化し、母が彼を愛したと丁度同樣に彼が愛したい――つまりその中に自分自らを再現する――といふ樣な戀愛對象を追ひ求める點に存する。この過程の目印として、その男性の對象の年頃は、彼にこの變化（母との同一視）が齎された時の年頃と同じでなければならぬといふ戀愛條件が先づ何年もの間生ずるのである。我々は、强さこそ違へ、多分この歸結に導くに與つて力ありと思はれる種々の要素を知つて來た。先づ第一が、ある他の女性對象へ心を移す事を難からしめる處の母への執著である。母と同一視するといふ事は、この對象結合の一つの拔け道で、この最初の對象（母）に、何等かの意味でいつまでも實を示さうとする意向を同時に遂げさせるのである。

それから次が自己愛性對象選擇 narzistische Objektwahl の傾向であつて、これは一般に、異

性への轉向よりも遥かに手の屆き易い處にあり、從つて手を染め易い。この動向の陰には、も一つ他の全く際だつて強い意向が隱れてゐるといふか、それと軌を一にしてゐるといふか、孰れにしても男性器官の買被りの氣持があつて、自分の戀愛對象（女）にそれを缺くといふ事に甚しく嫌厭たる氣持が之である。女性の輕視、女性を嫌ふ事、然り時には女性を憎惡する事、是等は先づ定つて、女は陰莖を持つてゐないぞ、といふとつくの昔に氣づいてゐる處から導かれて來るのだ。それから、後になつて、我々を同性愛的對象選擇に致す力強い動機としては、父を憚る事乃至は父を畏怖する氣持が働いてゐるのを知るに到つた。何故なら女性を見限るとは、父（或は父の代理たるべき總ての男の人）とのいざこざをはぐらかす事になる譯だからである。この後の方の二つの動機、即ち陰莖條件に執著する事とこの躱身 Ausweichen は共に去勢複合 Kastrationskomplex に數へられるものである。母性結合 Mutterbindung——自己愛 Narzismus——去勢恐怖 Kastrationsangst、これは決して特異な契機ではないのであるが、これは今日に到る迄同性愛の心理的原因の中に嗅ぎ出して來たのであるが、そこに更にリビドの早期の定着に與つて力ある誘惑の影響並に戀愛生活に於ける受動的役割の遂行に糧を與へる器質的要素の影響といふもの

が加はるのだ。
然し乍ら我々は、同性愛の由來の精神分析はこれに盡きるものだとは決して信ずるものではない。今日、私が人を驅つて同性愛的對象選擇をなさしめる一新機制をば指呼し得るとは言へ、これとても極端な同性愛、顯著なしかも一圖な同性愛の形成に當つてどれだけ大きい役割を演ずるものだかを述べるすべを知らない。色々觀察して見ると、母性複合 Mutterkomplex から派生した特に強い嫉妬性感動が、早期童兒期に仇役——大抵兄さんだが——に對して角を現したといふ例が多いのに括目させられる。この嫉妬は、同胞に對して强烈な敵愾的、攻擊的意向を執らしめるに到り、更に甚だしきは奴等が死んで吳れればいいといふ樣な死の願望 Todeswunsch にまで熾烈にし得るものであるが、これすら自然の機序たる兒童の發育の前には手も足も出なくなり、それなりになつて了つたのである。
敎育の影響を受けた爲に、そして多分又この感動のつゞぱる腰が弱かつた爲もあらうが、此奴は壓迫に委せられて、或る感情轉換を來さざるを得なくなつて、以前の仇役は今や一轉してお初の同性愛對象になつて來るのである。母性結合のさういふ轉歸は、我々に知明な他の過程との幾重に

も興味のある關係を示すものだ。先づ第一が追跡妄想症 Paranoia persecutoria の發生と比較すると完全に對蹠關係に立つのであつて、追跡妄想症では初めの戀人が一轉して憎むべき追跡者になるのだが、同性愛では嫌ふべき戀仇が轉じて戀愛對象になるのである。更にこの過程を伸張して考へれば、これが社會本能の個人的起源になるといふのが私の見界だ。[*] 競爭者を憎む場合も、これを愛する場合も、同じく嫉妬性乃至敵對性感動といふものが存在してゐるのだが、それが充足せられないで、轉じて感傷的の、而も社會的の同一視感情 Identifizierungsgefühl といふものが、壓迫された攻擊本能 Aggressionsimpuls に對する反動形成として生じて來るのだ。

＊ 群衆心理學と自我分析、一九二一年參照（全集第五卷に輯錄）

同性愛的對象選擇のこの新しい機制、つまり克服された敵視竝に壓迫された攻擊傾向から生じて來るこの機制は、我々に旣に知られてゐる處の定型的な條件に相伍するに到る。母が他の男の子をめでて、あれを手本にしなさいと推賞してから、彼等に同性愛性轉向が生じたといふのを同性愛者の生活史から知り得る事が稀でない。つまりこの爲に對象を自己愛性に選擇する樣に心構へを刺戟されて、そして銳い嫉妬を感ずる短期間を一先づ通つて、それからこの競爭者が戀愛對

象にされた譯なのである。その他、彼にこの轉向が非常に早期に起つて、母性同一視 Mutteridentifzierung といふものが、後詰にまはつたといふ點で毛色の變つた場合もある。私の手がけた例でも、唯同性愛的狀況に置かれただけで、必ずしも異性愛を棄てず、且婦人恐怖 Horror feminae をも來してゐなかつたものもある。

同性愛的人間で、社會本能が特に發達してゐて、そして公益に獻身するといつた點が目だつてゐる人が可なり多數にあるのが知れてゐる。他の男達に自分の戀愛對象を置かぬ限りでもない男の振舞ひが、男といへば直ぐ女仇といふ工合にぴんと來るといふ樣な男達の社會にそむいて別樣に擧措するものだとそれを理論的に説明しようと試みた事でもあらう。然し同性愛にも嫉妬もあれば敵愾心もあり、男性の社會が又斯ういふあり得べき仇敵を包含してゐる事を思ひばこの論法はあやしくなる。しかし又、かういふ當推量ばかりの基礎づけでもこれを度外視するならば、男性との競爭を早期に克服した爲に同性愛性對象選擇が生じて來る事も稀ではないといふ事實は、同性愛と社會的感覺 soziales Empfinden との關聯に對して何等與る處なしとすましてゐられまいではないか。

精神分析の考究上、社會感 soziales Gefühl といふものは、同性愛性對象意向の昇華なりと認めるになれてゐる。社會的毛色を帶びてゐる同性愛者では、その對象選擇からこの社會的感情を分離させようとしても、そいつは首尾よく行くものではなからう。

サディスムス

性格と肛門性慾

シュレジアのルブリニッツに於けるヨハン・ブレスラア博士編輯の「精神症神經症學週報」第九年第五十二號（一九〇八年）に初め發表せられ、次いで「神經症小論集」第二輯に再錄せられたもの。

精神分析の手を煩はすやうな人々の中に、如何にもある性格特質がきはだつてゐて、一方さういふ人達の幼年時代には、ある身體的機能とそれを司る器官との按排が甚だ本人の注意を惹いたといふ樣なある人間の型に出會す事が全く多い。その性格とかう言つた器官關係との間に何か有機的な關係がありさうだといふ印象が、どういふ一々の動機から私に芽生へて來たのか、今これを述べたてる方圖を知らないがとにかくこれは事實なので、理論的にでつち上げようとしてとりたてたのではない事は確かだ。

近來さういふ經驗に頻々として出會すので、私としてもさういふ關係に就ての信念が益々强く培はれ、玆に敢てそれに就て報告しようとする次第だ。

私が記述しようとする人達には、次に述べる樣な三つの特質がいつもきまつて組合はさつてゐるのが特徴だ、即ち特に几張面 ordentlich で、しまりや sparsam で、そして我が强い eigensinnig、とりたてればさうであるが、これらは又それぞれに近緣な氣質ぶりを引き具してゐるのだ。几張面といふのはちつぽけな義理を滿すことや、信用などといふ事にがつちりしてゐる事でもあるが、又きれい好きをも言ふのだ。この反對はずぼら unordentlich で、なげやり nach-

lässig といふ奴だ。しまりやといふのは時にけちんぼ Geize の程度に見える事さへある事がある。我が強いといふ方は傲岸に移行するが、傲岸は憤怒と復讐と結びつき易くなつてゐる。この後の二つ——しまりやと我の強さ——は、初めの几張面とよりもお互ひにより堅く結びついてゐる。そしてそれらはどつちかといへば、これよりもいつも缺けない顔觸れであるが、しかし總て三つがどうにかつつぱりあつてゐる事は見逃し得ない樣に思はれる。

かういふ人達の幼時期歷を探つて見ると、きつと彼等がしものしまりがよくなるまで比較的永かつた、そしてしりまはりのしくぢりがぽつぽつ後に少年期にもあつたといふ事を見出し得る。彼等こそおまるを跨がせられた時にすなほに脫糞しようとしないああいふ幼兒であつたのだ。斯うして排便に際して副産物的快感を得ようとしたのだ*。なんとなれば排便を堪へる事で滿足を作り出さうとした事がもつと後年にもあつたと陳べてゐるし、御本人よりその兄弟の口から、彼等は白日に浴さうとする糞にあらゆる不都合な仕掛けをしたといふ事が申し述べられてゐるから、そこで以上の記述から肛門帶 Afterzone の、それから生じた色情系に於ける目に餘る程の色情的特質を聲を大にしてさし示したい。處がかう言つた人々も少年期を經過した後にはこの習癖を

見出されないから、我々は肛門帯は成長の經過中にその色情的意義を失つて了ふものだと認めねばならない、そして性格的特質のかの三者がこの肛門愛の蝕滅と共にとつて代つて生ずるのであらうと想像される。

＊これは性理論の三論説、二　一九〇五年、（第二版、一九二二年）に詳し。

その話がとつつきが悪く、説明に何かひつかかりをつけない限りは、その意味合を信じようとしまいとは察する。少くともそれの根本概念は、一九〇五年の「性理論の三論説」に敍説した彼の假定の解説を俟つて了解し易くならう。その處に於て私は、人間の性慾といふものは甚だ混み入つてゐるもので、數多の要素から數多の部分性慾がからみあつて出來てゐるものであるといふ事を示さうとした。「性的興奮 Sexuallerregung」を惹起するに實在的に與つて力あるものは、かく「色情帯 erogene Zonen」なる名を負うてゐるある特定身體部位（生殖器 Genitalien、口 Mund、肛門 After・膀胱口 Blasenausgang）の末梢的興奮である。これらの部位から到達した興奮はしかし全部が全部同じ効果を齎すのでもないし、又各年齢期によつてその行先が違ふ。おしなべて言ふと、單に彼等の一部分が性生活に顯現するので、他の部分は性的目標からそれて他の目標

に轉向し、「性慾の昇華 Sublimierung」なる名にふさはしい一過程を生ずる。「性慾潛伏期 sexuelle Latenzperiode」ともいふべき滿五歳から、思春期の前觸れの生ずる年（先づ十一歳）迄の間の時期には、これ等の色情帶から傳はつて來た興奮を擲つてさへも、精神生活に反應體、卽ち羞しさ、いとはしさ並に身じまり等後來の性慾的行藏の栅となる樣な拮抗力が形成される。扨てこの肛門愛は成人して了へば性的目的に用ひられない樣な、又我々の唯今の敎養が許さない樣なさういふ要素の衝動に屬してゐるものだから、嘗ての肛門愛者に甚だ屢〻認められる性格特質――かの几帳面、しまりや並に我の强さ――をこの、肛門愛の「昇華」の最も手近かなながれのはてで、いつも落ち着く處はそこだと認めても差支へあるまい。*

＊乳兒の肛門愛に就て「性理論への三論說」中に述べて注目を促した處が、のみこめない讀者に特別に衝擊を與へたので、私はここにある一つの觀察を挿んで置きたい。この例はある智能豐かな患者の提供に基いたものである。

ある知人だが、彼は「性理論」に就ての論說を讀み、その刊行を祝ひ、全然その說を承服したのだが、その中の唯一箇所――それの内容を勿論同意し、且了解してゐるのだが――餘りにグロテスクに、そして

滑稽に感じたので、彼は坐り直して十五分程も大笑したといふのである。その箇所といふのは斯う言ふ處である。「乳兒がおまるをあてがはれた時に頑强に排便をおしとどめて、しかもそれがばあやに氣に入るためではなくて、實に自分自身のためにこの排便を差し控へてゐるなどといふのは、後來の異常、即ち神經質の最もよい前徴だ。排便を堪へてあとになつて彼の寢床にたれながさうが、ながすまいが、さういふ事は意に介しないので、唯排便によつて副產物的快感が逃げやしないかを恐れるのみである云々」と。おまるをあてがはれた乳兒が、さういふ彼自身の自由意志を制御する事が氣に入るとか入らぬとかを熟考したとか、その他に排便に際して快感をとりにがさない樣に氣を配つてゐるとか、さういふ觀念を考へて見て彼はとてもおかしくてふき出したのである。二十分程してから、全く突拍子もなくかう言ひ出した。「君、君、僕は今このカカオが眼について急に或る一つの考へが浮んだんだよ。この考へといふのは僕が子供の時には始終頭から離れた事がなかつたんだ。子供の時には、自分は Van Houten（ヴアン　ハウテン）（ヴアン　ホートウン）（さう、彼は、ヴアン　ハウテン—Van Hauten—と發音した）カカオ製造業者であつて、このカカオの製出に大いなる祕策を有してゐるので、だれでもがこの僕が虎の子の樣に大事にしてゐるとても素敵な祕策を盜まうとしてゐるんだといふ風に始終考へてゐたね。一體何故 Van Houten なんて頭に浮んだのか知らないがね。きつとあいつの廣告が一番頭にこびりついてゐたんだね」と。私も笑ひながら、そして特別に深い意圖からといふ譯で

もなく、私はつい斯うしやれた、「Wann haut'n die Mutter?（いつお母さんが皮をむくんだらうね）」。處が暫くして私はこの私の洒落が實際にこの全部の急に思ひ浮んだ小兒期の記憶の急所を衝いてゐる事を知つた。これを今私は一つの假托空想 Deckphantasie の素敵な一例だと思ふ。即ちこの假托空想は、實際事實上に存在するもの（たべもの）を把持しながら、類音聯想に基いて（Kakao, wann haut'n――Kakao, Van Houten）心にやましい意識な記憶内容の完全な置換によつて靜めるのである。（しもの事はかみへ、食を便として出す事などは食を攝る事に、恥しい隱さなければならない事はとても愉快な祕密に………といふ工合に）。とにかくこの際お定りの異議申し立てが出て來た事であつたが鋒先甚だ鈍く、さうかうしてものの十五分もしたら御本人の意志におかまひなく、御當人の無意識界からのつぴきならない證據が飛び出して來てそれを承認して了つたのは愉快だつた。

この關聯の内部的必然性に就ては私自身も勿論見通しがつかないが、さう了解せしむるに與つて力ある事柄を二三もち出す事が出來る。潔癖 Sauberkeit、几帳面 Ordentlichkeit、ものがたさ Verlässlichkeit は、不潔なもの、ぶちようはうなもの、身につかないものに對する一つの反動形成であるとの印象を與へる。（Dirt is matter in the wrong place その處を得ざれば穢し

である)。我の強い事を排便興味と結びつける事は簡單な問題の樣ではないが、しかし斯ういふ事も考へなくてはならぬ、既に乳兒が糞便を御意のままにやつてゐるのであるし、そしてその際色情肛門帶と結びついてゐるお臀の皮に痛い刺戟を加へる事は、そいつを意の儘にもてあそばうとする兒の我を折る處のいましめとなるのだ。强情竝に强情な嘲慢といふものを表現するには、昔も今も肛門帶强情がその內容物に對して有する愛着が示す要求、壓排に逢うた情愛等を用ひる。尻を捲くるなどといふ事は、さういふ口で言ふ處を、身振りに弱めて示してゐるものだ。ゲーテの作物「ギョッツ・フォン・ベルリッヒンゲン」の中に、口說と仕草とが不遜の表現に用ひられてゐるが、實にその處を得てゐる樣な概がある。

次は金錢の利害關係と排便との關係の話であるが、こんな表向きとてつもなく緣遠い觀念複合の間の因果關係といふものが、實は最も素敵な話柄となるのだ。精神分析に造詣のある醫師なら誰にでも知れ切つた話であるが、この關係を辿つて神經質者の所謂常習便祕がとりのぞけるのである。そんな事を驚嘆する必要はないので、この作用も催眠術的暗示と結局同じなのだ。精神分析に於ては、當該被驗者の腦裡の金錢に關する觀念複合に觸れて、それ竝にそれの親類筋のもの

を意識に上せる様に手がければいいのである。要するにこの神經症も巷間言ふ處の、くよくよして金を貯めてゐる奴を「きたない」(schmutzig 又は filzig——英語で filthy) といふ言ひならはしの含む意味のものから一歩も出てゐないのだ。しかしこの言ひ方ではお粗末すぎるといふのか。實際古代の物の考へ方が行はれてゐる處、殘つてゐる處、卽ち古代文明、神話、傳說、迷信、無意識的思考、夢竝に神經症に於ては、金錢ときたなさとは最も密接な關係をもつてゐるのだ。惡魔が彼の情婦に贈つた黃金が、彼の去つた後で埃になつたといふ話は人口に膾炙してゐるが、この惡魔といふのは、とりもなほさず、押し込められた無意識的本能生活の具現だ。[*] 更に斯ういふのも知れ亙つた話だ。糞をひる事を金をひる事と御幣を擔いで見たり「かねくそをひる」といふ譬が行はれてゐたりする。一體古代バビロンの敎へを見ても、黃金は地獄の糞なり (ilu manman) といはれてゐる。[**]

* ヒステリイ性憑依竝に惡魔の跋扈、參照。

** イエレミアス「古代亞細亞の洗禮を受けた舊約全書、第二版、一九〇六年、二一六頁、竝に新約全書に現れたるバビロンの事共、一九〇六年、九六頁に依れば、Mamon (Mammon) とはバビロンでは man-

man と言ひ、地獄の神ネルガル Nergal の又の名である。亞細亞の神話（それは亞細亞の國民の傳說に殘つてゐるが）によれば、黃金は地獄の芥であると。猶バビロンの宗敎に於ける一神論的脈派に就て、參照。

今前述した神經症がそんな風にして癒るとすれば、この關係に於ても、他と同樣に、この言葉の始原的な、しかも含蓄のある意味に接し得るの趣があり、その言葉は寓意的に見えても、常に定つてその言葉の昔の意味を今に新たにしてゐるのだ。

近來人間がその價値を知るに到つた最も價値あるものと、人間が忌避 refuse して擲つ處の最も價値なきものとの對比こそ、正にこの黃金と糞とをとり立てて對比にせしむるに近いとも言ひ得よう。

神經症を考察する場合この最も價値あるものと、最も價値なきものとを同列に置く事が必要だが、更にもう一つの條件を補ふべきだ。この排便に際しての始原的な色情的興味といふものは、我々が知る如く、成熟期に於ては消滅する運命にある。この時期に於ては、金錢に對する關心といふものが新しく湧いて來る、これは幼時にはない處のものである。かくの如くにしてその目標

を失はんとしてゐる幼兒時代の渇望は、新しく浮び上つて來た目標に容易く乘り換へ得るのだ。

ここに主張せられたる如き肛門愛と彼の性格の三特質との關係に何か事證があるとすれば、例へばある種の同性愛の樣に、成熟期になつても肛門部に色情的適合性を有してゐる樣な人々に何も「肛門愛的性格 Analcharakter」なる刻印を捺す必要はない。この所說に重大な誤りなしとすれば、この結論と我々の經驗とは先づ大體非常によく一致する。

扨て次に又他の性格複合 Charakterkomplex も亦、ある色情帶の興奮と交聯を有してゐる事を見出し得ざるや否やを吟味せずばなるまい。私は今迄に、並々ならぬ功名心に燃えてゐる性格が、以前の寢小便小僧に出て來るのを知つてゐる。體質的本能から決定的な性格が型づくられるに就ては確かに一つの法式が認められる。卽ち

遺殘した性格樣態は、始原的本能のその儘の伸張であるか、それの昇華によるものであるか、將又それに對する反應體である。

本能轉換、特に肛門性慾の轉換に就て

初め「國際精神分析學雜誌」第四卷（一九一六年——一九一七年）に發表、次いで「神經症小論集」に再錄せられたもの。

何年も前から私は精神分析的觀察から出でて次の様な想像を作り上げて來た。几帳面、しまりや、我が强い――この三つの性格特質がいつも纏つてあらはれてゐる人間には、定つて性慾體質中の肛門色情的要素 analerotische Komponente の强かつた事を指摘し得るので、かういふ人間が成長した後には、その肛門色情 Analerotik が消失して、さういふ目立つた自我の反應樣態が形成するに到つたのだと。*

* 「性格と肛門愛」參照。

當時私はこれを實際に知り得た一つの聯關として指摘する意圖を有してゐて、それの理論的評價には餘り介意してゐなかつた。三つの性格特質――吝嗇、几帳面竝に自恣――の各ゞどれもが、肛門愛なる本能源泉から湧き出るものであり、更に注意深く更に完全に表現すれば、この源泉よりの重要な補給によるものであるといふ風に考へ方を纏め上げるに成功した。上述した三つの性格缺陷が特別にきはだつて見えた例（肛門性格 Analcharakter）は、まづ極端な例で、さういふ場合にはこの興味ある關係は素人眼をさへも欺き得ない程であつた。それから後數年間私は特に突き進んだ精神分析的經驗から導かれた十分な印象を得て、人間のリビド開展上に於て性器

統制期 Genitalprimat の前に一つの「前性器的統帥編成 prägenitale Organisation」といふものがあつて、この時期にはサディスムス Sadismus や肛門愛が第一番の役割を演ずるのだといふ結論を導いた。*

* 强迫神經症の素質(本全集、本卷にあり)參照。

この肛門愛的本能衝動のその後の殘存如何の問題はそれからは示し得なかつた。一體最終的性器的統帥編成が確立せられて、性生活に對する意義を失つて了つた後にはそれの運命はどうなるのであらうか。それはなほそれとしてたとひ片隅に壓迫されながらもながらへるものか、昇華に身を委せ、或は消化されて性格特質の中に變改されるか、さなくば性器の統轄下に定められた性の新しい樣態にその安住の地を得るのか。がしかし寧ろから言つた方が至當だらう。多分上述したどの運命も一つとして除外し得べきものでもないのだから、如何なる企畫に從ひ、どんな方法でこの色々なあり得べき事が分れて肛門愛——その有機的な源泉は性器的統帥編成によつて蔽ひかくされ得ない——の運命を決定せしむるのか。

から言ふ開展と變改の經過は如何なる人にも行はれるに違ひないから、この疑問の解答につい

ての材料に乏しくなく、かくして精神分析的研究の對象になり得ると思ふのは見易い道理だつた。ところがこの材料は甚だ見通しのつかぬものであり、常に去來する印象群は實に錯綜的なために、私は今日猶この問題の完全な解決を得てゐないで、ここに逃べるものも決定的のものでなく單にその解決に幾分でも寄與してゐるといふに止つてゐる。私はこの際それが適確に肛門愛に關しなくても、その關聯が他の本能の轉換に論じ及ぶきつかけになるなら、その機會を逃さうとはしなかつた。扨てこの開展史が、精神分析とし言へばどこでもさうではあるが、神經症過程neurotische Prozesse で一先づ晁がついた退行現象 Regression から推論されてゐるのだといふ事は取りたてて言ふ程の事はあるまいと思ふ。

この論議の初まりを言へば、無意識といふものの産物――ふとした思ひつき、空想竝に症狀――の中で、糞 Kot (金錢 Geld, 贈物 Geschenk), 子供 Kind 竝に陰莖 Penis の三者は辨別し難く、容易に混線されてしまふといふ概觀からかも知れない。然しこんな風な話し方にすると、精神生活の他の領域で用ひられる表示を誣ひて無意識界にまでもち込み、且比較が齎す御調子の都合で迷路に踏みこむ惧れがある事は勿論知つてゐる。そこで我々はかういふ各要素は無意識界

でも有識界でも同價であつて、別に文句なしに置換してもいい様に屢〻取り扱はれるものだといふ事を文句の出ない様に繰返し述べるのだ。

子供と陰莖の事は最も譯がない。兩者が日々の生活でも、夢判斷上の象徴語 Symbolsprache から言つても共通の象徴で置き換へ得るといふ事は唯は見逃し得ない事だ。子供も陰莖も「小さきもの das Kleine」を示す。この象徴語は屢〻性的差異を超える事も知られた處で、初めこの「小さきもの」は陰莖を意味したのだが、二次的に女性性器を示す言葉にもなつて了つたのである。婦人の神經症で十分深く探りを入れるときは、陰莖を男の様にせしめたいといふ願望が押しつめられ乍らも存在してゐる例にぶつかる事が稀ではない。强い男性素質が存在するために因つて來るものであるこの婦人の生活の偶然的不幸が、我々が陰莖嫉妬 Penisneid として去勢複合 Kastrationskomplex に編入するこの小兒希求 Kinderwunsch を再び活性を帶びさせ、リビドの流を逆流させて、ここに立派な神經症狀の負帶者を作り上げるといふ譯になる。別の例ではこの陰莖希求 Wunsch nach dem Penis に就ては何事も認められないで、その位置を小兒希求が占め、結局この望みが達せられないので神經症になるのがある。一體自然は女に與へまじきも

の（陰莖）の代償として子供を與へる様になつたのだとは、主旨としては猶あるまじき事になつてゐるかも知れぬが、恰もかかる婦人の事を言ひ當てたかの如くである。他の婦人の例で、小兒期には兩方の願望が存在してそれが交代に現れたといふのも經驗することだ。彼女等は先づ初めに男の様に陰莖を得たいと思ひ、後に——といつても常に幼兒期中ではあるが——子供を得たいといふ願望が代つて出て來る。兎に角小兒生活の偶發的動機、兄弟の存否、丁度うまい年頃の時にお產 Geburt に出會す事、これらはこの關係を複雜にせしむる基であつて、その見通しをつければ、根本に於ては陰莖希求は小兒希求と同じものであるのだといふ印象を棄て去り得ない。

これが神經症を起す素地を後來の生活に印するのだとすれば、この陰莖を欲する幼女性願望が如何なる運命をたどるのか申し述べる事が出來る。それは「をとこ Mann」を欲する願望に變る。かうなると「をとこ」なるものは陰莖の附着物 Anhängsel なりてふ寸法になるのだ。この變化によつて女性の天賦の性的機制の思ふ壺に嵌る事にならうといふものだ。かういふ婦人には對象戀愛 Objektliebe としては男性型を擁つた性愛生活が出來るので、それはしかもその在來の女性

的な、そして自己愛症 Narzissmus から導かれた性愛生活と共存する事を主張し得るのだ。他の例ではナルチスムス的自己愛 narzisstische Selbstliebe から對象戀愛への移行を生ぜしむる楔が、「子供」である場合があるのを耳にした事がある。そこで此の點で子供が陰莖によつて代理された事になる。

私は初回の性交の後の婦人の夢を手にする機會を數囘得た。この夢はまがふ方もなく、彼女が追ひ求めてゐた陰莖を自らに把持しようといふ願望を暴露してゐた。これはリビド的論據から豫想すれば、願望對象 Wunschobjekt として「をとこ」から陰莖へ暫し退行した事に相當する。男と何かする事なしには子供が生れない事を一寸でも頭に置いて見れば、「をとこ」を欲する事は純理的に言つて子供を欲し望む事に歸し得る。しかし「をとこ」を求むる願望が小兒希求と無關係に起るとなし、そしてそれが全然内省心理學に屬する理解し得る動機に出でる場合、かの陰莖を希求した昔の願望は、無意識のリビド的强勢としてこの願望に附加して來るのだといふ風に前にはされてゐたものだらう。

上述した現象の意義は、それが若い女の自己愛性男子性の一片を女子性の方に移讓して、女性

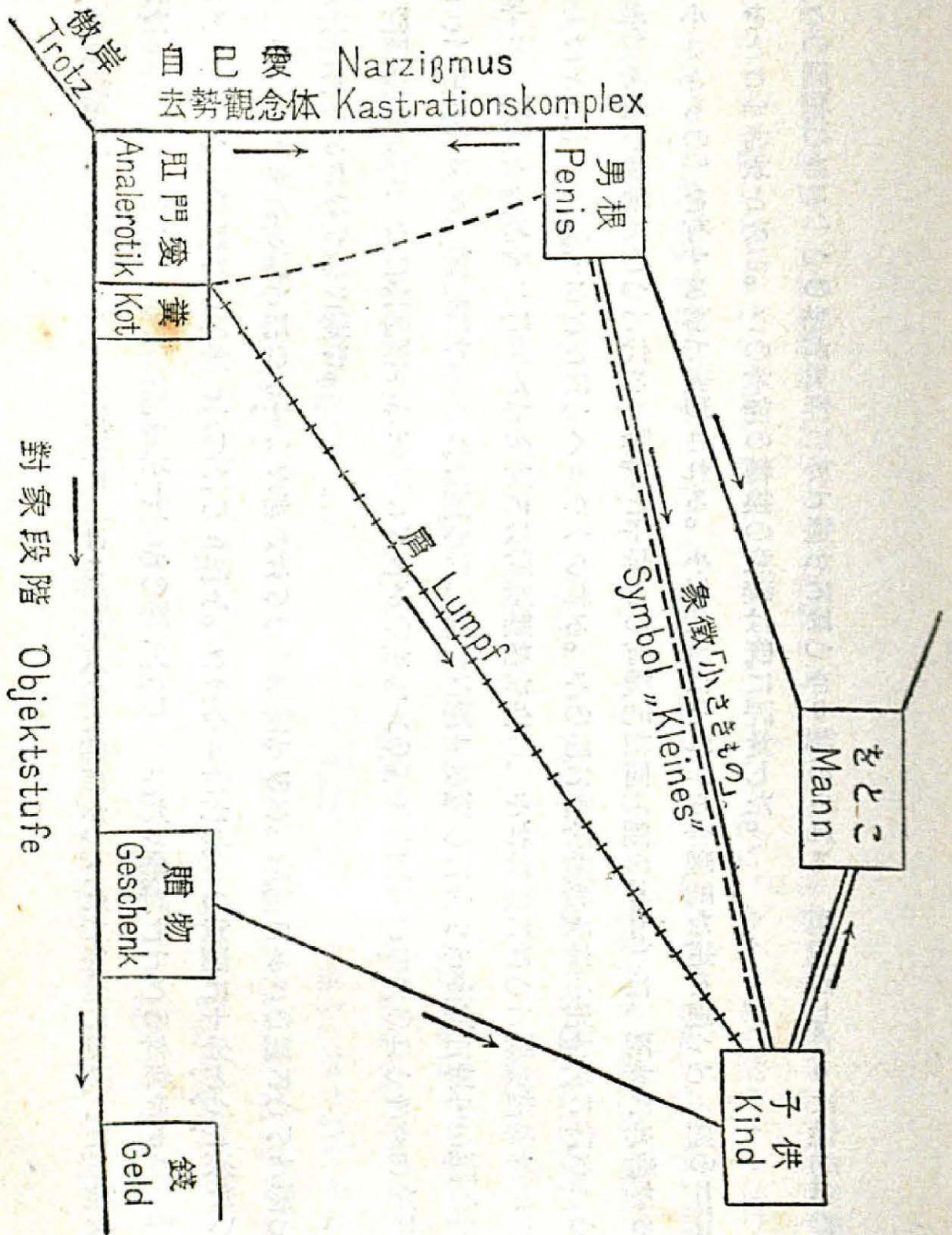
的性機能に障りをなくするといふ點に存する。更にもう一つはこの前性器期の色情 Erotik の一部は、性器的統制の時期に於ける運用に役立つのだ。その際には子供は、しかも「屑 Lumpf」として、腸を通つて體から分れるなにかとして觀られるのだ(小さいハンスの精神分析の項、參照)。そこでかの腸内容に概當したリビド的役割の一役が、腸を通つて生れた小兒にも擴充されて當てはめられ得るのである。この糞と子供との相關に就て下世話にもいふではないか、「子供をひりだす」と。糞といふものは乳兒がその愛する人のためなればこそ、手放す處の身體の一部分で、それを以て自ら進んで愛する人の歡心を買はうとする最初の贈物 Geschenk である。氣心の知れない人に、普通そんな汚らはしい事を敢てして心中立てするがものはなからうからである(これは尿 Urin でも、それはそんなにはつきりした樣態は示さないが同樣な事があるのだ)。脫糞に際しては小兒は自己愛性 narzisstisch に出るか、或は對象好愛性 objektliebend に出るかの岐路に立つので、その孰れに從ふか先づその決斷を要するのだ。糞を自由に落下させて糞を對象愛の「犧牲」に供せんか、將又糞を抑壓して自己愛の具に供し、その後來彼の自我意志の主張の基地に資せんとするかの決斷だ。後者の方に處斷すると、肛門愛で自己愛に執する事から發する處

の倣岸 Trotz（我 Eigensinn）の素地が固められる。

扨て糞便關心が辿りつく次の意義は、金 Gold——錢 Geld にあらずして、贈物 Geschenk といふ事になる。小兒は彼に與へられて手にした金錢といふものを知らないし、又自身から獲た金錢といふものを知らず、そして猶財産としての金錢といふものを知らない。糞が彼の最初の贈物であるから、彼に最も大切な贈物としてお目見得する新しい贈物には容易に目移りがするものだ。この贈物といふもののかういふ由來を疑ふものがあつたら、精神分析療法に於ける彼の造詣に俟つばかりだ。そして彼が患者から醫師として受ける贈物を研究して、彼が一つの贈物を通して患者側に呼びおこし得る轉授性動向 Uebertragungsstürme を注意して見るがいい。かうして糞便關心 Kotinteresse は一部分金錢關心 Geldinteresse として進み行き、他方その一部は小兒希求の中に移行して行く。この小兒希求の中で今や肛門愛的衝動と性器的衝動（陰莖嫉妬）とが出會はす。しかしこの陰莖といふ奴は小兒關心と無關係な肛門愛的意義をも有してゐるのである。つまり陰莖と糞便に滿されて興奮した粘膜管（腸）との間の關係は、先づ既に前性器、卽ちサディスムス的肛門期 sadistisch-anale Phase にその輪廓をあらはす。糞塊——ある患者の表現に從へ

ば「糞棒 Kotstange」——は、いはば第一の陰莖で、それによつて刺戟されるのは直腸の粘膜だ。扨て肛門愛が破瓜前期 Vorpubertät（十歳から十二歳）の頃まで、强くそしてちつとも變らずに殘つてゐるといふ樣な人があるが、かういふ人を觀察すると、彼等は旣にこの前性器期の間に、空想 Phantasie 又は倒錯性慾的所作事 perverse Spielereien の中に、性器的統帥編成のものと相同な統帥編成が發達してゐて、陰莖と膣とが、糞棒と腸とによつて代理されてゐるのを經驗する事がある。他の例——强迫神經症患者 Zwangsneurotiker ——では、性器的統帥編成の退行性貶下の結果狀態を知り得る。この事柄は、總ての始初的に性器的に書き割られた空想が肛門部に置き變へられてゐるので、陰莖は糞棒で、膣は腸でおきかへられてゐることを表示してゐる。

扨てこの糞便關心が普通の道を通つて退行すると、ここに示されてゐる有機的相同が作用して、糞便が陰莖に移行される樣になる。後に子供が腸から生れるのだといふ事を性的穿鑿から經驗して來ると、子供といふものが肛門愛の主要繼承者になつて來るが、子供の前身が、この意味でも又陰莖であつた譯である。

をとこ
Mann
子供
Kind
象徵「小さきもの」
Symbol „Kleines"
男根
Penis
屑 Lumpf
自巳愛 Narzißmus
去勢觀念体 Kastrationskomplex
肛門愛
Analerotik
糞
Kot
贈物
Geschenk
錢
Geld
傲岸
Trotz
對象段階 Objektstufe

この糞便――陰莖――子供の系列に於ける混み入つた關係が、これで完全に見殘しなく陳べられたと確信するので、今度は圖で示してその缺を補ひ、それを檢討してこの材料をもう一度、こんどは異つた觀點から評量して見たいと思ふ。このやり方が我々の意圖に十分どつと來ない事や、それを適切な方法で用ひるすべを知らないのが遺憾である。幾重にもこの圖について嚴つい要求を求められない事を望む。

肛門愛からは、自己愛的應化で傲岸といふものが他人の要求に對する自我のはつきりした反應として出來て來る。糞便にむけられた關心は、贈物に對する關心に次いで金錢に對する關心に移行する。陰莖が登場するに及んで少女には陰莖嫉妬が生じ、それは後になつて陰莖把持者としての「をとこ」を希求することにつくりかへられる。その前に猶陰莖希求は小兒希求に代る、つまり小兒希求の位地にとつて代る。陰莖と子供との有機的相同（圖の┋）は、兩者に共通な象徴「小さきもの」を有する事で表現される。小兒希求はそれから合理的な道を辿つて（圖の‖）「をとこ」希求となる。この本能の轉換の意義は既に評量した。

この關聯のある一つの點が男性に於て遙かにはつきり認められる。男兒がしきりに性的穿鑿の

眼を光らせた時に，女性に陰莖がないといふ經驗にぶつかつた場合の事である。そこで陰莖といふものを先づ體からとりはづせるものとして認め、さあさうすれば、あきらめて棄てさらなければならない處の最初の體的のもの――即ち糞との相同に眼が向けられようではないか。舊い肛門的傲岸 Analtrotz はかくして去勢複合の組成の中にも入り込む。この前性器期に腸內容が陰莖の前身なる事を示した有機的相同といふものは動機としては問題にならない。單にそれは性的穿鑿の際精神的埋草たるに止る。

子供の事であるが、子供は性的穿鑿の眼には「屑」と認められ、力强い肛門愛的關心で占められる。もし社會的經驗が敎ふるが如く、子供が愛の證據、贈物なりとすれば、この小兒希求といふものは同じ泉源から第二の論理的援助をうける事となる。糞柱、陰莖、子供の三者は總てそれが入り込み又は押し出す際に粘膜管（ル・アンドレア・サロメ Lou Andreas-Salomé の言つた恰適な表現に從へば、直腸に同時に宿をかりた膣*）を興奮せしめる固體である。幼時の性的穿鑿はこの事柄から子供は糞柱の通るのと同じ道を通つて生れるものだと知るので、陰莖の機能は幼兒の穿鑿では普通發見されない。しかも一つの有機的相似が廻り路をしながらも、一つの無意識的合

致として精神機能の中に再び現れて來るのを見るのは興味のある事柄である。

* 「肛門的」と「性慾的」（雜誌イマゴ第五卷一九一一年）參照。

マゾヒスムス

小兒が打擲される！

倒錯性慾の發生に關する參考知見

初め「國際醫事精神分析學雜誌」第五卷（一九一九年）に發表せられ、次いで「神經症小論集」に再錄せられたもの。

一

「小兒が打擲される！ „ein Kind wird geschlagen“」、斯う言ふ空想表象は、ヒステリイ症乃至は强迫神經症 Zwangsneurose の爲に精神分析療法を求めた人々にびつくりする程每度白狀されるものである。且この表象は現在疾病に惱んで此の療法を受けようと決心せざるを得なかつたといふ人々以外にも屢々あるといふのもさもあるべき事である。

此の空想には快感が結び附いてゐるので、それ故これは今迄にも文句なしに度々想ひ浮べられても來たし、これからも始終頭で生かされる筈のものだ。想ひ浮べられた情景が最高調を示して來ると、殆ど判で捺した樣に自慰的滿足 onanistische Befriedigung（つまり性器に）が遂げられる。初めの中はその人の意志で、しかも後になつて來ると今度は意志の抵抗も物かは、强迫的性質を帶びてこれが遂げられるのである。

此の空想は躊ひつつやつと我々に打ちあけられるのだが、それの初めての現れに就ての追想は不確かで、この問題の精神分析には一義的な抵抗 Widerstand がのさばつて來るし、羞らひと罪惡

意識 Schuldbewusstsein とか性生活の初まりを想起して同じ樣に打ちあける時よりもこの場合には多分より强く働くのである。

然し乍らこのものの最初の空想は非常に早期に、さう、確か就學前、つまり五歳乃至六歳頃既に馴染まれてゐるのであつて、この小兒が學校で他の兒童が先生に打擲されるのを目擊すると、その體驗こそは、かの空想を（もしそれが旣にまどろんで影を沒して了つてゐれば）呼び醒して來るし、或は（猶それが餘燼を保つてゐるならば）それに油を灌ぎ、その內容を目立たしい程に變化せしめるのである。つまりそれから後といふものはその空想の內容は「漠然と多く」の小兒が打擲されるといふ事になつて來る。この學校での體驗の影響が如何に著しいものであるかは、當該患者に追想させると、自分の打擲空想を徹頭徹尾この學童期、つまり六歳時以後の印象に歸へさうと先づ試みるのでも判る。しかし兎に角それは眞相ではなく、この空想は實は旣にもつと前からあり來つたものなのだ。

高年級になつて兒童の打擲が熄むと、それは、やがてその頃になつて意義を齎しかけて來た讀み物の働きかけに段々置き代へられて來る。私の患者の身のまはりには、打擲空想がその書の內

容から新しい興奮を曳き出して來る様な、所謂通俗物「薔薇叢書」だの、「アンクルトムス・ケビン」だとかさういつた若年期に親しんだと同じ書物があつた。是等の小說と角逐して、兒童の固有の空想作用、つまりその空想光景の眞只中に自分の身を置いて、自らの惡るの爲に、自らの不行儀の爲に打擲される、言はば罰せられ、懲らされるのだといはんばかりの多くの情景を意識の中に見つくろつてそれに浸らうといふ空想作用が始まつて來る。

「小兒が打擲される」、この空想表象には定つて著しい快感が伴ひ、發しては快感に充ちた自己色情的 autoerotsch の滿足の行爲に出る事からしても、この他の兒童が學校で打擲されるのを目擊したのも又同様な享樂の源泉となつて居たであらう事は察するに難くない。しかし常にさうとは限らない場合もある。學校で打擲場面を覿面に見せつけられた際には、目擊した兒童に、本能的に掻き立てられた多分ごちやごちやな感情、その中でも「いやだなつ」といふ氣持が主流となつて動くといふ感情を呼び起した事もあるのである。生々しい打擲の場面に直面して眼を蔽うて堪へがてであつたといふ三、四の例もある。他方また後年の圖々しさを帶びた空想では、この御仕置される小兒達としては決して由々しい害が加へられるものではないといふ譯合になつてゐる。

打擲空想 Schlagphantasie の意義とまざまざと身體に加へられる御仕置が家庭教育上演ずる役割との間にどういふ關係が存在することであらうかといふ疑問が必然的に發せられた。「それや背馳した關係を生ずるさ」といふ待ち構へた樣な推測が當るかどうかは、材料が偏倚してゐるから何とも言へない。この精神分析に材料を提供した人々は、その小兒期に殆ど打擲された事のない人達で、兎も角もあまり鞭の御厄介にならずに教育された人々である。それにしても此等の兒童の孰れもが、いつかは彼の兩親か先生の優れた膂力の洗禮を受けてゐた。小兒達の間での毆り合ひといふものにしてからが、既に何處の子供部屋でも缺けない番附だ位は今更執り立てて言ふ程の事もなからう。

私は學校の印象か讀物の中の光景からの影響をばはつきりは現してゐない極く早期の、しかも單純な空想に、好んで更に深くメスを入れて見ようと思つた。打擲された兒童は誰か？　空想者自身か、或はてんで別人か？　それはいつも定つてある一人の兒童か、それとも任意の他の兒童か？　兒童を打擲した人は一體誰か？　大人か？　そして大人としたら誰か？　それとも自分自身が他の兒童を打擲したかの如くその兒童が幻像するのか？　總て是等の質問に言ひ解いた答へ

といふものは殆ど得られなかつた。得たものはいつも唯おづおづした答へ「小兒が打擲される „ein Kind wird geschlagen"」。私はこれ以上にはどうもはつきりしませんといふのである。時打擲された小兒の性を質した場合には寧ろ手應へはあつたが、しかし矢張明確を得なかつた。時は、いつも少年 Buben だけでありました、とか、いつも少女 Mädel でありましたとかの答へはあつたが、先づ大抵の場合は、さあ、どつちでしたか „das weiss ich nicht"、だの、それはどつちつかずでした „das ist gleichgültig" のといふ。質問者の狙ひ處、つまり空想する小兒の性と打擲される側の小兒の性との間の恒常的な因緣は到頭判らず了ひであつた。時あつてか空想の內容から詳細な特有な消息が明るみに持ち出されたこともあつたが、それは、小さな子供が尻を捲られてたたかれた „das kleine Kind wird auf den nackten Popo geschlagen" といふので、それも非常に有益な知見だが的外れだつた。

こんな風な譯で、打擲空想にくつついてゐる快感を、サディスムス的なものとすべきか、マゾヒスムス的なものとすべきかを一擧には決定し得なかつたのである。

二

さういふ、極く幼兒期に多分偶然の機會に出現して自己愛性滿足に執した空想を味つて見て、我々の今迄の見界に從ふと、是が正に倒錯性慾 Perversion のしよつぱしめの特質に蔓つつぱりを持つてゐる事を高調し得る。性作用の要素の中のあるものは、その發展に際して他のものに先んじ、魁けて獨立して定着して了ふので、それから後の發展經過からは取り除けを食ふ、しかし斯うしてそれにその人間の一つの特異な、異常な素質の證印が貼られて了ふのである。然し我々は、或るさういふ兒性の倒錯性慾といふものが何も一生涯附纏ふといふ程のものでない事も知つてゐる。それは猶後に壓迫によつて壞滅する事もあるし、ある反動形成 Reaktionsbildung で置き換へられ、將又昇華といふ事で變形される事もあるのだ（しかし昇華といふものは恐らくは壓迫の力によつてなら妨げられるであらうある特別な經緯から生じて來るものらしい）。然し若し斯ういふ運びがつかない時には、倒錯性慾は成年になつてからも保たれるのだ。そこで成人に性的踏み迷ひ sexuelle Abirrung——節片淫亂症 Fetischismus、轉倒 Inversion——を見出した時

は、既往歴を深く探るにつれて小兒期のさういふ固定現象を見出し得べきは受け合つて間違ひはない。しかり、精神分析の現れる時代より遙か以前から、ビネエ Binet の樣な觀察者は、成人の特異な倒錯性慾をば、同樣に正に五才とか六才とかの小兒期のさういふ刻印に歸しゐたのだ。そして此の際確かに我々の現在の認識の埒につきあたつてはゐたのだ。ただ、定着する要素は障礙能力を缺いて居り、それ等は先づあり來りのものであつて、他の個人には何等興奮を惹起するものではなかつたから、一體、何故性のいきみといふものが丁度それらに定着して了つてゐたのか、それを説明する事が出來なかつたのである。然し、それが先走りして跳びはねようとしてゐる性要素に、假令偶然にでも、定着の機會を與へて來たものだといふ處にその意義を見出してゐたのだつた。しかし因果關係の連鎖が何處かで何か暫定的な決著をつけられねばならなかつたので、そこで所謂持ち前の素質といふものがあるからさういふ工合になるのだと口をぬぐつて濟してゐる樣な破目になつてゐたのだ。

若し早朝に離脱した性要素がサディスムス的のものであるならば、後になつてそれの壓迫に依つて强迫神經症への素地が造られるといふ事は、他の事柄から得られた見界からも期待し得るの

だ。そしてこの期待に研究の結果からしても背反する處はないのであつて、私の六例（四例は女性、二例は男性）――それを立ち入つて研究してこの小論を作り上げたのであるが――の中にも强迫神經症例が三例あつて、非常に難症で生活をめちやめちやにする程のもの一例、中等度のもので、外況によく可親性であるもの一例、最後に他の一例は、强迫神經症の少くも個々の色彩を示したものであつた。第四例は明らかに苦痛と抑壓とを伴つたあまり難のないヒステリイ症、そして第五の例は、生活上の不決斷といふ單にそれだけの爲に精神分析を求めたのであるが、さつと診ただけでは「精神衰弱症 Psychiasthenie」とも言ふべきものに過ぎなかつた。がこの統計に決して期待を裏切られる事はないのである。なぜなら第一に、その素質が皆が皆疾病に迄更に發展して行かねばならぬ譯のものではないし、第二に、その素質の現在の狀況だけで十分說明がつくからである。さういふ素質から何故何物かが生じて來なかつたかを又理解させようとする問題からは一般に言つて解放される譯だ。

問題は先づ玆等が行き止りで、我々の現在の見界は打擲空想の理解へ我々を深入りさせないであらう。しかしこの問題はこれで能事終れりとするべきでないといふやうな豫感は、精神分析に

携つてゐる醫師が、この空想が大抵神經症 Neurose の他の内容から仲間放れになつてゐて、その陣營の中で當然占むべき正しい位置を得てゐない事を認めざるを得ない時は、さういふ豫感は彼等に湧然として生起する事である。

二

嚴密に言へば、――そして何故これを出來得る限り嚴密に極めようとしなかつたものであらう――唯精神分析的苦心のみが、成人に彼等の幼年期生活の追憶（先づ二歳から五歳迄の間の）を初めからぼかして了つてゐる健忘をとり去つて精密な精神分析學の認識を得しめるのである。これを精神分析者の間でも十分に强調することが出來ず、且又これを十分屢〻繰返すことが出來ないのが現狀だ。しかもその必要を省みないといふ動機は、それは判る。何故なら短い時間に、そしてより少い苦心で役に立つ結果を得たいからだ。が現在では、理論的知識は治療的効果よりも猶比べものにならない程我々の誰にも重要であつて、幼年期精神分析をうとんずるものは收拾し得ざる誤謬に陷るであらう。それなら後年の生活經驗の影響を少く見積るべきかといふに、何も

この最早期のものの重要性を力說したからとてそれに左右されるものではあるまい。しかし後年の生活體驗といふものは、精神分析に際して患者の口から十分强調されて話されるが、幼年期のもののレーゾン・デトールは、醫師によつて初めて口を割られざるを得ない。

一體、二歳乃至四、五歲間の幼兒期といふのは、持ち前のリビド的要素が、生活經驗によつて先づ眼覺めて、或るそれぞれの觀念複合 Komplexe に結びつけられるといふからいふ時期である。ここで問題にしてゐる打擲空想は、この時期の末期か、或はこの時期が過ぎ去つた後に初めて姿を示すのである。それ故それは既に一つの既往歷を有し、發展といふ洗禮を受けるので、その發現は決して始初期のものではなく、一つの決著期のものに相當するのだとは信憑すべき筋がある。

この推測は精神分析によつて確かめられてゐる。精神分析を應用した結果の敎へる處によれば、打擲空想は決して單調な發展經路を踏むものではなく、その發展階程として、その中の大部分の要素は一回ならず數回の變轉を經るのである、つまり空想と空想する人物との關係、空想の對象、內容竝に空想の意義等の變化がこれである。

打擲空想に於けるこの變轉をより追及し易からしめるために、私の記載を女性に限る事を許して戴かう。尤もこれは女性は、さなきだに私の材料の多數（男二に對し女四）を占めてゐる爲でもあるが、男性の打擲空想には猶私がこの報告では除外して置きたい或るもう一つの論旨が附隨して來るからでもある。扨て論を進めるに就ては、事柄が共通してゐて羅列する必要を認めない場合以外にはなるべく、話をはしよつて模型化して述べないやうに氣をつかふ心算だ。且それから更に突き進んだ觀察をするにつれて事柄がよしこんがらかる樣な事があらうとも、私は先づ定型的な現象を擧げて、假令食ひつきやすくとも稀な種類のものは捉へない覺悟だ。

扨て女兒では打擲空想の第一期は非常に早い幼兒期に屬するに違ひない。彼等の中の二、三のものは、まるで無關心であつたかの樣に、それについてはつきりどうとも言へないでゐる。患者が最初に告た處から得た貧少な答へは次の如きものでさへあつた。小兒が打擲される „ein Kind wird geschlagen" 唯これだけがこの空想の僞らざる處であると。しかしある點は確然とこれを言ひ切る事が出來たものがあつても、その他の點では同樣模糊としてゐたが、兎に角それによると、打擲される小兒は決してこの空想してゐる小兒自身ではなく、定つて他の小兒であり、しか

も同胞がゐる場合には第一に年下の同胞であつた。同胞といつても、兄弟の場合も姉妹の場合もあらうから、これだけでは空想するものと打擲されるものとの「性」といふものの間に定つた關係を指摘する事が出來ない。そこでこの空想はマゾヒスムス的のものでない事は確かだ。寧ろそれをサディスムス的なものとしたい。孰れにしても空想する小兒が常に決して打擲されるものそれ自身ではないといふ事だけは等閑に附してはならない。それなら誰が一體その打擲する御本人であらうか、これも先づとつつきは漠としてゐるが、次の事だけは確定し得る、それは決して他の小兒ではなくて、實にある大人であるといふ事である。この不定の成人は後にはつきりしてくるのだが、一にも二にも正に（その幼女の）父であるのだ。

　そこでこの打擲空想の第一期を言ひ換へれば、次の言葉で滿足に表現される——父こそ子供を打擲するのだ „der Vater schlägt das Kind" と。この言葉の代りに次の樣に言ふならば、後に示さうとする意味をよく補ふ事と思ふ——父こそ私の嫌ひな子供を打擲するのだ „der Vater schlägt das mir verhasste Kind" と。しかし一體後來の打擲空想のこの前階程に、既に或る「空想」の性質を認めて良いものかどうかといふ事になると人は二の足を踏むかも知れない。或

はそれは寧ろ一緒に目撃したことのある様な經緯、將又色々な機會に現れて來たことのある願望を追想してさういふ觀念を作るものかも知れぬ。しかしこの疑問は決して重要性を有してゐるものではない。

この第一期と次の時期との間に大きい變化が行はれる。打擲する人には變りがなく、同じく父性であるのだが、打擲される方の側は他のものになるのだ、卽ちそれがいつも定つて空想する小兒自身といふ事になつて來る。そしてこの空想には强く快感が高調されて、ある意義深い內容に滿されて來る。この內容の流露こそ後になつて我々を煩はせるものであるのだ。そこでそいつを言葉に換へて見れば、つぎのやうなものになつて來る、「私は父に打擲される！ „Ich werde vom Vater geschlagen"」と。玆に於てそれは疑ひもなくマゾヒスムス的な性質を帶びて居る譯だ。

この第二期こそは總ての中で最も重要なもので、且その結果の及ぼす處も最も深刻なものである。がある意味から言へばそれは決して眞に實在してはゐないものだとも言へるのだ。何故ならそれは孰れの例に於ても追想されてゐないし、そして又決して意識に迄は上されてゐなかつたか

らである。つまりそれは精神分析での一造構に過ぎない。しかしそれだからといつてその必要性を薄くするものではない。

第三期は再び第一期に髣髴して來る。そしてそれは患者の述べる處からその儘判る意向をもつてゐる。打擲する人は最早決して父性ではない、第一期の樣に不明に委せられてゐるか、或は、父性代理（教師）によつて充塡されるのを定型とする孰れかである。空想する小兒それ自身は打擲の中に姿を現さない。そこで立ち入つて强ひて究問して見ても、患者はただ斯う告るのみだ、「さうですね、私は多分觀てゐましたよ „Ich schaue wahrscheinlich zu."」と。今迄はある一人の小兒が打擲されるのであつたが、今度は多くは數人の小兒が問題にされて來るといふ事になる。そしてここで打擲されるものは（幼女の空想では）幼少年である場合が先づもつて屢〻であつて、しかもそれらは個人的には見も知らぬ子供達なのだ。しかも皮切りになつた、この單調な被打擲 Geschlägenwerden といふ經緯も、多種多樣極まりない變化と粉飾とを被つて、打擲といふ事それ自らが模樣變へによつて別樣の懲罰 Strafen だとか侮蔑 Demütigung だとかいふ抽象的なものに置き代へられるのだ。だが、この期の最も單純な空想でも第一期のものと異らし

め、そして第二期への聯關を示す様な、本質的な特質は次の如きものである。卽ちその空想がこれでは、一義的な強い性的興奮を荷つてゐる者で、さういふ者の常として自瀆的滿足の媒をすることこれである。まあしかしこれも謎であつて、見も知らぬ男の子が打擲されるといふこのサディスムス的な空想が、どういふ道筋を經てそれから後、幼女のリビド的いきみの座を引きつづいて占めるに到るのであらうか。打擲空想の三つの時期の關聯と接續は更なり、その總ての特質もこれ迄には全く手のつけやうもなく放つて置かれた事を今更祕めようとはしない。

四

打擲空想がそこ迄蔓つつぱりを持つてゐて、そこからそれが追想されて來るといふあの早期を通じて精神分析を導いて行くと、打擲空想が小兒を彼の兩親複合 Elternkomplex の興奮の眞唯中に釣り込んでゐるのが判るであらう。

幼女は惚れて、恐らくこの幼女の愛を贏得る資格を十分に具へてゐるその父に執著してゐるのだ。母に對する情愛的な倚賴性の流れを持つてゐると同時に母に對する憎しみの、競爭の態度へ

の芽をこの際植ゑつけるのだ。而もこの芽は年毎にいや增しにはつきり意識される樣になるか、或は却つて餘り大きすぎる反動性戀愛結合の衝撃となつて母親に結合する樣になつて來る事もあり得るのだ。しかし母への關聯へのみこの打擲空想といふものは結び付いて行くものではない。眼を子供部室に轉ずれば、そこに餘り年恰好の違はない兄弟共がゐて、それらは色々な意味合から、特に彼等と兩親の愛をば分たざるを得ないが故に好ましくなく思ひ、そしてこの位の年のものの感情生活には持ち前である處の全く野性的な渾身の勇を奮つてそれらを自分より押しのけようとするのだ。それが自分より年下の同胞である時には（私の四例中三例に於て然り）、それを嫌ふ他に、それを蔑む。しかも愛に盲ひた兩親が、いつの世にも最も幼い者に與へようとまちかまへてゐるその愛情をば如何にこの幼き奴輩がこれを恣にしてゐるのを彼等は目擊せねばならぬ事か。ここに於て打擲されるといふことは、假令それを甚だ悲劇的なものにとらないにしても、愛を拒まれ、屈辱を受けた印を意味することをやがては覺るであらう。かくして彼の兩親の搖ぎなき愛の中に確實に王座を占めてゐると思つてゐた多くの小兒は、このたつた一擊を以てして彼の想像してゐた萬能の世界から九天直下叩き落されるのである。そこで父がこの厭ふべき小さき者

をば打擲するといふ氣味の良い表象は、正にそれが打擲されるのを目撃するしないに拘らず頭に思ひ浮べられるのである。これが第一期に於ける打擲空想の內容でもあり、意義でもある。この空想は、その小兒の嫉妬をばあからさまに慰めて呉れ、彼の愛情生活と關聯を有して來るのだが、しかもそれは又それの利己的な利害關係によつても力づよく支持されてゐるのだ。そこでこれをば純粹に「性的 sexuell」のものなりとして可なるかは疑はしいであらう。將又「サディスムス的 sadistisch」と呼ぶのも躊躇する。扨てそれによつていつも我々が差別決定をしようとする總ての目印は、その由來の如何になると模糊たる事を勿論知つてゐる。そこで恐らくバンコの三人の運命の姉妹 drei Schicksalsschwetern an Banquo の約束と同じ工合に次の如くなるのであつたか。確かに性的とも言へぬし、それ自らサディスムス的でもない、がしかし後に兩者になるべき素であると。處が如何なる場合にも、この空想の第一期が既に性器の要請から自瀆的行爲ではけ口を作らせる事が出來る樣な興奮に腕を藉すであらうなどといふ想像をさせる根據は一つもない。この父子相姦的 inzestuös な愛情のこの早まつた對象選擇で、明かに性器統帥編成 genitale Orgainsation の段階が到來する。この事は幼い男兒にはより容易に指摘し得るが、幼

女に於ても又その然る事は疑ひを容れない。つまり後來の決定的な、そして正常な性目標への憧れに似た何かが小兒のリビド的いきみを支配するのだ。さういふときつとそれなら何處からそれが由來するかに驚くかも知れないが、興奮過程で性器が既にその役割を占めてゐるのが證明されるのだ。母と共に子を做さうとする希望は決して幼童に缺けず、將又父と共に子を得ようとする望みも幼女に恒在する、しかもこの欲求を充足させる路の路しるべをはつきり指し示すことは完全に不可能である。假令小兒がその穿鑿癖で兩親の間の慇懃の何ものであるかを求めて何か他の種類の事物に結びつける。例へば一緒に寢てゐる beisammenschlafen のだとか、一緒に小便をしてゐるのだ in gemeinsamer Harnentleerung とか、さういつた樣な事でかたづけ、そして性器との關聯に關しては模糊としてゐても、さういふ内容がいちはやく言語觀念で先んじて捕捉されるのだが、それでも性器との間になにか關係があるだらうとは小兒に氣取られてゐるらしい。

而もこの若い芽生えが霜に損なはれる時期が來るのだ、この父子相姦的な惚れ込みは總て壓迫現象の宿命より免れる事が出來ない。それはこれといつて示すに足る外部的機會で何か當てはづ

れが起つた時とか、思ひがけない病氣だとか、さもなくば好ましからずも新しい同胞が生れて裏切られた樣に感ずる際か、將又さういふ機會でなしにつまりあんなにも永く憧れてゐた願望の充足が遂に到達しなかつたといふ内部的理由からか、その孰れかによつて衰滅に瀕するのだ。然しさういふ動機が働くからさういふ風になるのではなくして、この愛慾關係にはいつか一度衰滅する事が運命づけられてゐる——その落ち行く先は何處か、それは我々は言へない——といふ事は蔽ふに由ない。然し最も確からしい事は、衰滅すべき時がめぐつて來たから衰滅するのであり、宗族發生上嘗てある時期にさういふ父子相姦的な對象選擇を敢てする事を抑壓された事があるやうに又それが抑壓される個體發生上の新しい發育階程に踏み入つたためである（エディプス神話の運命を見よ）。この父子相姦的な愛慾衝動の精神的の所產として意識されずにゐる處のものは、新しい階程の意識には引きつがれないし、その中で既に意識されてゐた處のものは再びひきずり出されて來るのだ。この壓迫過程と時を同じくして一つの呵責意識が生じて來る。これもその由來が不明であるが、しかもかの父子相姦願望 Inzestwunsch に結びついてゐる事は疑ひを容れない。そしてその願望が無意識なものになつて續生して行けば呵責意識の務めがすむのだ。

父子相姦的な愛慾期の空想は既に述べた如く、彼（父）の愛してゐるのは私許りであつて、他の子供はさうでないのだ、その證據には父があれを打擲するではないか„Er (der Vater) liebt nur mich, nicht das andere Kind, denn dieses schlägt er ja."といふのである。この凱歌の逆轉、即ち「いや、父はお前を愛してゐない、何故なら彼はお前を打擲するではないか„Nein, er liebt dich nicht, denn er schlägt dich"」といふ事ほど呵責意識を持つ身にとつてつらい懲めはないのである。そこで第二期の、自分の身が父に打擲されるといふ空想は、父への愛着が根柢となつてゐる處の呵責意識の直接な表現となるといふ手順にならうではないか。そこでマゾヒスムス的になつて來るのである。私の知つてゐる處では、いつもさうであつて、常にこの呵責意識はサディスムスをマゾヒスムスに化生せしめる動機になるのだ。しかしこれがマゾヒスムスの全內容ではないことは勿論で、呵責意識のみがその全幅を占めるといふ法はない。つまり愛戀の衝動もそれに一枚加はるのだ。扨てある子供で體質性土臺の中でサディスムス的な要素が魁けてしかも孤立して現れて來たといふのを手がけた事のあるのを想起して見よう。我々はこの例でもやはり上述の見界を見棄てるがものはないのだ。斯ういふ子供にこそ性生活の前性器期的サディ

スムス的肛門愛的統帥編成 prägenitale, sadistisch-anale Organisation の反囘がすらすらと行くのだ。そして辛じて到着した性器的統帥編成 genitale Organisation が無殘にも壓迫現象によつて排拭されると、父子相姦的な愛慾の精神的代償の孰れもが意識されなくなるか、無意識に止るかといふある結末が生じ來るのみならず、性器的統帥編成自らも代償性なひけめを味ふといふやうな他の結末も附け加つて現れて來る。「父が私を愛する ,, der Vater liebt mich. ”」とは、性器的意味に解釋された事であるが、それが退行すると、父が私を打擲する ,, der Vater schlägt mich. ”（私は父に打擲される ,, Ich werde vom Vater geschlagen ”）」になるのだ。で、この被打擲といふものは實に呵責意識と色情 Erotik とが相合つて釀したものといふ事になる。それは單に禁壓された性器關係に關する懲罰であるのみならず、又さういふ性器關係に對する退行性代理であるが、この代理を核心にしてリビド的興奮が關聯して來て、この興奮が今度は彼に膠着して自瀆行爲にそのはけ口を見出す。しかもこれが先づマゾヒスムスの本體である。

第二期の、自分が父に打擲されるといふ空想は普通は意識されずに留つてゐる、これは多分壓迫が强烈であるからであらう。しかし私の六例の中の一例（男性の例であつた）でこれが意識さ

れてゐたのがあつたが、何故さうなのか私は述べる事が出來ない。この人はもう大人になつてゐるが、彼の記憶にはつきり殘つてゐる處では、母に打擲されるといふ觀念を自瀆的目的に資したといふ事を言つてゐる、兎角、彼は自分の母を或る時は學校友達の母達で置き換へ、或は誰か彼女に髣髴たる夫人で置き換へてゐたのである。茲で忘るべからざる事は、男兒の母子相姦的な空想が、それに對應したマゾヒスムス的なものに化生する際には、その轉向、つまり積極性を受身性で置き換へる事は女兒の場合よりはもつと多く起る。斯ういふ變形の大多數はこの空想が壓迫の爲に無意識に止りきりになる事を防ぐのだ。そこで呵責意識には壓迫現象と迄行かなくても退行現象 Regression が起つただけで十分なのだらう。處が女性の場合には、寧ろそれ自體遙かに强請的な呵責意識は、兩者が協同して作用して初めて慰撫されるのだ。

私の女性の四例の中二例では、マゾヒスムス的な打擲空想の上に一つの技巧に滿ちた、しかも當事者の生活にとつては甚だ意義を有してゐる處の白晝夢 Tagträume が屋を架すに到つたのだが、その白晝夢には、自瀆行爲をやらないにしても猶滿足した興奮の感情を惹起するに足る機能があるのだ。これらの例の一例では、「父に打擲される」といふ内容が、再び意識にのさばり出て

來る事が出來たのだ、尤も本質的自我はヴェールに蔽はれて曖昧に附せられてはゐたが。この例の主人公は定つて父に打擲されたのであるが、後には唯叱られたとか、屈從を强ひられたとかだけの事であつた。

しかも私は繰返して述べる、定則としてはこの空想は意識されずに止り、精神分析に當つて初めて再構成されねばならないのだ。これは自瀆がここに述べる第三期の打擲空想よりは早く現れた、そして打擲空想の方は後になつて學校での例の光景を見せつけられてその印象から追加して來たのだと追想しようとする患者にはこれで寧ろ理に合ふ。我々が屡〻かういふ申出でに信を置くときは、自瀆は無意識の空想に支配されて生じ、後になつて意識的のもので置き換へられるのだと認めるに傾く。空想する兒が一義的になほ傍觀者として現れ、父性は教師乃至他の目上の人の人となりになつて保たれてゐるといふ決著的な樣態を執つてゐる第三期のあの知明な空想を、さういふ置き換へであると我々は思ふ。扨て第一期の空想に髣髴としてゐるこの空想は再びサデイスムス的なものに轉向したやうに思はれる。そこでその印象を章句にして見ると、「父は他の子供を打擲する、彼は私のみを愛してゐるのだ „der Vater schlägt das andere Kind, er

liebt nur mich.」といふ事になるのだが、この下の句の方が壓迫によつて喪失して了ふと、强勢符が上の句の方に打たれるといふ事になつて來るのだ。この空想の形式は確かにサディスムス的ではあるが、それから得られる滿足はマゾヒスムス的のものであつて、この空想は、壓迫された部分のリビド性役割を引き繼ぎ、これと一緒に內容にくつ附いてゐる呵責意識までも引き受けたといふ點に大いなる意義が存するのだ。つまり教師に打擲される多くの不定な兒童達は要するに自分自身の代償に過ぎないのだ。

玆で初めて例の空想に現れる人物の「性」Geschlecht の方の恒在關係といつた樣な物に言及しよう。打擲される小兒は殆ど常に男の子であつて、これは男兒の空想でも女兒の空想でも同じ事である。この經緯は「性」の例の競り合ひといふ點から掌を指す如くに說明するといふ譯には行かない。何故ならその點から言へば、男兒の空想では寧ろ女兒が打擲される事になるべきだが、さうはならない。且第一期の例の（打擲されたい）嫌ひな子供の性ともやはり無關係であるが、唯女兒の場合には一つの複雜な機構を指し示してゐる。彼女が性器的意味を持つた父子相姦的な父への愛著から轉向する際には、特に易々としてその女性的役割と反噬して、彼女の「男性複合

Männlichkeitskomplex〔Van Ophuijsen〕」を復活させ、以後は單なる「赤坊」たらんと欲する。だから彼女が代理する被打擲小兒 Prügelknaben も又赤坊なのだ。で白晝夢の兩例では——その一例は殆ど主人公は常に若い男許りで、女性はこの創造には先づ與らないで、數年の後初めて傍役を勤めるといふだけであつた。

五

望むらくは、私は私の精神分析經驗を精細に十分唱道し、前述した六例で能事足れりとせず、他の精神析分家と同樣に猶多數の少くとも十分よく研究した例を擧げて手を下したいと考へてゐるのに留意して戴きたい。この觀察から多樣な方向にその鋒先を向け得るので、特に倒錯性慾、殊にマゾヒスムスの由來の解明の問題、將又神經症の構造中の性の差異に關して演ずる役割の品隲の問題にも向けられるのだ。

さういふ討論の最も目立たしい成果は倒錯性慾の成生にその止めをさす。倒錯性慾には性要素が體質的に强勢してゐるとか、早熟してゐるとかが前景にあらはれるものだといふ風にのみ込む

事は先づ妥當ではあらうが、それで全部言ひ盡くされたものではない。倒錯性慾は兒童の性生活の中に孤立してゐるものではなく、我々に知られてゐる定型的——正常なとは言はない——な開展機序の聯關の中にとり込まれてゐるのだ。つまりそれは小兒の近親相姦的な對象愛 inzetuöse Objektliebe 竝にそのエディプス複合 Oedipuskomplex と關聯する樣になり、該複合を基本として形貌を現し、その複合が殲滅するや、屢々それのみ離れてその複合のリビド的性負荷の繼承者として殘り、それに膠着してゐる呵責意識を背負込む。異常な性素質が辣腕を振ふと、エディプス複合をある特殊な方向に逐ひ込んで、ある竝みでない殘餘現象にまで强ひて推しつけて了ふのである。

この小兒的倒錯性慾は、一生を通して同じ意義をもつて恒在して、人生を蠶食する例の倒錯性慾の形成基礎になり得るし、或は打ち碎かれて正常の性的開展の幕の陰に潛んで殘り、それからちくちくとあるエネルギイ量を奪ふといふ樣になる事もあり得る。第一のからくりは精神分析前處置期に見拔かれるものであるが、第一のものと第二のものとの辻褄は、さういふ熟しきつた倒錯性慾の精神分析的研究によるときちつとあふのだ。つまりかういふ第一の場合の樣なのを吟味

して見るとそれが普通破瓜期に於て正常の性作用の尻馬に乘つて現れて來たものであることが全く屡〻である。然しそれは十分の力をもつてゐなかつたので、最初の、決して番附から缺けることのないあの妨礙によつて振り落され、その擧句としてその個人をつかまへて例の幼兒的定着 infantile Fixierung にひき戻すのだ。

一體幼兒的倒錯性慾といふものがエディプス複合から生じて來る事を全然普遍妥當的に主張していいものかどうかを知るのは勿論甚だ大切な事であらう。尤もそれは更に深く研究して見ない限りは決定し得ない事かも知れぬが、しかし不可能な事ではないのだ。成人の倒錯性慾から得られた既往歷を考察する時は、總ての此等の倒錯性慾者 Perversen、フェティシスト Fetischisten 並にそれに類する人間の基準となるべき印象、「最初の體驗」は、六歲より先の時期には殆ど決して體驗されてゐないのに氣付く。丁度この時期を限つてエディプス複合の支配は既に過ぎ去つて及ばなくなつてゐるのだが、憶起された甚だ謎の樣に効力的なこの體驗は確かにその繼承を代理したものである。この體驗と又壓迫された複合との關係といふものは、精神分析の力で最初の「病因性」印象 "pathogener" Eindruck よりも遡つて照魔の光を及ぼさなかつたならば蒙昧に

委して止つたであらうに。玆で考へても見給へ、例へばその人間が旣に八歲乃至六歲頃から同性に愛好の念を感じてゐたといふ樣な報告に基いて、生來性の同性愛が存在するなどと主張する事などが如何に價値少き事である事か。

しかも倒錯性慾といふものが、エディプス複合から派生するといふのが一般に理の通つた話だといふ事になると、我々がその複合を重視する意圖が猶一層新たな支援を受ける事になる。我々は憶ふに、エディプス複合こそは神經症の本來の核であつて、その複合の王座を占めてゐる幼年性性慾 infantile Sexualität、神經症の實際の條件並にその複合から無意識の中に殘つた處のもの、これ等は皆後來成人後の神經症疾患への素因となるのである。この打擲空想並に他のこれに類する倒錯的定着はあのエディプス複合の殘渣に過ぎず、言はば旣に經過してしまつた現象の後遺性瘢痕である事は、著明な「劣等感」といふものがさういふ自己愛的な瘢痕に相當するのと丁度同じだ。私はこの見界からかのマルチノウスキイ Marcinowski がそれを手短かに非常に旨く代言して呉れた處に無條件に同意する（劣等感の色情的根源泉 Die erotischen Quellen der Minderwertigkeitsgefühle 性科學雜誌、第四卷、一九一八年、參照）神經症患者のこの微小安

想 Kleinheitswahn は明らかに單に部分的のもので、他の源泉から生じ來つた自己過評價 Selbstüberschätzung の存在と相容れるのである。エディプス複合それ自身の由來に就て、並に、總ての動物の中で恐らく人間のみに與へられた運命であらうが、性生活を二度これを新たに始めねばならない事、つまり最初は總ての他の生物と同じにその早期小兒期に、次いで永い中斷を經て思春期に再びこれを新たにするといふ運命に就て、約言すれば彼の「古代の繼承者」archaisches Erbe と關聯を有する處のもの總てに就て私は他の項目で既に述べたから、茲では深く入り込まぬ心算である。

マゾヒスムスの成因に就て我々の打擲空想をあげつらつて見ても、その寄與する點は少い。マゾヒスムスは一次的な性慾表現になるものでは決してなく、サディスムスが戈先をその本人にむけた、つまり對象が反轉したために自我に向けかへられたために生じたものである事は確からしい（小論集 Sammlung kleiner Schrfiften 第四輯、一九一八年、中の「本能とその運命 „Triebe und Triebs Shicksale"」を參照せられたい〔全集中本卷にも集錄されてゐる〕)。受身の目標を持つた本能が別して婦人の場合では初めから認められるが、受身 Passivität といふものはマ

ゾヒスムスの全部ではない。本能充足に際して現れるとは甚だ奇怪な話だが、不快性 Unlust-charakter と言ふものが猶それに屬してゐるのだ。サディスムスのマゾヒスムスへの轉向は、壓迫行爲に介與した呵責意識の影響によつて起る樣である。壓迫現象はかるが故にここで三樣の作用として發現する。それは先づ性器的統帥編成の結末を無意識ならしめて、これを極く初期のサディスムス肛門愛的な階程へ迄退行せしめ、そしてそのサディスムス性を受身な、ある意味から言ふと自己愛性のマゾヒスムス narzistischer Masochismus に化生するのだ。第二のものは、これらの例に認められる性器的統帥編成の力の及び方が弱いために生れるのだ。呵責意識が、性器的に纏められた近親相姦的な對象選擇を惡く思ふと同樣に、このサディスムスをも惡しざまに思ふといふ事の爲に、第三のものが必要なのである。然らば呵責意識が何處から因由して來るものであるか、これを精神分析學は言はない。小兒が踏み込んで來た新しい時期から生じて來る樣に思はれる。そしてそれより以降それが止つてゐるならば、劣等感 Minderwertigkeitsgefühl の場合の樣な瘢痕形生 Narbenbildung に當る樣に見える。我々の自我といふものの造構の見當は不確實なのだが、兎に角それによれば、呵責意識は批判的良心 kritisches Gewissen として

殘餘の自我に對立し、夢では所謂ジルベレルの機能的現象 das Silberersche funktionele Phenomen を生じ、注意妄想 Beobachtungswahn に於ては自我から乖離する處のあの審判にあたるのだ。

序に知つて置きたいことは、ここで問題にしてゐる小兒の倒錯性慾の精神分析は、兎に角精神分析學者當事者よりも寧ろ門外漢をもつと苦しめて來たある舊い謎を解くに與つて力があるといふ事である。しかも、神經症患者では自瀆行爲が彼等の呵責意識の眞唯中で遂行されるといふ事實を著しい、而も說明のつかない事實であるとブロイラーでさへも端的に認めて居る。我々はそれ以來この呵責意識は少年の早期の自瀆 Onanie を意味するので、破瓜期自瀆 Pubertätsonaie を意味するものではない事、そしてそれが先づ大體自瀆行爲に關與するものではなく、たとひそれが無意識性――つまりエディプス複合から生じた――空想であらうとも、その自瀆行爲の底に橫はつてゐる處のものと關聯を有してゐるものであると認めて來た。

この第三の、打擲空想の見かけがサディスムス的な時期といふものが、自瀆にまで推しつめて行く興奮の擔荷者として如何なる意義を贏得たか、そして一方同義を保つて存續し、一方代償性

に止揚する空想作用の中の何れに彼等を驅つて到らしめるものかを敍述した。しかし第二の無意識性、即ちマゾヒスムス的な時期、自分が父に打擲されるといふ空想もこれに比すべくもなく更に重要なものである。それがそれを補塡する處のものの手に依つて作用しつづけるといふ一事に止らず、彼等の無意識性覺悟から導かれて來て、性格に働きかける作用も證明されるのだ。さういふ空想を擔つてゐる人間には、父の列に伍し得る樣な人々に對する特別な敏感性と刺戟性とが發展する。彼等は直きにさういふ人達によつて面白からぬ氣持にされ、彼等が父に打擲されるといふ空想性場面の實現を想つて心を痛ましめるのだ。私はこの空想そのものが偏執性好訴妄想 paranoischer Querlantenwahn の基礎になるのを證明するに成功する時期がたとひ來ようとも敢て驚くに足らぬと思ふ。

六

扨て幼年時代の打擲空想は、些少な點は別として、女性の場合の經緯にのみ局限しなかつたならば先づ餘す處なく述べ了へた事になる。又ここに上述した處を約言すれば次の如くになるであ

らう。幼女の打擲空想は三つの時期を經過する、第一のものと第三のものとは意識されて憶起されるが、第二のものは意識されずに止る。この意識される方の二者は、サディスムス的のものであるが、第二の無意識性のものは、疑ひもなくマゾヒスムス的のもので、その內容は父に打擲されるといふのであつて、それにはリビド的負荷と呵責意識とが關係してゐる。打擲される事になる子供は前二者の空想では常に自分以外の子供であるが、第二期では自分自身である。そして第三の、意識性の時期では打擲されるものはとりわけて男の子のみである。打擲する人は初めから父であつて、後になると父の列に伍する人達の中から代りが出來て來る。第二期の無意識性空想は元來性器的意義を有してゐるのであるが、父に依つて愛されようといふ父子相姦的願望から壓迫と補塡によつて生じて來るのだ。上の先づざつと述べた處から結論すると、女兒は第二期と第三期の間に彼女の性を變換して、自分自らを男子にと空想するのだ。

男兒の打擲空想の知見に就ては、多分材料が旨くないからのせいでもあるが、深く究める處がない。私は概念的に男兒でも女兒でもその關係は全然相同であらうと心に決してゐた、卽ち空想の父の位置に母が代つて入り込む事だと思つてゐた。この期待は、男兒のそれに相當すべく思は

れる空想が、母（後には母に代るある人）によつて打擲されるといふ事をその內容に有したといふ處から確かめられる樣に見えた。しかし本人が對象とされたこの空想はそれが意識され得るといふ點で女兒の第二期のものとは異るのだ。それならば寧ろ女兒の第三期のと比肩させたら如何かといふことになるが、今度は男兒の自分自體といふものが、多くの、不定の見知らない女兒、少くとも多數の女兒によつてとつて代られるといふことがないといふ點で新しい差異が生じて來る、そこで男兒の場合と女兒の場合とで完全な相同といふものがあらうといふ期待は裏切られた。

私の男性の材料は性的作用のその他の粗大な沮礙を伴つてゐない幼兒性打擲空想は極く少數例きり含んでゐないが、之に反して倒錯性慾の意味から言つて、正眞正銘なマゾヒストと名づくべき人達の例が多い。それは徹頭徹尾マゾヒスムス的な空想をして自瀆する事に性的滿足を見出した人々か、將又マゾヒスムスと性器機能とをうまく結びつけて、マゾヒスムス的に措置し、そして丁度さういふ條件の下において勃起 Erektion と射精 Ejakulation とを遂げ、或は正常の性交 Koitus へ導かれ得る樣になつた人達かいづれかであつた。それには猶、マゾヒストで、彼の倒

錯行爲に際して堪へ難きまでに強く現れた强迫觀念 Zwangsvorstellung に妨げられたといふ稀な例もあつた。扨て倒錯性慾が假令あつても、それが滿足されてゐる場合には精神分析の手技を要請するがものは先づないのだ。さうすると上述したマゾヒストの三つの群型が彼等を驅つて精神分析學者の下に到らしめるには何か强い動機があつたに相違あるまい。その中あのマゾヒスムス的な自瀆者は、兎に角後になつて女と性交しようとしたら、全然陰萎 impotent である事が判り、次にマゾヒスムス的な觀念や措置の助を藉りて性交を實現させて來た人は、この彼に快適なやり方をやめて了ふと、その性器がマゾヒスムス的な刺戟には反應しなくなる事を突然發見するといふ事があるためであらう。我々に精神的陰萎 psychische Impotenz の治療を求めるや、我我はそれが確實に恢復する事を明言するのが普通だが、この障礙の機構が不明である限りはその豫後に就ては確言を差し控へなくてはならぬものであらう。精神分析が「單なる精神的」陰萎の原因を、多分旣に永い間根ざしてゐるマゾヒスムス的な態度のためだとするならば、それは勝手な早合點といふものであらう。

此等のマゾヒスムス的な男性に就て新しく知り得た事は、女性の場合とのアナロギイを深く追

及する事は先づ扨て置くべきで、寧ろ男の場合は男の場合として獨自に判斷するがいいといふ事である。彼等はマゾヒスムス的な空想の中でも、その空想の實現をもくろむ際にも、きまつて女性の役を買つて出て、女性的態度に合致する。この事は空想の一つ一つから容易に證明し得る處であり、且大多數の患者はまたそれを知つてゐるし、一つの確乎たる主觀的事實なりと表白してゐる。マゾヒスムス的な舞臺の劇的粉飾が、ふしだらな子供、罰せられねばならぬ學童の作り話に終つたにしても、何等話の筋をかへねばならぬ譯のものでもない。みせしめをする人は空想でも、實在でも同一で、常に女性である。これは實際複雜してゐるので、幼兒期の打擲空想のマゾヒスムスもやはり既にさういふ女性的態度に基くものかを知りたい。*

* 更に詳くは「マゾヒスムスのリビド經濟の問題」一九二四年（全集本卷にあり）參照。

扨て成人のマゾヒスムスの說明に苦しむ樣な經緯は度外して、ここでは男性に於ける幼兒期の打擲空想に目を轉じよう。すると最も早い幼兒期を精神分析して見ると、驚倒に値する掘り出し物が手に入る。曰く、母に打擲されるといふ內容の意識された、又は意識され得べき空想は決して初めてのものではないのである。それには定つて意識下に潛入して居て、そして私は父に打擲

されるといふ内容を持つてゐる前階程があるのだ。この前階程は實際少女に於ける第二期の空想に對應する事になる。そして私は母に打擲されるといふ意識的なあらはな空想は少女の場合の第三期の位置を占めるので、それでは既述した様に見も知らぬ男の子が打擲される對象なのだ。私は少女の第一期に比較し得るサディスムス的な性質を帶びた前階程期は、男兒では證明し得なかつたのであるが、しかもここにさういふものはないものだと決定的に言明する氣はない。何故なら私は複雜した型のもののあり得る事を洞察してゐるからである。

男性の空想の打擲されるといふのは、私が端的に、しかも望むらくは誤解されぬ様に述べれば、正に退行 Regression によつて低俗化した性器的意味の惚れられるといふ事になるのである。そこでこの無意識空想は元來は我々が前に假りに說いた様に、私は父に打擲される „Ich werde vom Vater geschlagen." といふ風ではなく、寧ろ私は父に愛される „Ich werde vom Vater geliebt." といふのだ。そして例の定つた過程を踏んで、今度それが、私は母に打擲される „Ich werde von der Mutter geschlagen." といふ意識性空想に化生するのだ。つまり男兒の打擲空想は初めから受身のものであつて、實際父への女性的態度から生じて來るのである。これは丁度

女性のもの（少女の空想）と同様にエディプス複合に相當するのではあるが、「男、女の場合の孰れに於ても、打擲空想といふものは父への近親相姦的な執著から生ずる」といふ他の共通點を別にしては、我々に期待されたるが如き兩者間の平行關係云々は放棄せねばならぬ。

扨て私が玆に男女兩性の打擲空想のなほ他の共通點や差異點を附加したなら、一層それについての大觀を得るに便であらう。少女ではこの無意識性のマゾヒスムス的な空想は正常のエディプス複合から生じ、少年では逆に父を戀愛對象にとつたものから派生するのである。少女では空想が一つの前階程（第一期）を有し、そこでは打擲が特殊な意義をもつて現れるのではなく、嫉妬的に嫌ひな者にむけられるのである。これは少年の場合には認められないのであるが、この差異も一層工合の良い觀察によつては拂拭される時が來るかも知れない。この時期に執つて代る意識性の空想へ移行するに當つては、少女は父の人柄、つまり打擲する側の人の「性 Geschlecht」に介意する、そして打擲される側の人竝にその性が變じて、結局は一人の男が男の子を打擲するといふ工合になるのであるが、男兒の場合には反對に打擲する方の側の人物 Person 竝に性 Geschlecht が變化するので、彼は父を母によつて置き換へ、そして自分の人柄はそのままにして

置く、そこで結局打擲する人と打擲される人とは異つた性のものになるのである。少女ではもともとのマゾヒスムス的（被動的）な境地が壓迫現象によつてサディスムス的のものに化生し、そしてその性的色彩が非常に薄れる。之に反して男兒ではそれはその儘マゾヒスムス的なりに止り、打擲する人と打擲される人との性が異る事のために元の性器的に意味された空想と多分の相似性を持つてゐる。つまり男兒は壓迫現象とこの無意識的空想の模様がへのお蔭で同性愛といふものから遠ざかる。彼の後來の意識的空想で目立たしい事は、それが同性愛的對象選擇 homosexuelle Objektwahl なしに女性的態度 feminine Einstellung をその內容にもつてゐるといふ事である。少女はこれに反してこの同じ過程に當つて特に戀愛生活の要求より逸れる、そして自ら男性的に能動的に振舞はふとはしなくても自らを男に見たてて空想し、性的なものを代償する行爲に當つては唯寧ろ傍觀者として立ち合ふのだ。

この始初の無意識的空想が壓迫されて見ても、そんなに大した變化を齎すものではないと認めるのは理に合つてゐる事と思ふ。處が意識されぬ樣に壓迫されたもの竝に置換されたもの、總てこれらは無意識の中に保たれ、何時でも出動準備が出來てゐるのだ。それのみではなく、それ

は性統帥編成のより早期の段階への退行の効果を伴つてゐる。つまりそれが無意識の中でその按配を變へて、男女兩性を通じて無意識中で壓迫を被つた後には、父によつて愛されるといふ（被動的な）空想ではなく、マゾヒスムス的な、父によつて打擲されるといふ空想が殘存すると信ずべき節がある。玆に壓迫が殆どその意圖を達してゐないからさうなつたんだといふ事を示す事も出來る。同性愛的對象選擇を忌避しようと決して、彼の性を變じなかつた少年でも、彼の意識的の空想の中では女として自らを感じ、打擲する女性に男性の屬性と特質とを賦與してゐるし、之に反してその性に見極めをつけて了つて、全體としてもつと徹底した壓迫作業を了した少女でも、父より免れ得ず、敢て自らを打擲するにも到らないのだ。彼女自ら赤坊になつて了つてゐるのであるから、そこで先づ第一に赤坊が打擲されるといふ事になるのだ。

これだけで男女兩性各〻の場合の打擲空想の機構の差異が十分に解明されたものではない事は知つてゐるが、私自身觀察の材料に遺漏なしとは思はぬから、他の動向との關聯を追及してこの紛亂を解かうとする試みは放棄する。然しこの問題に直面して、私は二樣の理論、それはお互ひに背馳はしてゐるが、兩者とも壓迫現象と性的性質との關聯を云爲したもので、この關聯を各〻

の立場から非常に緊密なものとしてゐる二様の說の檢討へ用ひたいと思ふ。先に申し述べて置きたい事は、私は常にこの理論は兩方とも的に崁らず、且論理に誤りありと思つてゐた事である。

此等の說の第一のものは名稱がない。數年前その當時は親交のあつた同僚が私に主張したものであるが、それの大規模な單純さは、人をして驚きの眼を見張らせて、それ程のものが今迄何故文獻に片鱗を現したのみに止つたんだらうと反問せしめる程のものである。それに依ると、個人には兩性的體質 bisexuelle Konstitution といふものがあつて、各個人の性的性質の葛藤が壓迫現象の原動力となるといふのだ。つまり力強く形成されて、先んじてその人を支配する方の性は、負けて下積になつた方の性の精神的代理者を無意識の中に壓迫して了ふのだ。だから無意識なるものの核心、つまり壓迫せられたものは、各個人の中に存在してゐる反對の方の性だと言ふのだ。人間の性といふものが性器の完熟によつて定められるとする限りは、まあその意味は把捉出來ようが、さうでないとすると、一人の人間のより力强い性といふものは不確かなものである、すると研究の據所として一役勤めねばならぬ處のものが、却つて自らの結論から自らを求めねばならぬといふ妙ちきりんな事が起る。だがその要旨は、男性では無意識性に壓迫されたものは女

性的本能衝動に返り咲き、女性ではその逆だといふのだ。

第二の說はその由來が新しい。矢張りこの兩性の葛籐をば、壓迫の決定的動因なりとする點で第一說と一致してゐるが、その他の事では背馳せねばならない、つまりそれが生物學的論據によるものではなく、社會學的論據を有してゐるのだ。アドラー Alf. Adler によつて述べられたこの「男性抗議 männleiher Protest」の說がその內容に包壞する處は、各個人は價値少き「女性線 weibliche Linie」上に止る事を潔しとせず、何とかして滿足的な「男性線 männliche Linie」へ躍進せんとするのだといふのである。アドラーはこの男性抗議よりして說き擴げて全く普汎的に性格形成並に神經症形成をば說明したのである。然し遺憾ながらこの兩形成、それは確かに乖離した現象なのだが、これをアドラーは明確に分つ事をなさず、壓迫現象の事實を目する事甚だ薄きが故に、男性抗議の說を壓迫現象といふ事に應用しようとすると誤解の危險に曝される惧れがある。私に言はせれば、この研究は男性抗議、つまり「女性線」上より身を避けようとする意志が總ての場合に於て壓迫現象の原動力であると結論して來なければならなかつたのだ。この儘では壓迫するものは常に男性的本能衝動で、壓迫されるものは之又常に女性的本能衝動だ

といふ事にもなるし、將又症狀といふものは女性的本能衝動の結末でなければならないと言ふ事にもならう。何故ならば症狀といふものが壓迫されたものが、その壓迫に抵抗して生じて來た處の代償であるからには、その症狀の性質を無視し得ないからである。

扨て今度は、壓迫現象の所謂性慾化といふものが共通點である上述二說をば、玆に硏究してゐる打擲空想の例について檢討して見よう。私は父によつて打擲されるといふ始初の空想は、男兒では女性的態度に相當するので、つまりこれは彼の性と逆の性的素質の表現である。これが壓迫の咎を受けたといふのならば、壓迫されたものとその人の性と對蹠した性とが同一であるといふ規則を規定する第一說が肯綮に値するかも知れないが、處が壓迫現象がその効果を修めた後に生來し來つたものが、又もや女性的態度である處の意識的空想（尤も今度は母に對するものではあるが）といふのでは、我々の期待に背く處が大きい。然し我々は玆でその質疑に深く立ち入らぬ心算だ、その是非の決定は論を進めて行くにつれて間もなく下す時があるからだ。少女の始初の空想、私は父に打擲される（つまり愛される）といふのは、確かに彼等にあらはに現れて先行支配してゐる性に一致してゐるのであるから、この說の通り壓迫よりは免れ得、無意識性にならなく

てもいいのだ。處が實際には蔽ふべからざる性的性質をも拒むが如き意識的空想で置き換へられる場合だつてあるのだ。だからこの說は打擲空想の理解には用ひられ得ないものであり、且それにより否定されるのである。しかし女兒性男兒 weiblicher Knaben とか、男兒性女兒 männliches Mädchen とかいふものがあつて、それ等にこの打擲空想が現れるなら斯う言ふ運命になつて來るのだとか、或は又男兒に女性的色彩、女兒に男性的色彩といふものが存在してゐて、男兒では被動的空想が生ずる樣、女兒ではそれが壓迫される樣にからくりがさうなつてゐるのではないかとの抗議が出るかも知れぬ、我々もこの考へにはさういふ事もなくあるまいといふ程度には同意した事でもあらうが、しかしあらはな性的性質と壓迫される人身御供を選び出す事との間にこの說で說いてゐる樣な關係があるかどうか、その論點が薄弱であらう。我々の根本原理とする處のものは、男には男性的の本能衝動、女には女性的の本能衝動が同樣に生じて來て、それが各〻壓迫によつて無意識的に始末されるのだといふ事にある。

男性抗議の說が打擲空想の檢討に當つて主張する處は前者より遙かに步がある。少女でも打擲空想は女性的態度、つまり女性線上にさまよつてゐる事に相當する、そして兩性共に空想の壓迫

によつてこの態度からはづれようとあせるといふのである。兎に角この說では女兒の場合だけなら完全な說明がつき、しかもこの男性抗議の作用の恰適な例になる。男兒ではとても話がさう旨くは運ばない、つまり女性線は見棄てられず、彼の意識的マゾヒスムス的な空想の中でも確かにその執著を離れてはゐないのだ。男性抗議が幸ひせられなかつた爲に生じて來た一つの症狀を、我々がこの空想に認めるといふのならば、まだこの說から導かれる期待に沿ふものである。處が壓迫から生じた女兒の空想が一つの症狀の價値と意義を有してゐるなどとは我々をわづらはせるも甚しいものだ。男性抗議がその意圖を完全に遂行してゐる場合、そこには旣に症狀形成の條件がなくなつてゐねばならぬ筈であつたではないか。

この難點から、男性抗議說の全體の觀察の仕方が神經症並に倒錯性慾の問題に對して不適當であり、それを應用して見たつて何も決著をつけ得まいといふ想定をつける前に、我々の眼をこの受身の打擲空想から轉じて、同樣に壓迫現象の作用を受ける處の小兒性性生活の他の本能衝動表現にむけて見よう。初めから男性線上に就してゐて、例へばサディスムス的な衝擊 sadistische Impulse や正常のエディプス複合から派生した母への願望やら、さういふ男性的衝擊の表現で

ある願望や空想のある事、將又これ等も同樣に壓迫現象によつて屈伏され得る事は何人と雖も疑ひを入れない處である。扨て若し男性抗議が被動的な、後來はマゾヒスムス的になる空想を十分によく說明したとするならば、その反對にならつて對蹠的な斯ういふ主動的空想の例に對しては完全に用ひ得べからざるものになつて來る。つまり、男性抗議說は壓迫現象の事實と特に相容れざるものだといふ事になるのである。そこでかのブロイラー Breuer の最初の通利療法 kathartische Kur 以來なされた事、且その通利療法を使つてなされた處の總ての心理學的地步をば自ら拋擲するだけの用意のある人のみ、神經症竝に倒錯性慾の說明に當つて、この男性抗議の原理に猶意義を歸する事を敢てする人々であらう。

觀察を土臺とした精神分析學說は、壓迫の原動力は性慾化されるべきものでないといふ見界を執る。精神的無意識の核心をば人間の古代よりの遺產が形成するのであつて、壓迫現象の手中に陷るものは、常にそれから後の發展階程へ進むに當つて不要のもの、或は新しいものと慣れ合はずにそれに害を與へるもので、推し止むべき必要があつたものである。この選擇はある本能群では他の本能群（例へば性慾）よりも容易に遂げられる。處が中々手剛い後者の本能群卽ち性慾

は、既に何回も述べたやうな特別な關係の力を藉りて壓迫現象の意圖を邪魔し、障礙的な代理形成 Ersa'zbildung によつて代理を强ひ得るのである。かるが故に、壓迫に慴伏してゐる小兒性慾 infantil Sexualität こそは症狀形成の主要動力であり、その內容の本質的塊片はエディプス複合、卽ち神經症の核心複合 Kernkomplex である。望むらくは、この報告に於て、小兒期の性的踏み迷ひも成熟期のものと同じく同じ複合から派生して來るものであるといふ期待を新たにし、括目してこれを見るべき事を。

マゾヒスムスに於けるリビド經濟の問題

初め「國際精神分析學雜誌」、第十卷、第二號（一九二四年）に發表せられたもの。

人間の本能生活の中でマゾヒスムス的な動向の存在といふものが損得づくでは解し難い難物だとする事には一理がある 何故なら快感原則 Lustprinzip といふものが、精神過程上、不快を避けて快に就かしめるのをその第一の目標として支配してゐるならば、マゾヒスムス Masochismus といふものは了解し難い事にならう。若し苦痛と不快とがその警戒を解いて、しかもそれ自體が目的となり兼ねないといふに到つては、最早快感原則の機能は停止する。つまりこの我々の精神生活の番兵が一服盛られたかたちになる。

マゾヒスムスはかくして一大危機を孕んでお目見得する、これはマゾヒスムスの好敵手サディスムス Sadismus には絶對に見られない圖である。そこで我々は快感原則をば單に我々の精神生活の番兵なりとする代りに我々の生命の番兵なりと呼ばうとするの可なるを感ずる。然しさうすると、玆に我々が峻別し來つた二つの本能種類、卽ち死滅本能 Todestrieben 竝に色情的の（リビド性）生活本能 Lebenstrieben との快感原則との關聯をば研究すべき新しい命題が生じて來る、そして我々が先づこれを片づけぬ限りは、マゾヒスムスの問題の品隲に一歩も進む事が出來ない。

御承知の如く*、我々は、總ての精神現象を支配してゐるかの快感原則を、フェヒネル Fechner の所謂「恒常への傾向」Tendenz zur Stabilität の特異例と考へて來た。そこで精神機構にはそれに打ち寄せて來る興奮の集積をば全部無に歸せしめ、或は少くとも出來るだけそれを低めて抑へつけようとする意圖があるとして來たのだ。バルバラ・ロウ Barbara Low はこの假想された努力に涅槃原則 Nirwanaprinzip と名づけるのが至當だとしてゐるが、我々はそれもよからうと思ふ。しかし我々は快・不快原則 Lust-Unlustprinzip をこの涅槃原則と無雜作に同定はしなかつた。若ししからば總ての不快感が精神的なるものの中に存在してゐる刺戟緊張を引き上げ、そして總ての快感がそれを引きさげるといふ事にならなければならなからうし、涅槃—（竝にそれと所謂相同な快感—）原則は、それの目的がこの恒常ならざる生をば無機物狀態の安定へ迄導くと言ふあの死の本能の頤使に全く甘んじたであらうし、高翔的に生活の結末をつけて了ふ事を妨げようとする生活本能、即ちリビドの要求を警戒するといふ機能をもつ事になつて了ふ。兎にかくかういふ物の考へ方は正しくないのだ。我々は刺戟の大いさの增減を直接に緊張感の埒で感ずる樣に思はれる、そして快感に充ちた緊張 Spannung と不快な弛緩 Entspannung といふもの

が存在する事は疑ふべくもない。性的興奮の狀態はさういふ快感に充ちた刺戟增大の最も切實な類例ではあるが、しかもこればかりがさうだといふ譯には行かない。快感といふも不快感といふもかうして見れば、我々が刺戟緊張と稱する處のものの量の增減には、假令表面はこの機緣と結ぶ處が大きい樣であつても、實は關聯があり得ないのである。つまりその量的要素とは關聯しないで、質的性質ときり言ひ得ないその要素の性質に關係するのであるらしい。それなら一體どれがこの質的性質かを申し述べ得るには、更に深く心理學に入り込まなくてはなるまい。多分それは刺戟量といふもののリズム、變化上の暫時性經過竝にその高潮低落の關係であらうが、それらは我々の知り得ない處だ。

＊快・不快原則の彼岸、一、參照。

生物に於けるこの死滅本能に屬する涅槃原則が一つの變形を經て初めて快感原則になつてゐる事を十分知悉して、どんな場合にも兩原則をば同一視する事を避けねばならない。どういふ力でこの變形が生ずるのかは、若しこれを熟思しようとする意圖さへあるなら敢て推測するに難くない。死滅本能に比肩してさういふ工合に生活現象の統制に强ひて關與し來つたものは生活本能卽

ちリビド以外のものでありやうはないのだ。そこで我々は玆に些事ではあるが、興味のある一例の關聯を得る事になる、卽ち涅槃原則は死滅本能の傾向を表現し、快感原則はリビドの要求竝にその變形をしたものを、實在原則 Realitätsprinzip は外界の影響を表現するのだと。

しかもこの三原則の孰れももとよりお互ひに他のものに無効にされる事はない。それらは、時に撞著葛籐に及んで、一方からは刺戟負荷を量的に減殺する事、他方からはそれの質的性質といふものが生じて、遂に刺戟發散が暫時遷延するとか、不快緊張が或る時間繼續するとかを目ざす樣な事があつても、實際にはお互ひにこらへ控へる事を知つてゐる。

かういふ議論から結論すると、快感原則を生命の番兵なりとする記載を不可となし得ない。

扨てマゾヒスムスに話を戻さう。これは三樣の樣態を執つて我々にお目見得する。つまり性的興奮の一つの制限として、女性樣態の一表現として、そして生活能度（行動、behavior）の一規範としてといふのがこれである。そこで性起源的 erogener、女性的 femininer、道德的 moralischer マゾヒスムスといふ三つのものを區別し得る事になる。第一の性起源的マゾヒスムス、疼痛嗜好 Schmerzlust は他の二者の根柢にも潜んでゐるのである。これは生物學的に體質的に

云爲されるのであるが、全く蒙昧に委せられた點に就て二三の推定を決しない限りは理解に苦しむ。第三の、ある見地よりすればマゾヒスムスの最も重要な表現型である處のものは、近來初めて精神分析に先づ大抵無意識性罪悪感 unbewusstes Schuldgefühl としてその價値を認められ出して來たものであるが、これは旣に完全な說明がつき、我々のその他の知識の中に伍するに到つたものである。これに反して女性的マゾヒスムスなるものは、我々の觀察に最もよく觸れてゐるもので、その不可解な點が最も少く、しかも常にその全幅を曝してゐるものだ。このものから我々の記述を始める事にしよう。

我々はこの種類のマゾヒスムスを男性（材料の關係から玆では男性に止める）でマゾヒスムス的な（屢〻その爲に陰萎であるが）人達の空想の中から十分にこれを知り得るので、この際さういふ空想が自瀆行爲の間に浮ぶのか、或はそれ自身旣に性的滿足を示すのであるか、孰れかである。マゾヒスムス的な性慾倒錯者の現實的實行は、それ自身目的として遂行されようが、將又ポテンツ Potenz を整復して、性行爲に就かせる事に資するためであらうが、その如何に拘らず、この空想と完全に調子を合せるものである。兩者の場合（空想と實行と）――その實行といつて

も勿論單にその空想の演戯的遂行に過ぎぬが――その中にははつきりとした內容があるのだ、つまり、猿轡を含まされるとか、縛られるとか、痛撃されるとか、鞭うたれるとか、何應工合にか虐待されるとか、堪へ難い無條件な服從を强ひられるとか、汚穢にまみれさせられるとか、將又屈從に委せしめられるとか等がこれである。しかし傷害云々の問題がこの內容にとり入れられるのは遙かに稀で、假令あつても甚だしい限定の下に問題にされるのだ。其處で最も手頃な言ひ廻しをして見れば、マゾヒスト Masochist は幼少な、賴りない、そして世話の燒ける子供、しかも特に惡い子供として取り扱ふ可きものだと言ふことになる。一例報告を集めて見るなどは駄足であつて、斯ういふ材料はどこにでも轉がつて居り、觀察する氣なら、精神分析學者の手を俟たなくても隨時手に入る問題だ。しかし乍らマゾヒスムス的な空想が、特に非常に手の込んだ細工をされてゐる樣な例を硏究する機會にぶつかつたら、その空想がその人間を女性に條件づける樣な狀況に置き換へる、つまりそれが去勢されるとか、性交されるとか、或はお產するとかを意味してゐるのを易々と發見する事であらう。かういふ譯合から、その要素の多くのものは幼兒的生活を示してはゐるのだが、このマゾヒスムスの表現型をば寧ろ重きに從つて a potiori 女性的マ

ゾヒスムスと呼んだのだ。この小兒性のものと女性的のものとの交錯は、後に端的に説明をつける筈だ。去勢又はその代理として現れる盲目は、別に性器や眼には何等の實害が起るものではないといふ條件で屢〻空想にその否定的痕跡を殘す。(マゾヒスムス的な拷問は先づかの――空想された又は實演された――サディスムスの殘忍性の樣なそんな印象を與へる事は稀である。マゾヒスムス的な空想のはつきりした內容の中には、又一つの罪惡感が表現されて來る、それには當該人士が何か斯う罪を犯してゐて(それがどういふものかは不明に委せられてゐる)、そいつが總て苦痛な、そして呵責的な手配によつて贖罪せしめられなければならないといふのだ。これは恰もマゾヒスムス的な內容の表面合理的な說明の樣に見えるが、實は、これに幼兒期手淫 infantile Masturbation との關係が裏に潛んでゐる。そして他方この呵責動機は、第三の道德性のマゾヒスムスの型に移行するのだ。

上述の女性的マゾヒスムスは始原的 primär な、性起源的 erogen なもの、つまり苦痛欲求 Schmerzlust に全然基いてゐるが、その說明は更に深くつき入つた檢討なくしては達せられない。

私は「性理論の三論說」の中の幼兒期性慾 infantile Sexualität の起源に關する部で次の樣な

主張を建てた。性的興奮といふものは、ある大系列の内的現象の副作用として、この現象の强度がただ或る量的限界を超えて上るや否や生ずるものであると。然り、そこで凡そ生體でより重要なものでその要素を性慾の興奮に寄與しなかつたものはあるまい。從つて又苦痛興奮竝に不快興奮といふものもかういふ結末を擇らねばならぬ事にもならう。苦痛緊張竝に不快緊張に當つて起るこのリビド性共同興奮は、一つの幼兒性生理的機制であつて、後には消滅して了ふものである。これは種々な性素質の內で、色々な大きさの組み立てを受け、常に生理學的基礎工事をなし、それから性起源性マゾヒスムス erogener Masochismus として心理的に屋を架せられるのだ。

一體この說明が隔靴搔痒の感を與へるのは、その中に本能生活の中でマゾヒスムスといふ好敵手たるサディスムスとの恒常的なしかも緊密な關聯といふものへ、てんで解釋の光が投げられてゐない處にある。我々が一步退いて、生體で作用してゐると考へられる二種類の本能種類を想定して見たら、上述した處のものとも背馳しない別の推論に達するであらう。リビドといふものは(多細胞)生物では、そこに支配してゐる死滅本能卽ち破壞本能 Destruktionstieb と衝突する。

この破壊本能といふものはこの細胞體を壞滅せしめて、個々の要素性組織を擧げて無機物性安定（相對的安定かも知れないが）の狀態に導きたがつてゐるものである。リビドはこの破壞本能を手も足も出なくさせる役目を持つてゐて、その本能を大部分、そして、時にはある特別な器官組織、筋肉系の力を藉りてこれを外界に導き、外界の對象にむけしめてその破壞性を免れるのだ。そこでこの部分は破壞本能とも支配本能 Bemächtigungstrieb とも權力への意志 Wille zur Macht とも呼ばれよう。この本能の一部は直接に性的機能の奉仕もさせられ、その方面で重要な事を爲さねばならない。これこそ在來のサディスムスである。處がその殘りの部分の本能はかかる措置を外界に向つてとらず、生體の中に閉ぢ籠つて、そこで上述した性的共同興奮の手を藉りてリビド性に結合する。このものを我々は本來の性起源性マゾヒスムスと認めねばならない。どういふ道筋で、どういふ手段で死滅衝動のこの掣肘がリビドによつて遂げられるのか、それの生理的理解は得られない。この兩種の本能は十分に、而も、種々な割合で混合し化合してゐるので、我々は死滅本能とか生活能力とかを純粹にとり立て、指呼する事が出來ないで、唯それらの種々の割合に混合したものを指摘するに止らねばならぬ事を、精神分析的考へ方からは認め得

るばかりだ。本能の混合があるからには、ある作用の下にそれが分解する事もあらう。しかも死滅本能がリビド系へ加勢するためにさういふ掣肘から離脱する部分がどれだけの大いさのものであるかは今の處わからない。

若し茲に多少雜駁な物言ひを許して戴くなら、生物で作用してゐる死滅本能――原サディスムスUrsadismus――はマゾヒスムスと同じなものだとも言ひ得よう。その本能の主要部隊が外的對象にさしむけられた後には、内部にその殘遺部隊として本來の性起源性マゾヒスムスが殘り、其奴は一方に於てはリビドの一要素となつて了つてゐるし、他方に於ては猶相變らず自身自らを對象にしてゐるものなのだ。そこでこのマゾヒスムスは死滅本能とエロスErosとの生命の爲にしかく重要な合成が爾々の時期に行はれたといふ事の證據であり、且その形成期の殘遺物であるといふことにならう。だから時あつてか、ある狀況の下では、この外方に向けられ投影されたサディスムス、卽ち破壞本能が再び內方に轉向して、內部にその戈先をむけるに到る、つまりさういふ風にしてその初期の狀況に還元する事があるのを耳にしてもあながち驚くにあたらない。かうして第二次的マゾヒスムスが出來て、在來のものに附け加はるのである。

性起源性マゾヒスムスはリビドのあらゆる發展階程と事を共にし、それにつれてその折々の心理的衣換へをする。トーテム動物 Totemtier（實は父だが）に喰はれて了ふといふ心理は原始的口愛性統帥編成 primitive orale Organisatin から萠芽するし、父によつて打擲されたいといふ願望、これは次いで現れるサディスムス的肛門愛性期 sadistisch-anale Phase に生ずる。そして男根性統帥編成 phallische Organisati n の階程の殘渣として去勢といふ事が、假令後には否定し去られるにしても、兎に角マゾヒスムス的空想の内容の中に入つて來る。大詰めの性器性統帥編成 Genitalorganiration からは勿論女性に特有な立場、通ぜられる（性交される）とか赤坊を生むとかいふのが生ずる。又マゾヒスムスでの肛門の役割は、それの明白な現實上の根據は別としても之を理解するに容易だ。肛門といふものはマゾヒスムス的肛門愛性期の性起源的に取り立てて選ばれた身體部位であつて、これは恰も口愛期に乳房、性器期に男根が選ばれると同樣である。

マゾヒスムスの第三の形、道德性マゾヒスムス moralischer Masochismus は、我々が認識してゐる性と言ふものと少しく緣遠くなつてゐる事が著しい點である。總てマゾヒスムス的な苦痛

といふものは、その苦痛が愛人から發し、愛人の命令なるが故に堪へ忍ばれるといふ條件がついてゐるのであるが、かういふ制限は道徳的マゾヒスムスではとり去られてゐる。何からそれが由來しようとも苦痛それ自ら苦痛なのだ。愛する人から課せられようとも、路傍の人から課せられようともそれは問題ではないのだ。それは人間的でない權力又は狀勢から由來されてゐる事もあらう。正眞正銘のマゾヒストは彼が一撃を食らはうともくろんでゐる場合には、何時何處でも彼の頰を擊たるべく向けてゐるのだ。この事柄を說明するにリビド云々の言は姑く度外視して、破壞本能が再び內部に向けられて、今や自分自身に對して爆發するのだといふだけに話をとどめたのは見易き道理である。しかも言葉の慣れで生活狀態のこの規範と色情 Erotik との關聯を矢張り言ひ及んでゐる事、そしてさういふ自家傷害者 Selbstschädiger をマゾヒストと呼んでゐるのは意味深長な事である。

手法上の習慣に從つて、我々は先づマゾヒスムスの極端な、疑ひもなく病的な型のものを問題に取上げて見よう。他の箇所*でも述べた事であるが、精神分析的處置をなすに當つて、治療の影響に對する患者の態度から、そこに「無意識性」罪惡感の存在を考へざるを得ない樣な患者にぶ

つかる事がある。私は其の箇所でかかる患者を認識する手がかりといふもの（つまり「この消極的治療反應」negative therapeutische Reaktion とも言ふべきもの）を論じ、その上さういふ衝動が強い事は、我々の醫療的、或は教育的意圖の成果に對して最も強い抵抗と最大な危險とを意味するものだといふ事を有りの儘に述べた。この意識性罪惡感の滿足こそ、治癒する事を邪魔し、病んでゐる狀態から脫出せしめようとしない力の集り、つまり普通複雜な病症利得 Krankheitsgewinn といふものの恐らく最も賴みとする根據地であらう。神經症が苦痛を齎すのは、その苦痛でマゾヒスムス的な傾向が强まるやうにといふさういふ動機からである。そしてあらゆる治療的苦心にも背いて來たある神經症が、その人間が不幸な結婚の悲慘さに落ち込んだとか、その財產を失つたとか或はある恐しい器質的疾患に罹つたりすると、あらゆる理論を超え、あらゆる期待に反して、その神經症が忽然として消滅するのを經驗するが、これは甚だ教訓的な事實である。苦痛のある形のものが他の形のもので解き放たれた事になるのであるが、我々の見る處に從へば、ある分量の苦痛だけはいつでも保持してゐようとするからさういふ事になるのだ。

＊自我とエス參照。

無意識性罪惡感の存在する事は患者は中々信じて吳れない。意識性罪惡感、罪惡意識 Schuld-bewusstsein が如何なる苦惱（良心の呵責 Gewissensbissen）を齎すものかは彼等のあまりによく知つてゐる處である。そこで、自分の中にそれに全く同樣な衝動を包藏して居ながら、しかもそれを自分では殆ど感付いてゐないのだなどといふ事を信じない。思ふに、さなきだに心理學的に不正確な名稱「無意識性罪惡感」といふのを廢棄して、その代りに、この觀察された事象に丁度恰適である事を知つた「懲罰欲求 Strafbedürfnis」といふ言ひ方にすれば、ある程度迄その抗議を緩和し得よう。しかし我々はこの無意識性罪惡感の定規で判斷し、位置を定める事は止められない。

我々は超自我 Ueber-Ich に良心 Gewissen の機能を歸屬せしめ、罪惡意識を目して自我との間の緊張の表現なりと認めて來た。自我が彼の理想たる超自我に求められた要求に沿ひ得なかつた事を自ら認めた時に苦悶感 Angsrgefühl（良心苦悶 Gewissensangst）を以て反省する。扨て然らば次に知りたい事は、超自我といふものが如何にしてかかる權威ある役目に就くに到つたか、そして何故自我が彼の理想と遠ざかつた場合に畏怖に襲はれねばならぬのかである。

自我といふものの機能は、自我が仕へてゐる三つの審判 drei Instanzen の要求を和協せしめるためにそれ等を統一する處に存すると述べたが、自我は超自我の中にその規範を見出して、それに倣はうとしてゐるものである事を更に追加し得る。この超自我はつまり外界の代言者たると同程度に又エス das Es の代辯者である。エスのリビド性衝動の最初の對象、卽ち兩親が自我の中に内向されて、その際その對象に對する關係が性的意味を失ひ、直接的性目的からの離脫を經て超自我が成生するのである。斯ういふ風にして先づエディプス複合の克服が遂げられたのである。そして超自我が内向された人格の本質的特徵、その權力、嚴格性、監督し懲罰せんとする傾向をば有するに到つたのだ。他の箇所でも詳述した樣に、*自我へ兩親を對象としてさういふ風に取り込むと共に本能の分解が生じ、從つてこの嚴格性が一層昂まつて來るのは理の見易き道理である。扨てこの超自我卽ち超自我の中で有力な良心は、これ迄は自我を被護してゐたが、轉じて硬化し、假借する處なくなり得るのだ。カントのかの範疇命令 kategorischer Imperativ はこれであつて、つまりエディプス複合の直き直きの申し子であるといふ事になる。

* 自我とエス參照。

しかし超自我の中にあつて良心審判 Gewissensinstanz として更に作用し續けるその人格（兩親）が、エスのリビド性衝動の對象たる事を止めて了つた後にも猶實在外界に屬してゐる。この實在界からの人格が執り上げられて來てゐるのだ。彼等の權力の陰には過去の竝に傳承の影響が匿れてゐるのであつて、この權力が實在といふものの最も感知し易い一つの表現であつたのだ。斯ういふ都合のお蔭で、エディプス複合の代償たる超自我が實在外界の代表者となり、自我の努力に對する手本となるのだ。

エディプス複合は、既に歷史的にも推定されてゐる如く我々の個人の倫理（道德）の源泉である事がわかる。子供が成長するに從つて、漸次兩親から離れて行くものだが、それにつれて、超自我に對する人格的意義といふものが立ち歸つて來る。兩親によつて殘された殘像の上に今度は教師、權威者、自ら選んで規範とする人、或は社會的に著聞な英雄、さういふものの影響が附け加はるのであるが、もうさういふ人格は既に張りが強くなつて來た自我には最早取り込まれる必要がない。兩親から始まつてゐるこの一聯の系列の最後の形態こそは運命といふ茫漠たる力である。この運命と言ふものを非人格性なりと觀ずる事を得るのは先づ我々の中でも極く小數の人の

なし得る處だ。オランダの詩人ムルタトゥリ Multatuli が、ギリシャのモイラ神（運命の神）をロゴスとアヴァニエの神（理性と憎みの神）との一對の神樣で置き換へたが、これについては異議を挾しはさむべくもない。しかし世の中の出來事の攝理を神意、神或は神と自然に歸するものは、彼等が最も外廓にあり、そして最も遠きにあるこれ等の力を常に兩親――神話的に――の様に感覺し、そしてその力とリビド性結合で結び付けられてゐると信じてゐるのではないかと疑はれる。私は「自我とエス」の中で人間が現實に於て抱く死の恐怖は運命をさういふ風に兩親云々で解釋して見ようと試みた。この考へ方からは非常に離れ難い樣に思はれるのである。

* トーテムとタブウ、第四節參照。

扨て先づからいふ前置きをしてからやつと道德性マゾヒスムスの品隲に立ち歸る事が出來る。我々が旣に述べた樣に、或る人士で治療に當つても日常生活でも彼等の行動に徵して彼等が道德的に過度に抑壓されて居り、餘りに銳敏な良心の掣肘を受けてゐる――よしさういふ過度の道德に就ては何等意識する處がないにせよ――かの樣な印象をまざまざと與へる人がある。處が更に深く檢討して見ると、道德のさういふ無意識性の延長を道德的マゾヒスムスから分つ區別に十分

氣がつく。前者では、超自我のサディスムスの昂進が强調されてそれに自我が慴伏し、後者では逆に自我の持前のマゾヒスムスが强調されてゐるので、そのために、超自我からの懲罰にせよ、兩親の權威からの懲罰にせよ、孰れにしてもとにかく懲罰を希求してゐるのだ。そのどつちにした處で結局自我と超自我或はそれと同列の權力との間の一つの關聯が眼目なのであるから、最初兩者を混同して述べたが結局それでいいのだ。兎に角兩者の場合懲罰乃至は苦痛によつて滿足されるある要求が存する點は同一だ。超自我のサディスムスが多くの場合炳乎として意識されるに拘らず、自我のマゾヒスムス的な動向といふものは先づ普通はその個人に隱れてゐてその狀況から推論されねばならぬといふのはどうでもいい傍系的狀況として抛つて置かれてはならぬ事情である。

この道德性マゾヒスムスが無意識性であると言ふ點から、我々はある示唆を受ける。卽ち我々は「無意識性罪惡感」なる表現はとりもなほさず兩親權力 elterliche Macht によつて懲罰される事を要請する事だと解釋する事が出來た。扨て其處で、彼の空想の中に甚だ屢〻現れる願望、父に打擲されたいといふ願望が、他の一つの願望つまり父に對して受身の(女性的)性的關係で

結びつきたいといふ願望と非常に親近で、唯これの退行的歪み regressive Entstellung にすぎないといふ事が判る。この説明を道徳性マゾヒスムスの內容に織り込むといふと、それの祕めたる意味が豁然として我々の眼界にひらけて來る。一體良心竝に道德といふものは、エディプス複合を克服する事、その性的要素を奪つて了ふ事によつて生じ來つたものなのだ。道德性マゾヒスムスによつて道德といふものが再び性的臭ひを吹きこまれ、エディプス複合が復活し來り、そして道德からエディプス複合への退路が切り拓かれるのだ。これは道德の利益にもならなければ、個人の利益になる事でもない。各人は確かに彼のマゾヒスムスの他に猶彼の倫理道德をば全部或は幾分を保つて來たのであるが、而も且彼の良心の大部分がマゾヒスムスに失はれて了つてゐる事もあり得るのだ。他方マゾヒスムスは「罪の」行爲へ誘惑するのであるが、この行爲がそれからサディスムス的な良心(ロシアの性格型に甚だ屢〻ある樣に)の非難を受け、或は運命の偉大な兩親權威の折檻によつてお仕置をされねばならぬ事になるのだ。この兩親代償によるこの懲罰を挑發するために、マゾヒストは非合目的な事を行ひ、彼自身の利益に反して働き、實社會に於て彼に開けてゐる好望を覆へし、時あつてか彼自身の存在さへも沒却せねばやまないのだ。

サディスムスが御本人自身へ逆襲して來ることは、教養によつて本能彈壓が行はれると定つて生じて來るが、この彈壓はその人間の破壞性本能要素の大部分が生活上に作用する事を差し止めるものである。破壞本能のこの取り殘された部分が、マゾヒスムスの昂進として自我の中に形貌を現して來ることは考へ得る。良心の現象から推測すると、外界より再歸して來た破壞がさういふ風に變貌する事なくして超自我に採擇され、そして超自我の自我へのサディスムスを高めるのだ。つまり超自我のサディスムスと自我のマゾヒスムスとはお互ひに肩を藉し合つて同一の結果を招來する樣になる。思ふに、斯くの如くにして初めて、本能抑壓 Triebunterdrückung によつて――屢〻いや時には全く普汎的に――一つの罪惡感が結果され、そして良心はその個人が他人に對する攻擊を差し控へれば差し控へる程それだけ嚴格になり、それだけ感受性に富んで來る事が理解し得る。教養から言つて望ましくないあの攻擊を避けるを習慣とすべきを自ら知つてゐる人は、つまり立派な良心があつて、自我をよく監督するに手落ちのない人であるといふのは、期して持つべきである。道德的要求が先づあつてその結果として本能止揚が行はれるかの如くされてゐるが、これでは道德といふものの由來が判らない事になる。實際に於ては、その關係は逆に

なつてゐると思はれる、つまりしよつぱしめの本能止揚といふものは、外的權力によつて强ひられたものであり、これによつて初めて道德が作られ、この道德が良心となつて現れ、そして次々に本能止揚を要求するのだ。

そこで道德性マゾヒスムスなるものは本能混合の存生に對する昔ながらの證人となる。それの危險性は、それが死滅本能から派生して居り、その本能の破壞本能としての外に轉向する事から免れる部分に相當してゐる點にある。しかし他方それはある色情的な要素の意義も有してゐるから、その個人の自家滅却 Selbstzerstörung といふものもリビド性の滿足なくしては招來され得ないのだ。

フェティシスムス

フェティシスムス論

一九二八年發行の精神分析一九二八年暦に掲載せられたるもの。

昨年余は各〻或る嗜好片（フェティシス）に支配されて對象選擇をなしてゐる人々を患者として、精神分析的に研究する機會を持つことが出來た。しかし注意せねばならぬ點は、此等の人々は、自分がフェティシスムスに陷つてゐるがために余のところに分析を受けに來たのではない事である。何故なれば、フェティシスムスに陷つた人は、成程周圍の人々からは異常者であることが知られはするが、何等病氣としての症狀に惱まされることはない。のみならず、その多くは自分に滿足し、却つて自分の戀愛生活が容易にせられることを都合よく思つてゐる位である。だからフェティシスムスに陷つてゐると言ふことは、何か他の病症の合併症としての意義を有するに止るのである。

　余の取り扱つた例症の個々は、殆ど同じやうな根據から發表することが出來ない事情にある。だから余は、如何樣にして、偶然の事情のうちから、嗜好節片を選擇するやうになつたかを明白にすることは出來ない。最も著しい例は、或る若い男が『鼻の輝き』Glanz auf der Na e をフェティシスムスの條件として選んでゐる例であつた。而も此の患者は英語を話す國で子供の時代を過し、後獨逸國にやつて來たのであるが、殆ど完全に母國語たる英語を忘れて了つたと言ふ事

實から、此の患者のフェティシスムスの驚く可き説明が得られたのである。此の男は最初の小兒時代に得たフェティシスムスの節片については獨逸讀みをしないで英語讀みをするのである。例へば Glanz auf der Nase を英語讀みして Blick auf die Nase と讀む。glance と Blick は同意義であるからである。鼻そのものも彼の嗜好節片の一つであつた。そして彼は鼻には特殊な輝きを隨意に見付け出すことが出來ると言ふのであつたが、これは他人には見ることが出來なかつた。

分析によつて、嗜好節片の意味と意圖とに關して得た結果は、總ての例で殆ど同じであつた。その結果は強ひられたものではないので、余は既にこの解決を一般に總てのフェティシスムスの例に期待しようと定めてゐる位である。余の發見したその嗜好節片は、一に陰莖代理物であると此處に書けば、讀者は定めしがつかりするであらう。ところが、余は急いで附記したいのだ。此處に代理物と言うても隨意の陰莖を意味するものではない。一定の、全く特別の陰莖、それは早期の小兒期では甚だ巨大な意義を有してゐたが、後年に至つてこの意義を失つて了ふやうな陰莖のことである。言ひ換へれば、正常の場合では確かに意義を失ふ筈であるが、然し嗜好節片なる

ものが正にその失はんとする意義を失はぬやうにするものなのである。更に明かに言ふならば、嗜好節片と言ふのは女性の（即ち母親のもつてゐた）男根 Phallus の代理なので、子供の時に母親に確かにそれがあると信じ――その考へを捨て去り度くないのである。何故に捨て去り度くないかはよくわかる。*

＊此の解釋は既に一九一〇年余の論文「レオナルド・ダ・ヴィンチの小兒時代の思ひ出」の中に、その證明はあげてないが、考へは書いて置いた事がある。

だから、フェティシスムスの由來は、男の子が女には陰莖がないと言ふ事實の認識を、承認することが嫌で拒絕しようと言ふところから來てゐるのであつた。いや、斯う言うては本當でない。何故なれば、女が去勢されたために陰莖を有してゐないのであつたとすれば、彼自身の所有してゐる陰莖もとられることがあるかも知れぬ。故にこれに對して自己愛症の一部分、即ち自然が此の器官を大切にさせるために豫め與へて置いた自己愛症が奮然として奮ひ立つたわけである。この恐慌は、成人となつてから後に、王位或は宗教が危險に瀕してゐるとの叫びを聞いた時に經驗すると同じやうな恐慌である。この恐慌は成人をも同じやうな非論理的な結果に導くに違

ひない。余が誤りでなければ、ラフォルグは斯かる場合に言うた。子供は女に陰莖のないと言ふことを認識するのを暗點症と同じやうにみのがす skotomisiert と。[*] 新しい語彙も、それが新しい事實を記載し、或は主張する場合には是認されねばならぬ。然し此處ではこの新しい語が適當であるとは考へられぬ。此の病的の過程に對しては、既に最も古くから我々の精神分析學上の語彙のうちには、「壓迫現象」と言ふ語がある。若しも表象の運命と、感情の運命とは區別して混同してはならぬ、そしてこの「壓迫現象」と言ふ語は單に感情の場合にのみ限局して置く可きであると人ありて主張するならば、この場合の如き表象の運命について言ふ場合は、「否認現象」Verleugnung と言ふ語を用ひるのが獨逸語として正しい。部分視 Skotomisation と言ふ語は此處には特に不適當と思はれる。何故ならば、此の語は恰も視覺印象が網膜の盲點と言ふ部分に落ちた場合と同一の結果の如く認識のすつかり拭ひとられて了つた時の如き觀念を思はしめるからである。然し、此處で論じてゐる狀況はこれとは正に反對の場合で、認識は確かに存在してゐる。そしてその認識を何とかしてうまく否認するために非常な大努力が拂はれてゐる場合である。子供は女を觀察することによつて女にも陰莖があると信じ、これを少しも變化せしむること

なく保つてゐるのであると考へるのは正當ではない。それは維持せられてもゐるが、然し同時に廢棄せられてもゐる。實際は、望まぬ認識の重さと、その反對を願望する强さとの間の葛籐は、唯無意識に於ける思考法則の支配の下に於てのみ——即ち第一次過程 Primärvorgänge ——或る一種の妥協に到達することが可能である。正にさうだ。女はその心理内に於ては倘陰莖を所有してゐる。然し此の陰莖とは言ひ條以前にさうであつた如き同じ形をしてゐるものではない。陰莖ではない何か他の物が、その代りに入り込んで來てゐる、故に言はば陰莖の代理と名付けられる可きものである。そしてこの者は今や、前に受け取つてゐた興味の遺產を受け取るのである。此の興味は今や更に一層高まつてくる。何故ならば去勢に對しての憎惡が却つて此の代理の生ずることに對して重大な作用をなすからである。此の際生じた壓迫現象の證據、消す可からざる烙印 Stigma indelebile としては、フェティシスムスにあつてはいつも決して缺くることがない實際の女性の陰部に對する冷淡さが存在する。斯く考へてくると嗜好節片が爲すところは何であるか、又何によつてこれが續けられるかを概觀することが出來るであらう。即ち此の嗜好節片は去勢脅威に對して勝利を得たことの證據であり、この勝利の保證である。又、節片嗜好症者は、この嗜

好節片のあるために、同性愛者とならずに濟んでゐる。何故ならば、嗜好節片があつて初めて、女性にも亦性的對象として堪へ得可しとの性質をかづけることが出來るからである。更に後年に至つては、フェティシスムスに陷つてゐる人は、彼の陰部代理物のあることによつてもう一つの利得を享受することが出來ると信ずる。卽ち彼の嗜好節片は他人にはそれほどの意味がない。だから決して拒絶されることはない。彼は容易にそれに近づき、それに結合してゐる性的滿足を享樂することが出來る。他人が得んと努めて苦勞するものは、フェティシスムスの人には少しも羨しくは思はれぬのである。*

*余は自ら訂正して置く。卽ちラフォルグは一體こんなことは言はぬであらうと言ふ假定をなす可き根據を余自身が持つてゐると言ふ事である。彼がこの部分祠する Skotomisation なる語彙を導入し來つた本來の意義は、早發性痴呆症の記述から來てゐるのであつて、決して精神分析的見解を精神症にも應用するために生じ來つたのではない。そして發育過程や、神經症形成に對して何等の通用を有してゐないものである。だから本文中でも此の恰適ならざることを明らかにせんとして注意してある。

女性の陰部を見てああ言ふ風に去勢せられては困ると感ずることは男子には誰にもあるものと

考へられる。此の印象の結果として或る者は同性愛的になるのであらう、又他のものは嗜好節片を探して之を得たことによりこれを防ぐことになるし、大多數の人はこれを打ち勝つことが出來る。斯く或る者に生じ或る者に生ぜぬのは抑〻何故であるかは容易に説明する事が出來ぬ。同時に作用する澤山の條件が其處にあつて、そのうちどれがこの稀な病的結果に對して最も働いてゐるかがまだ解つてゐないのであらう。だから唯今は、實際にさうなつてゐるものが何で出て來てゐるかを説明し得たらそれで滿足せねばならぬ。前者は何故それにならぬのであるか、この問題は、一時拒絶して置くことにしようではないか。

女性にある可くして失はれた男根の代理物としては、然らざれば陰莖の象徴となり得るやうな器官に對象が選ばれると言ふことは、期待し得るところである。そしてこれは甚だ生じ易いには違ひないが、然し必ずこれが生ずるとは決つてゐない。嗜好節片の定着は、恐らく、外傷性健忘症の際に生ずるやうな、記憶の一定時期への停止を髣髴せしめるやうな一過程がひそんでゐるやうである。だから此處には、興味が途中で停止して止つてゐる。即ち無邪氣なものとか、外傷的なものとかの最後の印象が嗜好節片として固定して了ふやうである。斯くの如くであるから、足

とか靴とか——或はそれ等のものの一部とか——が嗜好節片となりやすいが、これは子供の好奇心が、下の方卽ち足から女性陰部の方へと窺うた事情から來てゐるに違ひない。尙毛皮や天鵞絨に定着するのは——旣に永い前より想像せられてゐた如く——陰部の毛を垣間見たこと、これから女に陰莖があるのを見たがつた結果より來てゐるに違ひない。洗濯物が甚だ屢〻嗜好節片に選ばれるのは、脫衣の瞬間に固定するわけで、これが女に陰莖があると思つてゐた最後の瞬間をなすものだからであらう。余は、いつでもその嗜好節片の決定事情が確實にはつきりわかると主張するものではない。しかし、フェティシスムスの硏究こそは非常に熱心にすすめたく思ふものである。殊に去勢複合の存在を疑つたり、或は、女性の陰部に對する驚きが他の理由より來る、例へば出產外傷の記憶の假定などから來ると考へたりする人々に對しては、特にすすめたいと思ふ。余自身にとつても、嗜好節片の說明は尙他の理論的の興味が多分にある。

余は此の頃、純粹に思索的に次の如き命題を發見した。卽ち神經症 Neurose と精神症 Psychose との間の本質的の區別は、前者に於ては自我が現實に適應するためにエスの一部を抑壓するに拘らず、精神症では自我は現實の或る部分から逃れるために、エスから分離して了ふのである

事に存すると言ふのである。余は後にもう一度此の同じ主題について省みたことがある。[*] 然しその後間もなく、余は餘り言ひ過ぎたことを後悔するに至つた。二人の若い男子の分析から、余はこの二人の者が共にその愛する父親の死を、一人は二年後に於て、一人は十年後に於ても尙その事實を認めようとしなかつた、卽ち部分視してゐた skotomisiert のを知つた。而もこの二人共何等精神症となつては來なかつたことを知つたのである。其處で此の場合に於ても現實の確かに重要なる一部が自我に依つて否定されてゐること、恰もフェティシスムスに陷つた人が女性は去勢されてゐるとの不愉快なる事實を否定してゐると同樣なのである。余は亦これに類似した出來事が、小兒の生活中にも決して稀ではないことを考へてゐるものである。余は亦同樣に神經症や精神症の特性のうちにもこれに似た誤謬があるのではないかと考へる。然し其處に敎訓が存するのかも知らぬ。余のあげた法則は小兒ではなく、より高い程度に心理裝置の分化してゐるものに於て先づ證明して見なくてはならぬ。小兒には許されても成人には嚴格な危害となつて罰せられる事柄もあるに違ひない。斯くて更に研究を進めることに依つて此の矛盾については他の解決が得られたのである。

＊『神經症及び精神症』一九二四年、竝に『神經症及び精神症に於ける現實喪失について』一九二四年參照。

此の二人の若い男子は、父親の死を部分視してゐること、恰もフェティシスムスに陷つたものが、女性の去勢されてゐることを部分視してゐるのと同樣であるとは旣に述べたところである。ところが、父の死を認めようとしないのは、唯彼等の精神生活のうちの一つの流れのみであつて、彼等は他の流れをも有してゐて、これは父親の死と言ふ事實を完全に知つてゐるのである。卽ち願望に忠實なる傾向と、現實に忠實なる傾向とが同時に竝び存してゐるのである。この二例のうちの一例にあつては、此の傾向の分離が、彼の中等度の强さのある强迫神經症の原因をなしてゐた。生活の總ての場合に於て彼を二つの假定の中に迷うてゐるのであつた。その一つは父親はまだ生きてゐて、從つて彼の行爲にはまだ制限があるとの考へと、これと全く反對の、父親はもはや死んでゐるから彼はその後繼者として總ての權利を所有してゐるとの考へとの間に板挾みとなつてゐるのであつた。このことから考へて見て、精神症者の場合に、現實に忠實なる方の流れだけが全く失はれて了つてゐるのではないかと考へてゐたことが確かめられたのである。

さて余はもう一度フェティシスムスの記載に戻つてみよう。余はフェティシスムスに陷つてゐる人は、女性が去勢せられてゐるとの問題に對して、二つに分離した考へを有してゐると斷定したいのである。精巧なる例について見るに、嗜好節片の成立が、女性の去勢を一方に於て否定し、一方に於て肯定してゐる事から出て來てゐるものがある。例へば或る男は女の用ひる腰帶Schamgürtel を嗜好節片としてゐたが、この男はこれを自分で男の猿股のやうに穿いてゐた。卽ち此のやうな包裝具は一般に陰部を蔽ふものであると同時に陰部の相違をも匿して了ふものである。分析の證するところによるとこれは女性は去勢せられてゐると言ふことと、同時に女性は去勢されて居らぬと言ふことをも意味してゐたのであつたが、これを更に押し擴げて男性の去勢と言ふ假定をも附け加へてゐた。何故なれば、總てこれ等の事の何れが可能なるかはこの腰帶の陰ですつかり匿されて了ふからである。而もこの腰帶についての小兒時代の最初の代理は、彫像の陰部を匿してゐる無花果の葉であつたのである。斯くの如く互ひに相反するものが、二重に結合して出來たフェティシスムスは、勿論特別の場合である。このやうにうまく行つてゐない場合では、二つに分離してゐることは、嗜好節片症者がその節片嗜好に對して爲す事を見ればわかる

――或は實際になすところを見てもよし、或は空想上に爲すところを見てもよい。先づ彼等には嗜好節片を尊重することを擧げられるが、これのみでは盡くされない。多くの例に於てフェティシスムスに陷つた人は、その嗜好節片を取扱ふに當つて、明らかに去勢に對する彼の考へ方を以て取り扱つてゐる。故に父親との同一視が强く出來てゐる場合には、彼は父親としての態度で嗜好節片を取り扱ふ。何故ならば子供は女性を去勢するものは父親であると考へてゐるから。この嗜好節片を、情愛を持つて取り扱ふか或は敵意を持つて取り扱ふかで去勢を否定してゐるのか認めてゐるのかがわかる。ただ多くの場合ではこの兩者が不同な程度で混在してゐる。だから或る時はその一つが明らかに出て來るし、或る時は他のものが明らかに出てくる。此の理由から、時代は甚だ遠ざかつてはゐるが、丁髷切り Zopfabschneider の作法が昔あつたと言ふ事は、去勢されてゐないと考へてゐるものが却つて去勢を遂行する必要が生じて來たものとして理解することが出來る。丁髷切りの所作には二つの互ひに相容れない主張が合一してゐる。卽ち女性には陰莖がある。そして父親が女性を去勢すると言ふ二つの主張である。この變異したものであるが、やはり民族心理學上フェティシスムスに併行してゐるものが、支那の風俗のうちに見ることが出來

ると考へられる。卽ち支那では女の足を纒足にすると言ふことである。而もこの纒足せられた足が、嗜好節片として一般に尊重されると言ふ點である。これは支那の男性は、このことについて女性が去勢に服從したと考へて女性に感謝する事に當ると考へることが出來ようではないか。

さて、要するに次の如く結論してよいであらう。嗜好節片の正常典型は男性の陰莖である。勿論同樣に、これより劣つた器官の正常典型は實際に小なる陰莖、卽ち女性の陰核である。

或る小兒神經症の病歷から

「或る小兒神經症の病歷から」は一九一八年フロイド著「神經症小論集」第四集の中に發表せられた。（フーゴー・ヘルレル書店、ライプチヒ及びウヰーン）後其の集の第二版からは取り去られ（一九二二年、國際精神分析出版社、ライプチヒ、ウヰーン及びチューリヒ）そして「全集」第五卷に入れられた。——後一九二四年同出版社から、これだけで單行本としても出版せられてゐる。

第一、前　書　き

此處に記述しようとする病歷は——やはり斷片的ではあるが——確かに力說して描き出していいやうな數多くの特徵を具へてゐるものである。＊これは一人の青年の病歷である。彼は十八歲の時、淋病に感染したる後、初めて此處に言ふ如き病氣となり、數年後精神分析的治療を受け始める迄、全く依賴的 abhängig となり、全く自分だけでは生存不能的 existenzunfähig になつてゐたのである。此の青年の病氣にかかつた時點より前の十年は、殆ど正常の狀態で生長し來り、彼の中學時代もさしたる障礙なく過して來た。然るに彼の極く幼い頃には重い神經症的の障礙があつたもので、これは彼の第四回目の誕生日の直ぐ前に、恐怖性ヒステリイ症（動物恐怖症）として始まり、やがて宗教的内容を有する强迫神經症に變り、この萠芽が彼の十年代に迄持ち越して來てゐるのである。

＊此の病歷は一九一四年より一九一五年にかけての冬期に於ける治療の終結直後に、當時の新しい印象

に從つて、ユングやアドラーが精神分析年鑑に提出してゐたものを改めるつもりで執筆せられたものである。だから此の病歷は一九一四年の、精神分析年鑑第四卷に發表せれられた論文「精神分析運動の歷史について」（本全集第七卷に集錄）に關係してゐる。だから同時に其の時述べてある、本來は個人的なる論難を、分析的材料の客觀的評價に依つて今補ふ事になる。本來はその次の號のために用意せられてゐたものであつたが、然しその發表が世界大戰による故障のために殆ど期限なく延期せられたので、遂に余は新しい出版者から出される論集に添へることに決心したのである。此のうちに初めて言ひ出されてゐることとの大部分は、一九一六年から一九一七年にかけて行つた「精神分析入門」のうちに取り扱はれてゐるものである。初稿の本文には重要なる事柄については何等の變化も加へられてゐない。從つて後で加へた附加のところは括孤を附し、且一字下げてわかるやうにしてある。

此處では、唯此の小兒期神經症のみが、余の報告の對象となつてゐる。患者の要求があつたに拘らず、彼の疾患及び治療經過等の完全なる歷史を描くことは余は好ましく思はぬ。何故ならば、それは、手法的にも遂行され難いことだし、又社會的にも許容され難い點があるからである事がわかつてゐるからである。依つて彼の小兒期疾患と、後年の決定的なる疾患との間の關係を明ら

かにする可能性は捨て去つた。此の後年の疾患については、此の患者はかなり永い間獨逸の或るサナトリゥムに入つてゐた事、その時は躁鬱病 manisch-depressives Irresein だと言はれて居つたことを附記して置くに止める。此の診斷は、彼の父に對してこそ亦確かにあてはまるものであつた。卽ち彼の父はその波瀾に富んだ生涯の活動や興味を、繰返し生じた、重い抑鬱狀態の發作のために臺なしにして了つてゐたのである。此の子供自らについては、余は數年間の觀察をなしたが、氣分變換があることは觀察することは出來なかつた。それは發作の生ずる時の强さや條件が、明らかに精神的狀況に關係してゐることに依るものだからであると思はれる。其處で余は次の如く解釋してゐる。卽ち此の例は、精神病學臨床上の診斷としては、甚だ多くの、又各〻異つた病名が與へられるやうな種類のもので、一時的に急に經過した後の結果として、缺陷を殘して治癒した强迫神經症として考ふ可きものであると。

故に此處に記すのは、唯小兒神經症に關するのみで、啻にその神經症の存在する間についてのみならず、經過して了つた後をも入れて、とにかく十五歲迄を分析したものである。此の敍述の仕方は、成程缺點もあるが他の仕方と比べて見て甚だ勝つた點もある。神經症的の子供のみにつ

いて行つた分析なるものは、由來信賴し得可きものに見えるが、その內容が餘り豐富であると言ふわけにはゆかぬのが常である。何故ならば子供から多くの言葉と思想とを取り來らねばならぬに拘らず、子供では、多くはその最も深いところは、まだ意識に見出すのに困難であるからである。小兒の病氣に於ける分析も、もう大人となつて了つてゐる且精神的にも成熟してゐる人から思ひ出を媒介としてなす場合には、この如き制限は無い。然しこの場合には亦、凡そ後年に至つて過去を顧る場合に付きものである、歪みや、人工的の調製を計算に入れてかからねばならぬ。第一の場合、即ち子供を直接に分析する場合は、恐らくより確信の出來る結果が出來るであらうし、第二の場合は、更にはるかに教訓深いものが出來るであらう。

然しいづれにしても、小兒神經症の分析は、特別の高い理論的興味を主張し得ることは認めねばならぬ。それは子供の夢が大人の夢の硏究に役立つと同じやうに、成人の神經症に對する正しい理解の手助けとなるからである。子供の分析はその要素が少いから洞察するのに容易であるなどと言ふことは決してない。寧ろ小兒の精神生活への移入 Einfühlung は、醫師にとつて特別にむづかしい部門に屬すると言はねばならぬ。しかし、そのうちには、後に集積して、遂に神經

症の本態をわからなくせしめるやうなものはまだない。精神分析學に向つての現在の如き闘爭の時代においては精神分析の得た結果に對する反抗は、更に一の新しい形式をとつて現れて來てゐる。以前は分析に依つて主張せられた事實に對して、それは眞實ではないと駁撃することを以て人は滿足してゐたものだ。このためには再試をしないのが最良の手法であるにきまつてゐるが、この如き態度は、永い中には漸次に無駄になつて了つた。だから、人は他の方法を持つて來なくてはならぬ。事實は認めねばならぬ。その事から導き出して來る結果は、その解釋が誤つたものとして取り除かねばならぬと言ふやうになつた。斯くして一時でも、迫り來る新發見を防いでゐなければならぬことになつた。ところが小兒神經症の研究は、此の如き淺薄な、或は力づくの方法、即ち解釋を誤りだとなす方法では反抗するのにも全く不十分であることを示して了つた。これは今や、神經症の形成が、リビド的本能力から來ると言ふことを否定したがつてゐる人々に對して、それが如何に優勢を占めてゐるかと言ふことを示して了つた。倘、これを承認する者すらもそれは遠くに目的を有する文化的の目的努力のために來るのであると說明してゐたのだが、子供はこんなものは何も知つてゐる筈もなく、從つて子供に對してはこれは無意味であるところか

ら、それを否定せねばならぬことをも示したのである。

此處に報告する分析例が、注目に値する更に他の特徴は、病症の重さに關係してゐる。又その治療の經過の永いことにあつた。凡そ短い時間で、うまい結果になつて來た分析例は、治療者の自己感情としては價値も多いし、精神分析の醫術的の意味もまた多いわけである。然しかかるものは科學的知識の進歩に對しては大して意義がないであらう。かかるものからは何等の新しいものも學ぶ事はない。かかるものは既にその解明に對して人は總てのものを知悉してゐるから極く迅速にうまく行つたと言ふだけのことである。新しい事柄は、甚だしく困難であつた、そしてその解決の爲には永い間を要したやうな分析例からしか得られない。斯くの如き例に於てのみ人は初めて精神發育の最も深い、最も始原的な層にまで下りゆくことが出來る。そして其處で、後の發育の形態に對する問題の解釋を酌みとることが出來る。斯くて人は初めて、嚴格な意味に於ける、分析と言ふ名に値する探求をなしたと言ひ得るのである。勿論ただ一例で、知らんと欲してゐたことが全部わかると言ふやうなものではない。正しく言へば、總てを理解し、自己の認識の不慣れによつて强制されることなく、僅かをでも知れば滿足であることが出來る場合に於て初

めて總てを學ぶことが出來るのである。

その果實はまことに豐富ではあるが、その研究の極めて困難なる例は、此處に記す病例に越すものはないであらう。治療の最初の一年は何等の効果もあげ得なかつた。唯幸福であつた事情は、それにも拘らず總ての外部の條件が、治療研究をつづけるのに可能であつた點にある。余は思ふに、もう少し事情がよくなかつたら、恐らく治療研究は僅かの研究の後に止めて了はなくてはならなかつたであらう。醫師の立場としては唯々次の如く言ひ得るばかりである。即ち醫師は此の如き例では、若しも何かを經驗し、何かを得度いのであつたならば、殆ど無意識と同樣に、「時間を超越」しなくては出來ない事である。斯くの如きことは彼が、短時間に治療に成功しようなどと言ふ野心を捨て去つて初めて出來ることである。忍耐、從順、洞察、同情の大量が、患者及びその家族周圍の者にも無くてはならなかつた事は、多くの例にも稀に見るところであらう。然し分析者としては次の如く言ふことが出來る。卽ち、一つの例に斯くも永く研究して得來つた業蹟は、第二の同樣な重い病例に遭遇した時に、その治療期間を必ず短縮することが出來るし、且第一の場合にははまり込んだが、次の場合には無意識の超時間性をも打ち勝つことが出來ると

言ふ點に非常なる助けがあると。

此處に研究をなした患者は、永い間意氣地なき狀態、卽ち不管症 Teilnahmslosigkeit に罹り、全く自分を外界から離して了つてゐたのであつた。彼は聞く。理解もする。然し何事にも我不關焉なのである。彼の叡智は少しも障礙がない。然し總ての本能力とは全く切り離されて了つてゐる。そして僅かに殘つてゐる此の本能の如き力が彼の生活に對する關係を支配してゐるばかりである。彼を動かすために、或は自分の受持ちの仕事をなさしめるためには、永い敎育が必要であつた、而もその骨折りの結果として第一回目の治癒が來て、直ちに彼は仕事についた。これは、もう此の上の變化が來ないやうにする爲、且このよくなつた狀況に永く保留したい爲であつた。自分の存在そのものが彼には如何に羞恥に感じられてゐたかは、それが病氣の總ての苦惱を償つて餘りあつた點からよくわかる。だから彼はこの病氣になると言ふことが、それに打ち勝つ唯一無二の道であると思うてゐるのであつた。余は先づ此の患者が余の人格に對して強く結合して來て、その考へと平衡を保つに至る迄待つてゐねばならなかつた。斯くして後、余はこれを他の因子に對する一因子として用ひた。余は思ふのに、治療を或る一定の期限までひと先づ終らしめよ

うと定めたがそれは時宜に適してゐた筈だと思ふ。更にこれを續けたとしても同様の結果しか得なかつたであらうと考へられる。だから此の期限を嚴守しようと余は決心してゐた。そして患者は遂に余の嚴格なるを信ずるに至つた。此の期限を附することの甚だしい壓力は、然し彼の反抗を買ひ、彼の病氣への固着を癖しはしたが、この分析は比較にならぬほど迅速に、その制止の解消、その症狀の消失を可能ならしめる材料を得しめた。この如き反抗が一時消失した最後の時期に於ては、患者は然らされれば達することの無かつた、眠り Hypnose にもなりゆくやうな清明さ Luzidität に到達し、このことから余は小兒神經症なるものの理解が出來るやうな發見を得ることが出來た。

依つて、此の治療經過は正に精神分析的手法について旣に永き前より高唱されて來つた法則、卽ち患者と共に辿らねばならぬ道は長い、そして打ち勝たねばならぬ材料はこの道の上に充ちてゐる。然しこれ等は、その仕事の間に遭遇する抵抗に對して比較すると問題にならぬほどであるが、この抵抗とは必ず比例するものであることが確かであるとの法則をよく說明してゐるものである。更にこれ等の經過は、恰も敵軍隊は數週間、數月間、僅かの土地を通るにもかかるが、平

和の時には數時間の急行列車で通ることが出來、或は自國の軍隊ならば永くとも數日で通ることが出來るのに比す可きでもあらう。

更に此處に描く分析例の第三の特徴は、あとになるに從つて、總てを語る決心が漸次に困難となつて來たことである。此處に得た結果は、吾人の既に持つてゐた知識で、多くは滿足に綜合することが出來、且接續を見出すことが出來た。然し、多くの個々の問題に對しては、余自身にも注目に値し、且中々信じ難く見えたものがある。卽ち余は、この例を信ずるためには他の例のうちにも同樣なものを見出さねばならぬと考へたほどである。余は患者に、その思ひ出に對しては嚴格過るほどの批判を加へよと要求した、然し彼は彼の言うたことには少しも僞りを含んだものはなく、全く確かであると主張した。故に讀者諸君もこれは余とは全く獨立した經驗、余によつて少しも影響せられざる、むしろ余の豫期と全く相反するところあるものを、余自身が報告してゐると言ふことを少くとも信じて可なりと思ふ。だから余は、天と地との間には、余等の机上の學の夢にも知らぬことが澤山あると言ふ、あの賢い語を思ひ出すしかない。而も尙彼の持つてゐる確信なるものは更に一層檢討せねばならぬことを理解する人は、匿されたものについて尙一層の

發見をなす人たるに違ひないのである。

第二、環境と病歴の管見

此の患者の生ひ立ちを純粹に歴史的に記すのでは、又實際に必要な部分だけを記すのではいけない。同様に治療經過をのみ記すとか、病歴をのみ記すのであつてもならぬ。この記述を互ひに組合はして見ることが最も必要であると考へる。實際分析によつて結果し來つた確信を、そのまま再現したところが、それは何等順序立つたものではない。分析中に取つた經過、苦勞してプロトコルに記載したものを、そのまま出したのでは確かに何の役にも立たない。何故ならば、治療の手法の記載なぞは全く除外す可きものだからである。實際斯くの如き分析例は誰も發表しようとはしないものである。これは亦今まで全く缺けてゐたもの、信じ得可からざる様なもので、これを信ぜしめることはむづかしいと考へられる。何故ならば人は、研究者に對して何か新しいものを期待してゐるくせに、同時に患者のうちに、何か自分の體驗から既に確信してゐるものの存在することを要求するものだからである。

だから余は、先づ子供の世界を描出し、此の患者の場合にその小兒歴から、努力なしで經驗したものと、それから後年に至る迄完全に且透徹して經驗することがむづかしかつたものを分けて記すことから始めよう。

兩親は若くして結婚してゐる。結婚生活はまづ幸福であつた。二人が病氣をしたことに依つて初めて影がさした。母は下腹部の疾患にかかり、父は抑鬱發作 Verstimmungsanfälle に罹つた。共に此の子供が家から留守をしてゐた間に起つたものだから、父の病氣は、從つて隨分遲くなつてから知つた。然し母の病氣らしい狀態は、つい早期の小兒期から知つてゐたのである。母親は病氣について此の子供には殆ど話すことが少かつた。或る日、たしかに四歳より前のことであるが、此の子供は、母親に手を引かれて、母と共に醫者を家の外に見送つて出ながら母が醫者に愽りに訴へてゐるのを聽いた。而もその同じ言葉を、後に至つて自分自身のために用ひねばならなくなつた事が深く心の中に銘記されてゐる。この子は一人子ではなく、二歳上の姉娘があつた。この姉娘は快活で、才能があり、然し、早く不良となり、此の子供の生涯に對して非常に大きな影響を及ぼしてゐるのである。

保姆が彼を育てた。思ひ出し得る限りでは、この女は教育のない、老いた田舍女で、彼に對しては飽く迄も優しかつた。この老いた女に對して、この女の息子で、幼年で死んだ子供の代理に彼自身がなつてゐたわけである。子供の家族は田舍の領地で生活し、夏には轉地をした。この兩地から遠からぬところに都會があつた。彼のまだ子供の折に、兩親は此等の領地を賣つて、都會に引き移つた。近い親戚例へば、伯父伯母達、叔父叔母達、及びそれ等の子供、母方の祖父母等が此等の兩地に、永い間滯留するやうな事もあつた。夏には、一二週間に亙つて兩親が旅をした。あとで假托記憶 Deckerinnerung として思ひ出したところに依ると、彼は保姆と共に父や母や姉達の乘つてゐる旅立ちの馬車の中を覗いたこと、そして泣きもせずに家に歸つたことなどがある。恐らく此の如き時に彼は可なり幼かつたに違ひない。その翌年の夏は姉も家に殘された。*そして英國女の家庭教師が雇はれて、これが子供等の監督となつたのである。

* 滿二歲六箇月位の年齡、殆ど此等の時期全部が、あとで確かめられてゐる。

後年に至つて、彼は自分の幼年期のことについて人から話をきいてゐる。*話に聞いたことは、殆ど全部、彼も亦知つてゐる事であつた。然し勿論時間的の、或は內容上の關係は知つてゐなか

つた。此等の口供のうちの一つで、後年の彼の罹患の機緣となつたものとして、繰りかへし彼の前に語られたものが、我々に是非共よく論じなければならぬ問題を與へる。彼は最初は、甚だおとなしい、溫順な、寧ろ靜かな子供であつたに違ひないことは、人々が、彼はほんたうは女に生れる筈の子で、彼の姉さんこそ男の子だと言ふのを常とした事でもわかる。ところが、或る年、兩親が旅から歸つて來て見ると、彼が全く變化してゐるのを發見した。彼は不平を言ふ、刺戟に應じ易い、强情な子供になつて了つてゐるのを發見した。總てのことを問題にし、騷ぎ狂ひ、野蠻人のやうに泣き叫ぶのであつた。故に兩親はこの狀態の續いてゐる間は甚だしく憂慮してゐて、彼を學校にやることも出來ないかも知れぬと言うてゐた程であつた。これは、英國人の女家庭敎師の居つた或る夏のことであつた。彼は全く馬鹿な、なんにでもつつかかつてゆく、醉ひどれのやうな樣を見せてたことがある。だから母親は、此の子供の性格の變化したのは、この英國女のせいではないであらうか。此の女の子供の取扱ひ方が子供を刺戟したのではないかと考へた程であつた。烱眼なる祖母は、この子供と一と夏別れてゐたのであるが、此の子供の過敏になつたのは、英國女と保姆との間の不和がその原因となつてゐるものに違ひないとの意見を出した。

此の英國女は保姆のことを鬼婆出てゆけと何度も呼んだ。その時、この子供は勿論、彼の愛する「ナーニヤ」(保姆)の肩を持つて、家庭教師を憎んだ。斯くの如くであつたから、此の英國女は、兩親が歸つて來てから直ぐに解雇された。然し此の子供の我儘は少しも癒らぬのであつた。

＊此のやうな打ち開け話は、多くは拘束されぬ點について、信ずべき材料として利用することが出來るものである。だから、患者の記憶の缺けてゐるところは、昔の家族の者からの話しに依つて、困難なく補足する事が出來たと考へられる。唯余自身は、此の如きやり方で十分よくわかるものと決定するわけにはゆかぬ。親族のものが、或は質問に對して、或は聞き出しに對して答へたものは、勿論考へ得可き批評的の考察を加へてある。唯此の如き供述に賴らねばならぬのは殘念であるが、然しこれは分析に對する信用の程度が少く、かつ更にもう一つの檢閲が分析の上に置かれることになる。とも角も思ひ出されるものは、分析をすすめてゆくうちにだんだん姿を現して來る。

此の最惡な時代の記憶は此の患者にはよく殘つてゐる。彼がなした最初の暴行は、彼自ら思ふのに、耶蘇降誕祭であつた。降誕祭は同時に彼の誕生日でもあつたので、彼は二重にお祝ひ物を貰ふ可きであると考へてゐたのに、それが無かつた時であつた。彼は、その權利を主張し、その

充されざるを感じ、愛するナーニャをすらも許さず、恐らく非常に苛酷に保姆をいぢめたことであつたらう。然し、此の性格變化の時代は、彼の記憶のうちで、時代の前後のはつきりわからぬ他の特異なる病的なる現象としつかり結びついてゐる。彼は上に述べたやうなことと、同時には有り得可からず、內容的に考へても互ひに矛盾の存在するやうな事など總てを、この同じ時代に歸してゐる。この時代を彼自ら「これも最初の領地で起つたこと」としてゐる。彼の信ずるところに從へば、五歲の時にこの最初の領地を引き移つたのである。尙彼は、彼の姉は彼を苛めて樂しむのであると言ふ恐怖に惱まされたこともあると述べてゐる。或る繪本があつた。この繪本には一匹の狼が直立して四方を睥睨してゐる圖が描かれてあつた。此の繪を見ると彼は火のつくやうに泣き出すのを常とした。彼は狼がやつて來て、彼を喰つて了ふことを恐れたのである。彼の姉さんはこのことを知つてゐて、いつもどうしても彼がこの繪を見ねばならぬやうにしむけて來て、彼が驚いて泣くのを見て喜んでゐた。此の狼ばかりでなく、同時に他の大きい動物や小さい動物をも恐れた、或る日彼は美しい羽の端に黃紋のある大きい蝶を追ひかけて、これを捕へようとした。（これは「あげは蝶」であつたに違ひない。）追ひかけてゐるうちに、突如として、此の

動物に對して恐怖を感じて、追ひかけるのを止めて泣き出した。甲蟲や、毛蟲に對しても、彼は恐怖と憎惡とを感じた。然し、尙彼は此の時代に、甲蟲を苛めたり、毛蟲を捩斷つたりしたことも記憶してゐる。馬も亦、彼には親しみを感ずることの出來ぬ動物であつた。馬が鞭で打たれるのを見て泣き出し、そのために或る時などはサーカスを見てゐたが見るのをやめて出て了はねば承知しなかつた。ところが或る時は却つて彼自身馬を鞭打つことに興味を持つた。此のやうな、動物に對する全く反對な仕打ちが、實際に同時に爲なくては居られぬのであつたか。或はこれ等は交々起つてゐたのか、更に又、これがどうなつたか、一體いつ頃の事であるか彼の記憶からだけでは知ることは出來ないが、とも角もこの二つの反對行爲が切り離すことが出來なくなつてゐたのであつた。この不愉快な時代が遂に病症となつて來たものであるか、或はずつとそのままでゐたのか、彼には確言することは出來ない。唯これにつづく事情を聞いて見て、彼は確かに、子供の時代に、立派な强迫神經症とわかるやうな病症に罹つてゐたと言ふことを假定し得るのみである。彼の述ぶるところによれば、彼はずつと非常に敬神的であつた。寢につく前に、彼は永い時間祈りをしなくてはゐられなかつた。そして限りもなく、十字を切らねばゐられなかつた。ま

た、夕刻椅子の上に上つて聖像に接吻をするのだが、これもその部屋のうちに架けてある總ての聖像の前に一々椅子を持つて行つて、敬虔な接吻を一々して廻らなければ承知が出來なかつた。此の敬神的儀式があつたと言ふことは、別に恰も惡魔からの入智慧の如き神聖冒瀆の思想も思ひ出のうちに在ることと一見甚だしく一致しない如くに見える。――然し、これが恐らく或は甚だよく一致してゐるとも言へるであらう。彼はいつも聯想した。Gott――Schwein 神――豚と。或は Gott――Kot 神――糞と聯想した。嘗て或る時、獨逸國の温泉場で、馬糞の塊が三つあるのを見たとき、或は他の糞が街に横はつてゐるのを見た時、どうしても聖三位一體のことを思ひ出すと言ふ强迫に惱まされたことがあつた。此の時代に、彼に同情を起さしめる乞食だの、不具者だの、老人だのを見ると、やはり特異な儀式を遵奉せねばならなかつた。即ち彼は、此の如き人々のやうにならぬやう、息を嚮くつめて、これ等の者が通り過ぎてから、荒く吐き出さねばならぬ。或は亦他の場合には、非常に强く息を吸ひ込まねばならなかつたと言ふのである。余はこれについて次の如く假定してよいと考へる。即ち此のやうな稍長じてからの明瞭な神經症的症狀としては、動物に對する恐怖の表れと、動物に對する殘酷なる取扱ひとの二つのものが同時にあ

つたと。

此の患者の成長してからの年代には、父親との關係が甚だ不和であつたが、その時代に父親には抑鬱狀態 Depression の發作が、起つたためで、これで彼の性格に病的の一面のあることは匿すことが出來ぬ。しかし、小兒時代の初めには、此の父親との關係は甚だ情愛的であつたことは、此の子供の思ひ出にもよく現れてゐるところである。父親は彼を甚だ愛し、喜んで彼と遊んだ。彼は小さい時から、父親に關しては誇りを感じてゐたもので父親のやうな紳士になるといつも言うてゐた。ナーニャは、姉さんはお母さんの子ですが、あなたはお父さんの子ですよとよく彼に言うたものだが、その度毎に彼は滿足を感ずるのであつた。ところが小兒時代の終りに、彼と彼の父親との背反がやつて來た。父親は明らかに彼の姉の方を餘計好いた。そして彼はこのことについて惱んだ。斯くて遂に父親に對する恐怖が順次に力を占めて來たのである。

八歳の頃に至つて、患者の所謂不愉快を以つて始まつたと言ふ時代に歸す可き總ての現象は少しく消失した。但し此等のものは一時に消失して了つたのではない。何回か歸つて來たが、やがて遂に消失し去つたのである。彼はこのことは、女性の補育者に代へるに、男教師や男の補育人

を以てしたことの影響であると信じてゐた。さて分析に依つて解決せんとする謎の極く大略の輪廓を示して見ると次の如き事項となる。即ち此の小兒の性格變化は何處から來たのであらうか。又彼の恐怖症や、彼の倒錯は何を意味すのであらうか。如何にして彼に强迫的の敬神が來たのであらうか。亦此等の現象間にはどんな關係がお互ひに存するのであらうか。余は此處に附け加へて置かねばならぬ。即ち第一に、後年に至つて即ち最近に至つて此の患者に出て來た神經症的疾患に對する治療的の努力は確かに有効であつた事、第二には此の如き初期の問題に對する解明は唯分析の經過が現在の時代を分析するだけではうまくゆかなくなつて、小兒時代の初期への廻り道が必ず必要とせられるに違ひないが、その時まで保留して置かねばならぬと言ふことである。

第三、誘惑及びその結果

最も近い疑ひは言ふ迄もなく、英國女の家庭教師に向けられねばならぬ。此の家庭教師の居つた間に、子供の變化が現れて來たのであるから。ところが此處には二つの、それ自身としては理解し難い假托記憶 Deckerinnerung があるが、確かにこれ等の二つはその家庭教師の女に關係があるものである。彼女は嘗て外出した時に、從ひ來る子供に言つたことがある。私のおちんちをのぞいてごらん！ と。又或る時は、車に乘つてゐた時わざと帽子を飛ばして了つて、二人の兄弟のものを笑はせた事があつた。この事はどうも去勢複合 Kastrationskomplex を意味するものと考へねばならぬ。又これは彼女から子供に向けられた去勢脅迫が、子供の異常な態度の發生に對して與つて力あるものであるこの構想を許すものと考へねばならぬ。斯くのごとき構想は、被分析者に話すことも何等危險なことではない。この如きものは分析を少しも傷つけない。若しもこれが誤りであつたとしても大丈夫である。然し多くは、それに依つて何か眞實に近づく見込

みのない場合には言ひ出されぬのが常である。この主張の第二の證據は、夢が現れて來たことである。その夢の意味は完全にはわからぬが、然し常に同じ内容を持つて現れて來た。兎に角これは、理解し得る限りでは、その子供の姉や家庭敎師に對する攻擊的の行爲、脅力的な譴責又は懲戒とも言ふ可きものに關係したものであつたと考へられる。例へば、彼は風呂のあとで、姉娘の衣物をまくらうとした、或はもぎ取らうとした、或はこれに類することをなしたと言ふ夢であつた。然しこれは夢判斷に依つても、正確な内容を知ることは出來なかつた。唯此等の夢は、同じ素材が常にその都度變化して現れて來たものであると言ふ印象を受けたのであるから、今與へられた追憶についての見解は確かであると考へられる。然しこれは唯、夢を見たこの本人が、いつか一度、恐らくはその思春期の年代に於て、自分の小兒時代を材料として空想をしたことがあり、そしてこの空想が、今にいたつて甚だ見分け難い形で再び浮び上つて來たのであるかもしれぬ。

此の事についての理解は、患者が、突如として次の如き事實に思ひ到つた時に、電光の如くわかつて來た。即ち姉娘は彼を「彼がまだほんの幼兒で、なほ第一の領地に居つた頃」性的の行動

で誘惑せんとした事があると言ふことである。最初に次のやうな思ひ出から出て來た。卽ち子供等はよく一緒に便所に入つたりするものであるが、彼女は便所で、彼を挑發した。××××××しようぢやないか、と言ひ且これを實行した。この後更に思ひ出が浮んで來て、眞に誘惑と稱す可き程度のものが、時や所の詳しい點まで思ひ出された。それは春の初めであつた。父親の留守であつた時、子供等は或る部屋の床の上で遊んでゐた。この隣の部屋には母親が働いてゐた。姉は彼の×××××これを弄んだ。そして、その辯解でもある如くナーニャに關して何か彼の理解出來ないやうなことを言つた。ナーニャはかう言ふことを誰とでもするのよ、例へば庭師とするのよ。そして×××して、その××を握るのよと話した。

此處で、以前から推量せられてゐた空想の理解が與へられた。その空想は、後に患者の男性的の自己感情に衝突して消失した一つの過程についての思ひ出であるに違ひない。そしてこの空想は歴史的の眞實の代りに願望反對物 Wunschgegensatz を置きかへてはじめてその空想目的を達したのである。此のやうな空想のあつたことを見れば、彼は姉に對して受動的役目のみを取つてゐなかつたもので、寧ろその反對に、彼は攻擊的であり、姉を裸かにして見ようと望んだことも

あつたに違ひないが、いつも拒否せられ、叱責せられ、そしてそのために怒つたものであらう。このことはこの家系のもつ傳說にも澤山ある。女家庭敎師も亦この作爲の中に織り交ぜられてゐることは、誠に合目的なことであつた。嘗て彼女が、母親と祖母とから此の子供の怒りの發作のための主なる責任を負はされたのもそのためである。此の如き空想は、故に、正しく後には强くそして誇らかになつた一民族が、その發祥時の、小なる或は不幸なることを蔽ひ隱さうと試みて作る傳說形成 Sagenbildung に相當してゐるものである。

實際はこの女家庭敎師は、彼に對する誘惑行爲、及びその結果に對しては殆ど關係がないとせねばならぬ。彼の姉娘との情景は、その年の年初に起つたことで、その年の盛夏になつて、この英國女は初めて、當時留守をする兩親の代りに子供を監督するために招かれたのであつた。この子供の、この女家庭敎師に對する敵意が恐らく他の様式として入り來つてゐるものである。彼女は保姆を怒らし、鬼婆などと言うて誹謗した爲に、却つて初めから保姆のことを悉く甚だしく惡く話すのを常とした姉娘の足跡のうちに入り込んで了ひ、且この子供をして、旣に我々の知つた如く、誘惑のために姉娘に向つて發生し來つた拒否をこの女家庭敎師に對しても現して來たもので

あらうと考へられる。

然し、姉娘による誘惑と言ふことは、これは空想ではない。この事の存在を信じ得可きことは後年の、成長してからの、誤らざる追憶によつてよくわかるのである。凡そ十年、或は十年以上も年上の從兄が、成長してから或る時の彼との會話のうちで彼の姉娘が如何に不謹愼な、好色な奴であつたかをよく思ひ出すことが出來ると語つた事がある。彼女は四つか五つの年でありながら、嘗て從兄の膝の上にのりながら、彼のズボンを開いて彼の××を握らうとしたことがあると語つた事がある。

さて此處で、この患者の小兒史を一時中絕して、この姉娘についてその發育、その後の運命、及びこの弟に與へた影響等について敍述の筆を運んで見度いのである。彼女は弟からは二歳の年長であつた。故に常に彼より一歩を先んじてゐた。子供の時代は、男の子の樣に制御し難い子であつた。そして才氣潑剌として、鋭い現實に對する理解を示し、學科のうちでは特に自然科學に秀でてゐる位であつたが、それでも詩歌を作つたりして父親に賞められた事もある位であつた。彼女の數多くの最初の求婚者は、彼女を寧ろ精神的の女と思ひ、且陽氣な女と考へるのが常であ

つた。ところが、二十歳になるや抑鬱發作が起り始めた。そして自分は美しくないと訴へ始め、そして自ら一切の環境から隱退したのである。仲のいい年上の婦人と共に旅に出されたが、歸つてからこの一緒に旅した婦人から辛く取扱はれたとか言ふ全く有り得可からざるやうな事を喋つた。それでありながら、此の苛めたと佯り言ひ觸らす婦人に公然と結びついて離れなかつた。そしてこの旅につづいた第二の旅上に於て、毒を飲んで、家から遠いところで死んで了つた。彼女の疾患は恐らく早發性痴呆症の初期であつたと思はれる。彼女は、この家系に、立派な神經症的遺傳があることを示してゐる一人であるが、それは彼女のみではない。伯父、即ち父方の兄弟は永い年月の變人生活の後に死んだが、この人も亦晩年には强迫神經症の重い徵候を持つてゐたのである。傍系のうちには輕い神經的障礙を持つた人の數は甚だ多いのである。

この姉娘は、現在の我々の患者即ち弟に對しては、その幼年期に於て——誘惑をしたことについては此處では觸れないとして——都合の惡い競爭者であつた。即ち彼女の無遠慮に示された優越さを、兩親がよくほめたりすることは、彼には甚だ眼の上の瘤であつた。彼女の精神能力、彼女の智的能力等について父親が證據だてる尊敬を、彼は特に嫉妬した。それだのに彼は、彼が强

迫神經症になつて以來、特に智的には制止が生じ、彼自身は益〻顧られないで滿足してゐなくてはならぬと言ふことがまた嫉妬の原因となつた。ところが彼の十四歲の年代から以後、姉娘との關係は自然によくなり始めた。兩親に對する同じやうな精神的立場、及び共通な反抗が彼等をして、恰も最も仲のよい同志の如く交際せしめる樣になつて來た。同時に彼の思春期の激しい性的興奮は、姉娘に對して肉體的の接近をも求めるやうな冒險さへなすに至つた。彼女が、斷乎として然し甚だ上手に彼を拒否したものだから、彼は直ちに丁度その時女中として働いてゐた、そして偶然にも姉と同じ名前であつた小さい一人の百姓娘に心を向けることになつた。斯くして彼はその異種性慾的 heterosexuelle の對象選擇に對しては、今や全く定つた道を步み出すことになつたのである。何故ならば、その後屢〻强迫的に多くの少女を戀したのであるが、それ等の總ては必ず、その容姿もその智性も、彼よりははるかに劣るものを必然的に選ぶことになつたのでわかる。卽ち總ての此の若き戀愛對象は、彼を拒否した姉娘の代理人物であるから、姉娘を貶下せしめるやうな傾向、その智的優秀さを無くするやうな傾向を持つてゐなくてはならぬのである。而もこの智的優秀さが、嘗ては彼を甚だしく苦しめたもので、今やこれが彼の對象選擇を決定する

ものとなつて了つたのである。

此の種の意圖は、即ち力への意志であり、個體の斷定本能 Behauptungstrieb から來てゐるものであるとして、アルフレッド・アドラーは人間の性的態度やその他のものはこの本能の下位にあるものであるとなした。余も亦猥りに、此の如き力への意圖、權力意圖の適應を否定しようとするものでもなく、亦肯定しないわけでもないが、彼等が主張する如く爾かく優越的の、爾かく絶對的の役目をなすものであるとは信ずることが出來ぬのである。若しも余が此の患者の分析を終り迄遂行しなかつたならば、或は余は、此の例の觀察をも、余の前の判斷を改めてアドラーの言ふところに變更したかも知れなかつた。ところが、全く豫期もなく、此の分析の終りに於て新しい材料が出て來て、これから考へると此の力への意圖（此の例に於ては貶下傾向 Erniedrigungstendenz）なるものは、ほんの附けたりの意味に於て、或はほんの合理化の意味に於て對象選擇を定めてゐるのみで、眞の、そして深い決定は、余の以前の確信が更に確かめられたに過ぎぬと言ふことになつた。*

* 後節第八節を參照。

姉娘の死の報せがついた時にも、此の患者の言ふところに依ると何等苦痛の感じが無かつた。彼は悲しみの狀を强ひて作つたが、內心では全く冷靜に而も次の如き事を樂しむことが出來た。即ち今や彼は總ての遺產の唯一人の相續者となつたのである。彼は旣に數年前から、彼の近頃の病氣からこのかた特にこの事が彼のために善かつたと思ふやうになつたと言ふのである。然し余は、特に此處で言うて置かねばならぬのは、此の例を余が診斷せんとするに當つて永い間確信がなかつたことであるが、彼が、自分の家族の愛す可き一員が死んだことに對して苦痛がないわけではないが、逆に働いてゐた彼女に對する嫉妬によつて、及び無意識となつてゐた近親相姦的惚れ込みの混在によつて表現が抑制せられて居つたもので、殘つてゐる苦痛の發出に對して、代理があると言ふ事は否定する事が出來ない點である。その一つとして遂に、彼自身にも理解し難い感情表出が現れて來た。姉娘の死後數箇月の後、彼は、自ら姉の死んだ地方に旅行して、その近所にある或る有名な詩人の墓を訪ねた。その詩人はその當時の彼の理想で、彼は墓に向つて萬斛の淚を流すのであつた。このことは、彼には今まで嘗て無かつた事であると言ふのは、此の尊敬す可き詩人は殆ど二世代位も前に死んでゐる人であつたことから考へて、彼はそのために嘆く事

はない筈である。死んだ姉の作つた詩を、嘗て父親が、この偉大なる詩人の詩に比較してほめてゐたことを思ひ出した時に、彼は初めてこの如き反應が彼に起つたのを理解することが出來たのである。更にもう一つの證據、此の詩人に向けられた歸依は見かけのものであることの證據は、彼は物語の中で、ある誤りを犯してゐたところから知ることが出來た。それを此處で提出して見よう。彼は前から繰りかへし述べてゐる。實際は彼の姉は彼自身が射殺したのであつたが、然し、發表するに當つては彼女が毒を飲んだと言はねばならなかつたのであると言ふのである。ところが面白いことにはピストルを用ひた決鬪で殺されてゐるのは此の詩人であつたことである。

さて余は、又弟の方の歷史に戻らねばならぬ。然し、これからあとは、少しの間もつと實際的に描いて見よう。姉娘が、誘惑的に出て來たのはこの子供の年齡がほんの滿三歲三箇月の頃であつた。旣に述べたやうにその年の秋に兩親が旅から歸つて來て全く變り果てた彼を發見したと言ふ、その同じ年の初め頃の事であつた。だから此の變化はその底に彼の性慾活動が眼覺めて來たことと結びつけて考へることが十分出來るのである。

此の子供は姉娘の誘惑に對してどう反應したか。答へは斯うである。いやいや乍ら、然しこの

いやいや乍らは人間について言ふことで、事柄についてではない。姉娘は彼にとつては性慾の對象としては愉快ではない。恐らくは、彼の彼女に對する關係は、兩親の愛を競爭するものとして敵意すら持つてゐる間柄であつたのだからである。彼は彼女を避けた。そして彼女の誘引も忽ちにして終局を告げた。然し、彼は姉娘の代りに他のもつと可愛い人を得ようと試みた。そして姉娘自身の誘惑が却つてナーニャに向けられ、ナーニャを典型として他の對象に傾いた。彼はナーニャの前で、自分の××をいぢることを始めた。他の子供の例にも、多くあるやうに子供が自慰を匿すことをしなくなるのは子供の爲す誘惑と認む可きである。ところがナーニャは彼を失望せしめた。即ち怖い顏をして見せ、それはよくないことですと說明をきかせるのであつた。斯くして、このことを爲した子供は、その場所に「傷」Wunde を受けたのである。

此の行爲の作用、卽ちこの行爲が同時に脅威をも伴つたことには、尙種々な證據がある。ナーニャに對する彼の傾倒はこのために薄らいだ。恐らく彼は保姆に對して怒つたわけであらう。このことは後に、彼の怒りの發作の時に、彼は眞にこの保姆に對して辛く當つたと言ふことでわかる。唯次の如き事は彼の特徵である。卽ち彼は、いつもそのリビドの位置を出してやらねばなら

ぬ時に、先づ何を置いても新しいものに對して避けようとする點である。例へば女家庭教師が現れ來つて、ナーニャを脅かし、その場所をとつて代らうとしたときにも、ナーニャは彼に脅威を感じさせた者であるに拘らずその愛を信賴し、新しいものを拒否し、攻め來る家庭敎師に對して强情に反抗した。ところがそれにも拘らず、彼は祕密に他の性的對象を求めようとした。卽ち誘惑は却つて彼に受動的目的を持たしめ、陰部に觸つて貰ひ度いと考へさせるやうにさせた。我々は、今や、一體誰によつてこの目的を達しようと望んでゐたのか、又如何なる道によつてこのやうな選擇に到達したかを見て見ようではないか。

これは全く我々の豫期する通りであつた。卽ち彼は最初の性的興奮から直ちに性的事物の穿鑿癖に入り込んだ。そして彼は去勢と言ふ問題に想到してゐる。當時彼は二人の少女、彼の姉とその友達が、おしつこしてゐるところを觀察することが出來た。彼の炯眼は直ちにこの一瞥によつて物事の關聯を了解する事が出來た。彼はこの時、吾人の知つてゐる殆ど總ての男の子供が知る通りを知つた。彼は直ちに、これがナーニャの言ふ通り、おちんちを弄つた爲に切つて取られて出來た傷だなと考へた。そしてこの事によつて、女の子には前の方にもおしりのあると言ふ事の

説明がついたのである。去勢と言ふ問題は、唯單に、この時の決定だけで終つたのではなかつた。彼は聞き込んだ總ての事を基として新しい解釋をも考へついた。或る時子供等に色のついた飴の棒が分配された事があつた。この時汚い空想をする癖のある女家庭教師は說明して、これは切斷された蛇ですよと言うた。このことから彼は嘗て父親と散步に行つた時に蛇に逢うたのを思ひ出し、これを二人でステツキで切斷したことを思ひ出した。彼は嘗て狼が冬魚をとる話を（ライネケ・フツクスのお伽噺）を聞いたことがある。狼は自分の尾を餌の代りにしたところが、尾は氷の中に閉ぢ込められて了つたと言ふのである。又彼は馬の種性の純粹さを區別する色々の名稱をきいた事がある。彼は斯くの如く去勢についての思想に滿たされてゐたが、然しまだそれについて何等の迷信も、何等の恐怖も有してはゐなかつた。他の性慾問題は、この時迄に聞いたお伽噺から得られた。「赤頭布」Rotköppchen だの「七つの小山羊」Sieben Geisslein だのの子供は、狼の腹の中から救ひ出された。だから狼は女性であるか、或は又、男でも子を腹の中に持つ事が出來るのであるか。このことは當時まだわからなかつた。なほ又、此の當時、性の穿鑿時代には彼は狼に對してまだ何の恐怖をも持つてゐなかつた。

患者の打ち開け話の一つから、性格變化の事情に對して何か説明の道を發見することが出來るであらう。即ち事は兩親の留守の間に起つたこと、この時誘惑が彼に與へられたことである。彼の言ふところに從へば、ナーニャが彼の誘惑を拒否し、彼を脅嚇した後、自慰は直ちに止めたと言ふ。このことは、性慾帶の統帥に始まつた性慾生活が、外的制止作用に遭遇して、その影響のために、より早期なる、前性器的統帥編成 prägenitale Organisation へと逆行して了つたのである。自慰を抑壓したために、この子供の性慾生活は、サディスムス的の肛門愛性格に變化した。彼は刺戟感受性が高まり、殘虐となり、同時に人に對しても動物に對しても我儘となつた。先づ彼の第一の對象は愛するナーニャであつた。ナーニャを泣き出す迄苛めるやうになつた。彼は前に拒否されたことに對してナーニャに復讐した。そして同時に彼の性慾的の欲望は、その退行した時期に一致するやうな形式で滿足せられたのである。彼は小動物に對して殘酷なことをするやうになつた。蠅を捕へてその翅をむしつた、甲蟲を踏みつぶした。又その空想では大動物、即ち馬を鞭打つことを愛するやうになつた。これ等總ては、全く能動的サディスムス的の行爲である。當時のこの肛門愛的衝動については、後の關係が重要な問題となる。

此の患者の思ひ出のうちに、同時に全く異る種類の空想があつたと言ふことは注目に値する點である。卽ち子供が叱られること、鞭で打たれること、特に陰莖を打たれることを內容とする空想のあつた事である。ところが、一體誰がこの名も知れぬ對象に依つて鞭打たれる兒となるのであるかと言ふ事は、容易に他の空想から察知する事が出來る。王位繼承者たる王子が、如何にせまい部屋に幽閉せられ、且如何に鞭打たれてゐるかが空想に描かれてゐる。明らかにその王子は彼自身で、斯くて空想中でサディスムスは自己自身に向けられ、突如としてマゾヒスムスに變換してゐる。これを更に詳細に描いて見れば、陰莖そのものが譴責を蒙つてゐることであり、結局この如き變換は、一種の罪惡意識 Schuldbewusstsein に關係してゐるもので、これぞ自慰に對しての刑罰を意味するものである。

だから分析によつて何等の疑ひもなく、此の如き受動的の努力は能動的サディスムス的の努力と同時にか又は直ちに續いて現れ來るものである事を示してゐる。* このことは又此の患者が、異常なる、明瞭なる、連續したる對立兩存性 Ambivalelenz を持つてゐること、これが此處では初めて、全く對立する部分本能の一對として同等な形成となつて現れて來てゐるのである。此の態

度はずつと彼の特徴として殘つてゐた。他にも勿論特徴はあつたが、それ等は本來は特徴ではなく、唯當時に生じたリビドの位置によつて生じたもので、それ等は後には完全に消失して了つたものである。此の對立兩存性は、他の性質と同時に益〻殘り、且彼の固定してゐる性格とその利害相反する間斷なき動搖を與へるものであつた。

＊此處では受動的努力と言うて、受動的性的目的の意味である。即ちこの場合には本能變換は無いが、目的變換が眼に見えてゐるのである。

此の子供のマゾヒスムス的の努力は他の方面から引き入れられたものである。このことに言及することは、今まで留保して置いた。何故ならばこれは、その發育の次の段階を分析することに依つて初めて確立されたものであつたからである。ナーニャの拒否によつて彼の彼女に對するリビド的の期待は解かれた。そして他の人物を性的對稱として目論んだことは既に述べた。その人物は、その時不在であつた彼の父親であつた。此の選擇に對しては、種々なる動機が共同して働いてゐると同時に、蛇の切斷についての思ひ出も偶然のものとして働いてゐる。然し何れにしても、彼はこの事に依つて彼の最初のそして始原的の對象選擇、即ち小兒としての自己愛症

Narzissmus に一致するものを選んだわけで、而もこの選擇の方法は同一視 Identifizierung と言ふ方法であつた。既に彼の語る如く、父親は彼にとつては驚嘆す可きほどな典型であつたもので、いつも彼は何にならうと望むかとの質問には、お父さんのやうな紳士(〓)と答へるのが常であつたことを見てもわかる。斯くて彼の能動的發動の同一視對象は、今やサディスムス的肛門愛的段階の受動的發動の性的對象となつた。彼にとつては受動的であつた姉娘による誘惑は、恰も彼を壓しつけて、彼に受動的の性的目的を與へたやうに見える。此の經驗の更に續いた影響によつて、姉娘に依つて開かれた道を、ナーニャに移し、ナーニャより父親へと移して行つた。卽ち女性に對して持つた受動的の態度を男性に迄移して了つたわけで、而もこの場合彼の極く早期の自然的發育段階に結合を見出したのである。さて父親は今や再び彼の對象となつた。この同一視は、より高い發育段階に一致して對象選擇を濟ました。能動的の態度が、受動的の態度に變換したことは、この間に介在した誘惑の結果でもあり證明でもあつた。然し勿論、サディスムスの段階に在つても、力强い父親に對する能動的の態度は、容易に出來ないものである。故に父親が、夏の終り、或は秋の初めに歸つて來た時に彼の怒り發作や、狂暴等は、新しくもう一度變換を蒙

らねばならなかつた。即ちナーニャに向つては、能動的サディスムス的の目的を果さうとし、父親に對してはマゾヒスムス的の意圖を持つことになつたのである。彼は自分の不快さの現れとして、父親からの譴責や打擲を强要して、自ら父親によつてマゾヒスムス的の性的滿足を得ようと望んだのである。彼の泣喚發作は、言はばその誘惑の試みであつた。尙マゾヒスムスを招來した意圖と一緒に、彼はかくして生ずる譴責から彼の罪惡感 Schuldgefühl の滿足をも見出したのである。斯くの如き場合に於て、父親がやつて來ると更に一層高く泣き叫んだと言ふ明らかな記憶が尙殘つてゐる。然し父親は彼を打擲はしなかつた。却つて彼を宥めようとして、クッションを集めて彼の前に竝べてやつたりした。

兩親や、家庭敎師たちが、此の子供のこの說明し難い然し上述の如き明瞭なる關係のある不快を眼の前に見る機會がどの位度々あつたかはわからぬ。斯くも制御し難く見えるのだが、子供は斯かる場合に、實は自白をなし、刑罰を要求してゐるのに當る。卽ち子供は正にその譴責のうちに同時に彼の罪惡意識の宥和とマゾヒスムス的の性的努力の滿足とを要求してゐるのである。

此の病例の更に進んだ說明は、更に確かに次のやうな思ひ出から取ることが出來た。卽ち總て

の恐怖症狀は、此の性格變化の表れた或る出來事があつて以來初めて出て來たと言ふ思ひ出である。これより以前には何の恐怖もなかつた。此の出來事の直後に恐怖は甚だ苛酷な形式で現れて來たのである。此の變化の時期は確言することも出來る。丁度第四回の誕生日の直前である。此の時期を境界點として、我々の研究せんとする小兒時代は明瞭に二つの時期に區別することが出來るのは工合がよろしい。卽ち第一期は滿三歲三箇月で始まつて、第四回目の誕生日までつづいた、不興時代、倒錯時代であり、第二の時期はこの後かなり永くつづいた神經症の徵候のある時代である。此の區別をせしめた出來事と言ふのは、何等外より來つた外傷ではない。一つの夢である。この夢を境として彼は恐怖を以て眼醒めたのであつた。

第四、夢及び原情景

此の夢については、それは內容がお伽噺から來てゐるので、他の所で一度報告をしたことがある。*が、今此處で、その一度報告した事柄をも繰りかへして見よう。

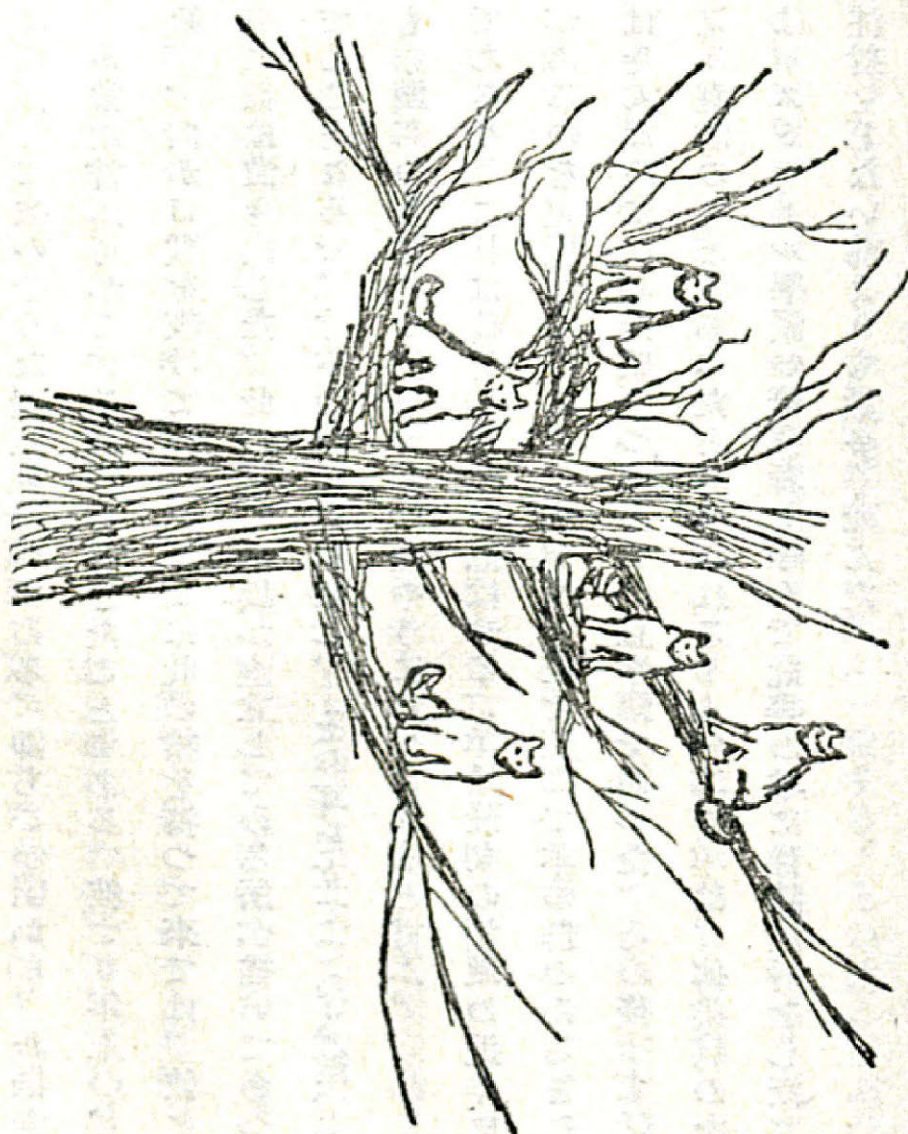
*「夢の中に現れるお伽噺の材料について」國際醫事精神分析雜誌第一卷、一九一三年（本全集第三卷）

『私は夢を見ました。夜、私は自分のベットに寢てゐました。（私のベットは窓のところに足を向けるやうになつてゐましたが、その窓の向ふには大きい胡桃の木がありました。冬のことであると記憶してゐます。勿論夜です）。突然に窓が獨りでに開きました。そして驚いた事には、この大きい窓際の胡桃の木の上に一對づつの白い狼が坐つてゐることでありました。その數は全體で六匹か七匹でありましたが、此等の狼は何れも全く白く、丁度狐かシェパアド犬の樣でありました。何故ならば彼等は各〻大きい尾を持つてゐるから狐の樣で、何かを待つてゐるやうに耳を立ててゐるので犬の樣でした。明らかに此等の狼に食はれることを恐れたので、私は

泣き出して、そして眼が醒めました。

泣聲をききつけて、私の保姆が急いでやつて來た。然し、これが夢であるとわかる迄にはよほどの時間がかかつた。それほど自然にかつ明瞭にこれ等の夢が見えた。その窓の自然に開いた事、木の上に狼がゐたこと。遂に然し私は靜まつて、危險でない事がわかり、斯くて再び眠りについたのであつた。』

『夢の中で動いたものは唯窓が自然に開いた事だけであつた。狼は靜かにこちらを眺めてゐるのみで、木の枝々に少しも動かずに居つた。右の方にも左の方にも狼が居つてこちらを見てゐるのである。恰も、狼はその全注意を私に向けてゐるやうであつた。――私はこれが私の最初の恐怖夢であつたと信ずる。此の當時、私は三歳か四歳、或は多くとも五歳位であつたらうと考へる。十一歳か十二歳に至るまで、この事について常に私は恐怖を持つてゐた。そして夢を見るのが怖くなつた。』

彼はこの上に、夢の話を確かにするために、狼ののつてゐる木を繪に描いた。この夢の分析により次のやうな材料を明らかにすることが出來た。

彼は此の夢と常に關係して次のやうな記憶を持つてゐる。即ちこの頃から、お伽噺の本にある狼の繪を見る度に、非常な言ふ可からざる恐怖を感じたことである。彼より年上の、このことをよく知つてゐた姉娘が、何か口實を設けて彼の眞正面に此の繪を持つて來ては、彼を揶揄するのであつた。その度毎に彼は泣き出した。此の繪には狼が直立してゐる所が描いてあつたが、今や歩み始めようとしてゐるところで、片方の前足を延ばし、その耳を立ててゐる繪であつた。彼は、この繪はどうも赤頭布のお伽噺の挿繪であつたやうに考へられると言ふ。

狼は何故白いのであらう。これは彼をして羊を思はせる。羊は最初の領地の近くに群をなして飼つて置いたことがあるのを記憶してゐる。父親が屢〻彼を連れて羊の群のゐるところを見に行つた事がある。彼はそんな時には甚だ威張つてゐて、且幸福であつた。その後——話を綜合して考へるのに、夢を見る直前のことであつたと考へられる——此等の羊は、傳染病のために散り散りになつた。父親はパストウール學派の研究者を呼んで此等の羊に豫防注射をした。然し此の注射をしてからも、注射をしない前よりも數多く死んだ。

何故狼は木の上に坐つてゐたのであらう。この事については彼に一つの物語が思ひ浮んで來る。

それは彼の祖父が彼に話した話であつた。これは夢のあとであるか前であるか、彼自身もはつきり言ふことは出來なかつたが、然しその內容は全くこれに一致する。その話と言ふのは次の如くである。昔ある所に仕立屋があつて自分の部屋で坐つて仕事をしてゐた。其處へ窓を開けて、一匹の狼が飛び込んで來た。この仕立屋ははじめ物差で追ひかけた――然しそれを止めて、忽ち狼の尾を捕へてこれを切つた。狼は驚いて逃げた。ところがやや暫くして仕立屋が森の中に行つたところが、突然狼の群がやつて來て彼をとりまいた。彼は困つてその傍の木にのぼつた。そこで狼も最初は途方に暮れたが、やがて、その群のうちにあつた尾を切られた狼がこの仕立屋に復讐をしようとして、皆の者に、一つ一つお互ひにその背の上に登つて結局仕立屋の高さまで登らうと言ふ提案を出した。そしてこのためにはこの狼自身が――それは年とつて力強い狼であつた――この大きいピラミッドの最下の礎とならうと言ひ出した。そして狼達はさうした。この仕立屋はこの時嘗て自分の所へやつて來たこの狼を認めたので、突然大聲で次のやうに叫んだ。「その年とつた奴の尾を捕へてくれ」と。ところが嘗て尾を切られた狼は、あの時の記憶を思ひ出して驚いて逃げ出したので、この時そのために皆の狼が崩れて落つこちたと言ふ話である。

さてこの話のうちに木が出てくる。この木の上に夢では狼達がのつかるのである。然しこの話は明らかに去勢複合と關係のある話である。此の老いた狼は仕立屋にその尾を捕へられた。夢のうちの狼が狐の樣な尾を持つてゐたのは、この話のうちの尾のない狼の代償である。

何故狼が六つも七つもゐたのであらうか。此の問題は中々わからなかつたが、遂に余が、彼の恐怖の種である狼の繪が赤頭巾のお伽噺から來てゐるとの疑ひを持ち始めてから初めてわかつて來た。此のお伽噺は二つの繪を持つてゐた。一つは赤頭巾の娘が森の中で狼に逢ふところで、もう一枚は、狼が祖母さんの頭巾をかぶつてベットに寢てゐるところであつた。恐らくは此の記憶のうちには、もつと別のお伽噺が匿れてゐるに違ひない、と考へてくるうちに彼は思ひ當つた。それは狼と七つの小山羊の話でつた。此のお伽噺には七つと言ふ數が出てゐる。然し、六つであるとも言へるのである。何故ならば狼が六匹の山羊だけを食べて了ふが、七番目の山羊は時計の箱のうちにかくれて了ふのであるから。又白いと言ふことも此の話から來てゐる。何故ならば狼はパン粉でその手を白くして置いた。最初は山羊達は、手が灰色であることがわかつたので狼であることを知つて了つたから。この二つのお伽噺はその他の點でも非常に共通なものを持つてゐ

る。何れも狼が食べて了ふことがある。そして腹を切り開いて、食べられた人物を取り出すことがある。そしてその取り出した代りに重い石を入れて置くことがある。遂に何れの話でもこの惡い狼が生命を失ふのである。小山羊のお伽噺では、この上に木がある。狼は食事の濟んだ後一つの木の下で睡り込んで鼾をかくのである。

此の夢についての更に特有な事情については他の場所で論ずるつもりである。そしてその時には更に深い解釋を施し、この夢の價値ある所以を現すつもりである。これは、小兒時代の思ひ出され得る最初の恐怖夢であつた。この夢の內容はこれにつづいて見た他の夢と關係があり、この夢を見た人の小兒時代の、或る出來事と全く別種の興味ある關係を見出す事が出來るのである。此處では夢を唯二つのお伽噺、即ち兩者共に甚だ多くの共通點を含んでゐる「赤頭巾の娘」と「狼と七つの小山羊」との二つのお伽噺にのみ關聯して考察をして見た。此のお伽噺の印象は、此の子供に對しては正しく動物恐怖症となつて現れて來た。似た同樣な他の例とは異つてゐる點は次の如き點である。即ち此等の恐怖動物は、日常の認識には容易には近づけない對象で（例へば馬とか、犬とかではない）唯お伽噺とか繪本とかの中にしか出て來ない動物であると言ふ點であ

る。

余は、此の動物恐怖症が如何に說明さる可きであるかと言ふことと、如何なる意義を有してゐるかと言ふこととを別々に論じ度いと考へる。先づ第一に氣附くことは、此の說明は、後年に至つてこの子供が罹つた神經症が、凡そ如何なる特質を有する神經症であるかに依つてきまると言ふ事である。父親に對する恐怖が、彼の病氣の最も强い動機であつた。そしてこの父親代理に對する對立兩存的傾向が、彼の生活を支配し、治療に當つてもやはり彼の態度を支配してゐたのである。

とに角狼が、此の患者に對しては最初の父親代理であつたが、疑問の生ずるところは、小山羊を嚙み切る狼のお伽噺と、赤頭巾の娘のお伽噺とは、父親に對する小兒性恐怖としてはその祕密なる內容に於ては少しく別種のものである。* 此の患者の父親は、他の父親がその子供をあしらふ場合に多くはさうである如く、「優しく叱る」zärtliches Schimpfen と言ふ特徵を持つてゐた。と同時に、戲談を言うて子供を脅かす、例へば「喰べて了ふよ」"ich fress' dich auf" などと初めはからかひ、或はあやさうとした事が一度ならずあつたのである。余の扱つた患者の一人で・

自分の二人の子供が、お祖父さんを愛する事が出來なくて困つた、而もそれは、お祖父さんはいつも子供と遊ぶのに、お腹を切るぞと言つておどかすがためであつたと述べた人があつた。

＊此の二つのお伽噺を、オットー・ランクが、希臘神話クロノスの話と比較してゐるのを參照せよ。（小兒性欲累と民族心理學との竝行的關係について、精神分析中央雜誌第二卷、第八號）

夢の示す此の如き評價の議論に關する事柄はそれとして、我々は次にその意味について考へて見よう。余は第一に、この意味を解からうとして余自身數年を費したことを附記して置き度い。患者は、此の夢については隨分早く打ち開けてゐる。そして最初から、余も亦この夢の背後に彼の小兒性神經症の原因となつたものが匿されてゐるなとの考へを假定し且信じた。故にその治療經過中、自分等は屢〻この夢の問題に戻つて來た。然しこの治療の最後の月に至つて、漸くこれを理解する事が出來たのである。而もそれは患者自身が自發的の業に因るのである。彼はいつもこの夢の話になると夢のうちの二つの事象が自分に強く印象づけられてゐるやうだと語るのであつた。その第一は狼が全く動かず靜かにしてゐると言ふ點であり、第二は此の狼が皆緊張して彼を注視してゐると言ふ點である。この外に夢から醒めてからも眞實の事と思はれたと言ふ點が注目

す可き事柄であると彼自身注意してゐるのであつた。

此の最後の點から解いてゆかねばならぬ。即ち夢の解釋の經驗から見ると、此の醒めてから後の眞實感と言ふものが非常に重要な意義を持つてゐると言ふことがわかつてゐる。即ち經驗によると、夢の潛在材料のうちにある何かが記憶のうちでこの眞實感を生ぜしめてゐること、又夢は實際に起つた事のある出來事に關係があり、唯單に空想のみに關係してゐないと言ふ事である。勿論それは何か無意識の眞實性に關係してゐるが、祖父が實際に仕立屋と狼との話を話したのであるかとか、或は赤頭巾の娘と、七匹の小山羊の物語を眞に彼が讀んで貰つたことがあるかとか言ふことなどでは、夢について永く存在する眞實感は說明が出來るわけのものではない。夢は眞に實際の出來事にかづけて意味づけをなす可きで、その現實性がお伽噺の非現實とは正に相反するものである點が力說せられねばならぬ。

若しも斯くの如き無意識の、即ち夢を見た時に既にその夢の內容の背後に橫はる情景が全く忘れ去られてゐるやうな工合であつたならば、その出來事は甚だしく早期に起つたものであるに違ひない。この夢を見た人も、さうです、私がその夢を見た時は、私は三歲か四歲か、多くとも五

歳位の年齢でありましたと言うてゐる。我々は更にこれに附け加へてよいであらう。彼はこの夢によつて、更に早期の時代に屬す可きものを思ひ出したことに當るのであると。

此の情景の內容については、夢見た人自身が主なる夢內容としてあげてゐるもの、卽ち著しく狼のこちらを見てゐること及び運動性のないことを考へねばならぬ。勿論、我々は、此の情景を生ぜしめた未知の材料は、どこか歪曲を蒙つてゐること、そしてその歪曲は恐らくは全く相反するものへと變化してゐることもあるであらうことは期待してゐる。

此の患者との最初の分析が與へた生のままの素材だけからでも同樣に多くの結果を導き出すことが出來るし、これ等を或る求めてゐる關聯に按配することも出來る。羊の養牧の敍述の背後には、彼が性の穿鑿に沒頭してゐたと言ふ證明書を求むることが出來るであらう。この穿鑿心の興味は父親と一緒に羊の群を見に行つた時に滿足されることが出來た。然し死の恐怖の諷示がその時にあつたに違ひない。何故ならば此等の羊の大部分が疫病で死んで了つたのであるから。夢の中で最も目立つてゐるものは、全く祖父の話の通りに狼が木の上にゐたことであつた。これについては殆ど、この夢を生ぜしめた原因、夢について直ぐ浮んで來ることは去勢を主題とするもの

に關係があるとしか考へられぬ。

其處で夢についての最初の不完全なる分析からは、次の樣な結論を導き出してゐた。卽ち狼は父親代理である。故にこの最初の恐怖夢は、父親に對する恐怖が表面に表れて來たのであつて、この恐怖はこの時以來一生彼につきまとふに違ひないと。此の結論は全くまだ恰適であるとは言へない。然しこれを暫定の分析の結果として綜合するに、此の夢を見た人自身から提出された材料は、凡そ下の如き斷片語であつて、これから再構成をす可きである×卽ち

實際に起つた出來事——

甚だ早期に於て——

瞠視——

動かぬこと——

性慾問題——

去勢——

父親——

何か驚く可き事物――と。

或る日のこと、患者は夢の意味づけをつづけた。夢の場所は余の考へでは次の如きものである。窓が獨りで突如として開いた、と言ふのは先づ窓に關係がある。仕立屋も窓の際に坐つてゐた。そして狼は窓から部屋に入つて來ただけでは物足りない。だから意味は次のやうに考へねばならぬ。眼は自然に開けられた。卽ち私は睡つてゐたが突然に眼が醒めた。そして何かを見た。狼の上つてゐる木を見た、と來なければならぬ。此處まではこれでよい。然し更に進まねばならぬ。彼は眼が醒めた。そして何か見える筈であつた。木の上の狼がなしたと言ふ注意深き注目は彼の上に移して考へられる方がよい。卽ち或る決定的の點については轉倒 Verkehrung が起つてゐる。この轉倒は他にもある、主なる夢內容にも又轉倒が現れてゐる。例へば狼が木の上に坐つてゐたと言ふのは一の轉倒で、彼等は祖父の話によれば地上にしかゐなかつた。而も木の上には上ることが出來なかつた筈なのである。

この夢見た人自身によつて力說せられた他の點にも果して轉倒や逆變が行はれてゐるであらうか。例へば運動性なきこと（卽ち狼が凝然と坐つてゐること、彼を瞠視してゐること、然し決し

て動かないこと」の代りには何があるであらうか。即ち甚だしい運動が來なくてはならぬ。だから彼は突如として眼醒めた。そしてひどく動いてゐる一情景を自分の前に見た。そしてこの情景を彼は緊張した注意で見守つた。即ち轉倒の一方法としては、主觀を客觀に、能動的を受動的に、瞠視する代りに瞠視されること等の交換が成り立つ。又他の方法としては全く反對のもの、例へば運動に對して安靜等を置くことが出來る。

夢の理解に對して、更に一歩が進んだのは、突如として或る時浮び來つた思ひ付き Einfall であつた。即ち、木はクリスマス樹ではないか。斯くて彼は、夢はクリスマスの直ぐ前で、クリスマスを待つことが夢となつたのであらうと言つた。クリスマスは、同時に彼自身の誕生日であつた。だからこれで夢の現れた時期もわかつた。夢から出て來る變化も今度は確かに知ることが出來た。時期は正に彼の第四回目の誕生の直前であつたのだ。だから、彼には二重の贈物が澤山貰へるであらう日を、緊張して待ちながら眠りに入つたのであるに違ひない。我々は、子供と言ふものは斯かる狀況にあつたならば、容易に彼の希望の成就を夢のうちで先き取りしようとするものであることをよく知つてゐる。即ち夢ではもうクリスマスである。夢の内容は、彼に既に贈與

を示してゐる。彼に氣に入るやうな贈物は木に懸つてゐるのである。ところが贈物の代りに、その――狼であつた。依つて夢は、彼が狼によつて喰はれると言ふ恐怖（恐らくは父親に對する恐怖）が來たために終つて了つた、そして彼の保姆に對する逃避が來た。夢の前迄の彼の性的發育の知識は我々にも夢の中の間隙を充すことが可能であると思はしめた。又滿足を恐怖に變化せしめたことも說明し能ふやうに思はれて來た。夢を生ぜしめた願望のうちで、最も強いものは性的滿足を求めて興奮するものであるに違ひないが、これは父親から貰はうとしてゐたものである。此の願望の強さが或る一情景の永く忘れ去られてゐた記憶の殘遺を再び蘇へらせることが出來、依つて彼に性的滿足が父親に依つて如何に與へられるかを示すことが出來たのであらう。而もこの結果は恐る可きことであつた。此の願望の充されることについて、此の願望に依つて代表せられてゐる興奮に對する壓迫現象が生じ、そして遂に父親から逃避して、危險のない保姆にゆくことになつたのである。

此のクリスマスと言ふ時期はこの患者の述べるところによると、次のやうな思ひ出に於て深い意味を有してゐる。即ち彼はクリスマスのための贈物が不滿足であつたために第一の狂暴の發作

が起つたのであつた。然しこの記憶は正しいものと僞りのものとをごつちやにしてゐる。このまでは正しいとは言へない。何故ならば、兩親の屢〻繰りかへした所によると、彼の惡くなつたのは兩親が旅から歸つて來たときに既に始まつてゐたので、決してクリスマスになつてから始まつたものではない。然し、愛の滿足が缺乏してゐることと、狂暴發作と、クリスマスとの間には、本質的に一脈通ずるところがあるので、記憶のうちでは一緒になつて了つたのであらう。

然らば、一體如何なるものが、夜每に作用する、性的な憧憬を呼び起してゐるのであるか、而も爾かく強く願望の充足を威嚇することが出來たものは何であらうか。分析の材料から、このものの條件を求むることが出來る筈である。そしてそれは去勢觀念であると言ふ事を確信せしむ可き根據が確かにあると言はねばならぬ。卽ち此の感情變化の一切の原因は去勢恐怖である。

さて此處で今や、余には分析の經過に依り賴む可き根據がわかつて來た。余は更に亦恐れるのである。この根據が、同時に讀者が余に對する信賴を無くなす場所ではないであらうかを。

夜每に無意識の印象痕跡の混沌から浮び來るものは、兩親の性交の像である。常ではないが、時とすると特に觀察し易い狀態にあるそれである。此の情景に結合し得る總ての疑問に對して、

滿足なる答へをなす事は漸次に出來るであらう。中でも治療を始めてからの初めに現れた夢は甚だしく變化してゐるし、新しいものが附け加はつてゐるが、分析が明らかにしようとした說明を與へてゐるものであつた。先づそれを目擊した時の子供の年齡を探求して見ると滿一歲と六箇月位の時と思はれる。此の子供はその時マラリア病を患つてゐた。* その發作は一日のうちで一定の時間に必ず起つて來た。** 彼の十歲の頃以來、時々抑鬱發作 Depression が起つて來たが、これはいつも午後に始まつて五時頃にその最頂點に達するのを常とした。此の症狀は分析治療を始めた頃に尙存在してゐた。此の繰りかへされる抑壓感情は、マラリヤ病を患つたときの熱の、或は身體倦怠性の發作を代理するものである。此の午後五時と言ふのが、熱の最高時を意味するか、或は兩親の性交を觀察した時間かを意味する。この兩者が同時に生じたと假定しないならばさうなる。*** 恐らく彼は此の病氣の時に兩親の部屋に寢かされてゐたのであらう。尙此の事は、直接の口傳とも言ふ可きものから、マラリア病にかかるのは夏であると考へられる所から、その年齡は、クリスマスに生れた子供が、夏には滿一歲六箇月になると推定する事が出來る。彼はだから兩親の部屋に寢たに違ひない。そして熱の昇ることに依つて、眼醒めたに違ひない。午後の事で、恐

らく後年抑鬱發作の生じたことに依つてわかる五時頃の時間であつたであらう。恐らくは夏の非常に暑い日であつたであらうし、兩親は、だから殆ど半裸體で、夏の午睡の部屋に引き下つてゐたものと考へられる。***此の子供が眼醒めた時には、彼は三度繰りかへされたある姿態 Coitus a tergo（××からの××）の目撃者たらざるを得なかつた。****彼は母親の××と、父親の××とを見ることが出來た、そして此の意味とその經過とを理解した。*****遂に彼は、夢の醒めるところで述べたやうに泣き出してこの兩親の交渉を妨げたのであつたに違ひない。

* これについては、その年齢が唯の滿六箇月の時であるとの考へもあるが、これは殆ど不可能の事と考へられる。

** 此の動機が後年その强迫神經症のうちに變形して來てゐるのを參照。此の治療の間の夢のうちでは、これを非常に强い風に依つて代理せられてゐる。（マラリアの aria は空氣を意味する語である。）

*** これは同時に起つたとも考へられる。何故ならば患者の夢では五匹の狼として現る可き筈であるのに、夢の實際の話には狼は六匹或は七匹であるとなつてゐる。

**** 即ち白いシヤツのみで、これは狼の白いところからわかる。

＊＊＊＊＊何から三度繰りかへされたと判斷するか。彼は嘗て突如として余が斯く斷定することが出來るやうな話をしたことがあつた。然し實際はその事は合つてゐなかつた。この斷定は他の、自然に生じた、更に批判を加へることによつて引き出された思ひつきから來てゐる。この思ひつきを、彼は勿論いつもの如く余に轉嫁して、更にこれを投射することに依つて信頼出來るやうに爲したのである。

＊＊＊＊＊＊余は考へるのに、彼はこの意味を四歳の時の夢を見た時に初めて理解したので、此の觀察當時に理解したのではあるまい。滿一歳六箇月の時に兎に角印象を受けた。この印象は彼の生長するに及んで、性的興奮及び彼の性穿鑿研究の結果として夢を見た時に至つて初めて理解を可能ならしめたのに違ひないのである。

さて此の事柄はその根柢に於ては決して異常となす可き事柄ではない。また放縱な空想の結果であるとの印象を與へるものでもない。若い、結婚してから間もない夫妻が、暑い夏の一日、心地よい午睡の後に××があつたこと、而もまだ滿一歳と六箇月にしかならぬ、ベットに寢てゐる子供の面前で行はれたと言ふだけのことである。これは全く月並みの、日常瑣事に屬することであるし、また余が推理した上記の××の體位と雖もこの日常瑣事たることに何等の變つた判斷を

下す必要もない。殊に××がいつでもこの××らの體位で行はれたと言ふ證明材料とするわけでもないのだから極めて日常のことと考へて宜しい。しかも目撃者にとつては、他の場所では決して見ることの出來ぬ、或は見ることの極めて稀な觀察の機會をうつかり一度だけ與へたと言ふこともあり得ることである。だから此の情景の內容を信用することについては何等の議論の餘地もないのである。然し信じ得可からざることだと言ふ考への生ずるのは他の三點に關してである。

即ち

第一にほんの滿一歲と六箇月にしかなつてゐないやうな幼い小兒が、爾かく複雜なる過程を認識に取り入れ、假令無意識のうちではあると言ふも、そんなにも正確に保存してゐたと言ふこと、

第二には、後にこの理解に基いて、滿四歲に至つて、そんなに印象深いやうに變形を行ふことが可能であつたこと、

第三には、斯くの如き情景の個々の點を、斯くの如き事情に於て經驗して而も理解し、これと立派に相關聯せしめかつ信じ得可きやうに意識に上らしめたこと、

の三點である。*

＊この三つの困難なる問題の第一だけでも、次の如き假定無くしては解くことは出來ないと言ふ人があるだらう。即ち此の子供は觀察の時迄には既にもう一歳だけ上になつてゐたものではないであらうか。即ち滿二歳六箇月になつてゐたのではないか。この位の年齢になると完全に子供は話しをする位のことは出來るやうになる、と。然し此の患者については此の如き年齢の移動は總ての副事情により殆ど全く除外することが出來るのである。その外に、兩親の性交を觀察するなどと言ふ特殊の情景は分析に於て發見出來る筈のないものであると言ふ人があるかも知れぬ。然しこれが甚だ子供の幼い時だとすると正に有り得ることである。勿論子供が長ずるに從つて、兩親は子供に斯かる觀察の機會を許さぬやうに用心深くすることは、一定の社會的階級に於ては言ふ迄もない事である。

余は此の如き及びその他にも考へがあつて、その後用心深く研究したので、今讀者に對して保證することが出來る。即ち余は彼の子供の時に此の如き觀察があつたと言ふ斷定を彼に示して了はないで、深く批評的に出た。即ち彼に乞ふに此の情景の現實性については差當り余に信頼を與へては貰へまいかと言うた。そして先づ我々は此の如き「原情景 Urszene」が夢に對する關係を

研究し、ついでそれがこの患者の症状に對する關係、生活史に對する關係等に及び度い。故に我我は特に、此の情景の實際の內容から、及びその眼に見た印象から如何なる作用が生ず可きかを追求しようではないかと言うたのである。

この眼に映つた印象と言ふ項については、彼が見たと言ふ兩親の體位は男が立つてゐて女が獸の樣にかがんでゐるところであつたと余は信ずる。既に述べたやうに彼の恐怖時代に姉娘がお伽噺の本のうちにある繪を見せて脅かしたのは、狼が立つてゐる繪の描かれてゐたものであつたことを我々は知つてゐる。一方の足を前の方へ出して前足を立ててそして耳をも立ててゐる。此の患者は治療の間に、昔の古ものを探して倦まなかつたが遂に彼の小兒時代に見たお伽噺の繪本を見つけ出した。それは果して「狼と七匹の小山羊」の繪圖のうちにあつた。彼は思ふに、此の繪の狼の體位は正に既に述べた原情景に於ける父親の體位であつたに違ひないと言ふのである。此の繪が恐怖作用の出發點となつていつも恐怖が發展して行つた。彼が七藏か八歲の時に、明日新しい教師が彼のところへ來ると言ふ報告を聞いたその夜、此の教師を夢に見たのであるが、それは獅子であつた。而も此の獅子があの繪の狼のやうな體位で高く咆吼しながら彼の寢臺に近よつ

て來た。そこで再び恐怖の爲に眼が醒めたのである。此の時代には既に狼恐怖症は打ち勝つてゐたところである。故に彼は今や新しい恐怖動物を自由に選べる身分であつたわけである。このことから後の夢のうちで教師は卽ち父親代理であつた。總ての新しい教師は彼の小兒時代の後期にこの樣に父親代理となつた。そして良きにつけ、惡しきにつけ父親の影響が此等の教師に賦與されてゐるのであつた。

運命は不思議である。彼の狼恐怖症はギムナジゥムで再び新しく出て來たと言ふ、特異なる機會が生じて來た。そしてやはり同じ關係を根據として、重い制止の發動を生ぜしめたのである。此の中學校で羅典語を受持つてゐた教師は實際にその名がヴォルフ（狼）であつた。此の患者はだから初めから此の教師の前では狼狽してゐたのであつたが、或る時此の教師からひどく叱られるやうな仕儀になつて了つた。それは彼の羅典語の飜譯のうちに馬鹿らしい誤りをなしたからであつたが、此の事があつてから此の教師に對する今までの痲痺するやうな恐怖は總つて了つてその代りに、直ぐ他の教師に對して恐怖が移つて行つた。ところが、彼が飜譯で誤りを犯した動機は全く關係のないことではなかつた。彼は羅典語の filius（息子）と云ふ字を譯さねばならなか

つたのであるが、此の字を彼は母國語のその字の飜譯を付ける代りに佛蘭西語の fils（息子）と言ふ字で譯して了つたのである。狼はいつも彼の父親であつた。*

* 教師ヴォルフ（狼の意）氏から遣責されたあとで、同級生の一般の意見は、此の教師に宥如を受けるには――彼は金を出さねばならぬと言ふことを聞き込んだ。このことについては後にもう一度話が出るはずである――余は次の樣に表象することが出來る。斯くの如き小兒時代の話を合理的に解釋するためには、狼に對する全恐怖が、實際に同じ狼と言ふ名を持つてゐる羅典語教師から出て來て、小兒時代に逆に投射せられ、そしてお伽噺の繪本から、原情景の空想となり、依つて恐怖となつて出て來たのであるとするならば如何に容易となるであらう。ただ然し合點のゆかぬ點がある。それは狼恐怖症の時間的の發祥であるが、これを第一の領地に住んでゐた頃の小兒時代にあると言ふのは置き違ひであることだけは確實に證明せられたが然し夢よりは前で、しかも夢は四歲を以つて始まつてゐるのはどう言ふわけであらうか？

治療中に現れた一時的症狀 passagere Symptome の最初のものも亦狼恐怖症及び七匹の小山羊のお伽噺に歸す可きものであつた。* 最初の診療をなした部屋には、患者に向き合つて大きな柱

時計があつて、それは余の後ろで一つのソーファの上に位置してゐた。ところが余は暫くしてゐる間に、彼が時々余に顏を向けてニコニコして和解を求めるが如くに余を見、やがて余から眼を外らして時計に向くことを氣がついた。その時これは早く治療が濟めばよいと彼が思つてゐるに違ひないと余は受取つた。ところが、餘程經過してから患者はこの擧動を余に思ひ出さしめてこれに説明を與へた。卽ち小山羊のうちの一番小さい山羊は柱時計の箱の中に身を匿したのに、六匹の山羊は皆狼に喰はれて了つたことを思ひ出してした擧動であつたと言ふのである。その時彼は言はうとしたのであると言ふ。私と仲よくして下さい。私はあなたを恐れねばならないのでせうか。あなたは私を喰べますか。私は一番小さい山羊の様に時計の箱の中に身を隱さねばならぬのでせうか。と。

＊フェレンチの「精神分析中に生ずる一時的症狀形成について」精神分析中央雜誌、第二卷、一九一二年、五五八頁參照。

斯くて彼の恐れた狼なるものは、疑ひもなく彼の父親のことである。然し狼恐怖は直立してゐる體位と言ふことにきまつてゐる。彼の思ひ出はいつもこの點については全く一致してゐる。

即ち四つの足で歩いてゐる狼とか、或は赤頭巾の娘のお伽噺に出て來るやうに寢臺の中に寢てゐる狼とかは彼には何の恐怖をも與へないと言ふのである。尙又その原情景の組立ての中で我々が女に與へて見た體位にも少からざる意味が含まれてゐる。然しこの意味は唯性的領域にのみ限られたものであつた。と言ふのは彼自身成人となつてからの戀愛生活のうちに著しい現象として、いつも謎の如く不可思議に現れて來るのは、强迫性に現れて來る肉體的の溺愛の發作であつて、突如として現れ、直ちに消えるのであつたが、このやうな發作の場合には、發作のない時に存在する制止は全く鎖を解き放ち、その支配は完全に失はれて驚く可きエネルギイを持つて現れて來ると言ふことであつた。此の强迫性戀愛の完全なる評價は、特別に重要な關係があるからあとでよく論ずることとするが、此處に述べて置かねばならぬのは、この强迫性戀愛發作は一定の、彼の意識にも全く匿された條件と關係してゐるもので、これは治療中に知ることが出來たことである。即ちその樣な時に女は、原情景で母親が持つてゐたと我々の判斷したところの體位をいつもとつてゐなくてはならなかつたと言ふ一事である。思春期以來ずつと、大きい著しい臀は彼にとつては女性の有する最も强い刺戟である。××からの方法でない限り××も彼には何等の感興を

も與へないと言ふのである。但し批評的の考察からは此處で次の如き討論をなさねばならぬ。即ち女の××の體部が性的に甚だ優位なる魅力あることは强迫神經症に傾いてゐる人々の有する一般的の性格で、小兒時代の特別なる印象から必ずしも誘導することが正しいとは言へないではないかと言ふことである。このことは肛門色情的素質の問題に屬するもので、又此の構圖が示すところは何か古代の特徵がある。××からの××、——即ち more ferarum (鷄姦)——は宗族發生的の古い型式であると考へてよろしい。我々はこの點に關しても後に彼の無意識の戀愛條件をよく知つてからもう一度討論を試みて見よう。

さて尙我々は夢と原情景との關係についての說明を續けて見よう。我々のこれ迄に期待するところによれば、あの夢は子供に對してはクリスマスに於ける彼の願望の充足を意味し、又、性的滿足を父親から望んでゐるのを意味し、彼が原情景に於て見た事のある像を自分の滿足の典型として見てゐることを意味してゐる。ところが此の像の代りに祖父が少しく前に話してくれた物語の材料が入つて來たのである。木、狼、尾の切斷、この尾については超代償の形式で出て來たから狼には毛むくぢやらの尾があつた。ところが此處に原情景の物語の內容から狼の物語に移行し

て來たつながり、言ひ換へれば聯想橋が缺けてゐる。それでこのつながりはどうしてもあの體位の問題となり、あれ以外にはないことになる。祖父の話のうちに出て來る尾のない狼は他の狼を自分の上に立たせるやうに促してゐる。此の結果として原情景の像が思ひ出として醒めて來たのであらう。此の方法で原情景の材料は狼の物語の材料に依つて代られ、兩親は二人であるに違ひないが、或る願望を表すために狼の多數に依つて代理せられた。更に第二の移行として、夢の內容は狼の物語の材料が七つの小山羊のお伽噺の內容に恰適して七つと言ふ數がこれから引用せられた*。

* 夢の中では六匹か七匹かであると言うた。六匹と言ふのは喰はれた山羊の子の數であつて、第七番目のは時計の箱に匿れてゐて救はれたのである。夢には極めて嚴格な法則がある。即ち總ての個々の事象迄說明されねばならぬと言ふ法則である。

此の材料の移行、卽ち原情景――狼の物語――七匹の小山羊のお伽噺――これは夢形成に當つての思考進捗の跡である。父親を通しての性的滿足の憧憬――これに結合してゐる去勢の條件への洞察――父親に對する恐怖。余は思ふに、これで四歲の子供が持つてゐた恐怖夢については餘

すところなく説明し盡されたわけである。*

* このことがわかつてくると、此の夢を綜合することが出來る。余は今これを試みて見よう。そして顯れた夢の内容と、潛在する夢思考の關係を瞥見的に描出して見よう。**それは夜でありました。私はベットに横はつて居りました。** 此の最後の語は原情景の再現の初めである。「これは夜でありました」と言ふのは「私は睡つてゐました」の歪曲である。注意。私の夢を見たのは冬であつたと言ふことがわかつてゐます。そして夜でありました。と言ふのは夢の記憶に關係してゐる言葉で内容に關係してゐる言葉ではない。これは皆正しい。即ち彼の誕生日の前夜、言ひかへればクリスマスの日であつた。**突然に窓は獨りでに開きました。** 突然私は獨りで眼醒めましたと譯しかへる可きで、これは原情景の記憶を意味してゐる。狼の物語のうちで狼が窓から入り込んだと言ふ話の影響が少しく變化を受けて此處に當てはまる。そして直ちに繪で見た表現に變化してゐる。同時につぎの如き夢内容を現在になほして考へるためこれに窓の導入が用ひられてゐる。クリスマスの夜、扉は突然開かれる。そしてクリスマス・ツリーを數多の贈物が懸かつたまま突然見る事が出來る。だから此處にも切實なるクリスマス期待の影響が當てはまる。尤もこれに性的滿足の待望が合一してゐる。

大きい胡桃の木 クリスマス・ツリーの代理者、これも亦實際的である。この上に、木と言ふものは狼の物

語のうち仕立屋が逃げ登つたと言ふところから來てゐる。この木の下に狼が待伏せしてゐたものである。高い木と言ふは屢〻余の主張する如く、觀察することの象徴、觀察者の象徴である。人は高い木の上に登つてゐるとその下に行はれる總てを見ることが出來、而も自分は見られない。ボッカチオの有名なる物語、又はこれと類似の道化話を參照。

狼 此の數は**六匹又は七匹**、狼の物語では數は示してない、狼の群集となつてゐる。この數をきめるのは七匹の小山羊のお伽噺で、その內六匹は喰はれた話の影響を示してゐる。原情景の二人と言ふ數の代理として原情景には無かつた多數が出て來たのは歪曲作用の抵抗に媚びてゐるわけ。夢に出て來た記號は、恐らくは問題「それは夜でありました」を訂正しようためで五と言ふ數を表現せんとしたのに違ひない。

彼等は木の上に坐つてゐました 第一 この狼達はクリスマス・ツリーに懸つてゐるクリスマスの贈物を代理してゐる。しかし狼達が木の上にのつてゐるとのことは、言ひ換れば彼等は瞪視してゐるとの意味である。祖父の話では木の下をとりまいて位置を占めた筈である。彼等の木に對する關係は夢のうちではこの通り逆となつてゐる。このことから夢の內容中には、潛在する素材に對しては他の逆轉も現れてゐるに違ひない。

彼等は緊張した注意をもつて、彼を凝視してゐた 此の一行は全く原情景から來てゐるもので夢の中では

全然逆轉せられて來てゐるのである。

彼等は全く白くありました　これはそれだけとしては實際ではないが、夢を見た人の物語のうちでは强く力説された特徴であつた。素材のすべての層からの諸要素が、豐富に溶解したもので、その强さはそのお蔭を蒙つてゐるわけ、尙且他の夢の源の細部が原情景の意義深い部分と結合してゐるわけである。此の原情景の決定は、寢臺や、兩親の肌着やの白いこと、これに加へるに羊の群の白さ及び彼の動物に於ける性穿鑿の暗示としてのシェパード犬の白さ、それから七匹の小山羊のお伽噺のうちに出て來る、その手の白さによつて母親であることが知れると言ふ白さ等の結合したものである。我々は後で白い洗濯物は死の意味があることをも理解するであらう。

彼等は少しも動かずに其處にゐました　此處には觀察した情景の著しい內容が却つて逆に言はれてゐる。彼等の持つてゐたその體位によつて原情景と狼の物語との間の結合が出來たものならば寧ろその運動性とならなくてはならぬ。

彼等は狐のやうな尾を持つてゐました　これも亦經驗とは背馳してゐる。即ち原情景の影響から狼の物語に與へたものとは背馳してゐる。然しこれけ性穿鑿をなしたことの重要なる證據として認めねばならぬ。だからこの背馳は去勢を意味する。此の考へによつて彼の驚きは夢のうちに遂に一疏通を見出し、そして

この結論を生じたのであらう。

狼に喰はれて了ふと言ふ恐怖　これは夢見た人自身も夢内容に依つて出て來たものではないと考へた。彼は、私は恐れる筈がなかつたのです、何故ならば狼は寧ろ狐か犬のやうに見えましたし、亦彼等は私に對して私を喰はうとして突撃して來るわけではありませんでした、のみならず唯靜かにしてゐるし、且少しも恐いわけではありませんでしたから。我々はこれ等のことから夢の仕事が苦痛の内容をこれと相反するものに變形さして障礙なしにしようと、可なり骨折ることを知るのである。(彼等は自分で動かうとはしませんでした。彼等は眞に美しい尾を持つて居りました。) 終りに至る迄此の材料は蔽はれてゐるが、然し恐怖は出てゐる。これはその表現を皆小山羊の子供が狼の父親に喰べられて了ふと言ふお伽噺から借りてゐるのである。此の如きお伽噺の内容はそれ自身では恐らくは父親の子供と遊ぶ時の戯談まじりの脅かしを思ひ出したのであらう。故に狼に喰はれて了ふと言ふ恐怖は思ひ出であると共に移行代理でもあり得るのであらう。

此の夢の願望動機は直ぐわかる。例へば表面的の日中の願望はクリスマスが彼への贈物を持つて早く來てくれ(待ち切れぬ夢)との望みであるし、深い意味では、此の時から繼續してゐる、父親に依つて性的滿足を得ようとする願望である。父親は第一に束縛されてゐたものを見ようとする望みを代理してゐる。斯

くて此の夢が引き出された原情景のうちの願望充足の心理的過程は、今や避け難くなつた願望の拒絕、即ち壓迫現象に迄經過したのである。

此の描寫の範圍及び實現のために余は讀者に自分で行つた分析の證明力と同樣なものを與へようと考へ、甚だ努力を拂つたのであるが、同時に、數年の間に亙つてゐる分析の發表を求める讀者には物足らぬかも知らぬ。

原情景の有する病原的の作用に關しては、及び、彼の性的發育に目醒めさせたその變化に關しては、余は既に觸れて來たもの總てを、短く總括して見ることが出來る。今は我々はこの夢が表現してゐるところの作用だけを追求するに止めよう。後に我々は明瞭に知るやうになるに違ひないが、原情景からはただ單に一つの性的潮流が出て來てゐるのみではなく、斯かる、正にリビドの分裂をせしめた諸潮流の全系列がこれより出て來てゐるのである。更に我々は此の情景の賦活(余は故意に此處には追憶せられたとは言はぬことにする。)せられたことは、恰もそれが近頃經驗をなしたと同樣な作用があつたと言ふことを注意せねばならぬ。此の情景は後年に至つて作用したわけだし、かつその間には滿一歲六箇月から滿四歲の間の距りがあるから、勿論そんなに新

鮮に影響せられたわけではない。恐らく我々は更にもう一つの觀點、卽ちこの情景は滿一歲六箇月の時以來、近頃再認識せられた時迄の間ずつと一定の作用を持つてゐたのではないかと言ふことを考へねばならぬであらう。

此の患者がその原情景のうちで占めてゐた位置を深く追求したところ、彼は次の如き自覺を生じ來つた。旣に前からあの觀察した過程は決して暴力づくで行はれた行動ではないと言ふことは彼が母親の顏に見た如何にも滿足げな顏付きでよくわかつてゐた。彼は恐らくその時から、これが一種の滿足に關係してゐることを知つてゐたのであらうと言ふ自覺を生じ來つた。兩親の性交を觀察したことが彼に齎した本質的に新しい事は、これを見て彼が去勢は實際に行はれ得るものだ。前には可能だと考へてゐたが、可能どころではない確かだとの確信を得たことであつた。(可能性があることについては、二人の放尿する少女、ナーニャの脅かし、女家庭教師が飴ん棒を見せて言うた事、父親が杖で蛇をたたき切つたこと等の思ひ出より來てゐる)何故ならば、今や彼は自身の眼でナーニャが嘗て話した陰莖の切り取られたあとの傷を見たのだし、そして、この傷のあることが父親との性交の條件をなしてゐたことを理解したのであつた。それはもはや少女の

お臀を見た時のやうに曖昧ではないのである。※※

＊ 患者のこの言葉は、次の如き假定を置くと最も速かに理解せられるであらう。即ち彼の觀察の對象となつたものは、初めは正常位での××であつた。これはサディスムス的行爲であるとの印象を彼に與へたに違ひないとの假定である。此の後は體位が變へられて、他の觀察と判斷が爲されたわけであらう。此の假定は確かめる由もない。然しこの假定は避けることが出來ない。本文に書いて置いた省略された描寫については我々は實際の事は次の如くであるから止むを得ないと言はねばならぬ。即ち分析せられてゐるこの人は、彼の四歳の時の印象や興奮を、二十五年もの後に至つて彼がその時には見出すことの出來なかつた言葉として探し出すわけになると言ふことである。この注意を此處に書かないと、まだ四歳にしかならぬ子供が斯くの如き時間的の判斷、及び學問的の思考を持ち得たことは信ずべからざることであるし、且いとも滑稽なことであると言ふ人があるであらう。この持ち越しNachträglichkeit の例はこれで二例目である。此の子供は滿一歳六箇月で、その時は全く反應することの出來ないやうな印象を得た、そして四歳の時にこの印象を賦活して初めて理解もし、初めてこれを獲得したのであるが、この時に彼のうちに生じたことは、後二十年もあとになつて精神分析によつて

意識せられる思考活動として初めて把握したのである。此の被分析者は、三昔も後がへりをすることが出來て、現在の自我をこの遠く過ぎ去つた昔の狀況に置くことが出來たのである。我々はこれに依つて、彼に從つてその者のうちに入り込むことが出來る。何故ならば、正しい自己觀察及び意味づけさへあれば、その效果は、敢て第二の昔と第三の昔との間の距離は問題にならぬからである。さうでなければ、余等はこの第二の昔に生じた過程はこれを記載する方法は無いのである。

＊＊問題のうちでのこの部分について彼は如何に後に到つて意見を異にしたかについては彼の肛門愛の過程に當つて後に再び我々の經驗するところである。

夢から醒めた理由は恐怖であつた。そしてこの恐怖は、ナーニャが彼の傍に來て吳れる迄靜まらなかつた。かくて父親から離れてナーニャに逃げて行つた事になる。恐怖は父親によつて、性的滿足への願望が拒絕せられたことであつて、この願望への努力が亦彼に夢を與へた原因なのである。この恐怖の表現、卽ち狼に喰はれることは、唯――假に我々の知る如く――退行的の願望變換で、母親の如く父親から××を受けて滿足したいとの願望に當るのである。彼の最終の性慾目的は、父親に對する受動的の位置を望むことであつたが、これは壓迫現象を蒙つて、その代り

に狼恐怖の形をとつて父親に對する恐怖となつて出て來たのである。

然らばこの壓迫現象を生ぜしめた力は何であつたか。諸種の事柄を綜括して考へて見ると、これは自己愛的性器的リビド narzisstische Genitallibido であると考へられる。即ち彼の陰莖が奪はれることの懸念があるから、彼の陰莖による滿足が出來なくなるであらうとの心配として表れて來た性器的リビドである。この自己愛症 Narzissmus が脅威を受けたことから、彼の父親に對する受動的の態度を拒否する彼の男子性 Männlichkeit が消滅したのであらう。

さて描寫に當つての此の如き點から我々は用ひて居つた術語を變へねばならぬことについて此處に注意をせねばならぬ。性慾的對立は、それまでは彼にとつては能動的なることと受動的なることと二つあつた。ところが彼の性的目的は誘惑以來受動的なるもの即ち陰部に觸つて貰ひ度いと言ふ受動的なものになつて了つたので、早期の、サディスムス的肛門愛的統帥編成についてのも退行現象が生じ、却つてマゾヒスムス的のものへ、即ち禁制せられ罰せられることに變化したのであつた。彼にとつては斯かる目的が、男性に依つて達せられやうが、女性に依つて達せられやうが、それはどちらでもよい事であつた。彼はナーニヤと父親との性器的の區別などは顧みるこ

となく、ナーニャに陰莖を觸つて貰ひ度いと望んだことをそのまま、父親に依つて罰せられ度いと言ふことに變へて了つたのである。この際には性器のことはまだ問題にならなかつた。そして陰莖を鞭つて貰ひ度いとの空想のうちに、退行現象に依つて陰蔽せられた關係となつて現れて來てゐるのであつた。ところが今や夢の中に現れた原情景の賦活は彼を再び性器統帥編成につれ戻つた。彼は膣と言ふものの存在を發見した。男性及び女性の生物學的の意義をも發見した。其處で彼は今や能動的なるは男性であり、受動的なるは女性であることを理解した。故に彼の受動的性慾目的は女性的なるものへと移り行つて、其處に表現を見出さねばならなくなつた。父親によつて性交を受けると言ふ代りに、父親に依つて陰部、或は臀部を打擲されると言ふ表現を持つやうになつた。かやうな女性的目的は今や壓迫現象を蒙り、依つて結局狼に對する恐怖に依つて代理せられねばならなくなつたのである。

此處では彼の性的發育についての討論は暫く差控へねばならぬ。後年、彼の生活史の研究から新しい光がこの早期の問題についてかへり來るまで。然し狼恐怖症の評價に關して、尙少しく附け加ふ可き必要がある。即ち父親及び母親共に狼になつてゐると言ふ點である。母親は去勢せら

れた狼の役目を演じてゐる。この狼は他の狼をして自分の上に×××しめたのであつたが、この×××た狼が父親なのであつた。然し彼の恐怖は、既に我々が彼から確かに聞いた如く、立つてゐる狼にのみ關係してゐる。卽ちこれは父親に關係してゐる證據である。更に恐怖は、夢から出發して祖父の物語にその典型を持つてゐることに氣附かねばならぬ。卽ちその物語のうちで、去勢せられた狼は他の狼を自分の上にと登らせたのであつたが、彼の尾がないことを思ひ出した時に、恐怖から落ちて了つたのである。だから彼は夢の過程の間では、去勢せられた母親と同一視し、そして彼自らは斯かる經驗には反抗したのであつた。恐らくは恰適する飜譯は次の通りであらう。若しもお前が父親から滿足を欲するならば母親のやうにお前も去勢を受けねばならない。然し自分はそれを欲しない。かくて男子性の明瞭なる抗議となるわけである。その他の點については余等は次の點を明らかにせねばならぬ。卽ち此の場合の性慾發育は、余は此處迄追求して來たが、此處に我々の研究に對して甚だ大なる不便がある。卽ち亂されずに殘つてゐるものはないと言ふ事である。性慾發育は、初め誘惑によつて決定的の影響を受け、今や性交目擊の情景に依つて轉向せられ、第二の誘惑があつたやうな影響を受けることになつた。

第五、一二三の對論

北極熊と鯨とは相鬪ふことは出來ない。何故ならば、各〻その境涯が一定されてゐて互ひに相逢ふことが出來ないからである、と言はれてゐる。同樣に余には心理學、又は神經學 Neurotik の領域の研究者と討論をなすことは出來ない。此等の人々は精神分析學の前提を認めないのであるし、亦その結果をも人工的 Artefakte のものとしてゐるのであるから。これに加へるに、近頃新しい反對も亦現れ始めて來た。それは本來の思想としては少くとも精神分析を基準として立つてゐて、その手法、その結果等は全く同じものを執つて越えない、のみならずこれを是認してゐる癖に、この同じ材料から全く他の推論を導き來り、他の綜合を志してゐる徒輩である。

理論的の反對は多くは取るに足らぬ。其の材料からこそ考へを出さねばならぬのにその材料を遠ざけることになれば、忽ち人は唯自分の判斷に醉ふだけで、遂には事々に事實と背馳するやうな意見を作るに至るものである。だから、余はこのやうな中心はづれの理解を避けるためには、

個々の例及び個々の問題を深く研究することが一番合目的であると考へるのである。

既に上述した通り（三五四頁參照）『ほんの滿一歳六箇月にしかならぬ幼い子供が、爾く複雜なる過程を取り入れて、しかもそれを彼の無意識のうちに保存したこと、及び後に滿四歳に至つて此の材料を理解したと考へねばならぬやうな加工を加へたことが如何にして可能であつたか、及び第二に斯くの如き狀況に於て經驗した斯くの如き情景の個々の點まで、相連絡し、信じ得可きやうな形で意識にのぼせこれを理解することが出來た』と言ふ點については確かに有り得可からざる點が多々ある。

然し此の最後の問題は純粹に事實の問題である。だから、精神分析を、既に力說して示してある手法に依つて斯くも深きところ迄追求するだけの勞力を厭はぬ人には、誰にでもこの事が可能であると確信することが出來る。これを等閑に附するもの、及びこれほど深く穿鑿せずに精神分析を打ち切るもの等は判斷をなすに値せぬものである。然しこの深部分析 Tiefenanalyse によつて到達した理解と雖も尙決定的ではない。

他の二つの思考が、此の早期幼兒期の印象については否定的に傾き、これがそんなにあとまで

作用を有するやについて信賴し難きやうに考へしめる。卽ち、神經症の原因は、殆ど全く、もつと後年に於て生じた、もつと重大な葛籐に求む可きで、小兒期の有する意義は精神分析についでは唯後年神經症となる傾向があるかどうかについてだけのもので、早期の過去の再發 Reminiszenz 又は象徵 Symbol として現在の興味を表現して來るものではないと言ふ風に考へる考へ方である。小兒期の動機について斯く考へて來ると、精神分析には極く近い關係はあるが、これに反する多くのものを含んでゐる、且局外者にとつては信用の出來兼ねる、多くの勝手なる道が生ずることになる。

余等はこれに對して、次の如き見解を提出して討論をして見る。卽ち斯くの如き早期小兒期の情景は、神經症の苦心した分析が——例へば此の例が——示す如く、後年の生活及び象徵形成をかづけてゐる眞に遭遇した事柄そのままの再生ではないかも知れぬが、成人となつてからの、これ等の興奮を借り來る可き空想形成は、一定度迄此の時の眞の願望眞の興味が象徵的に入り來る事によつて定まるものである。而もこの空想形成は、現在の事情からの退行的の傾向、及び轉向から來てゐる。果して然らば、未丁年の年齢にある小兒の精神生活又は智的活動に對して、奇怪

なる責任を嫁せずに濟むのであるとの考へである。

さて此の見解は、多くの事實が示す困難なる問題を、なるべく合理的に、なるべく單純化せんとする、我々に共通な望みに相反するやうな事が生じて來る。又初めから、實際の臨床分析家が把持してゐる或る考へをも全く除き去ることになる。小兒期情景についての上述の如き見解が、果して正しいとしても精神分析のやり方は何等變化するところはないことを認めねばならぬ。神經症者が一度その現在に對する興味を轉向せしめんとの惡い特質を持ち、その興味を斯くして生ずる空想中の代理形成に結び付け始めるや、人は唯その道を追求して彼にこの無意識内の生産物を意識せしめるより外の手段はない。何故ならばこれ等のものは、その現實的の價値については論外とするも、我々にとつては、その時の興味の保持者及び所有者からその興味を解き放たしめ、これを現在の問題に向けてやることが最も價値あることだからである。故に精神分析は全くいつもと同じやうに遂行せられ、この如き空想を素朴にも信じてゐる人にも同じである點については少しも變りはない。分析の終局に至つて初めて、卽ちこの空想を發見して了つてから初めて、その著しい區別が現れて來る。この場合に患者に對して「さあ、よろしい。あなたの神經症は、あ

なたの小兒期にかくかくの印象があつてそれがずつとつづいてゐるのです。然しそんな事は可能なことではないことをよく自覺しなさい。これは現にあなたがゆき當つてゐる現實の問題を轉向せしめようためのあなたの空想活動の生產して來た產物なのです。故にこの如き問題が一體何であつて、それが空想との結合關係は如何になつてゐるかなどと言ふ點は我々の硏究に任せてお了ひなさい」と言ひ、つぎの現實生活に向けられた治療上の點は、この小兒期空想が輕快してから後にやつたらいいではないか、と言ふことになる。

此の方法の短縮、卽ちこれ迄用ひられてゐた精神分析療法の變化は、然し手法的には出來難い事である。若しも空想を患者に全形に亙つて意識せしむることが出來なければ、これに結合してゐる興味に關しては何等の處理をもすることは出來ない。若しも患者をその空想から轉向せしめ直ちに、その存在及びその一般的の輪廓を氣付いたとするも、人は唯壓迫現象の仕事を助力してやるに過ぎない。而もこの壓迫現象に依つて、空想は患者の總ての努力にもかかはらず全く觸れることが出來ないやうになつてゐるのである。又若しも、患者から逸早くこれを無價値にしてやり、或はそれについて少しは患者に話して聞かせたとしても、それは唯空想に關係してゐるだけ

で、何等の眞の意味を有せず、且又何等空想を意識に齎してやるために助力することは出來ないだらう。だから分析的手法は正しく行はれたとしても何等變化を齎すことは出來ない。唯この小兒期情景を持つて認めると言ふに過ぎない。

余は既に、此の情景の理解は、退行的空想ではあるが、多く事實上の動機をその支持として持つてゐるのであると主張してゐる。就中その一つは、此の如き小兒期情景は治療中に——余の今迄の經驗によつて見れば——記憶として再生せられるのではなく、構成 Konstruktion の結果として知り得るのである。この事を認めさへすれば、それで多くの論難は忽ち決定して了ふ。

此處に誤解を避けるために一言を要することがある。總ての分析者は、うまく行つた分析例にあつては、患者は自發的に、小兒期からの記憶を相當數だけ言ひ出すものであることを恐らくかなり度々經驗してゐることと思ふ。而も此の記憶の浮び出しは——恐らくは最初の浮び出しは——少しも醫師に責任のない、少くとも醫師はこれと同じやうな内容を患者に對して一度も構成せしめようとの試みをしたことのない浮び出しがあるものである。此の如き、それまでは全く無意識であつた記憶は、勿論常に眞實なものとは言へない。眞實だと言ひ切れないとするも、多くは

眞實の事實を歪めたもの、これに空想的要素を加へたもの、全く自然的に存在した所謂假托記憶Deckerinnerung によく似てゐるものである。故に余は唯次の如く言ひ度いのである。卽ち情景と申すものは、この患者に於てしかく早期の、又しかく不思議の內容を有した、而も病歷に對しては著しい意義を有するやうな情景は、いつも決して思ひ出によつて再生せられるものではなく、必ず歩一歩と、而も骨折り骨折つて、その意味を探求した綜括として推理せられる――構成konstruieren せられる――ものである。尙議論に對しては次の如く附記すれば足るであらうと思ふ。卽ち少くとも强迫神經症の例にあつては斯く情景は記憶として意識せられるのではない、少くとも、余が此處に硏究した一例に於ける問題に限局して見れば尙然りであると。

余は、今、此の情景は必ず空想のうちに存在せねばならぬと言ふ意見を持つてゐるのではない。何故ならばこの情景は記憶として再生して來たのではないから。然し余は、全くこれは記憶と同價値であると考へる。此の空想は――此の例に見る如く――夢に依つて代理せられる、而もその分析は規則正しく、同一の、個々の部分からその內容を、飽くなき努力に依つて工夫して知る、いつも同じ情景に歸つて來るのである。假令夜と言ふことが夢形成と言ふ條件の下にはあると言

うても夢も亦記憶である。この夢の中に歸り來ることに依つて、患者自身もこの原情景の眞實性についての確信が漸次に生じて來た。その確信たるやこれが確かに記憶に根據あるもので決して空なるものではないとの確信である。*

* 如何に早くこの問題について考へてゐるかは余の「夢判斷」の第一版から一部を引用してこれを證明しよう。その一二六頁に、或る夢に現れて來た物語の分析について次の如く書いてある。「これはもはやこの物語は余自身から出て來たものと思つてはならぬ、余は數日前彼女に說明して、最も早い小兒期の經驗は、そのまま存在するわけではなく、轉授現象と夢とに依つて、而も分析のうちに出て來たものである。」と

反對論者は自由にこの議論について戰ひを宣して宜しい。決して見込みがないとて捨て去る必要はない。卽ち夢は勿論よく知られてゐる如く操縱することが出來る。* 被分析者の確信は暗示に依つての結果としても出來る。何故ならば暗示なるものも常に分析的治療の力技に在つて尙一種の役目を持つてゐるからである。古風な精神療法家も亦患者に對して、あなたは健康である、あなたの持つてゐる制止作用は打ち勝たれて了つた等と暗示するではないか。成る程精神分析家はさうは言はない。あなたは小兒の時代に斯く斯くの經驗を持つてゐました。あなたは病氣が癒る

ためにはそれを思ひ出さねばいけません。と言ふではないか。この兩者の區別は唯これだけで大して違はないではないか、と。

＊夢の機轉は影響せられない。然し夢の材料は一部分的には勿論支配せられるであらう。

論者のこの說明の試みもやはり、小兒期情景を、智慧付けられたものとして、その根據をはるかに輕くせしめようとするところから來てゐるもので、更に次の如く言ふであらう。此の小兒期情景と言ふのは實際の情景ではない。空想である。今や明らかであることは、患者の空想ではなく、分析者自身の空想である。この空想を分析者が何かある個人的の觀念複合からもつて來て彼分析者に押しつけたのであると。分析者は、この非難を聞いて、彼の安心のために次の如き事を持ち出す。卽ち斯くの如き彼から出たと言はれるが、その空想が如何に漸次に構成に到達したであらうし、又、此の構成は多くの點に於て如何に醫者からの刺戟とは無關係に出て來たか。又如何に治療の或る一定期に於てこの空想に集中して來たものであるか、及び如何に今や綜合に當つては種々なる注目に値する結果がそれからそれへとこの空想から出て來るか、或は又如何に大小に拘らず患者の病歷中にあつて說明し難かつたものがこれで解決出來るかと言ふやうな點を主張

し、更に、醫師が如何に洞察力ありとするも、總てを唯一つで充たして了ふやうなものを、捏造することは出來ないではないかと主張するであらう。然し、此の辯解も亦、實際に自ら分析を經驗しないものの意見に對しては何等の作用するところも無いであらう。一方では狡猾なる自己錯覺と言ふであらうし、一方では又判斷の不足と言ふ。この解決はまだ中々定まらぬ。

我々は更に構成せられたこの小兒期情景の見解に對する反對者を支持する他の點を見て見よう。それは次の點である。問題となつてゐる空想の形成の說明に用ひられた此の總ての過程は、確かに成立するし、且意味深きものと認める事が出來る。現實生活の問題から興味が轉向してゆく。その代理形成としての棄てられた活動に對する空想の存在、これ等は此の如き生れ付きの人に恰適してゐる總て退行的傾向である——唯一つの意味に於ける退行のみならず同時に生命に對する後退逃避、過去への退轉——總ては分析に依て規則正しく判明するところに一致するものである。然し問題となつてゐる早期小兒期の再發を說明し而もこの說明が科學の經濟學的原理に基いて、先づ何よりも說明せられればならぬ、ためには新しい更に珍しい假定がなければ出來ない筈である、と。

＊余は一定の根據から、これはリビドが現實的の葛籐からの轉向であると考へる。

余は此處で、次の如き事柄に注意を拂はねばならぬ。卽ち現今の精神分析學上の文獻に見る反對論は、何れも常に全體對部分原理 Prinzip des pars pro toto から來てゐると言ふことである。より高く綜合せられた全體から、人はそのうちの作用の强い一部分を取り上げ、これを眞理であるとして宣言するがこのために他の部分又は全體が矛盾することがある。然るに更に詳細にこの特徵が如何なる群に屬するかを調べて見ると、或る他の所から旣に知られてゐるものを含んでゐるか、或は最初からその或る他の物より來てゐるかするものであることを見出すであらう。この意味に於てユングは現實性と退行現象とを根據とし、アドラアは利己的意圖をあげてゐる。誤謬として捨て去られたものこそ、正に精神分析學にとつては聞いたこともないものであり、且本來誤謬とせられたものである。この方法によつて、都合の惡い精神分析學への革命的の突擊は最も容易に反證せられるやうに思ふ。

此處に特に附記するのも無駄ではあるまい。卽ち、小兒期情景の理解に反對する見解が生ぜしめた此等の動機のどれもがユングから新しいものとして學ばれたものではない。現實の葛籐、現

實よりの轉向、空想に於ける代理滿足、過去の材料への退行現象、これ等總ては共に同じところへ合流するもので、恐らくは語彙を極く僅かな變化だけすれば何れも余自身の敎養の積分的要素を形成するものである。現實から出て、神經症形成へと退行的方向を走りゆくものは求むる原因のほんの一部分で、決してその全體ではない。但し余は此處に、小兒期の印象から出て來て作用し、又生活から退行逃避したリビドに道を示し、且又小兒期への說明し難き退行現象を理解せしめる、第二の影響については、尙餘地を殘して置いた。斯くてこの兩動機が余の見解に從へば症狀形成に當つて一緒になるものである、然し早期に於て一度一緒になつたことは余にとつては甚だ意味に滿ちたものと考へられる。余は依つて次の如く斷定する。卽ち小兒期の影響は既に神經症形成の初期狀況に見出し得る。この時既にそれは、果して又は如何なる場所に於て個人は生命の現實的問題の超克を拒否するかを決定的に定めてゐるものである、と。

斯く、小兒期に動機あることの意味は今尙論爭の間にある。問題は此の意味を、何等の疑ひなしに示してゐるやうな例を見出すことに懸つてゐる。然し、我々が此處で斯くも徹底的に取り扱つてゐる此の例、卽ち早期に神經症があつて、後年再び神經症が出來て來たことを特徵としてゐ

る此の例が正に斯かるものである。正に斯くの如き事情なるが故に、余はこの例を報告のために選んだのである。これがために又、誰か、この例では動物恐怖症が十分重要なるものとして現れてゐないとの故を以てこれを獨立した神經症として認めることを拒否するならば、余は、この恐怖症は間斷なく、或は强迫儀式として、或は强迫行爲として、或は强迫思考として現れて來てゐるではないかと言ひ度いのである。此の論文の後半に於て此等の事項は十分に論ずるつもりである。

滿四歲又は滿五歲位の小兒期に於ける神經症的の病氣は、何よりも先づ次の如き事を示してゐる。卽ち小兒期時代の經驗はそれ自身だけでも神經症を生ぜしめることが出來る、生じ來つた生活問題のうちに逃避することを要するやうな事情がなくとも神經症を生ぜしめることが出來る。斯う言ふと人は、子供には子供で苦勞の種があり、從つてそれから逃れようと考へることもあらうではないかと批難するかも知れぬ。なる程これは正しい。然し、未だ學校へゆくやうにもならぬ子供の生活は、容易に見透すことが出來、神經症の原因となるやうな決定的の「問題」があるかないかは容易に見透し得る筈である。斯く考へて調べて見るに、子供には滿足の不可能なるも

ので、成長してゐないからそれを超克することが出來ぬやうな、且これを根據として結果の出て來るやうなものは本能興奮より外にはない。

神經症の發病と、既に述べた小兒期經驗との間に、極く短かい間隔しかなかつたことが、期待にそむかず、原因としての退行部分は極度に縮小してゐることとなつてその原因の豫備部分のうちに、既に早期に有してゐた印象の影響を、蔽ふことなく現して來たわけである。此の如き關係から考へて此の病歴は、幸ひにも明瞭な像を與へることが出來るであらう。原情景の疑問或は最も早期のうちに探られた小兒期經驗の分析についての疑問に關しては、この小兒神經症は他の根據から決定的の答へを與へることが出來るのである。

さて、次の如き假定を先づ矛盾なきものと考へて見よう。卽ち斯かる原情景なるものは手法的には正しく引き出されたものであること、又それは小兒の病症の症狀が示すところの總ての謎の共通な解決に對して缺くべからざるものであること、又總ての作用はこれから出てゐるもので、このことは分析の總ての絲が皆手繰つてゆくと此處に歸するのでわかること、然しその內容を顧ることは不可能であること、從つてこの子供が經驗した眞實なるものから見れば、それは再生で

あるから少しは違つてゐるものであること等である。何故ならば小兒はやはり成人のなす如く、空想を生產するには何か彼の後天的に獲得した材料を用ひねばならぬ、而も、此の獲得の道は小兒に對しては部分的には全く閉ぢられてゐて（例へば讀書は子供には出來ない）、この獲得に對して許された時間も短かく、容易に、その源は探索し盡される筈である。

此の例に於てはその原情景は兩親の××の像であり、而も觀察のためには特に都合よい體位でなされたものであつた。若しもこれを或る患者、即ちその症狀がこの原情景の作用のために、後年のいつか現れいでて來たと言ふやうな患者の場合であつたならば、これを現實性あるものとは決して認められぬであらう。斯かる場合には長いその中斷時の間に種々なる印象、表象及び知見を獲得するであらうし、これから彼の空想像を作り、これを彼の小兒時代へと逆に投射し、依つて彼の兩親へとかづけるかも知れぬからである。然し此の情景の作用が、滿四歲又は滿五歲に現れ來たやうな場合には此の小兒が此の情景を實際に、更に幼小の時代に見たに違ひないと言へる。斯くて我々が小兒性神經症の分析に依つて知る珍しい結果は正しいと考へられる。今假りに、この患者は唯單にこの原情景を無意識に空想したばかりであるのみならず、同時に彼の性格變化、

彼の狼恐怖、彼の宗教的强迫等をも亦勝手に架空的に創造したのだと假定しようと望んだとするに、然しこれ等の事柄は彼のその他の無邪氣の本性、その家族の直接の話等が矛盾するであらう。だからこの例の如き場合には——余は他の場合にもいつもさうだとは決して思はぬ——彼の小兒神經症から出で來つた分析が、全く唯一つの狂愚に過ぎないか、或は又余が上述した如く總てが正しいのであらうか、この何れかが殘るべき筈である。

余等は既に初めからいつも兩意性につき當つてゐる。卽ち患者が女性の臀部に對して及び此の位置での××に對して偏愛を有することは兩親の××を目擊したことから出て來たと同時に、この特徴こそ强迫神經症へと素質を持つてゐるもの、古代的體質 archaische Konstitution の一般的特徴をなすことにもなるのである。此處にその矛盾を宿命的の決定 Ueberdeterminierung として了ふのに甚だ都合のよい知見もある。卽ち、患者がこの位置で××を目擊した人は、而も彼の愛する父親であつて、この父親から彼も亦この體質的の偏愛を遺傳せられて來たものであるとの考へである。父親の後年の病症が、尙この家族の家族史を物語つてゐると共に、この父親の兄弟の一人は、既に述べた如く、强い强迫性疾患の初期と考へらるべき狀態で死んでゐるのであ

る。

此の事に關して思ひ出すことがある。それは滿三歳三箇月の男の子に對して誘惑を試みた時に、彼の姉も亦その老いた勇敢な保姆に對して異常な誹謗をしてゐる。即ち保姆は誰をでも逆倒しにして auf den Kopf stellen その××××るのだと語つた事である。* この事から何となく考へ度くなるのは、この姉娘も亦この弟と同じ位の幼い年齢で、後に弟が見たと同じやうな情景を見たことがあり、故に性的行爲に當つて逆倒しの位置 auf-den-Kopf-stellen に對して特に興奮を起し易くなつてゐるのであると。此の假定は亦この姉娘の自身の性的早熟の原因についての證明ともならうと考へられる。

* 第三一八頁參照。

〔此處で余はこの「原情景」の眞實性の價値に關する討論を更に進めようとの意圖は初めは持つてゐなかつた。然し余は此の問題については余の「精神分析學入門」のうちでそれは論爭的の意圖からでは決してないが、更に廣い關聯から論ずるつもりが十分にあつたのである。であるからそれが誤りであつたとしても其處で定めた見地の應用を此處に提出した例に及ぼすこと

は差控へて見よう。唯余は補足の意味で、及び報告の意味で次のことを附け加へて置から。卽ち此の夢に基礎を置いてゐる原情景について他の見解を作ることも亦可能である。その見解は、既に一度遭遇した決定を或る部分轉向せしめると、多くの困難なく出來るものである。小兒期情景を退行的特徵に迄押し進める考へ方は、此の修正からは得られない。然しこの考へ方は余は此の分析を通して――他の分析でも同樣であるが――小兒神經症分析に當つて一般に適用出來るものであることを解決し得たと信ずるのである。

其處で余は事物關係をも次の如き方法で整理することが出來ると信ずる。小兒が性交を目擊し、そのために直ちに、去勢と言ふことは唯空な脅かしのみではなく實際に存在するものであることを信じたと言ふ假定については我々は否定することは出來ない。尙又恐怖發生は男と女とのその體位から來てゐる事、又戀愛條件としては、他の何等の選擇も許されず、どうしても coitus a tergo, 後ろからの×× more ferarum (鷄姦)でなくてはならなかつたことも亦許す可きである。然し他の動機で代へ得られぬものではなく、且他の動機もまた恰適するかも知れぬのは、或はこれは兩親の性交ではなかつたかも知れぬ、小兒が見たものは動物の性交であつ

たかも知れぬ。これが兩親へと移行せしめられ、恰もこれが擴げられて兩親も亦同じやうにするに違ひないと空想されるに至つたのかも知れぬ。

この見解について第一に工合がよいのは、夢に出てくる狼が本來はシェパード犬であり又、同樣に繪にもこれが書いてあると言ふ事である。夢を見る少し前、小兒は度々羊の群に伴はれ、此處で澤山の白い犬を見て、恐らくはこの犬等が性交するのをも見たに違ひない。又三度と言ふ數については此の夢を見た人は何等更に進んだ意圖も提出せず、唯彼にこの如き觀察をシェパード犬で三度見たことが記憶に殘つてゐるに過ぎないと假定することが出來るのである。夢を見た夜の、何か期待ある興奮に現れて來たものは、最近に得た記憶像の總ての細部を兩親に移行せしめたのであつたであらう。この兩親に移行することに依つて初めて總ての力强い情緒作用が可能である筈である。今や恐らく數週、又は數月前に受けた印象の後ればせの理解があるし、恐らくは我々のうちの誰でもが自分獨りで經驗するであらう如き過程も亦あるのである。性交をしてゐる犬から兩親への移行は、言葉の結合によつて結論を得ることからも出來るばかりではなく、恰も兩親の一緒にゐる眞の情景を記憶のうちに尋ね求めて、これを性交狀況

に融合せしめて了つても出來る。夢の分析によつて確かめられた總てのその情景の詳細は此處に十分に再生せられることが出來る。即ちそれは眞に夏の午後であつた。この子供はマラリヤ病に罹つて寢てゐる時に、兩親は何れも白衣でその傍に居り、かくてこの子供が睡りから醒めた――この情景ならば何等害はなかつた。ところがこれに兩親が××に醉つてゐる樣を見度いものだと言ふ好奇的の願望が後に起つてこれが犬で見た經驗を根據としてこれに附加はり、かく空想せられた情景が、總ての作用を起し來り、余等がその作用については既に論じた如く、恰もその情景が全く眞實であつたかの如く、決して二つの、即ち一つは早期の無邪氣な、一つは後年の、高く印象力あるよせ集めたもの、の二つの成分からではないかの如く現れて來たのである。

斯く考へると直ちに强ひられてゐた程度、信じ易き程度が何倍か樂になつた事は明らかである。もはやこれでは、兩親が子供の面前で、假令その子供は甚だしく幼いとは言つても、性交を行つたと言ふことを假定する必要がない。即ち思はしからぬ表象はこれで無くてもよいことになる。また後年への持ち越しのエネルギイ量 Betrag も低下するから、從つてこの情景は滿

四歳の時の數箇月に關係あることになり、必ずしも見分け難き最初の小兒年代に遡る必要はない。この子供が犬から兩親へと移行せしめ、斯くて父親の代りに狼を恐れるやうになると言ふやうな傾向は少しも珍しいものではない。これ世界觀 Weltanschauung の發達過程にも亦見られるところで、余は「トーテムとタブー」のうちでトーテミスムスの回歸として論じて置いたものがこれである。神經症の原情景は、後年に至つて逆行空想 Zurückfantasieren によつて說明する事が出來るとの學說も、我々の見るところでは、この神經症の子供の年齡がまだ滿四歳と言ふ幼少時であるに拘らずよくあてはまるのを見出すことが出來る。彼はそんなに若かつたが、滿四歳の年からの一つの印象を滿一歳六箇月に受けたと空想する外傷に代理する事が出來た。此の退行現象は決して謎のやうでも無く或は偏してもゐない。此の現出せしめようとした情景は一定の條件を滿さねばならなかつたが、それは例へば兩親の寢室にやはり子供の寢臺があると言ふ條件であつたからこの子供の生活狀態に從つて早期に迄どうしても遡つてその條件を見出さねばならぬわけである。

此處に提出せられた見解の正しいことは、余が他の例に於ける分析的結果から導き來つたも

のを持つて來れば、多くの讀者には正に決定的にわかるであらうと思はれる。非常に小さい時に親の性交を目擊すると言ふ情景は――これが眞の記憶であるか、或は空想であるかは問はず――神經症的の子供を分析することに依つて眞に少しも稀なことではない。恐らくはその觀察は神經症的になつてゐる人にとつても、甚だ屢〻現れることである。恐らくはこの觀察は規則正しい大事にされる記憶の――無意識にも又は意識的にも――うちに屬するものであらう。然し余は斯くの如き情景を如何に屢〻分析によつて發展せしめることが出來たか、それ等は皆同じ特性を有し、この患者に於て有するところを支持したものであるが、而もそれは皆後ろからの×× Coitus a tergo にのみ關係してゐた。これではかり目擊者にとつては陰部の觀察が出來るわけである。從つてもはや疑ふ必要はない。卽ちこれは確かに動物の性交觀察によつて恐らく必然的に生ずる空想に關係がある。然り、更に余は、余の所謂「原情景」と稱したものに於て、この子供が如何にして兩親の性交を妨げたかを遲れながら論じなくては尙不完全なのである。余は此處で、此の如き妨げ方も亦總ての例で殆ど全く同じであることを言ひ度いのである。

余は思ふに、此の病歴の讀者の側から、今や困難なる誹謗を蒙るに違ひない様に思ふ。即ち「原情景」について斯かる見解をよしとして今や定めるとしたならば、余は一體最初の爾く荒唐無稽に見えたあの見解を蹂躪して了ふためには、何と申譯することが出來るであらうかと言ふに違ひない。或は又余は病歴の最初の草稿と此の附加章との間の時間間隔があつたために何か新しい經驗をして余の初めの見解を變化する必要に迫られ、何かある動機からこれに代へようと欲するのに違ひないであらうか、と言ふに違ひない。余はこの誹謗に對して、少しく別のことを言ひ度い。卽ち余は原情景の眞實性の價値についての討論は此處ではまだまだ證據不十分 non liquet と結論しようと考へるのである。此の病歴は倘未だ終つたのではない。更にこれを追求して見ると今は甚だよいと考へてゐることも恐らく動搖せしめられるやうな動機が浮び來るかも知れぬのである。然らば余の「精神分析入門」で余が原空想又は原情景の問題を取扱つた場所に書いてある非難より外には何も殘らないことになるであらう。」

第六、强迫神經症

第三度目に彼は、その發育上全くもう一度變化するやうな決定的な影響を經驗した。彼が滿四歳六箇月になつて彼の刺戟を受け易い狀態、彼の恐怖し易い狀態の尙未だよくなつて了はない時に、女親が彼に何か繪の書いてある物語を敎へよう、さうすれば彼の興味を轉じ、彼をよくすることが出來るかも知れぬと決心した。同時に彼に宗敎を敎へ込めば、これまでの狀態は終るであらうと考へた。成程これは恐怖症狀を無くなした。ところが代りに却つて强迫症狀を生ぜしめて了つたのである。これ迄も彼は容易に寢付けなかつた。それは寢れば、クリスマスの前の夜に夢に見たやうな惡いものを夢に見るだらうと恐れたからである。然し、今やベットにゆく前に部屋の中の總ての聖畫に接吻をし、祈りを捧げ、何度も何度も自分のことや自分の病氣のことについて十字を切らねばならなくなつたのである。

其處で彼の小兒期はこれを概觀的に言うて次の如き各期に分つことが出來る。

第一期　誘惑前期（滿三歲三箇月迄）この間に原情景が經驗せられた。

第二期　性格變化より恐怖夢に至る迄の期（滿四歲六箇月迄）

第三期　强迫神經症及び約滿十歲迄の期

この各期はこれに次ぐ時期に、瞬間的に且蹉跌なしに移り行つたものであつたが、それは事情も本性上から變化し此の患者の本性上にも變化があつたのであつた。然しこの變化にも拘らず、總ての過去のものが尙保持せられてゐること、種々なる流れが同時に存在してゐることが特徵であつた。恐怖の甚だしかつた最惡の狀態は尙未だ消退しはしなかつたが、これは漸次に減退して敬神の時期へと進んだのである。この後の時期では、最早狼恐怖は問題とならなかつた。此の恐怖神經症は、斷續的に經過し、最初の發作が最も長く最も强烈であつたが、第二、第三の發作は八歲又は十歲の時に現れた。之等總ての場合に神經症の內容に明瞭なる關係のある誘因 Verannlassung が存在したのである。母親が自分で彼に聖主物語を話してやつた。又自分でなければナーニャに多數の聖人の繪がついてゐる本を讀ませるやうにした。勿論最も感銘の深かつたのは受難物語 Passionsgeschichte であつた。ナーニャは自ら敬神的で且迷信的であつたから、その

說明も亦さうであつたが、この小批評家はいろいろの抗議や疑問を提出して、彼女はそれに答へを與へねばならなかつた。この兩者の爭ひが彼を感動させ始めた時は、遂に信心家の方にその勝利が來ることになつたわけで、斯くてナーニャの影響もこの神經症に與つて力あるものと言はねばならぬ。

宗教を彼に初めて導入したことの反響について彼の語つた思ひ出は、殆ど余には信じられぬ位のものであつた。それは殆ど余の考へでは、滿四歲六箇月或はやつと滿五歲になつたばかりの子供にはあり得べからざるほどのものであつた。恐らくは彼はこの早期の過去のことを、思ひかへした時の年齡卽ち三十歲の成人にあるものへと移行せしめたものに違ひない。*この訂正は然しこの患者は承知しない。他の多くの判斷に於ても同じやうに彼と我々との間には差異があつたが、彼を說得することは出來なかつた。彼の思ひ出した考へと彼の話した症狀との間の關係は、彼の性的發育に適應して論ずる必要がある。斯くして初めて彼をより多く信用せしめることが出來ると余は考へるやうになつた。余は自身でこれは正に宗教の教義に對する批評と同じで、余自身が子供には信用を置かうとせず、却つて成人の消え失せた小數について信用してゐるわけだと考へ

られる。

＊余は幾度も此の患者の歴史を少くとも一箇年だけずらして見ようと試みて見た。誘惑は滿四歳三箇月に起きた事となり、從つて夢は滿五歳の誕生日に置きかへることが出來る。そしてこの間の時期には何もなかつた事になる。處が患者は疑ひをはらすことは少しも出來ない辭に前說を固執してゐる。尙此の病歷が示す印象及び總てこれに關係ある說明及び結果は一箇年の斯くの如き移動も全く大した意味がない。

依つて彼の思ひ出の材料を先づ竝べて見て、これを理解する道があるかないかを探して見よう。聖主物語を聞いて彼の受けた印象は、彼の言ふところに依ると初めは少しも愉快なものではなかつた。初めは基督なる人物の惱み多き性格に對して反抗したものだから、從つてその物語の總ての部分についても反抗した。殊に彼は父なる神に對して不滿足な批評を向けた。若しも彼が萬能であるならば、人類が斯くも惡しく、斯く他を傷つけ、その爲に地獄に落ちると言ふのは寧ろ父なる神の罪ではないか。人類をよく創るのが當然である。この總ての罪惡、この總ての苦惱に對しては神が責任を負ふべきである。彼は、人若し右の頰を打たれなば左をも亦これに向けよと言ふ掟を攻擊した。又基督が十字架を望んで而も此の苦杯を取り給へと祈つたのを攻擊した。又

十字架に付けられてゐながら何の奇蹟も起らず、彼の神の子たる事を證さないと言ふ點を攻撃した。斯くの如く彼の鋭い洞察力は眼醒めてゐて、此の聖なる傳說に存在する弱點を呵責するところなく發かうとしたのであつた。

然しこの合理的の批評が忽ちにして冥想と懷疑を加へて來た。これは祕密なる感動があつたことを示すものである。この時ナーニャに尋ねた第一の疑問は基督も亦お臀を持つてゐたかと言ふ質問であつた。ナーニャはこれに對して、彼は神であると共に人間でした、故に人間としては人間の有するやうな總てを有し、人間の爲すやうな總てを爲し給うたわけですと敎へた。この答へは彼を少しも滿足せしめなかつた。然し彼は自分で自分を慰めて、お臀と言つても、足につづいてゐるのだからある筈であると自分に言ふのであつた。然しこの考へも何も基督を貶下したのではなからうかとの恐怖を重からしめたわけではない。然し基督は果して小便をしたであらうかと言ふ疑問を思ひ浮べて來た時に再び生じた。この質問は信心深いナーニャの前に提出するのは憚られた。然し、これはナーニャも知らぬだらうと言ふ口實を自分でこしらへた。基督はお酒を何もない所から作つた位であるから、食事をも何ものもないところから作ることが出來たであら

うし、從つて大小便などはしなくても濟んだのであらうと考へた。

此等の穿鑿立ての理解は、既に述べた彼の性的發育に結び付けて見るとよくわかる。既に述べた如く彼の性的生活はナーニヤから拒否されて以來、始まりかけた彼の性的活動はそれに依つて抑壓せられて、やがてサディスムス及びマゾヒスムスへと變化して行つた。彼は小動物を虐めたり苦しめたり、馬の打たれるのを空想したり、他面王位繼承者の打たれるのを空想したりした。* サディスムスは父親との極く古い同一視から來てゐるし、マゾヒスムスでも亦、性的對象として父親を選んだわけである。前性器的統帥編成期、卽ちこの時期から彼の强迫神經症への素質がわかると言うた時期は彼に於ては完全であつた。あの夢の作用に依つて彼は性器的統帥編成へと一歩を進めて行つた。故に彼の父親に對するマゾヒスムス、卽ち父親に對する女性的態度はやがて同性愛へと變化することになる。唯此の夢はその進步を促したのみではなく同時に、恐怖のうちへも入り込ませることになつた。卽ち父親に對する關係は、性的目的としては父親から叱責せられると言ふことであるのが第一であり、第二の目的は女の如く父親から××を受けると言ふ意味であるが、これについては彼の自己愛症的の男性抗議によつて更に原始的な階段に迄逆行せしめ

られたのである。従つて父代理への移行は恐怖として出て來、狼に喰はれることとなつたが、然し此の方法でも決してそれは輕減しなかつたのである。更に複雜な事物關係と考ふべきは、父親を目的とする三つの性的努力が同時存在として保持せられた點である。この二つのものの外に、それは、夢を見て以來無意識的の同性愛となり、神經症のうちには喰人行爲 Kannibalismus の水準に達して、とも角も早期のマゾヒスムス的の態度が尙殘存してゐたのである。總て此の三つの潮流は共に受動的の性的目的を持つてゐた。而も對象は皆同一のもので、又同一の性的衝動であつたが、これ等は相分裂して三つの各異つた水準となつて形作られたのである。

* 特に陰莖に鞭打たれること、三三〇頁を參照。

聖主物語の知識は、今や父親に對して支配的となつてゐたマゾヒスムス的の態度を昇華せしむる可能性を與へた。殊に彼自身降誕祭と同じ日に生れてゐるとの理由で彼は基督となることが出來た。故に彼は少しく大人となつた。——まだ暫くの間尙十分な力說を置くことは出來ないが——とに角一個の人になつた。基督も亦お臀を所有してゐるであらうかとの懷疑のうちには壓迫せられた同性愛的態度がほの見える。何故ならば穿鑿立ては要するに、彼も亦原情景に於ける母親

のやうに、即ち一個の女のやうに父親に必要とせられるであらうかと言ふ質問としてより外の意味は有しないからである。更に他の强迫觀念が存在することがわかつてこの事は倚確められたところである。受動的の同性愛が壓迫せられると、聖者を斯かる期待に結びつけるのは恥づべきことであるとの思考に相當するものとなる。斯くて、彼はその新しい昇華を、壓迫せられたその昇華を源として出て來た添加物から自由にして置かうと努力してゐたのがよくわかる。然し結局これは出來なかつた。

何故彼は基督の受動的性格に對して、及び同時に父親の惡しき取扱ひに對して反抗し、從つて彼のこれ迄のマゾヒスムス的の理想、例へば昇華そのもののうちにあるものすら否定し始めたのであるかは理解することがまだ出來ない。唯我々は此の如き第一の葛籐(支配してゐたマゾヒスムス的の流れと壓迫せられた同性愛的の流れとの間の)から出て來た低下せしめられた强迫思考の出現に對する第二の葛籐は特に好都合のものであつたことを假定するに止まる。何故ならば精神的の葛籐においては總ての反對潮流は、それが假令各〻異つた源より生じ來つたものであつても互ひに加算せられるものであるから。彼の反抗の動機、竝に、そのための宗教に對して與へた

批評等を、我々は新しい打ち開け話から學ぶことが出來るであらう。

聖主物語についての打ち開け話は同時に彼の性的穿鑿心に利益を齎した。それ迄は彼は赤ん坊は唯女から生れるばかりであることを假定する何の根據をも有しなかつた。却つてこれに反して、今まではナーニャは、あなたはお父さんの子供で、姉さんがお母さんの子供ですよと言ひ聞かせてゐたし、この父親に對する近い關係は却つて彼の誇りとするところでもあつた。然るに今や彼は、マリヤが基督の母であると聞いた。其處で子供は女から來るもので、もはやナーニャの言ふことは信を置くに足らぬことがわかつて來た。更に彼はこの物語から、誰が本來基督の父であるかがわからなくなつた。ヨセフがその父であると考へたかつた。何故ならばヨセフはマリヤといつも一緒に住んでゐたのであるから。ところがナーニャは言ふ。ヨセフは唯お父さんと言はれてゐるだけです。そして本來の父親は眞の神樣であるのですと。これは彼にはわからなかつた。彼は唯若しこのことが正しいとしたならば、今まで自分の考へてゐたやうに、父親と息子との間柄は近しいものではないな、と考へるのみであつた。

此の子供は總ての宗敎の底に横たはり居る父親に對する對立兩存的感情を一定度感じてゐたに

違ひない。此の父親關係の不明なことから彼は此の宗教を攻撃したのである。勿論彼のこの抗議もこれを教義の眞實性についての疑惑としては、直ちに止んで了つた。そしてこのために直ちに神そのものに向ふことになつた。神は彼の息子を苛酷に取扱うた。而も人間に對してもよりよく取扱うてはゐない。彼は自分の息子を犧牲として、そして而もこれはアブラハムによつて要求せられたところとちつとも變つてゐはしないではないか。斯くてこの子供は神を恐れることになつたのである。

若しも彼が基督であるとしたならば、神は正に父親である。然し彼に宗教を强制した神は彼の愛してゐる而も彼の奪はれるのを欲せざる父親の正當なる代理ではなかつた。此の父親に對する愛は彼の批評的の洞察力を創つた。彼は神に對して抵抗した。これは父親を把持してゐたいためであつたが、これは本來は新しい父親に對して昔の父親を守る意味でもあつた。彼は父親から離れ去ることの最も困難なる部分を完了せねばならなかつた。

これは昔の、最も早期に明らかにあつた父親に對する愛であつた。彼が神の征服に對するエネルギイと、竝に宗教に對する批評のための洞察力を得來つたのは。しかし他方此の新しい神に對

する敵意も決してそのものとして始まつた行爲ではない。あの恐怖夢の影響として生じて來たところの父親に對する敵意ある衝動に典型を求めたものであり、その敵意の再現を根柢にもつものであつた。此の二つの互ひに相反對する感情衝動は彼の全生涯を支配したに違ひないもので、此處に宗敎についてのテーマの場合にも對立兩存的戰鬪に一致するものがあつたのである。此の戰鬪から何が症狀として生じ來つたかと言ふに、それは、瀆神の思想、彼に迫つて神——糞尿、神——豚と考へしめる强迫等で、此等の思想を肛門愛に關聯して分析して見るとわかる如くこれは正に和解効果 Kompromissergebnis であつた。

これより型式は不明であるが、他の强迫症狀も、やはり確かに、父親に關してゐるもので、早期の偶然事と强迫神經症との關聯を示すものである。

彼の神に對する神聖冒瀆を遂に償はうとした敬神儀式としては祈禱があつた。これは或る一定の條件の下に祭禮的に呼吸をすることであつた。十字を切るに當つて彼はいつも深く吸息し、又は强く息を吐くのであつた。吸息は彼の言葉で言へば彼の靈であつた。これも亦聖靈の役目であつた。彼は聖靈を吸ひ入れて、惡い靈、彼が嘗て聞き又は本で讀んだ惡い靈は吐き出さなくては

ならぬのであつた。[*] 彼は自分の胃潰的思考は皆この惡靈のために來てゐると考へ、これに對して嚴しい懺悔をせねばならなくなつた。然し彼は、乞食や、癈疾や、憐むべき老いた人々を見る時には、強く息を吐き出さなくてはゐられなかつた。而もこの强迫は何か靈と關係があるのかどうか彼にも理解することは出來なかつた。唯彼は、これは自分が此のやうな人々と同じにならぬためにさうしなくてはゐられぬのであると辯解するのみであつた。

＊此の症狀は、後にわかる如く彼の六歲の時彼が本を讀むことが出來るやうになつてから出て來たのである。

此の呼吸、卽ち、同情しなくてはならぬ樣な人達を見た時に息を强く吐き出すのは、六歲以後に始まつたことで、やはり父親に關係があると言ふことは、一つの夢を根據とした分析によつて說明を得ることが出來た。彼は嘗て父親を數箇月の間見なかつた時に、母親が或る日子供等をつれて町に行つて見よう、そして子供等の非常に喜ぶものを見せてやらうと言うた。そして彼女は子供等を或るサナトリウム（療養所）につれて行つたので、彼等は父親を再び見ることが出來た。そして父親は哀れ氣に見えた。そして子供は父親のために悲しんだ。斯くてこの父親が、總ての癈疾、

乞食、貧乏人、總じて彼が息を吐かねばならぬ人々の原典型であることがわかつた。この時の父親は哀れにも人々の恐れる醜貌の原典型であり、多くの人が嘲笑するカリカツールであつた。此の同情態度 Mitleidseintellung はやがて原情景の特別な巨細の事柄に迄遡つて、斯くも後に至つて强迫神經症としてその作用を現し來つたものであつた事が、他の場所で證明せられたのである。

此の如き、息を吐く動機となつた、癡疾にならぬための此の用心は、だから正に父親同一視に當り、而もこれが消極的に變化して行つたものである。ところが此の場合にも彼は父親を積極的の意味で摸寫してゐる點がある。何故ならばこの强い息吹と言ふのは、××の時に父親からよく聞いた雜音の眞似であつたのだから。* 息吹は聖靈であるとすれば感覺的の興奮の證として出て來た事を喜ぶであらう。然し壓迫現象に依つて此の息吹は惡靈になつた。この惡靈に對する他の系譜は、卽ち此の原情景の際に彼の惱んでゐたマラリヤであるものと考へられる。

* これは原情景が眞實性あるものとの假定をなした場合である。

此の惡靈の拒否は明白な禁慾的の特徵に適應してゐる。この禁慾的特徵は尙他の反應として表れて來てゐる。彼が基督は嘗て惡靈を豚の中に宿らしたが、この豚等は谷に轉落してしまつたこ

とを聞いた時に、彼は姉娘が極く小さい時、彼の記憶に依れば海岸の港の傍の岩礁から轉げ落ちたのを思ひ出した。この姉も亦悪靈であり又豚であつたと考へ、これより短縮が出來て、神――豚となつて來た。これは父親自身尙感覺的支配にあつたことを示してゐる。彼が人間の太祖の物語を聞いた時に、彼の運命はアダムとよく似てゐるに違ひないと考へた。ナーニャとの會話のうちで彼はアダムが、一人の女のために不幸に沈んだと言ふのを聞いて驚いた風をした。そしてナーニャに對して、自分は決して結婚はしないと約束した。女との敵意は、姉娘に依つて誘惑されたことから、此の時代迄に强い表現となつて現れて來たのである。この事は恐らく彼の後年の戀愛生活に對しても十分屢〻妨げとなつたに違ひない。故に姉娘は彼に對しては永續的の、誘惑と罪との化身となつた。彼はこれを懺悔して初めて清淨となり、罪より解き放たれた氣がする。然し彼には恰も姉娘が待伏せしてゐて、彼を再び罪の淵に陷入れようとしてゐるやうに見えた。故に彼は用心する暇もなく姉娘との爭闘情景を豫期せねばならず、これによつて再び彼は罪に陷るやうに思はれた。だから彼は誘惑の事實を常に新しく思ひ出すことが必要であつた。この外の冒瀆的思考は、彼の言ふところによると決して懺悔のうちには出て來ないのであつた。

此處で後年の强迫神經症の症狀に、心ならずもつき當つて來た。だからその間に存在するものはとばして了つて、この後年の强迫症について報告した方がよいと思ふ。既に述べた如く、この症狀は、前々から存在した部分は別として、時々增强を受け、或る時の如きは、尙我々には不明のところがあるが、同じ町の一人の子供が死んだ時に、この死んだ子供と同一視をなした事もあつた。彼が十歲になつた頃、彼は獨逸人の家庭教師を得たが、この家庭教師は直ちに彼に非常な影響を與へた。この間に彼のひどい敬神は全く消失して了ひ、決して二度と出て來なくなつたのは興味深いことである。その後彼は、此の教師との間の會話教授の最中に、此の父親代理は敬神に對して何等の價値も置かず、宗教の哲理に對して何等の信を置いてゐないのを氣付いたのであつた。敬神は父親に關係して生じたものであつたから、新しい人ずきの好い父親に依つて全く解消して了つたのである。此のことが更に、强迫神經症の最後の燃え立ちとならずにはゐなかつた。これから强迫は特によく思ひ出され、町に三つの糞の塊が轉がつてゐると彼は必ず聖三位一體を思ひ出さねばならぬと言ふ强迫があつた。彼は又この價値を失ひ去つたものを尙保持しようとの試みをなすことなしでは、衝動に讓步することは出來なかつた。この教師が、小動物を苛

めることはいけないと彼に話したら、彼は此の不都合事を止めて了つた。しかしもう一度毛蟲をふみ躁ることを十分行つてから止めることにしたのであつた。同樣に精神分析的の治療に於ても、いつも一時的の「消極的反動」negative Reaktion が生じて來るのであつたし、叉亂痲を斷つ如き解決の生ずる度毎に、彼は暫く、その作用を症狀の惡化に依つて否定しようと試みるのが常であつた。この事は誰でも知つてゐることで、子供と言ふものは、全く誰でも同じ樣に、禁止されたことに對してこのやうに振舞ふものである。例へば子供等を忍び難い騷ぎをするからと言ふので一度叱りつけたとするに、子供等は禁じられてからもう一度騷ぎをしてから止めるものである。これは子供等は見かけだけでも自由意志で止めたやうにし、禁止を侮つたやうに考へて滿足するためである。

此の獨逸人の教師の影響で、彼のサデイスムスは新しい、よりよい昇華を遂げた、これは近づき來る思春期に相應じて、その時マゾヒスムスに關して上位を贏ち得たのである。彼は此處で兵隊に夢中になつた。兵隊の制服、武器、馬、等のことを考へて、殆ど一日中白晝夢に醉つた。斯くして彼は一人の男の影響のために、彼の受動的の態度から逃がれることが出來、初めて稍正

常の軌道を歩むやうになつた。この教師に愛着することの結果として、但しこの愛着は間もなく捨て去つたが、彼に、家庭的のもの(父親の代理たるもの)に對して獨逸的國家的の要素(醫師、病院、婦人)等を後年の生涯に於て高く評價すると言ふ影響を受けた。やはり治療を受け始めてからの轉授現象が、このことから大いなる利益を受けた。

此の教師に依つて解き放される前の時代に、尙一つの夢があつた。これを彼は治療を受けてゐる間忘れてゐて後で思ひ出したので、余は此處に言及して見度いと思ふ。彼は馬にのつて大きな毛蟲に追ひかけられてゐる夢を見たのである。彼はこの夢は旣に前に述べたことのある教師の來る前の更に早期の時代に見たことのある夢に關係してゐるのであることを知つた。此の早期の夢と言ふのは、惡魔が黑いガウンを着て、直立の體位でゐる夢であつた。この直立の姿は彼にとつては、狼や獅子の場合には非常に驚愕すべきものであつた。ところがこの惡魔は指を伸ばして大きな蝸牛を指さした。彼はこの惡魔は、有名なる詩から引用された魔王 Damon であるのを知つた。其處でこの夢は、非常に行き亙つてゐる像の變形したものであつて、戀愛情景では魔王と言ふと少女を意味することになる。蝸牛は女性の代りであつて、甚だ巧妙なる女性的性的特徵であ

る。此の魔王の描かれた容姿から考へて見るに此の夢の意味は直ちに與へることが出來る。卽ち彼は誰かを慕うてゐるに違ひなく、その人は彼の尙知らざる性交に關する謎を教へてくれる人であるべきで、この時は原情景に於ける父親が、その第一に考へらるべき人である。

更に後の夢については、女性的特徵が、男性的特徵で置きかへられて居つたものもあつたが、これは少し前に起つた或る定まつた經驗に由來してゐた。彼は或る日、田舍の領地で、睡つてゐる農夫の傍を通り過ぎた事があつた。その農夫の傍にその子供も寢てゐた。馬に乘つた人が、この父親を起した。そして何かを言つた。これに對して父親は馬に乘つてゐる人を怒り、これを追ひかけ始めた。其處でこの馬に乘つてゐる人、卽ち彼であつたが、馬を速く驅けさして遠くに逃げた。これに對して第二の思ひ出がある。卽ちこの同じ領地には眞白で全く毛蟲で圍まれた樹木があつたことである。この解釋は斯うである。彼は空想の實現の前に逃避を選んだ。又息子は父親の傍に眠つてゐた事、白い樹木はあの恐怖夢に關係して胡桃の木の上の白い狼を示すために引き入れられたのである。これは彼が初めは宗敎的昇華現象に依つて、ついで軍隊的昇華に依つて尙未だ彼の守つてゐた男に對しての女性的態度に對する恐怖の直接の爆發を意味してゐる。

然し强迫症狀の止んだ後は强迫神經症は何等永續的の作用を最早殘さなかつたと言ふことに對して大きな誤謬があると考へねばならぬ。この過程は批評的研究的反抗に對して、敬神的信仰が勝利を得、その前提として同性愛的態度の壓迫せられたことになる。この二つの因子から共に永續的の害が出て來た。卽ち知的活動は此の第一の大なる敗北以來ひどく傷害せられ、少しも學問をする熱心が出て來なかつた。彼の幼少な五歲の頃の宗敎的敎材を批評的に分解した時のやうな洞察力はその後最早全く無くなつて了つた。あの恐怖夢によつて現れた、强過ぎる同性愛に對する壓迫現象は無意識に對する此の意義深き衝動を保持せしめ置き、それを原始的の目的態度に際しても保たしめ、又それから然らざれば出來たであらう總ての昇華を成就せしめなかつた。依つて此の患者には生活に內容を與へる總ての社會的の興味は缺けてゐる。精神分析學的治療に當つては、此の同性愛の桎梏の解決が初めて出來た時に事物關係はよくなることが出來た。又この場合にも、如何にこの同性愛的リビドの自由になつた部分は——醫師の直接の訓告なしに——生活に對して應用を求めるか、又人間に共通な大きな事業に貼着することを求めるかを共に經驗したのは、甚だ注意すべきことに屬する。

第七、肛門愛及び去勢複合

余はこの小兒性神經症の病歷を、成人の病症を分析してゐる間に、言はばその副産物として得たのであることを此處で再び讀者に思ひ出されるやう望む。この全病歷は綜合することを倘禁じられてゐるのであるから、余はこれを細かい章節に分たねばならなかつたのである。然らざれば困難ならざる業蹟であるが、斯くなさねばならぬ上は自然的限界があつて、記載の平面上非常に廣範に亙る體裁を有することになるのである。だから、余はこの細かい章節だけで、讀者がそれから生きてゐる全貌として綜合し得るやうな提出が出來たならば、それで滿足せねばならぬ。此處に描かれた强迫神經症は旣に繰返して力說した如く、サディスムス的肛門的構成を基礎として成立してゐるものである。然しこれまでは唯そのうちの主なる因子、卽ちサディスムス及びその變化についてのみ論じて來た。肛門愛の關する總ては故意に除外せんとして來た。故に此處にはそれを綜合して述べようと思ふ。

精神分析者は既に永き前より、肛門愛として綜括し得べき多數の本能衝動に、特別の然し決して過剩に評價したわけではない性的生活及び精神活動構成に對する意義を與へてゐることに一致してゐる。同時に又此の同じ源から變形して來た色情 Erotik なるものが金錢の取扱ひ方のうちに重要なる現れを示すこと、卽ち生涯のうちで何でも貴重な物質に心理的興味を藏することで、これは原始的には糞に對して、肛門帶からの生產物に對して生じて來たものであるとなす點に一致してゐる。金錢に對する興味は、それがリビド的のもので、合理的性質のものでない限りは糞尿快感 Exkrementallust に歸し得るものであるとの考へを我々は持つてゐる。又正常の人については、彼の金錢に對する關係が全くリビド的の影響から免れてゐるもの、それを現實的顧慮を拂つて支配してゐるものと考へてゐる。

此の患者にあつては、後年の罹患の時に、此の關係は特別に兇惡な程度に亂れてゐた。ことに彼の獨立不能の、生活不能の大なる原因をなしてゐたのである。彼は實際は父親及び伯父からの遺產で非常に富んでゐた。そしてこの富に相應する樣振舞ふと言ふことに主として非常な注意を拂つた。だから他人が彼をさう認めてやらぬと彼は甚だしく惱むのであつた。然し實際は彼は如

何程所有してゐるか、如何程支出したか、又如何程殘つてゐるかを少しも知らなかつた。だから彼を吝嗇だと言うていいのか、浪費者だと言うてよいのかさつぱり見當が付かなかつた。彼は或る時はさうで又或る時は斯うであつた。決して一定の意圖であると判斷出來る樣に一樣な振舞をしなかつた。或る數多の目立つてゐた特徴により、これについてはあとに述べるが、人は彼を强情な金自慢の男であると思つた。而もこの金自慢の男は彼の富こそ彼の秀でた點であるとなし、金錢に對する興味の外は、感情に對する興味は決して見せた事がないと言ふ印象を與へた。ところが實際は、彼が富んでゐることから他人を評價しなかつた。だから彼は多くの機會に於て、人を補助し同情するやうに見えた。確かに金錢も亦彼の意識的の指定を受けなくなつてゐ、彼にとつては金錢としては意味が無かつたものと考へられる。

旣に余は、後年唯一の同僚であつた姉娘が死んだ時に、急に悲しまなかつたやうな點を、大さう不決斷なものとして感じたと述べた。今や彼は父親より遺された遺産を分けるに及ばなくなつた。彼は靜かにこの事について語ることが出來たのは、彼がさう公然と不人情をしてゐるとは少しも思はないやうであつたのが恐らくは最も著しい點であつた。分析の結果より、彼の名譽は恢

復した。即ち分析によつて、姉娘についての苦痛は唯移行を受けたばかりであること、初めは、彼が富の増加のうちに姉娘に對する代理を見出さうとしてゐたのであることがわかるに至つた。

尙他の場合の彼の振舞は、彼にも亦謎のやうに見える。父親の死後、その遺された財産は、彼と彼の母親との間に分配せられた。母親がこれを管理してゐたのだが、彼の財産要求に、少しも非難するところなく、自由な方法でこれを遇したと彼は自分で自白してゐる位である。ところが、金錢問題についてこの二人の間に取り交はされた交渉は、彼の方からは激しい非難となつた。即ち母親は彼を少しも愛さぬ、彼にはなるべく金をやらぬやうにしてゐるに違ひない、恐らくは母親は金を一人占めするために彼が死ぬといいと思つてゐるだらう、等々の非難を出した。母親は其處で泣いて彼女の私慾なきことを誓つた。彼は初めて耻ぢて彼こそは母について何等考へなしであつたことがわかつたのであつたが、同時に此のやうな同じ情景を恐らく次の機會でも繰りかへすであらうと考へた。

分析によれば、彼にとつては糞は旣に長い間金錢と同じやうな意義があつたことがいろいろの偶然からわかつてゐる。このうちで余は二つだけ此處に記して置かう。或る時、腸がまだわるく

なかつた時に、彼は一度或る大きな都市に彼の貧しい從兄弟を訪問した。彼が別れ去るに當つて、この貧しい親戚を金錢で支持してやらなかつたことを自責したのであるが、この時直ちに、「恐らく生涯で最も激しい便意を催した」と言ふのである。その後二年經つてからこの從兄弟に對して實際に彼は金を貸した。もう一つの例は斯うである。十八歳の時、彼がまだ高等學校の試驗準備をしてゐた頃、一人の友人を訪問して、共通の不安心、卽ち試驗が通らぬ durchfallen かも知れぬと言ふ不安心に對してお互ひに何とかしようと約束した。[*] 二人は結局學校の小使を買收しようと言ふ事になつた。ところがそのためには勿論彼が餘分に分擔せねばならなくなつた。家への歸路彼はつくづく考へた。そして若しも試驗に合格するならば、もつと出してもいい。けれども若しも試驗が通らないやうになつたらと考へてゐるうちに、彼が家の戸口にまだ着かないうちに、別の不始末 Malheur がやつて來て了つたと言ふのである。[**]

* 此の患者は彼の母國語では獨逸語で Durchfall（下痢）と言ふ語を腸の疾患に用ひると言ふことを知らないと話してゐた。

** 此の話し方は此の患者の母國語であるが獨逸語でも同じ意味である。

さて我々は彼がその後年の罹患の時に、甚だ頑固な且いろいろの事情で變化する腸障礙を有してゐたことは既に聞くまでもないところである。彼が余の治療を受けに來た時には、彼は灌腸Lavements をしよつちゆうやつてゐた。これは彼のお供のものがしてやるのであつたが、自然便は殆ど一箇月に一回もない位だと言ふのである。ところが何かある一定のところから突然の興奮が出て來ると、この結果として正常の腸機能が生じて來て、數日の間はつゞくと言ふのである。この時の彼の主訴は、世界が何だかヴェールをかけてゐるやうな感じである。或は自分がヴェールで世の中を隔離されてゐるやうであると言ふことであつた。而もこのヴェールは灌腸によつて腸內容物が外に出て了つた瞬間にとれる。そして初めて健康に、正常になつたやうな感じがすると言ふのである。*

* 灌腸は他人にして貰つても、自分でやつても同じ効果があつた。

此の患者の腸の狀態を診斷した醫師は、此の現象が、官能性の、或は精神的の理由から起るものであることを十分洞察する力のあつた人で、從つてそれは適當な處方を與へたことになる。この外には食事について注意を拂つてゐたが、分析治療の時に至つては殆ど全く自然便がなくなつ

てゐた（但し例の突發的の影響は勿論存在した）。患者は、この頑固な臟器は更に强い鞭撻を與へると益〻惡くなるに違ひないと考へ、一週間に一・二回灌腸をするか下劑をかけるかして排便をなすに滿足した。

余はこの患者の後年の病症について語るのに、その腸障礙に大部の紙面を割いた。この小兒神經症についての研究のプランには加はらぬやうなものに紙面を費したのであるが、これがために は二つの理由がある。第一は本來この腸障礙は小兒神經症以來殆ど變化なくつづいて遂に後年の疾患に迄及んだことであり、第二にはこの腸障礙には、治療の末期に當つて主役が振り當てられたからである。

强迫神經症を分析しつつある醫師に對しては、これは如何なる疑ひの意味があつたか。これは患者に對しては最も强い武器であり、彼の抵抗のための屈强なる材料たるの意味を有する。この疑問が、此の患者にあつては尊敬すべき無關心の陰に隱されて、星霜を經ても尙治療の骨折りにも拘らず、この事は少しも變化なく、これを彼に信ぜしめる何等の方法もなかつた。然ししまひにはこの腸障礙の意義はよくわかるやうになり、余の意圖も定まつた。これはいつも强迫神經症

の根柢に横たはることのあるヒステリイ症の現れである。余は患者に、その腸疾患は引受けて直して見せると約束をした。そしてこの約束と同時に彼の不信をも言ひ聞かせたところ、彼の疑ひは消失して行つた。恰も腸が特にヒステリイ症に親和力を有する臟器である様に「混線」mitsprechen し始めて來たが、やがて數週間の間に、爾く永く變化のあつた機能が遂にその正常の機能を現すやうになつたのである。

さて余はもう一度患者の小兒時代に歸つて見よう。小兒時代は、糞が彼にとつて避け得ざる金錢として意味を有した一時代である。

腸障礙は随分早期に彼には現れて來た。就中最も屢〻現れる、小兒にとつては正常と稱す可き失禁 Inkontinenz があつた。然し此の最も早期の出來事は、病的說明をするに及ばぬことは確かである。唯この事は排便機能と快樂とが誤たず結合してゐたこと、且保持せられてゐたことを知るための證據となる。多くの社會階級では勿論野卑とせらるべきものである肛門に關する駄洒落とか、見せ物とかに對する滿足が、彼にはあつたが、これが後年の疾患の初め迄存續せられてゐたのであつた。

英國人の女家庭教師が來る迄は、彼とナーニャとは同じ寢室に寢て喧嘩をすることが屢〻あつた。ナーニャはこれを說明して、彼が外ですべきことを寢床の中でした。夜は殊にさうであつたと證言してゐる。ところが彼はそれを少しも恥とは思はなかつた。女家庭敎師に對する面あてであると考へてゐた。

一年後（略滿四歲六箇月の頃）恐怖の起つてゐた時に、日中ズボンの中に糞をしたことがあつた。彼はこの時は甚だしく恥ぢてそれを洗つて貰ふまで惱み、彼はもう生きてはゐられないと思つた位であつた。その後これは少し改められたが、その痕跡のあつた事は彼の訴へを追求して見るとわかる。彼は自分はもう生きてはゆかれないと言ふ言葉を誰か他の人に常に言うたことがわかつた。いつか一度母親が母親のかかりつけの醫師に停車場迄ついてゆく時に彼をつれて行つた事があつたが*、母親は道々この醫師に彼女の痛みや、出血やについて訴へた時に同じやうな言葉を言うたのである。だから私はもう生きてはゆけないと思ひます。この子が私を覺え込むまで私は待つことが出來ないと思ひますと。此の訴へを彼は特に彼の後年の疾患の時に何度となく繰りかへした。この事は彼が——母親との同一視を持つてゐたことを證するものである。

＊これが何時であつたかは殆ど決定することが出來ない。然し滿四歳の時のあの恐怖夢の前、恐らくは兩親の旅立ちをした前のことであつたらうと考へられる。

この二つの出來事の間の中間で、その時も、その內容も缺けてゐたことが、彼の記憶から出て來た。それに依ると、嘗てその領地の附近に發した赤痢病にかからぬ樣にこの世話燒の母親が警告を與へたことに依つて恐怖の始まつた事があつた。この警告を聞いた時その何たるかがすぐわかつた。赤痢病にかかると大便のうちに血液が出ることについて甚だしく不安になつて、自分の大便にも恐らく血液がまじつてゐると斷言し、且赤痢病で死ぬことを恐れた。然し診察を受けて、お前は間違つてゐる、恐れる必要はないと言はれた時はこれを信じた。此の恐怖は母親との同一視をなさうがための恐怖で、出血のことは母親が醫師と話してゐるのを聞いたところから來てゐると考へられる。彼の後年の同一視の試み（滿四歳六箇月の）の時には血液のことは缺けてゐる。故に彼にはわからなかつたし、これについて彼は恥ぢてゐたが、彼は死の恐怖について畏れてゐることは彼の主訴のうちには現れてゐ、而も非常に明瞭に現れてゐた。

下腹部に病氣を持つてゐた母親は、當時自分自身に對しても又この子供に對しても機嫌がよく

なかつた。だから彼の怒りつぽいのは母親との同一視によつて、本來母親と同じ意圖から來てゐるものであらうと言ふ點は最も有り得可きことである。

然らば母親との同一視と言ふのは一體何を意味してゐるのであるか。

滿三歳六箇月を以つて始まつた頑强なる失禁と、滿四歳六箇月に至つて、その失禁について甚だしく驚愕したこととの間には、あの夢、即ちこれから彼の恐怖時代の始まつたところの夢があつたわけである。この夢こそは彼に旣に滿一歳六箇月の折に經驗した情景を後ればせながら理解せしめ、性行爲の際の女性の役目について彼に説明をなしたものである。* 排便に對する彼の態度の變化が、此の大きい革命的事件と、殆ど此の頃一緒に降りかかつたのである。母親が醫師に對してもう生きてはゐられませんと訴へてゐた病氣は恐らく赤痢病であつた事は明らかであるが、母親はこれを彼に下腹部、即ち腸疾患である事を話さなかつた。原情景の影響によつて、彼は、母親は父親と實行したことに依つて病氣になつたのであらうとこの間に關係をつけて了つた。** そして自分も血液が便のうちにあるやうならば母親と同じ病氣になるのであらうと恐怖を持つに到つた。これは彼の性的情景のうちの母親との同一視を忌避することであつたが、これと同じ忌避

で彼は正にあの夢から醒めたのであつた。然し此の恐怖は、原情景を後年に至つて改作すること に依つて、自分を母親の場所に置いたこと、從つて父親に對する彼女の關係を羨望して居つた證 據である。女性と同一視出來る臟器、卽ち男性に對する受動的同性愛的態度を現し居る臟器は、 正に肛門帶である。此の部分の機能の障碍は今や女性的の情愛興奮の意義を得て來た。そしてこ れは後年の病氣の間にも同樣に現れて來た。

* 三三五頁參照。

** 此の點については彼は恐らくは誤つてゐないであらう。

さて此の處で我々は一つの抗議を聞くに違ひないと思ふ。この討論は、却つて見かけ上混亂し てゐる部分の說明に役立つことと考へる。彼は夢の過程の間、女性は去勢せられてあること、男 性のやうな陰莖を持つ代りに一つの傷を持つてゐて、この傷が性交に役立つもの、而もこの去勢 こそ女性たることの條件であることを理解した。そしてこの脅威する喪失のために彼は男性に對 しての女性的態度を押しつけられ、恐怖を持つて同性愛的の耽溺から眼覺めたことになる、と余 等は假定して宜しい。性交についての斯くの如き理解が、膣に對する斯かる解釋が、腸を選んで

女性との同一視に資したとしても當然ではないか。恐らくは古く、且去勢恐怖に完全に背馳しはするが腸出口が性交の場であると言ふ見解から腸症狀が出て來ても當然ではないか。

確かに矛盾は存在する。又此の二つの見解は互ひにうまく合はないことはある。だから問題はこの二つがうまく合ふ必要があるかどうかと言ふことになる。我々の怪訝とする點は、我々はどうもいつも無意識的の精神過程を意識的のものとして取扱ひ、この二つの心理系の深く存する區別を忘れ勝ちになると言ふ點にある。

クリスマスの夜の夢を興奮して期待することが、彼にとつて嘗て觀察した(或は嘗て構成 konstruierten した)兩親の性交の像を髣髴せしめた時に、確かに最初に出て來た考へは、古いあの見解卽ち女性の體部のうちで陰莖を受容するのは腸出口であると言ふ見解であつたであらう。彼が滿一歲六箇月の時に此の情景を見てからとより外に何と考へ得たであらうか。*然し今や、四歲迄には新しく經驗したものがある。彼の今までの經驗、卽ち去勢についての今まで得てゐた見解が、この「同一排泄管說」Kloakentheorie に注意し、これに疑問を投げかけて、彼に性の區別の知識、女性の性的役目の理解に近づかしめた。この時彼は、丁度普通小兒が振舞ふ通りに振舞

うた。即ちその說明——性的の或はその他の——を喜び迎へようとしなかつた。彼は新しく知つた事實を捨てた——此の例では去勢恐怖の意圖からそれは來てゐる——そして昔の見解を固執した。彼は膣と腸との關係に對して、後に神に反對して父親に組したと同一の方法及び同一の意圖を示した。新しい說明を捨て去り、古い說を固執した。この古い說と言ふのが、女性との同一視に對する材料を與へるもので、後年これより腸死 Darmtod に對する恐怖が生じ來り、又最初の宗敎的の疑惑即ち基督もお臀を持つてゐるかどうかの如き疑問が生ずることになつた。然し新しい洞察も全く作用が無かつたわけではない。却つて全くこれと反對に、それは特別に强い作用を現した。それは全夢過程を壓迫のうちに保持し、後に意識的の作業として出して來たことである。然しそのために作用は盡きてしまひ、性的問題の決定に對して何等の影響を與へなかつたことになる。腸のために女性の同一視が生れ、この上に去勢恐怖が生じ來つたことは少しく矛盾である、然しこれは唯論理的の矛盾であるだけで、その他の意味ではない。全過程は今や、如何に無意識が働いてゐるかと言ふ點で特色がある。壓迫 Verdrängung は忌避 Verwerfung よりは大分別のものである。

＊若しくは、彼が犬の性交を理解しない間は。

狼恐怖が何から生じたかを研究した時に余は、新しい洞察が性行爲へ及ぼした作用を追求した。今や余等は腸活動の障礙を研究することから、これは古來よりの同一排泄管說を根據としてゐることを發見した。此の二つの立場は壓迫過程に依つて互ひに分別せられる。壓迫行爲に依つて拒絕せられた男性に對する女性的態度は同樣に腸症狀に歸せしめることが出來るもので、甚だ頻發する小兒時代の下痢、便祕、腸痛等となつて現れて來る。後年の性的空想は、正しい性的知識を根基として建てられ來るものであるが、やはり退行的に腸障礙となつて現れ得るものである。然しこのものについては最初の小兒時代以來の糞便の意義の移動を發見するにあらざれば理解し難いものである。*

＊「本能轉換について」全集第七卷參照。

余は旣に何處かで、原情景の內容のうちでまだ一部分だけわからぬものがあるが甚だ殘念であると述べて置いた。それは斯うである。此の子供は遂に大便を排出し、これがために泣き出して兩親の同衾を破つた。此の追加の批評に對しては余が旣に原情景の他の內容について論じたとこ

ろの總てと一致するのである。患者はこのことについて余が構成した結論を承認して、「一時的症狀形成」passagere Symptombildung からこれがわかると答へた。更にもう一つの附加すべき事柄として余の話した、父親は此の妨げに對して不滿足で、不機嫌のために叱責したに違ひないと言ふことは、今や引込めねばならぬ。何故ならば分析の材料はこのために何等の證據をも提出せぬからである。

今余が此處に附け加へた細目は勿論此の情景の他の內容と一列に置くべくもない。これは彼にとつて外よりの印象として、後年再歸することを期待するやうなことには關係がないので、唯子供の本來の反應に過ぎぬものである。これは全史にとつては大した意義はないので、これが實際にその時からあつたことであるか、或は後年になつて此の情景の過程に附け加へられたのであつたかそれはどちらでもよい事である。然し、これ等のものについての見解は疑ふ所はない。これは肛門帶(廣い意味で)の興奮を意味する現象である。他の例でも、同様な方法で、斯かる性交の目擊が尿排出をさせた例がある。成人ではこの様な場合には陰莖勃起が生ずる。此の子供では性的興奮の證として腸排泄を生じたことが、彼の生れつきの性的體質を判斷せしむる根據となる特

徴である。若し子供が直ちに受動的な態度をとるやうだつたら後年男性との同一視よりも寧ろ女性との同一視の傾向が强いことを示すことになる。

彼は他の子供と同様に、その腸内容物を、その第一の卽ち原始的の意義に從つて使用した。糞は子供の最初の贈物 Geschenk、最初の情愛的奉納物で、彼の出し得る身體の一部であるが故に愛人への親切を意味するのである。* これが此の例のやうに强情を表すやうに使用されたのは滿三歲六箇月の時で、女家庭敎師に對する面當てで、この早期の贈物意義の消極的の用ひ方であつた。泥棒が桓根に残してゆく糞の山 Grumus merdae は二つの意味を有するものと考へられる。卽ち嘲笑と、そして退行的に表現せられた辨償の意味である。この意味が益〻高い階梯に到達すれば、早期の意味は却つて消極的に低下せしめられた意味に用ひられるやうになる。壓迫現象は、全く反對の表現をすら有する。**

* 余は信ずるが、乳兒は唯、よく知つてゐる又愛してゐる人物だけなその排泄物で汚すと言ふことは容易に確かめ得ることであらう。見知らぬ人に對しては怒つて了つて斯かることはしない。「性理論への三論文」のうちで余は糞は先づ第一に腸粘膜への自己色情的の刺戟となつて用ひられるものであるこ

とを述べて置いた。これを更に發展せしめると、子供はその場合從ひ度い人か又は氣に入つてゐる人を脫糞のために對象として顧るものであるとなすことが出來る。此の關係は更に進むと、少し年とつた子供は特に贔屓する人物によつて便所につれて行つて貰ひ、放尿を助けて貰はうとするが、これには此處に言ふ滿足もあるものと考へねばならぬ。

＊＊無意識のうちには「否」と言ふことは一つもない。相反對するものが一緒になる。否定は壓迫現象の過程によつて初めて導入せられるのである。

性的發育の更に進んだ階梯にあつては、糞は子供を意味するやうになる。子供は大便と同じやうに肛門から生れて來る。糞の贈物としての意義は容易に斯う變化して來る。殊にそれは女に於て屢〻言はれることであるが、女は男に「一人の子供を贈物にした」と言ふ。然し無意識の常例としては、他面に於て、女性は男から贈物として子供を受ける（姙む）empfangen と言ふ意味もあることを顧みなくてはならぬであらう。

糞に金錢と同じ意味があることは他の方向に於ける贈物意義を示すものである。

此の子供の早期の假托記憶 Deckerinnerung のうちに、クリスマスの夜十分贈物を得る事が

出來なかつたために最初の怒りの發作を起したと言ふ記憶は、その有する深い意義を暴露してゐる。彼の得られなかつたものは性的滿足で、これを彼は肛門に關係せしめてゐたことを示す。夢の前迄の彼の性に對する穿鑿のために正にこの準備が出來てゐたもので、夢の過程の間に、性行爲が子供の生れ出ることの謎を解くことに與つたのであつた。彼は夢の前迄は子供の生れること を好まなかつた。嘗て巢から落ちた小さい鳥の裸子を見たときに、これを人間の生れたばかりの子供かと間違つて身の毛のよだつた事があつた。分析の結果、彼の苛めた總ての小動物、毛蟲、昆蟲、等は彼にとつては小さい子供を意味して居たのであることがわかつた。* 姉娘に對する彼の關係は、丁度年とつた子供が若い子供に對する關係を思はしめるものを多分に含んでゐる。嘗てナーニヤが彼に言うたことがあるが、お母さんはあなたをどんなにか愛してゐるでせう、それはあなたが末子だからですよと言うたのが、彼をしてもう子供があとからは生れて來ない方がよいと望ましめたやうに考へ得可き動機を得た。此の子供があとから生れることに對しての恐怖は、兩親の性交を彼に教へた夢の影響として再び新しく生じて來ることになつた。

* 小さい子供に對して屢〻夢や或は恐怖症の原因となる害蟲についても同斷である。

其處でこの上に更に既にわかつた新しいもう一つの性的潮流を附け加へねばならぬ。これもやはり夢のうちに再生せられた原情景から來てゐる。女性(卽ち母親)と同一視することに依つて、彼は既に父親に子供を贈物する準備が出來た。そして同時に既にこのことを實行してゐる。そして恐らくは再びするであらう母親に對する嫉妬が生じて來た。

贈物意義に共通してゐる出口について廻り道をして、金錢がやはり子供たる意義を供へてくることとなり、このために女性的(同性愛的)滿足の表現を有することになる。此の如き過程は余等の患者にも生じた。卽ち嘗て姉弟二人して獨逸のサナトリウムに行つたとき、父親が二つの大きい紙幣を姉娘にやるのを見た時に生じた。彼は父親と姉娘との間を空想のうちに常に疑つてゐたが、今や彼の嫉妬が眼醒めて來て、姉娘と二人だけになるや忽ち彼は姉娘につつかかり、甚だ猛烈にそのお金の分前をくれと罵りわめいたために、姉娘は泣き乍らお金全部を投げて逃げた程であつた。これは唯に眞實のお金に對して、彼が刺戟を受けたばかりではなく、父親に依る肛門愛的性的滿足を自分で望んだためである。この事があつたため、姉娘が――父親の在世中のこと――死んだ時に寧ろ慰めを得たのである。姉娘の死の報知があつた時に、先づ第一に彼に浮んで

來た考へは、全く次のことより外ではなかつた。即ち今や自分は唯一人子となつた、今や父は自分だけを愛するに違ひない、と。然し、此の如き全く意識的となる考へ方の背景となつてゐる同性愛は、穢い貪慾に變裝した方が、當分非常に心を輕くするほど甚だしいものであつた。

父親の死後母親に對してあの不正なる非難をあびせかけて、母親が金錢のことで彼を誤魔化した、又母親は自分よりも金錢を愛するのだと言うたのも同樣な根據に依る。昔の嫉妬、即ち母親がもう一人の子供を彼よりもよけい愛するかもしれぬこと、及び母親はもう一人の子供を產まうと望んでゐたかも知れぬと言ふ嫉妬が彼をしてこの告訴を强制せしめたもとであり、而も彼自身もこれを止めることは出來なかつたのである。

糞の意義を分析することに依つて今や、神と糞とを結びつける强迫思考は、彼は實際さうとしか考へなかつたが、唯冒瀆の意義を有してゐる許りではなく、外の何かをも意味してゐるのではなからうかと言ふ事を明らかにさして來た。即ち啻に敵意ある嘲罵ばかりではなく、情愛的な傾倒的な潮流をも持つてゐる、即ち眞に和解結果 Kompromissergebnisse であつたのだ。「神――糞」と言ふのはこの提議の短縮であつたであらうが實際の人生ではこれは短縮しない形で現れて

來るのである。「神に糞をする」auf Gott scheissen 或は「神が何かをひり出す」Gott etwas scheissen と言ふのはやはり神に子供を捧げること、或は神から子供を授かるとの意味である。古い、消極的の、卑下されたる贈物の意義と、後年のこれより出て來た子供を意味することとは强迫言語として互ひに結合してゐる。この後者には、女性的情愛が表現に入つて來て、彼の男性たることを斷念する、卽ちそのために女として愛されようとする用意の表現である。だから正にこれと同じ神に對する衝動が、パラノイア症に罹つた樞密顧問官シュレーベルの所での妄想體系のうちには、明瞭なる言葉として出て來てゐたのであつた。*

＊フロイド全集第八卷三五三頁參照。

余が後に多くの患者に於て此のやうな症狀解釋を報告するやうな場合には、余は腸障礙が同性愛的の潮流に役立つために現れて、父親に對する女性的態度として表現せられて來てゐることを更にも一度示すことが出來ると考へる。かくて糞の新しい意義は今や我々をして去勢複合について語り易くせしめて來たのである。

糞柱が色情帶としての腸粘膜を刺戟して、腸粘膜に對して能動的な臟器としての役目を果すや

うになると、これは正に陰莖が膣粘膜に對するやうに振舞ひ、同時に同一排泄腔 Kloake を有してゐた時代にその先例を求めるやうなことになる。糞を他の人物に對する贈物（戀愛よりの）として出すことは、この場合にはだから去勢の典型となる。卽ち自分自身の身體の一部分を自分の愛する他の人のために喪失する最初の機會たるであらう。* 然らざれば自己愛的であつた我が陰莖に對する愛は肛門色情 Analerotik の側から見れば補助として缺くことは出來ぬことになる。糞、子供、陰莖等はだから一樣に身體より取れば取れる單位であるとの概念を無意識的に――經驗の示すところの如く sit venia verbo ――持つてゐるのである。此の如き結合方法からリビド充塡の移動、增强等が行はれるやうになることは、意義の病理學であり、精神分析學に依つて初めて發見せられたものである。

* これと同樣に糞は子供として取扱はれる。

此の患者の初めの頃の去勢問題に對する立場はよくわかつてゐる。彼は去勢を考へず、肛門によつて性交をするものとの立場に留まつてゐた。余があなたは間違つてゐると言ふや否や、此の表現について第二の意義がやつて來たが、彼は、それが何であるかを知らうともしなかつたのだ

と言ふ壓迫現象の意味を示した。このために本來去勢が存在してゐるかどうかについては判斷を與へず、然し、恰もそれが存在せぬかの如く取扱うてゐたことが明らかになつた。此のやうな態度は、然し、決して決定的の意味ではないし又彼の小兒神經症の時代のみに存したものでもなかつた。ところが其の後になつて、彼は去勢を事實として認めたと言ふはつきりした證據が上つて來た。此の點に關しては、彼にはその本態はよくわかつてゐるが、移入や描寫は全く特に困難であるかの如く振舞うた。先づ彼は抵抗し、ついで讓歩した。然しその反動も、他のものを止めさせることは出來なかつた。だから遂には二つの全く相反する潮流が彼のうちに打ち建てられた、その一つは去勢を否定しようとするものであり、他の一つは去勢を認め、自ら女性たることをその代理として、依つて慰めようとするものであつた。然し更に第三のものもあつた。この第三の潮流は最も古い、最も深い、いとも單純に去勢を認めようとする、但し眞に去勢が實在するかどうかの判斷にはまだ疑問があると言つた風な考へであつたが、とに角この古い考へも賦活せられてあつたのである。余は此の患者には彼の五歳の時からある幻覺 Halluzination があつたことを他の場所で述べて置いたがこれについても此處で短かい解説を加へて置かねばならぬ。*

＊精神分析學的治療の間に生ずる、僞りの記憶 fausse reconnaissance（既に一度話したかも知れぬとの記憶 déjà raconté）について。國際醫家精神分析學雜誌第一卷一九一三年（全集では第六卷）

「私が五歳の時に、お庭で私の保姆と胡桃の木の皮を小刀で切つてゐました。この胡桃の木は私の夢の中に出て來たあの木でした。[*] 突然私は名狀しがたい驚きに打たれました。[**] と言ふのは私は自分の小指（右の手か左の手かの）を切つて了つて、唯皮だけでブラブラしてゐるやうに深く切つたのです。痛みはありませんでした。然し非常な恐怖がありました。數歩離れてゐるばかりの保姆さへ呼ぶことが出來ないで、近いところにあつたベンチに腰かけ、指を見ることすら出來ないでぢつとしてゐました。やつと心が靜まつてから指を見たところが指は少しも傷ついてゐませんでした」と。

＊夢の中のお伽話的要素。國際醫事精神分析學雜誌第一卷第二册（全集第四卷）を參照せよ。

＊＊彼はあとで又次のやうに訂正した。「私は木を切つてゐたのではないと信じます。これは恐らくある他の記憶とごつちやになつてゐると思ひます。他の記憶とはやはり幻覺的に虛構されたものですが、私が一つの木の上にメスで傷をつけたところ木から血が流れ出て來たと言ふ幻視でした。」

我々は既に滿四歳六箇月の時述べた聖主物語のことから、彼には確かに强い强迫敬神が入つてゐることを思はざるを得なかつた。だから、此の幻覺は彼が去勢を認めた時期に一致するものと斷ずることが出來る。恐らくこの幻覺が去勢を認めることの一步を記しづけるものであつたであらう。尙又患者の與へた少しの訂正も興味あるものである。彼が「恢復せられたる聖地」Befreites Jersalem に出てくるタッソー Tasso が英雄タンクレド Tancred から聞いたと同じやうなこの恐る可き經驗を幻覺した時に、その意味するところは極めて明らかであつた。即ち此の子供に對しては木は女性を意味するものであつた。だから、彼は父親として木に向ひ、母親からきいたあの出血を見たのである。このことによつて女性は去勢されたものであること、去勢のあとは「傷」が殘ることを認めたわけである。

切斷した指の幻覺の原因となつたものは、彼が後に述べた如く次の如き話から來てゐる。即ち親戚に六本指の子供が生れたが、この多過ぎる指は手斧で切り落したと言ふ話である。女性はだから陰莖を持つてゐない。これは生れる時に陰莖が切り去られたからである。斯くの如く彼は强迫神經症の時代に既に夢の過程で經驗したもの、その時は既に壓迫現象によつて壓迫されて存在

してゐたものを承認したのであつた。基督の古典的な割禮、勿論これは猶太の習慣であるが、聖主物語を讀んで貰つてゐる間又は會話の間に彼にはこの事がわかつてゐたのであらう。

此の時代にはまだ彼の父親が彼にとつて去勢を以つて脅かす威嚇人物となつてゐたことは疑はしかつた。殘酷なる神が（彼はさう叫んでゐた）人間を罪深きものになし、人類を罰するために彼の息子を犧牲にし、且人類の數多の子息達をも犧牲にとるのであるが、この神がその性格を父親に投けたのであるから彼は他方この神に向つて身を防衞せねばならぬと考へた。子供は此處に一つの宗族發生的の系譜を滿たさねばならず、且たとへ彼の個人的の經驗がこれと一致しなくつても、それを成立せしめねばならぬ。彼の經驗した去勢脅威又は去勢の意味付けは、多くは女性から來てゐる。* 然しこの經驗はさう永く保持されなかつた。遂に、父親からの去勢をも恐れるやうになつた。此の點については遺傳が勝利を占めた。偶然的の經驗が負けた。人類の歴史前期に於ては、確かに父親が、刑罰として去勢を用ひ、實際に切斷を行ふことが出來た。强迫神經症の經過中、肉慾的のものの壓迫現象が生ずれば生ずる程、彼には父親が肉慾的活動の本來の代償者で、これを惡い意圖の下に行ふ人であると言ふ風に益ゝ思はれて來るのであつた。**

＊このことはナーニャから聞いた。のみならず他の女性からも更に經驗があつた。

＊＊第四一〇頁の此の證明を參照。

去勢を行ふ人と父親とを同一視することは、強い死の願望に迄高められる、父親に對する無意識的の敵意、及びその反動として現れて來る罪惡感の根源として意義深いものである。[＊]他の神經症者、眞に積極的のエディプス複合に憑かれた、總ての神經症者 Neurotiker の場合の如く彼が然し正常者として振舞つてゐる間はよろしい。このうちで注意すべきところは彼のうちにはこれと全く相反對する潮流の存在すること、卽ち父親は去勢せられてゐて彼の同情を惹いてゐることでわかる。

＊彼の後年の病氣の惱み多き且つグロテスクな病狀に對する彼の關係は、言はば衣服を注文された仕立屋——が顧客に對する關係の如きもので、顧客に對する彼の敬意や臆病、少々ならざるチップを自ら取らんとする試み、仕事の結果に關するいつもの如く拒絕されると言ふ心配の如きものである。

癈疾や乞食を見ると生ずる呼吸儀式はやはり彼にとつては、父親をサナトリウムに訪問した時、病人としての父親に同情したことに歸せられるのであつた。分析によつてこの絲は更に遠くまで

手繰られることが出來た。それは更にはるかに早期で、恐らくは誘惑（滿三歲三箇月）の起つた時よりも前のことであると考へられるが、彼の田舍の領地で一人の貧しい日雇人が家に水を運搬するために雇はれたことがあつた。その男には話しが出來なかつた。彼奴は舌を切りとられてゐるのだと皆が言うてゐたが、恐らくは啞であつたであらう。此の子供は然しこの男を好きで心から同情をしてやつてゐた。この男が死んだ時に、子供は彼を天國に訪問した。* だからこれが彼の同情してやつた最初の癈疾者であつたであらうが、精神分析の結果を綜合し、按排して見るとこれは確かにやはり父親代理であつたと思はれる。

* これは後に至つて恐怖夢として現れて來たものであるが、時はやはり第一の領地内で生じたと考へられる。而もこの夢の天國では天人の間の性交情景が描かれたものであつた。

分析の結果は、もう一人の同情してゐた召使が記憶にあつたことがわかつた。この者についてはこの男は病氣なのか、或は猶太人（割禮されてゐるもの）かどちらかであつたに違ひないと言うてゐた。尙また彼が滿四歲六箇月の時に逢つた不幸 Malheur を洗つてくれた從者も、猶太人であつて、肺を病んでゐて彼の同情を得て居たものである。總てこれ等の人物は父親がサナトリ

ウムにゆく前の時に當るし、從つて深く息を吐くことに依つて此等の悲しみの者との同一視を避けようとした症狀が形成せられる前にあつたことである。ところがこの直後に、分析は突如として一つの夢に返つて來た。そして彼は原情景で××の際に確かに陰莖が消失したことを觀察したと主張するのでつた。このために父親に對して同情が灑がれ、失はれたと思つたものが再び現れて來たことが喜びになつたのである。だから此の情景からはもう一つの新しい感情興奮が得られることになる。同情の自己愛的起原は、文字通りの意味では、此處ではよくわかつてゐない事になる。

第八、原時期からの追加―解決

多くの分析例で、分析が終りに近づいて來ると、突如として思ひ出しの材料が浮んで來て、前には注意深く隱されてゐた記憶材料 Erinnerungsmaterial が、尙保存されてゐることがわかるやうな場合が時々生じて來る。或は又或る時はどちらでもよいやうな調子で、正しからぬヒントを與へてゐるか、少し無駄なことの樣に見えるものでも、あとではこれに醫師がどうしても耳を傾けざるを得ない樣なものが附け加はつて來、遂にはこの當ては僅かしか注意されなかつた記憶斷片が、患者の神經症となつて現れて來てゐる重要なる祕密への鍵であることを知るに至るやうな場合がある。

此の患者も亦初めに、恐怖症が重くならうとした或る時期からの一つの記憶を物語つてゐたことがあつた。彼は黃色い斑のある美しい大きな蝶を追ひかけたことがある。この蝶の大きな羽にはその先端に出つぱりがあつた。――これは燕尾がついてゐるのだ。彼は突然この蝶が一つの木

にとまらうとした時にこの蝶をつかんだ。ところがこの動物に對して恐怖がやつて來て彼は泣いてそれから逃げて來たと言ふのである。

此の記憶は分析の間しよつちゆう出て來た。そしてこの解決を要求したのであつたが永いことうまくゆかなかつた。ところが此のやうな詳細なことはそれ自身のためだけでは記憶のうちに存する筈がないことは勿論假定すべきで、恐らく假托記憶 Deckerinnerung として最も重要なものであるべきで何處かに結合してゐなくてはならぬのである。或る日の事、彼は此の蝶を不圖バーブシユカとか、老いたお母さん、とか言ふ風な名で呼んだ。一體蝶などはいつも女性とか、處女とか言ふ意味があるもので、甲蟲とか毛蟲とかは男の子として使はれる。だからこの事から考へるとこの恐怖情景の場合には或る女性的存在に關係のある記憶が眼覺めて來たものと考へて宜しい。余はその時に、蝶の黃紋は着物のかたの紋を意味するもので、さう言ふ着物をその女が着てゐたものと考へたことを記して置いてもよいのである。このことは唯恰も與へられた疑問を解決せんとして醫師が原則として用ひる組合せに過ぎぬもので、不十分であつた。分析の結果に對して醫師の空想だの暗示だのは責任があるものでこれで誤ることがあるが、その一例として示す可

きものであらう。

數箇月後に、全く別の關聯から患者はこの蝶がとまつてゐる時には此の蝶の羽の開いたり閉じたりしたことを言ひ出した。そしてこのことが何となく無氣味な感じを彼に與へたのであると言うたのである。こんなのは恐らくは女が脚を開いた時に、その恰好は羅馬字のV形となつたことで、このことは旣にその子供の年齢でも學習してゐたものであつたらうと考へられた。然し斯う言ひ切るにはまだ何だか後ろめたいもの、はつきりしないところがあつた。

ところが此處に一つの思ひ付き Einfall が出來て來た。この價値はそれまで何等感じなかつたものであるが、よく考へて見るに、この話のうちに露出せられた聯想過程は、正に小兒性の特色を持つてゐると言ふことだけはよくわかる。小兒の注意にあつては、余も屢〻氣のつくところであるが、靜かに存在することよりも運動の形による方がはるかに注意を引かれるものであるし、且運動と言うても、同じやうな運動を根據として聯想を形作る場合が多いもので、これは成人には見過ごし易く忘られ易いものである。

これは一つの問題として倘永い間そのままとなつてゐた。余は此の蝶の羽の棒狀の突起或は先

端は恐らく陰部象徴としての意義を持つてゐるのではないかと、安價に考へてゐた。

ところがある日のこと、臆病さうに、又不明瞭に記憶の如きものが浮び出て來た。これは恐らく隨分早期のことであらう。保姆がまだ來ないうちで、子守女がゐたころのこと、この子守女は大さう此の子供を愛してゐたものである。この子守女は丁度、母と同じ名を持つてゐた。彼は今でも確かにこの子守女の情愛深さを思ひ出すことが出來る。だからこれは消え去つては了つたが初戀とも言ひ得る話であつた。其處で我々は此處で何か後年重要なるものとなつたであらうものが偶發したに違ひないと考へるのである。

ところが彼はこの記憶をあとで訂正した。この子守女は母親と同じ名ではなかつたらしい。それは間違ひだ、と言ふのである。これは勿論記憶のうちで母親と子守女とをごつちやにしたものであることは確かだ。ところがこの子守女の正しい名前は廻り道をして彼は思ひ浮べることが出來た。そして彼は突如として、第一の領地に居つた時に、或る倉庫があつたのを思ひ出した。この中にはもいだ果物が貯へてあつた。この果物のうちで或る種類の梨が特においしいものであつた。これは大きな梨でその外皮に黄色い紋があつた。この梨はこの子供の母國語でグルーシヤと

呼ばれてゐた。そしてこの名がやはり子守女の名であつた。

さてこれで、追つかけた蝶の假托記憶の陰には、子守女の記憶がかくされてゐたことがわかつた。この黄色い紋と言ふのはその着物のことではなかつた。この子守女が名付けられ、さう呼ばれてゐた果物の名に關係があつた。然し何處にこの子守女に就ての思ひ出を賦括するのを恐怖する根據があつたのであらうか。無作法だが直ぐ次のやうな組合せが思ひ浮ぶ。卽ちこの子守女で初めて彼は小さい子供でありながら脚の運動を見た。そして彼女が脚を羅馬字のV形にあげたまま暫くとどまり、陰部にさはるやうな運動をしたのだと言ふ組合せである。だが、先づこの組合せは、この患者には話さないでおいて、更に出て來る材料を待たうではないか。

この情景に關する記憶は直ぐ出て來た。不完全であつた。然し保持せられて居つた限りでは確かである。グルーシャは床の上にかがんでゐる。その傍に一つのバケツがある。細枝でしばられた短い箒がある。この子供はその傍にゐる。そして子守女が彼をからかつたりやめたりしてゐる。

此處に何か不足してゐるものがあるが、それは次の時に容易に入つて來た。彼は分析治療の最初の月に、ある農夫の娘に强迫性に惚れ込んだことがあるのを話して居つた。この時彼は十八歳

であつたが、このあとで直ぐ後年の疾患に罹つたのだと言ふ。然しその時に、何故か極度に誤魔化してこの娘の名前を打ち開けなかつた。これが唯一つの抵抗であつた。その他については彼は分析的原則については少しも躊躇するところなく従順であつた。然るに彼は常にこの名前だけは言ふのが耻かしい、何故なれば、その名はほんたうに百姓らしい名で、良家の少女は決して持つてゐない名であるからと言うてゐた。終りにこの名もわかつたが、それはマトローナ Matronaと言ふのであつた。これは彼の母國語らしい響がある。彼の耻ぢたことは明らかに當つてゐない。唯事實としては、この戀愛は明らかに低級なる女に向つてなされたものであること、この戀愛を恥ぢるのではないが、彼はその名聞を恥ぢてゐたことだけは確かである。若しマトローナとの冒險が、何かグルーシャとの間の事柄と共通するところありとすれば、彼の恥ぢた事は何かこの最も早期の偶發事に關係あるものと考へられる。

更に彼は他の時に述べたところに依ると、彼はヨハネス・フツス Johannes Huss の物語を聞いた時に、彼はこの物語に全く捉へられて了ひ、彼の注意はヨハネス・フツスの額の髪を燒いた薪の把に奪はれて了つた。このフツスに對する同情の話は今や全く決定的な一つの疑ひを生ぜし

める。余は若い患者の場合には常に見出し、且常に同じやうな方法で說明したことのある疑ひがある。その一つの例では、フッスの運命に戲曲的改作を施して戲曲を書いたと言ふ例であつたが、その戲曲を祕密にせられてゐた戀愛對象が奪ひ去られた日から書き始めたと言ふのがある。フッスは火刑で死んだ。同じ條件を滿たしてゐるものは皆さうであるが、彼はいつも尿失禁者達Enuretikerにとつての英雄であつた。フッスの額の髮を燒いた薪の把を、この患者自身は子守女の箒（小枝の束）とごつちやにしたのであつた。

この材料はグルーシャとの情景の思ひ出のうちの足らぬところを滿たすためには、强ひてやらずとも自然に落ちてくるものである。卽ち彼は子守女が、床を洗ふところを見た時に、部屋の中に小便を漏らして了つた。そして子守女はこれについて確かに去勢脅威の言葉を冗談めいて言うたに違ひないのである。*

* 此處で注意すべき點はこの耻かしがると言ふ反應は不隨意の尿失禁（晝のも夜のも同じ）と極めて密接な關係があるが、誰でも期待する如き大便失禁との關係はないと言ふ事である。この點については經驗上何等の疑ひもない。又尿失禁と火とは關係がある。此の如き反應、この如き關係は人類の文化史から

の沈澱物もあるだらうが、それよりも、神話 Mythus や民族傳說 Folkslore にその痕跡を殘して僅かに保存されてゐるやうなもの總てよりも更に深く達してゐると思はれる沈澱物が存するに違ひない。

さて讀者は何故に余が此の早期小兒期の一挿話を爾く詳しく述べたのであるかが推量せられたであらうか。* この挿話は重要なる結合を原情景と後年の強迫戀愛との間に持つてゐて、これが殆ど彼の運命を決定したものと言うても宜しいもので、正にこの強迫を說明し得可き戀愛條件を導入してゐるものなのである。

* この話は略滿二歲六箇月の時期にあつたものであらう。とすれば、假定上の性交觀察と誘惑との中間にあつたものと考へられる。

彼はこの少女が床の上にかがんでゐるのを見た時には、少女は床を洗ふために忙しく、膝をかがんでお臀を後につき出し、背は水平にしてゐたものだから、彼は、××情景で母親のとつてゐた體位と同じ體位を見たのである。だからこの子守女は彼にとつては母親と同じで、この像を見る每に性的興奮が彼を捉へる。其處で彼は男として、父親が母親に對した時と同じ振舞をすることになるが、その行爲を彼は唯放尿することと理解してゐたに過ぎない。* 斯く考へて見ると床の

上に小便をすると言ふことは本來一種の誘惑の試みで、この誘惑を受けて、少女は、恰もこれを理解したかの如く、去勢脅威を以つて答へたことになるのである。

＊これは夢の前のことである。

原情景から出て來た强迫は、グルーシャとの此の情景に重なつた、そしてその作用を增したのである。然しあとで戀愛條件となつたものは、原情景の影響を示すやうな變化を蒙つてゐる。卽ちこの條件は女性の體位から、斯くの如き體位に於ける女性の活動へと移されてゐる。これは、例へばマトローナとの經驗で明らかとなつた。彼は野原を通つて散歩を試みたが、これは後年の領地であつたことに屬してゐる。この時彼は池の緣に一人のかがんだ農夫の娘を見た。池の中で何かを忙しく洗つてゐたのである。この洗濯娘に彼は直ぐ惚れ込んで、反抗することの出來ぬやうな强さで、彼女の顏をもまだ見なかつたのに拘らず彼は惚れて了つたのである。この少女は、彼にとつてはグルーシャのとつてゐた體位と同じ體位、同じ働きをして彼の前に現れたのであつた。かくて今や我々は、グルーシャとの情景の內容に當る恥かしさが、同時にマトローナの名前と結合があるのは何故かを理解することが出來たのである。

グルーシャ情景の强迫的の影響は、更に明瞭に、惚れ込みのもう一つの發作を、數年後に示してゐる。一人の若い農家の娘が、家の中に召使へてゐた。この娘は彼には永い前から氣に入つてゐたのであるが、彼は自分を抑へて自分に近よらないやうにして貰ひ度いと言うてゐた。ところが或る日のこと、彼女ただ唯一人で部屋に居つた時に彼は自分を忘れて惚れ込んで了つた。彼は彼女が床の上にかがんでバケツと箒を傍に置いて、そして掃除に忙殺されてゐるのを見たのである。これは正に彼の小兒時代のあの子守女と同じである。

彼の生涯に對して甚だ意義深い對象選擇が此のやうに全く定まつて了つたことは、此處には引例しない。更に近い事情を見れば、いつもこの同じ戀愛條件に關係してゐること、及び强迫の出發點としては原情景より、このグルーシャとの情景に及ぶ戀愛選擇がいつも支配してゐることからよくわかるではないか。余は既に前に述べたことがある。此の患者の場合には、戀愛對象の貶下への努力がよく認められることを注意したことがある。これは正に彼におひかぶさつてゐる姉娘の壓力に對して反動として生じ來つたものと考へられる。然し余はその時に此の明らかな性質の動機が(三二二頁參照)唯一つの決定的の動機ではなくつて、純粹の色情的の動機による決定

Determinierung が隱されてゐるのであることを示して見ようと約束して置いた。床を洗つてゐるこの記憶は、全く彼の位置としては貶下した、卽ち子守女が此の動機付け Motivierung を表してゐる。總ての後年の戀愛對象は、皆此の偶然なる狀況によつて最初の母親代理となつた此の唯一人の人物の代理人物であつたのである。患者の蝶に對する恐怖の問題に對する最初の思ひ付きは、後に容易く、少し遠いが原情景の先立つ暗示であることがわかつた(五時)。去勢脅威に關するグルーシャとの關係は或る特に意味の深い夢によつて確かめられたが、この夢は彼自ら飜譯する事が出來たのである。彼は言ふ。私は夢に見ました。或る一人の男が、一つのエスペ Espe を捕へてその羽を割きました、と。エスペとは何であるか？ これで何を考へてゐますかと余が尋ねた。――ふん、これは體に黃色い紋のある昆蟲で、多分は刺すでせう。それはグルーシャを暗示するあの黃色い紋のある梨のことでせう――恐らくウエスペ Wespe (胡蜂)のことでせう。さうは思ひませんか。と余が訂正した。――ははあウエスペと申しますか。私は亦エスペだとばかり思つて居りました。(彼は幾つもの國語を知つてゐたから、象徵作爲 Symptomhandlung に當つて假托 Deckung が出來易いのである)。然しエスペは、私のつもりでは、エス、ペー S.P

つて、この夢は明らかに、彼がグルーシャの去勢脅威に對しての復讐を意味するものである。グルーシャとの情景のうちの滿二歳六箇月の子供の行爲は、よくわかつてゐる原情景の作用から來てゐる。このグルーシャとの情景では彼は明らかに父親を複寫してゐるがこれはその發育傾向の指し示す方向を意味するもので、後年に流石に男性となることを示すものであつた。誘惑に依つて彼は受動的とせしめられたが、これは兩親××の目撃者として用意せられたもので本來のものではない。

余は治療歴のうちから更に次の如き點を擧げ度いと思ふ。グルーシャ情景、即ち余の臆測や架工なしに彼の實際に思ひ出し得る最初の經驗の克伏から、治療の宿題は全く解けたと言ふ樣な印象を與へた事である。この時以來もはや何等の抵抗もなかつた。唯思ひ付きを集め、これを排列すればそれで濟むやうになつた。其處で精神分析療法からの印象に基いて打ち建てられた當初の學說はもう一度その價値を現すことになつた。即ち批評的の興味から、余はこの患者をして他の見解をとらしめようともう一度押し付けをなして見た。然しそれに對しては全く無反應でしかな

かつたのである。グルーシャとの情景は疑ふべくもない。然しこの情景はそれだけでは何の意味もない。然し、後に彼の姉娘から逃れようとする貶下傾向 Erniedrigungstendenz のために、彼の對象選擇が召使ひの娘に投げられた出來事によつて退行現象を生じ來り、かくて力を强められたために意義を生じて來たのである。性交目擊と言ふが、これは彼の後年の空想であつたかも知れぬが、その歷史的の核たりしものは或は害なき灌腸の觀察或は經驗であつたのかも知れぬのである。恐らくは多くの讀者は、此の如き假定を以て最初に余が此の例の理解に近づいて行つたことを知つてゐる。余がこの如き見解を出して見た時に此の患者は余を怪訝な顏をしてながめ、少しく嘲笑的となり、再びこの如き見解には反應して來なかつた。合理化せんとする此の如きやり方に對する余自身の議論は旣に上記のうちに所々に述べて來た筈である。

〔然し、グルーシャとの情景は對象選擇についての此の患者の生涯を決定するやうな條件を含んでゐるのみならず、女性に對する貶下傾向の意義を餘り重く見る弊害を示してゐる。これは余が解決の唯一つの可能なる方法として、夢の直前に見た動物觀察(三九一頁)に何等の思索なしに原情景の導入をすることはいけないと拒否したために、今やこの情景を正しく見ることが

出來るやうになつたのである。此の情景は自發的に患者の思ひ出のうちにあつたもので、何等余の固執したために浮び出たものではない。この情景に歸せらるべき黄色い紋のある蝶に對する恐怖は、この情景が確かに意義深い內容を有してゐることをはじめから示してゐたのであるか、若しくはあとからこの內容に斯くの如き意義を與へたのであるか何れかを示してゐるのである。思ひ出そのもののうちには缺けてゐるが、此の重要なる意義は、この情景について出來た思ひ付きに依つて、竝にこれに結合してゐる結論とから確かに補足する事が出來るのである。蝶恐怖は全く狼恐怖と類似のもので、この兩者の場合、共に、去勢恐怖が先づ第一に、去勢脅威を最初に口に出した人物に對して與へられ、次いで他の人物に移動せられ、この他の人物に對しては宗族發生的の典型がしつかりくつついてゐることを見出される筈である。グルーシャとの情景は滿二歲六箇月の折に存したのであつたが、黄色い蝶との恐怖經驗は確かに恐怖夢の後に起つたことである。去勢と言ふことはあり得可き事であると後に至つて考へたことが、遂に前のグルーシャとの情景から恐怖を發育せしめたのであることは理解するに難くない。然し此の情景だけでは何等動力となるべきもの・眞に有り得可しと思はる可きものを含んでは居

ない。唯單に平凡な個々の瑣事で疑問を起す可き何等の根據ともならぬものである。これはこの子供の空想に歸せらる可き何物をも持つてゐない。これは殆ど不可能と言うてよい。

次に、床に前かがみとなり、雑巾がけをしてゐる少女に向つて立ちながら小便をする子供に何か性的興奮があるとの證據があるかと言ふ疑問がある。此の興奮は前に有してゐた印象の影響から來たのであるとするならば、滿二歲六箇月より前に何か動物についての觀察をなしてゐたもので、これがその原情景となるものであらう。或は又此の狀況は全く責任などはないもので、子供の尿失禁はほんの偶發的のものであつたがこれが後に至つて記憶のうちで性慾化せられ、その後更に同じやうな狀況を意義深いものとして認めたのではないのであるか。

此の點に關しては余も亦何等決定することが出來ない。余は唯精神分析學が既に、この情景から斯かる疑問を提起するに至る迄に進み來つてゐると言ふ事を注意するに止める。余はグルーシャとの情景は分析のうちでこれに歸せられた役目竝に生涯に於てこの情景より出てゐる所の作用等が、何等强制的なものではなく、而も完全に自らを說明してゐることになる事、若しも或る時は單に空想かも知れぬと考へたあの原情景を此處で眞實に存在したものと假定するな

らば、さうなつて來ると言ふことは既に否定し得ないのである。原情景はその基礎に於て何等有り得可からざるものを含んでゐない。これが眞にあり得たものとする假定は、夢の中のシェパード犬を意味づける動物觀察の興奮的影響とも全く矛盾してはゐない。

此の不滿足なる結果から、余は此の問題に嘗て余が「精神分析學入門」のうちで試みた事のある取扱ひ方を應用して見よう。余は先づ原情景が此の患者では眞の經驗であるか或は空想であるか、この點を知り度いと思ふのである。然し他の同じ樣な例を參酌するとこのことを決定するのは大して必要な事ではないと言ふことが出來る。兩親の性交を目擊したと言ふこの情景、小兒時代の誘惑の情景、去勢脅威の情景等は疑ひもなく遺傳せられた不動產、宗族發生的の遺產である。然し同時に此等は個人的の經驗の獲得物でもあり得る。此の患者では姉娘よりの誘惑は、疑ひもなき眞事實であつた。然らば何故に兩親の性交の觀察だけが眞實ではないのであらうか。

さて我々は神經症の原歷史に於て、子供と言ふものは彼自身の經驗がない場合にも此の如き宗族發生的の經驗をも採用することを見て見よう。個人的の眞實の缺けてゐるところを前歷史

的の眞實を以つて滿たすと言ふことは、本來の經驗の代りに豫覺を置くことである。此の宗族發生史的の遺産を認める點について、余はユングと完全に意見が一致してゐる（無意識過程の心理學、一九一七年、これは余の「入門」も影響してゐない年代の論文である）。然し尙未だ個體發生史 Ontogenese よりの說明の可能性が盡きぬ前に、その說明を宗族發生史 Phylogenese から得ようとすることは、余はこれを方法的には正しいとは思はない。何故に人は小兒の早時期も豫感に對して十分用意ありとの意義を與へることを頑强に論難するのであらう。余は宗族發生的の動機や産物自身を說明のために猥りに持つて來ようとするのがわからない。これ等のものは多くの例に於て必ず個人的の小兒時代からも幾分かは存在するものであるのではないか。結局余は此等の嘗て太古の時代にあつた事で、再び獲得し易い wieodererwerb やうな素質 Disposition として遺傳せられてあるものを、個々の場合に、有機的に再び復活するやうな同じ條件が保存されてゐるとするならばこれについて決して驚く必要がないと思ふのである。」原情景と、誘惑との間の中間時に於て（滿一歲六箇月から滿三歲三箇月の間）唖のやうな水運び人が、父親代理として入り來つてゐる事、グルーシャが母親代理として入つて來てゐるのと

同じであつた。余は信ずる、假令兩親に對して何れも召使のものが代償されてゐるとしても此處にもまた貶下傾向ありとするは誤りである。子供は社會的の區別などと言ふものは知らないか或はあつても極く意味がない。若しも兩親と同じやうに愛するものがあれば微賤の者でも兩親竝みに考へるものである。同様に此の傾向は兩親の代理として動物でも亦意義を有するもので、子供には動物の方が微賤だとはならぬのである。此の如き貶下を顧ることなしに、伯父も伯母も兩親代理として採られてゐたことは、此の患者の場合にあつても多くの記憶からわかるところである。

此の時代に當つて、まだ尙よくわかつてゐなかつた一時期が入つてゐる。それは甘いものより外のものは食べようとしなかつた時代で、一體これで成長するであらうかと人々に危ぶまれた時代である。この時、彼は、あなたには食事をいやがつて遂に衰弱で死んで了つた伯父さんがありますよと聞かされた。又あなたも亦三箇月ばかりの年齢の時に非常に重い病氣をした事があり、經帷子まで用意したことがあるほどですよと聞かされた(恐らく肺炎であつたであらう?)。これは彼を恐怖せしめるに十分であつたと見えて彼は食ふことを始めた。これより後の小兒期にあつ

ても、この死の脅威を防ぐために常に彼は責任を感じてゐた。此の死の恐怖、これは人がその時に彼の自衛のために呼び醒ましたわけであるが、これが後年母親が赤痢の危險を警告された時に出て來て、これが後年の强迫神經症の發作の原因となつてゐる(四二四頁)。其處で余等はこの起原及び意義をあとで調べて見よう。

攝食障礙に對しては余は、神經症的疾患の第一の意義を與へ度いと思ふ。故に攝食障礙、狼恐怖、强迫敬神、等と小兒性神經症の完全なる目錄が此處に與へられてゐる。これが、思春期以後に神經症を發病せしめた素質をなしてゐるものであつた。斯く言ふと反對する人もあるであらう。子供には誰にでも斯かる障礙、卽ち攝食不快、或は動物恐怖の如きは現れて來るではないかと言ふであらう。然しこの討論も余にとつては何でもない。余は既に總ての成人の神經症はその小兒神經症の上に打ち建てられる。然しこれは常に神經症となるほど强いものとは言へないし、又殆ど認められぬやうなこともあると言うて置いた。余等が神經症として取扱つて居るもの、卽ち唯後年の生活の作用に依つてのみ來ると言うてゐる神經疾患の見界に對して、小兒神經症infantile Neuroseの理論的の意義は、唯このやうな駁論が存在してゐるだけである。勿論此の

患者はその攝食障礙又は動物恐怖症とに、更に强迫敬神が加はつてゐなかつたならばその履歴は他の子供と決して著しい差はない。故に我々は極く陷り易い誤りを防ぎ得るやうな貴重なる材料には甚だ乏しかつただらう。

分析も遂に此の患者が彼の惱みとして綜括してゐたあの主訴を理解することが出來なかつたとすれば此の分析は不滿足であつたであらう。その主訴と言ふのは卽ち彼にとつては此の世界がヴエールに包まれてゐるやうに思へると言ふのであつた。其處で精神分析學派は、此の言葉は意味なきもの、恐らく偶然に選ばれたに過ぎぬものとの期待は持たない。此のヴエールは破ることが出來る——而も注目す可きは——ほんの唯一つの狀況、卽ち灌腸の結果便が肛門を通りさへすればよいのである。斯くすれば彼は再びよくなる、がほんの短い間だけ世界を明瞭に見ることが出來る。此の「ヴエール」Schleier の意義を解くのは、蝶恐怖を解くやうに同樣に困難であつた。此のヴエールと言ふのは決していつもヴエールと言ふわけではなく、黃昏の感 tenébres であるとも言ひ、又は他の捉へどころのない物の感じであるとも言ふ。

治療から暫く別れることになつた直前に、彼は思ひ出した。卽ち彼は「大福網」Glückshaube

にのつて生れて來たと聞いたことがあると言ふことである。だから彼は[illegible]自分をいつも特別の幸福兒であると信じ、惡は來ないと信じてゐた。ところが淋病にかかつて身體にも重い障礙を殘した時に初めてこの信頼を失つた。此の自己愛症の侮辱は全く彼を打ち碎いた。言はば彼は、嘗て彼に現れた事柄が總てそれから來てゐると考へた。卽ち狼恐怖もそのためであるとし、去勢が可能であると言ふ事實のために生じたことであるし、又淋病は卽ち去勢であると信ずるに至つた。大福網と言ふのは又彼を世界に對して、又彼に對して世界を蔽つてゐる、ヴェールでもある。これは本來は滿たされたる願望空想である。これは又母胎への歸還でもあるし、世界逃避の願望空想でもある。だからこれは次のやうに飜譯せらる可きである。私は生活ではこんなに不幸であります。だから母の胎に歸つてゆかねばなりません。と。（[illegible]）

然らば、此の象徵的な、嘗ては眞に存在してゐたヴェールが、そして灌腸による排便の瞬間に破れると言ふのは一體何を意味するのであるか。これは果して彼の病氣が、この條件で無くなつて了ふと言ふのであるか。綜合して見ると次のやうに答へることが出來る。卽ち、出產のえなが破れると、彼は世界を見る。そして再び生れることになるのだと言ふのである。排便は子供であ

る。子供として彼はもう一度幸福なる生涯に生れるであらうと、言ふのである。だからもう一度生れ度いとの空想、ユングが近頃注意を喚起した、そして彼はこれを神經症者の願望生活では最も優勢な位置を占めると言うてゐるあの空想であつたのである。

これが完成するやうだつたら甚だ宜しいであらう。此の狀況の詳細、及びこの特別なる生活史との强ひられたる關聯への顧慮等が、此の意味付けを更に一歩進めることを必要とせしめる。この再出生 Wiedergeburt の條件は、或る人が彼に灌腸をしてやると言ふ事である。(此の人の役目は後に必要に從つて自分自身で代理して行つた)。これは唯次の如くにしか考へられぬ。卽ち彼は自ら母親に同一視した。そしてその人と言ふのが父親を代理してゐる。灌腸こそは卽ち性交行爲を繰返すことであり、その結果として糞兒 Kotkind――これも亦二度目の彼――が生れるのである。この再出生空想は、だから、男との性的滿足の條件と密接なる關係がある。だからこの飜譯は次の如くになる。今や彼は自分を女性と考へてゐる。だからそれは母親を代理することで、父親に依つて滿足さして貰ふことで、彼に子供が生れることで、斯くて彼の病氣は出て行つて了ふと言ふのである。再出生空想はだから此處では唯同性愛的の、願望空想の振切れ振切れとなつ

た、やつと檢査を通つた生れ代りなのである。

詳しく見れば見るほど斯かる條件にある、この患者にとつては、彼の治癒は唯所謂原情景の狀況を繰りかへすことであることを眞に知ることが出來るであらう。だから彼が母親と自分を區別しようと欲し、旣に永い前より我々の假定して居つた如く、此の情景を自分で作れば彼自身糞兒を有つことが出來ることになる。これで見ると彼は尙ますます、金縛りに逢つた如く此の情景に固定せられてゐる。この情景は卽ち彼の性的生活に對して決定的となつたもの、あの夢の夜に現れて、彼の病氣の初めとなつたものである。ヴエールを引き捩切ることは眼をあけることや窓をあけることとどこか類似してゐる。斯くて原情景が、治癒條件のためには是非共再現せられねばならないのである。彼の訴へにより、或は除外によつてわかつてゐたものは、容易に今や總ての意味を明らかにし得る一つの單位に還元することが出來る。彼は再び母胎に歸らうと願つてゐる、單純に再び生れて來るためにではなく、其處で性交に依つて父親と逢はんがため、そして父親より滿足を得んがため、父親に依つて子供を妊まんがためにである。

初めに思つてゐたやうに父親より生れて來た子供であるために、又父親より性的に滿足を得ん

がために、或は親に一人の子供を贈らんがためには、男性たることを賭けねばならぬ。又これこそ肛門愛と言ふ言葉で表現せられねばならぬ。此等の願望は固く父親にと結びつけられた環であり、此處に於て同性愛が、最も高い、最も深い表現を得來つたことになるのである。*

* これも可能なる一つの副意義、卽ちヴエールは處女膜を意味するとのことは、成程これも性交に依つて破れる。然しこれは、治癒しても正確には癒着せず、且此の患者の生涯に何等の關係もない。この患者に對しては處女たることなどは何の意義もなかつたのである。

余は、この例から母胎空想 Mutterleibphantasie 並に再出生空想 Wiedergeburtsphantasie の起原と意義とに光を投ずることが出來ると信ずる。この前者は屢〻、卽ち此の例にも見る如く父親との結合から出て來てゐる。性交の際に母親と代つて父親をその場所に受取るために母親の胎のうちに、入り度いと願望する。ところが、再出生空想は恐らくはいつも緩和、言はば婉曲法 Euphemismus である。これは母親との近親相姦的の性交の空想、ジルベレルの言葉を用ひれば神祕的短縮 anagogische Abkürzung を緩和するためのものである。この場合には自分を男の陰莖と同一視し、その男によつて代償せしめて母親の××のうちに×れて、この狀況を再現せし

めようと願ふのである。だからこの二つの空想はこれに相當するものの男性的又は女性的の態度に從つて、父親又は母親との性交の願望を表現するものとして、即ち二つの相反する空想であることがよくわかるのである。此の患者の訴へや治癒條件のうちには、この二つの空想、言ひかへれば二つの近親相姦願望が一緒に入つてゐるとの可能性も亦否定し難きところがある。

余は分析に於けるこの最後の結果を、これと相反對する學說からの類型によつて置き換へて見ようとの試みをもう一度やつて見よう。此の患者は、典型的の母胎空想のうちで世界逃避 Weltflucht を訴へてゐる。そして治癒は、典型的なる再出生からしか來ないと考へてゐる。この再生空想を、彼は肛門症狀として著しい素質を持つてゐることで表し來つた。肛門的再出生空想の典型に從つて、彼はこの願望を古代的象徵的 archaisch symbolisch の表現方法でくりかへすとの法則に從つて自分の小兒情景を整理したのである。だからこの症狀は恰も此の如き原情景から出てゐるやうに、これと密接なる關係がある。だから此の全逆行程を辿らねばならぬ。何故ならば彼は或る人生問題につき當り、この解決のためには餘りに怠惰であつたか、或は自分の價値なきことを信用せぬやうな總ての根據を持つてゐ、又自ら此の形成に依つて最もよく逆行を助け得る

と考へたことからである。

若しもこの不幸が、唯、滿四歳の時、祖父から仕立屋と狼の話をきいて、これを契機として彼の神經症の原因となつた一つの夢を見たのみであつて、そしてその夢の意味のために此の如き原情景の假定が必要となつて來たのであると言ふだけであつたならば、總てはよくわかり且すつかりすんでゐると言ひ得るであらう。然し此の如き細かい且觸れ難い事實は、不幸にしてユングとアドレルの學說が示すであらう、緩和を失敗せしめる。事物の示すが如くんば、その原情景が再出生空想の鏡であると言ふよりも逆に、再出生空想こそ原情景からの發出物と余は考へる。尙又患者はその當時、彼の誕生後四年間で、再出生を願望するには餘りに若過ぎると言ふことも恐らく尙假定することが出來るであらう。然し此の最後の討論は余は引込めねばならぬ。何故ならば余の觀察によれば、人は子供を輕蔑してはいかぬものであり、從つて子供等に何を信じたらいいかを知らぬものだからいけないと考へられる。*

* 余は、此の疑問は全分析學上で最も危ない問題であることを附記しよう。余はアドラアやユングの報告について、批評をなさうとは思はぬ。然し分析によつて斷定せられた、忘れ去られた小兒時代の經驗は

――恐らくは餘り早期の小兒期に經驗したものではない！――多くは空想として止まり、この空想は後年の材料から作られること、及び其處ではいつも體質的の動機か又は宗族發生學的に保持せられた素質、これは斯かる小兒期の印象の後作用によつて分析上見出し得るものと信ずるが、さう言ふ素質が假定せらる可きであるとの可能性があるからである。これと反對に、この發表に對して余は何等の疑問もなく、又何等の他の不安定もない。だから後年刺戟により小兒時代へと逆行空想 Zurückphantasieren なすること及びそれを遲れて性慾化すること等を初めて最初に余が言つた時はこれに對して何等の反對者もなかつた。（夢判斷第一版四十九頁、本全集第二卷、及び「强迫神經症例への注意」一九〇八年、全集第三卷三一五頁參照）若し余がそれにも拘らず此の困難なる又有り得べからざる見解を、余自身の見解として把持したのであつたならば、此處に記した例でも、或は他の小兒神經症の例にあつてでもその見解を研究者に押しつけるやうな議論に見えるだらうし、或はその見解を今やもう一度新しく讀者の前に判決を待たうとするやうに見えるであらう。

第九、總括及び問題

上述の分析報告が讀者に此の患者の疾患の發端及び發育について明瞭な像を示すことが出來たかどうかは余にはわからぬ。余はさうでないのを恐れる。然り、余は余の描寫のやり方に對して必ずしも滿足するものではないが、然しそれにも拘らず此處には酌量す可き情狀があることを述べて自ら辯護したいと思ふ。それは未だ嘗て斯くも早期の時期まで描き、精神生活の斯くも深い層に迄迫つたことが無かつたことに問題が存するのである。然のみならず、此の如き問題は、恐れをなして逃避するよりも寧ろ解かさるに如かず、これに對して落膽するものの前には更に一層の危險が伴うてゐるに違ひないやうなものである。だから大膽に、斯かる問題については、人はその力無きことを覺らざるを得ぬことを表明するに如かない。

此の例は特に好都合であつたと言ふわけではない。然し、小兒期に關して報告するところ豐富なる所以は、此の例では小兒を研究するに、その小兒の大きくなつた成人を媒介として研究し得

たることであるが、分析を切れ切れに細分したこと、從つて描寫の不完全なること等はそのために許されねばならぬところである。個人的の特色としては、我々とは一寸違ふ國民性が、感情移入を少しく困難ならしめてゐる。彼の鋭い智性とは相反する彼の愛す可き個性との間の距離、及び勝れた思考方法と、完全に離叛してゐる諸本能との間の距離は、永い準備的の且訓育的の仕事を必要とせしめたもので、從つてこれがために瞥見が甚だ困難であつた。此の例の特色とするところは、同時に描寫に對して最も困難な問題でもあるのであるが、これは患者自身には何等の罪もない。成人の心理學においては、精神的の過程はすべて、意識的と無意識的との二つに區別して而も此の二つを明瞭なる言葉で記載することが出來るので甚だ好都合であつたが子供では此の區別は殆ど不可能である。子供では、何れを意識的とし何れを無意識的とすべきかが全くわからぬので困ることがある。確かに行爲をすつかり支配して居り、その後年の態度から考へて意識的と言うてよいやうなものすらも、子供にあつては無意識である場合が多い。何故であるか。これは見易いところである。それは意識界が子供ではまだ特性を總てそなへてゐないからであつて、これはまだ發育の途上にあり、これを言語表象として現し來る能力を缺いてゐるからである。認識とし

て意識のうちに現出し來る現象と現象との間の、卽ち他の場合では正に我々が責任を負ふべきである取り違へ、或は又假定せられてゐる心理的系統、卽ち余等が或る因習的の呼び方に從つてやはり意識的（BW系）と呼ぶ一系統へ屬せしめてよいかどうかの取り違へ、かかる取り違へは、成人の心理學的記載に當つては何等妨ぐるところはないが、小兒の場合には非常な誤りを來す場合がある。更に又「前意識」Vorbewusstes なるものも此處では餘り役に立たぬ。何故ならば子供の前意識は成人の前意識と必ずしも一致しないからである。故に人は此の暗黑さを明らかに承知してかからねばならぬのである。

此處に記載したやうな例は、精神分析の總ての結果及び總ての問題を討論せしめる機會を與へるものであることは自明のことであらう。これは全く終るところなき永久の研究である。然し唯一つの例から總てを經驗し、總てを決定するなどと言ふことは出來ない。故にその例が最も明らかに示してゐるものだけを利用することを以て滿足せねばならぬ。精神分析學に於ける說明を要する問題は、常に狹く限られてゐる。たとへば著しい症狀形成は、その原因を發見することに依つて說明す可きであるが、そのための心理的の機制とか本能過程とかは說明が出來ないものだか

ら唯記載すれば足るのである。此の二つの過程の説明に關して確立を與へんため、新しい一般論を得ようためには、此の例の如く、よくかつ深く分析せられた數多くの例を研究せねばならぬ。ところがこれはそんなに容易く得られない。各〻個々のものが何年と言ふ永い研究を要する。此の領域の進歩は、だからほんとにゆつくりやるより外はない。數多くの人物を研究し、その心理的の表面をほんの「搔抓」ankratzen するだけで、その底に横たはるものについては、何か哲學的傾向の庇護の下に行ふ思索を代用することで滿足するのは誠に容易でありかつ樂である。又同様に實用的の要求からだけならば此の態度も丁度工合よいであらうが、科學としての要求は何等代用品では滿足されないのである。

余は此の患者の性的發育の綜合的概觀を製圖してみよう。而もこのうちで今は最も早期の證跡から始めよう。このうち最初のものは、攝食快樂 Esslust の障礙である。これについては余はまだ總ての點に於て自制を有しはするが經驗上、これを性的領域の一過程の結果と解釋せんとするものである。余はこれを最初の、認め得可き性的統帥編成即ち所謂貪食的 kannibale 又は口唇的 orale の性的統帥編成となさうとするのである。このうちには性的興奮が攝食本能に原始

的の信頼をなしてゐることが主なる情景をなしてゐるとの意味である。此の時期の直接の表現は期待することは出來ない。然し入り込み來つた流れとしての證は見ることが出來る。この攝食本能が影響を受けるとのことは——勿論この外に何か原因はあり得るが——性的興奮の克服は生物にとつては決して出來ないものであることを注意せしめる。此の時期の性的目的は唯貪食行爲 Kannibalismus 暴食 Fressen ばかりである。此の患者では或る高い階段からの退行現象によつて、恐怖のうちに現れて來てゐる。卽ち狼に喰はれて了ふと言ふ恐怖となつてゐる。だからこの恐怖は父親に依つて性交せられると飜譯をすべきである。更に進んだ年齡、卽ち特に少女では思春期及びその直後に性的拒否が食慾不振 Anorexie となつて現れて來る、一種の神經症が生ずることはよく知られてゐる。この神經症は性的生活の口唇期に關係して說明することが出來るものである。愛撫的發作 verliebter Paroxysmus（卽ち「可愛いいから喰べて了ひ度い」）の昂じた場合及び成人が自ら小兒の眞似手振りをする情愛的の小兒との交際において、口唇的性的統帥編成の戀愛目的が再び出て來る。余はいつか他の所で、此の患者の父親自ら「情愛的の叱責」zärtliche Schimpfen をなしたこと卽ち小さい狼又は犬の眞似をして冗談にお前を喰べて了ふと

脅かしたことがあつたとの臆測を言ひ出したことがある(三四二頁參照)。この患者も此の臆測を彼の著しい轉授の態度によつて確認してゐる。屢〻彼は治療の苦しさから轉授現象へと逃げ去つた。そして彼は喰つて了ふと脅かし、後に總ての他の出來得可き暴行、而も總て情愛的の表現であつた暴行を以つて脅かしたことがある。

言語の用法も亦此の口唇的性期の一定の刻印を長く持つてゐる。例へば彼は「食ひ度くなる」appetitlich と言うて戀愛對象を表現した。又戀人を「おいしい」süss と呼んだ。これと同時に思ひ出すのはこの患者は小さい時に甘いものだけしか食べようとしなかつたと言ふことである。甘いこと、飴等は夢ではきまつて愛撫、性的滿足を意味するものである。

この時期にもやはり恐怖がある(勿論障礙の意味である)。その恐怖は生命恐怖として出て來て、その子供が適當と思つた總ての物に固着することが出來る。此の患者にあつてもこの恐怖は、彼をしてその攝食不快の克服を驅りたてるために、然り、恐怖の超代償を他に放失するために利用せられた。彼の攝食障礙の可能なる源は何であるかと言ふに、若し我々が——既に度々述べたあの假定を基礎として——斯くも多くの後に及ぶ作用が出て來たところの性交觀察は、滿一歲六箇

月の年齢で、確かに此の時期に攝食困難は來たのであることを思ひ出すならば明らかとなる。恐らくは、我々は、これが性的成熟の過程を促進するものであることを假定することが出來るし、かくて直接に、假令不確かでもその作用を繰出したのであつた。

勿論此の時期の症狀、例へば狼恐怖、攝食障礙等は性慾性 Sexualität 及び前性器的統帥編成には觸れずして單純にこれだけでも說明出來ることは余も亦知つてゐる。神經症の證據・及び此等の現象の聯關等を無視しようとする人は亦他の說明法をとるであらうし、余も亦それを妨げようとは思はぬ。此の性生活の初めに關して示されたやうな廻り道以外、何か强制的なものを發見しようとしても、それは甚だ困難である。

グルーシャとの情景（凡そ滿二歲六箇月）は此の小兒の正常なる性的發育の初め或は恐らくはその豫備を示してゐる。例へば父親との同一視、男性たることの代償たる尿色情 Harnerotik 等である。而も此の發育は原情景の影響の下にある。父親同一視は、既に我々は自己愛的のものであるとなした。これを原情景の內容に照して見ると、これは既に性器統帥編成に屬してゐることを否定することは出來ない。男性性器が既にその一役をつとめ始めたが、やがて姉娘の誘惑の影

響の下に更に發達して行つたのである。

然し、この誘惑は單に發育を促進せしめたに止まらず、發育を高度に障礙し、或は轉向せしめたとの印象をも與へる。この誘惑は男性々器の活動はその根柢に於て成立しないやうな受動的の性的目的を與へた。だから最初の外的妨害に當つて、卽ちナーニャの去勢脅威に當つて（滿三歳六箇月）出來てはゐたがこのまだ臆病な性器統帥編成は全く潰えた。そしてその先行段階卽ちサデイスムス的肛門的統帥編成へと退行して行つたのである。その後者は他の子供では、又はこのことがなければ、恐らくは極く輕い徵候だけで經過し行つたであらうところのものである。

サデイスムス的肛門的統帥編成は容易に口唇的の形成としても知られる。對象に對する力づくの筋活動が、この編成の示すところであるが、今はそれが性的目的となつた食食に對する準備行動としての場所を占める。この準備行動はそれ自身目的となる。前の段階に對して新しいところと言ふべきは、この取り上げた受動的の器官は口唇帶から分かたれて、肛門帶に形成せられると言ふ點に存する。生物學的の竝行關係、又は人間の前性器的統帥編成の見解は、多くの動物の種類にあつては、永く存續する制度の遺殘物として此處にそれに近いものが出て來る。探求本能

Forschtrieb が、此等の形成より建立せられるのも此の時期の特徴である。

肛門色情はそれ自身では著しく目立つことはない。然し糞がサディスムスの影響の下に、その侵害意義を捨てて情愛意義を得て來る。サディスムスのマゾヒスムスへと轉化することは一種の罪悪感と共に與つて働き、これは發育の途上に於て性的領域としては他のものに現れて來る。誘惑は性的目的の受動性を持ちながら、更にその影響を持ち續ける。これは今や大部分サディスムスをその受動的反對物たるマゾヒスムスに變化せしめる。この受動性 Passivität の特徴を全く自分の支配に置き得るや否やは疑問である。何故ならば滿一歳六箇月の小兒の性交目撃に對する反應も既に著しく受動的となつてゐる位であるから、性的共同興奮 sexuelle Miterregung は、排便に現れて來るが、これには常に一つの能動的部分を區別することが出來る。その性的努力を支配し、空想のうちに現れて來るマゾヒスムスの外にサディスムスも亦殘つてゐて、小動物に對してその姿を現す。性的好奇心は誘惑以來入り來つてゐて、本質的に二つの問題を取り上げる。卽ち小兒は一體何處から來るか、性器を喪失することは可能であるかどうか、と言ふ二つの問題である。このことは彼の本能衝動の表現と織り交ぜられてゐる。同時に小兒の代表者たる小

動物に對するサディスムス的の傾向となつて現れて來てゐる。
　さて此處迄に略滿四歳の誕生日の近くまでの描寫を試みた。此の時に當つて夢が現れ、滿一歳六箇月の折の性交觀察を遲れながら作用付けたのである。此處で果された過程を我々は完全に理解もしてゐるし、且十分に描き出すことも出來る。都合のよいことは、今は進んだ智的發育があるので理解することが出來ることである。此の像の賦活せられたことは、新しい經驗のやうに作用した。即ち新しい外傷、誘惑にも類ふ可き全く特異な影響として作用した。破れた性器的統帥編成はこの一撃によつて再び生じ來つた。然し夢のうちで行はれた進捗はどれ位だか確かめることは出來ない。然し壓迫現象と同樣に取扱つてもいいやうな一過程が生じたことは確かである。即ち新しい事實の拒否、その代理としての恐怖症の生じたことこれである。
　斯くて、サディスムス的肛門的統帥編成は今や入り來つた動物恐怖症の時期にも尙存續してゐて、恐怖現象のうちに混在してゐる。この子供はだからサディスムス的の活動とマゾヒスムス的の活動とを同時につづけた。然しその活動の一部に對しては恐怖を以て反應する。サディスムスがその反對者に交通することが恐らくは更に進捗を促すのである。

恐怖夢の分析から、結局この壓迫現象は去勢の認識から生ずると考へねばならぬ。新しいものは忌避する。何故ならば新しいものを受取るためには陰莖を犧牲とせねばならぬから。更に注意深く考察をかへれば次の如き事柄が知られる。卽ち壓迫せられたものは性器的意味に於ける同性愛的態度である。而もこの同性愛的態度は去勢の認識から形成せられて來たものであつた。然し、これは無意識のうちに止まり、遮斷せられた深い層中に構成せられてゐる。此の場合の壓迫現象の動力となるものは、性器の自己愛的の男子性であると考へられるが、この男子性は同性愛的性的目的の受動性と永い間葛籐を行つてゐたものである。だから壓迫現象はその男子性の結果である。

此の點から、精神分析學説の一部分に改訂を加へなくてはならぬことになると言ふ。この男子性と女子性との間の葛籐は、卽ち兩性的現象 Bisexualität であつて、却つて壓迫現象又は神經症形成からこそ出て來るものであることを證することも出來ると信ぜられると言ふ。然し此の見解こそ杜撰である。二つの互ひに反對する性的努力のうちで、一つが自我是正 ichgerecht であるならば、他はこの自己愛的興味を侮辱するもの、卽ちだから壓迫現象に陷るものでなくてはならぬ。勿論此の例に於てもその一つの性的努力に加擔して壓迫現象を實際に遂行するものは自我

であるに違ひない。他の例では、男性たる事と女性たることとの間に此の如き葛籐は存在せぬ。此の假定を要求するやうな性的努力と言うては唯一つしかない。而もそれは自我の權力に抗し、そして放逐される。この二つの性慾性自身の間の葛籐よりもはるかに屢〻あるのは、性慾性と道徳的自我傾向との間の葛籐である。然し此の例では斯かる道徳的葛籐はない。だから壓迫現象の動機としての兩性現象の力說は餘りに狹量である。却つて自我と、性的努力（リビド）との間の葛籐で一切の現象を說明することが出來るではないか。

アドラアの建設した「男性抗議」männlicher Protest の學說はこれに對して次の如く言ふ。卽ち壓迫現象はいつも決して男子性の味方となつて行はれるのではなく女子性の味方である。大多數の例に於て自我によつて壓迫せられるのは男子性であると。

此の例に於ける壓迫過程の眞の批判は、この外に自己愛的の男子性に唯一の動機があるとすることは出來ぬ。夢の間に生じ來つた同性愛的態度は、此の子供の自我がその征服を拒否され、壓迫現象によつてこれを防いだほど強いものであつた。此の意圖の補助者としてこれに反する性器が持つてゐる自己愛的男子性が呼び起されてくる。自我からの總ての自己愛的興奮が作用し、且

自我の傍に止まり、リビド的の對象充塡に反對してこれに壓迫現象を向けるのであることは、唯誤解を避けると言ふことにだけでも此處に言うて置く必要がある。

さて、全くそれを鎭めて了ふことが恐らくむづかしいらしいこの壓迫現象の過程についての議論から、成人の場合に夢から與へられる狀態について見て見よう。夢過程の間に同性愛（女性たること）に打ち勝つたものは果して眞に男性たることであるとするならば、既に言はれてゐる男性たることの特徴として能動的性的努力が目立つてゐなくてはならぬ。性的統帥編成の本性が、變化してゐないことや、サディスムス的肛門期がその要素として入つて來て、而もそれが支配的のものとなつてゐることなどは問題ではない。男子性が勝利を得てゐるとしたら、この支配してゐる統帥編成の受動的性的目的（卽ちマゾヒスムス的の統帥編成、必ずしも女性的のものではない）が恐怖を以つて反應してゐると言ふ點にのみ示されてゐる。これでは何等勝利を占めた男性的性的努力とは言へない。やはり受動的のもの、及び又受動的のものに對する抵抗があるに過ぎぬ。

余は、この不慣れな、許容し難い、受動的男性的なるものと受動的女性的なるものとをはつきり區別する事は、讀者に如何なる困難を與へるものであるかを想像する事が出來る。だから繰返し

を厭はずに述べて見よう。夢を見た後の狀態は次の樣な風であつたと考へられる。性的努力は分裂した。無意識のうちでは性器的統帥編成の段階が到達して來た。甚だ强い同性愛が構成せられ、この上に(假に意識のうちで)早期にはサディスムス的であつたが、今はマゾヒスムス的の方が勝つてゐる性的潮流が成立した。自我は性慾性に對する位置を全く變化して、性的拒否を見出し、支配的なるマゾヒスムス的の目的を恐怖を以て彈壓し、深い同性愛的の恐怖症形成を以て反應した、となるのである。だから夢の効果は男性的潮流の勝利と言ふわけではなく、女性的なるもの受動的なるものへの反動である。此の如き反動を男性たる事に歸するのは少し亂暴であらう。自我は何等の性的努力をも有しない。唯自己保存と、その保護とに興味を有するのみである。

さて今や恐怖症について見よう。恐怖症は性器的統帥編成の水準より出て來る。このことは恐怖性ヒステリィ症の比較的單純な機制よりわかることである。自我は恐怖發生によつて、自己の力の及ばぬ、危險として出て來た同性愛的滿足に對して自分を守るのである。だから壓迫現象のうちに見逃し難いその痕跡を見せる。恐れられた性的目的が結合してゐる對象は意識の前では他のもので代理せられねばならぬ。故に父親に對する恐怖とはならずに、狼に對する恐怖として意

識される。恐怖の形成に當つてはその內容のうちにそれは殘つてはゐない。だから狼は後に一定の時期だけ獅子に依つても代られてゐる。動物に對する恐怖症は、仇敵の代理者としての小動物に對するサディスムス的の興奮を以つて、復讐を遂げる。子供には小動物にしか害を與へることが出來ぬから。特に興味深きは蝶恐怖症の原因であつた。これは夢の中で狼恐怖症が發生したのと同じ機制を繰りかへしたものである。偶發的な誘因に依つて古い經驗、卽ちグルーシャとの情景が賦活されて、この情景の含む去勢脅威が、遲れながら作用を現して來た。この情景そのものはそれが生じた時に何等の印象ともなつてゐなかつたのに拘らず。*

*グルーシャとの情景は、既に述べた如く、此の患者の自發的の記憶活動であつた。これがために何等の構成も、何等の刺戟も醫師より與へられたものではない。この情景のうちに存した間隙は、分析によつて滿されたが、若しも分析法の研究方法に値を置いていいとするならば、これも亦少しも勝手のそしりを受けるものではない。此の恐怖症の合理的の說明は唯次の如く言へるであらう。恐怖への素質を有する子供が或る時黃色の紋のある蝶に對して恐怖發作を起したとするも何等異常とするには當らぬことで、これは遺傳せられたる恐怖傾向の結果として生じ來るものであると言へよう。(スタンレイ、ホールの恐怖の綜合

的發生の研究。アメリカ心理學雜誌、第二十五卷、一九一四年參照）。此の原因の知られざる事は恐怖のための小兒的關聯に求める可きもので、偶然に同名が出て來たこと、紋のあることも兩方にあつたこと等が思ひ出されるお伽噺のうちから一つの冒險の空想を構成するために利用されるのである。然し何等差支へのない添物としてついてゐる副景物、例へば雑巾がけ、箒、バケツ等も後年の生活では大いに力を發揮して、永續的の强迫的の對象選擇を決定せしめてゐる。故に此處に至つて蝶恐怖症は捕捉し得べからざる意味を有し來つたのである。實際の事物關係も亦、少くとも同樣に既に余の斷定した如く注目に値するものであつた。だから此の情景を唯合理的見地からのみ說明し盡くさうと言ふことは全く駄目と言はねばならぬ。グルーシャ情景は我々にとつても亦特別に價高いものである。何故ならばこの情景に懸つて餘り確實と言へなかつた原情景についての判斷が出て來たのであつたから。

此の恐怖症の形成に與つたのは、去勢恐怖であると言ひ得る。斯く言ふとも、恐怖が同性愛的リビドの壓迫によつて生じて來たと言ふ見解と何等矛盾するものではない。此の兩方の表現は、共に自我が同性愛的願望衝動からリビドを取り去つて、不定の恐怖でこれを取り換へ、ついで一定の恐怖症へと結合して來たと言ふ過程を示してゐる。去勢恐怖と言うて表現するだけでは唯自

我を鞭撻した動機を示してゐるのみである。

更に詳細に調べることに依り此の患者の最初の疾患（攝食障礙は別として）は單に恐怖症として言ひ現すだけでは盡きない。眞性ヒステリイ症として理解すべきで、恐怖症狀の外に倘轉換現象も入り來つてゐる。同性愛的衝動の一部はこれに關與してゐる器官に固定されるであらう。即ち腸はこの時以來、及び倘後年に於ても同樣にヒステリイ的に親和力ある器官として振舞ふ。無意識的の、壓迫せられた同性愛は、腸のうちに入つて了ふものである。正にこのヒステリイ症の一片が、後年の病氣の解決に非常なる働きをなしたのであつた。

さて今や、遂に複雜なる强迫神經症の理解を試みてみようとする勇氣が缺けてゐてはならぬ。其處でもう一度繰りかへしてこの狀況を見て見よう。一つの支配的なマゾヒスム的なそして壓迫せられた同性愛的性的潮流、これに對してヒステリイ症的の拒否に捉はれたる自我。此の如き狀態が强迫神經症に代つてゆくにはそも如何なる過程があるのであらう乎。

この變化は自發的前進發育に依つては現れてくるものではない。外からの新しい影響がなくてはならぬ。表面に現れた父親に對する關係、卽ちこの時迄狼恐怖症と言ふ表現を持つてゐたもの

が、今や强迫敬神となつて現れて來たと言ふのが見得可き結果であつた。余は、此の患者の場合にはこの過程は明瞭なる證據が、余が嘗て「トーテムとタブー」のうちでトテム動物の神に對する關係に關して提出した斷定から來る。* 余は其處で、神と言ふ表象はトテムの前進發育ではなく却つてトテムには無關係に、然し同一の根源より出て別れて來たものであると決論して置いた。トーテムは卽ち最初の父親代理である。然し神は後に、父親がその人間的形態を得て出て來たものである。此の患者ではこのことがよくわかつた。彼は狼恐怖症のうちには父親代理のトーテム的の時期を持つてゐたが、やがてこれが破れ、彼と父親との間の新しい關係に從つて宗教的敬神の一時期に依つて代られたものである。

* トーテムとタブー、一三七頁、一九一三年(全集第十卷にあり)參照。

此の變化が齎した影響は母親を通して知つた宗教の敎義、聖主物語であつた。この結果は敎育に依つて願望するところと同じものを齎した。サディスムス的、マゾヒスムス的の性的統帥編成は永くつづいたが遂に終りに到達した、そして狼恐怖症は忽ちにして消失し、これに代つて、性慾性の恐怖的拒否が、性慾性の抑壓の高級なる形を以て入り込んで來た。斯くて敬神が子供の生

涯に於て支配的の力を得來つたのである。この如き征服は勿論闘爭なきを得ない。その證據として神聖冒瀆的思想が現れ來り、又その結果として宗教的儀禮の强迫的遂行が固定して來たのである。

此のやうな病的の現象から眼を外らして言ふならば、此の例に於ては宗教は個人の教育として入り來る可き總てを提供してゐると言ひ得るであらう。即ち宗教は彼の性的努力を馴致せしめ、それに昇華作用 Sublimierung を與へ、固い錨を與へ、家族的關係にはこれを取り去り、遂には彼に人類の大なる連帶を眼覺ましめることに依つて孤立の脅威を豫防したのである。斯くて野生的の、直ぐ恐怖を感ずる子供は、社會的となり、道德的となり、教育に感化せられるものとなつて來たのである。

この宗教的の影響の主なる動力は、基督の姿との同一視であつた。これは偶然にも彼の誕生日を等しくしたと言ふ點で特に彼には近かつたものである。此處に彼の父親に對する至大の愛が見出される。これは必然的に壓迫を受けたものであるが、遂には斯く理想的の昇華にその出口を見出したものである。地上の父に捧げようとして得なかつた心の底からの愛を今や神と呼ばれる父

親、即ち基督に捧げることが出來た。人が此の如き愛を生ぜしめ得る道は宗教に依つて初めて指し示された。そしてこれには個人の戀愛努力には必ずつきまとふ罪悪意識も結合してゐない。斯くて初めて、最も深きところにある、既に無意識的の同性性慾として低下せしめられた性的潮流が、そのはけ口を見出すことが出來た。斯くて表面的のマゾヒスム的の努力は、父なる神の命令と榮光のために世の呵責を受けて犠牲となつた基督の受難史のうちに、少しも失ふところなく比較を絶したる昇華作用を受けたのである。斯くしてこのさ迷ひの子に對しても、宗教はその働きを與へ、滿足と、昇華と、肉慾的のものからの拒斥、との混交に依つて、純粹なる精神的の過程、宗教を信ずるものには與へらるべき社會的關係への覺醒を與へたのであつた。

宗教に對する彼の初めの反抗は、三つの異る原因を持つてゐた。第一は、既に例について述べたやうに、その種類を問はず、總ての新しいものから逃がれようとすることである。これは恐怖のうちに一度得來つたリビドの位置をそれを捨てる際に失ふことを嫌ふことと、この新しく入り來つたもので完全なる代理が出來るかどうかに對して信用をしないことからである。これは一つの重要なる、根本的なる心理的特異點で、これについては余は特に性學說への三論說のうちで

定着 Fixierung への傾向と稱したものである。ユングはこの同じものを心理的「惰性」Trägheit と稱し、神經症者の總ての失調のうちでの第一の原因となるものとしようとした。或は誤りであるかも知れぬが、これは更に廣く應用すべきで、神經質の人 Nervöser でなくともその生涯に當つて意義深い役目を演じてゐるものと余は考へる。リビド的の又は他の種類のエネルギイ充塡が、易動性であるか或は難動性であるかは、正常の人々にとつても特別の性格を形作る因であつて、單に神經質の人々にのみあるものではない。而もこれは未だ嘗て正常の人に應用せられた事はなく、恰も素數 Primzahl の如く分ち難きものと考へられてゐた。唯我々は一つだけは知つてゐた。それは心理的充塡の動搖性の特性は年齢と共に著しく減退するものであると言ふ一事である。而もこれは我々にとつては精神分析的影響の及ぶ限界に對する標示針を與へるものである。ところが、此の如き心理的可塑性 Plastizität は普通の年齢範圍にあつてもはるかに廣く持つてゐる人々と、これに反してこれをかなり若い時に全く失つて了ふ人々とがあるものである。これが神經症者にあつても、見かけは全く同じ關係にあつて、他のものでは極めて容易に克服せられるに拘らず、その變化が全く快復し難くなつてゐる人があるのを常に發見すると言ふわけであ

る。だから此の心理的過程の移變に對しても、エントロピイ Entropie なる概念を考へに入れて、この現れ來つたものの恢復形成の程度を測るに用ひたらいいであらうと思ふ。

第二の研究點はこの患者には宗教的教義それ自身はその根柢に於て、神なる父に對する何等明らかなる關係を持たず、却つて對立兩存的態度がある事の證があるが、それはその成立から考へねばならぬやうなものである。此の對立兩存性 Ambivalenz は非常によく發育した彼自身より取り出し、これに鋭い批評を加へたもので、ただ五歲許りの子供には誠に珍しく驚くべきものであつた。しかし、最も意義があつたのは、確かに第三の動機で、この作用あるがため、宗教に對して戰ひがあり、それが病的の結果であるとせねばならぬ點である。卽ち男子性を壓迫した潮流で、宗教によつて昇華したものが、而も尙自由とはならず、却つて一部分は壓迫現象に依つて特別のものとなり、ためにこの部分は昇華が出來なくなつて、本來の性的目的が結合して了つてゐることであつた。これに關係してゐる力は、壓迫せられた部分から、昇華されて居る部分への道を疏通せしめるか、又はそれを自分の方へ引きつけて了はうと努力してゐる。基督なる人格をめぐつての最初の穿鑿立ては既に、此の昇華されたる小兒は、尙無意識のうちでは堅く把持せ

られたる父親との性的關係を滿たすことになるのではないかとの疑問を含んでゐる。この努力の拒否は、見かけは神聖冒瀆的の强迫思考より他の何等の結果をも生ぜしめるべきではなく、よつて神に對する身體的の情愛をその低下せる形式で果すことになるのである。此の和解形成 Kompromissbildung に對する强烈なる防禦鬪爭は、敬神や神に對する純愛やが、豫定されたる出口を其處に見出して總ての活動の强迫的なる遂行へと導かれるのである。遂に然し宗教が勝を占めたが、その本能的の基礎物は、比較を絕する强さを以つてその昇華生產物への固着性を形成して來るのである。同樣に生命には新しい父親代理を齎し、この影響を宗敎に向け、遂には宗教を倒して他のもので代理せしめることになる。更にこれに加へるに興味深きは女性の影響の下に(母親か又は保姆)この敬神が成立し、これに男性の影響が與へられると却つて解放が生ずると言ふやうな合併症が生ずることである。

サディスムス的、肛門的の性的統帥編成を基礎として强迫神經症が成立すると言ふことは、余が他の場所で「强迫神經症への素質について」に於て述べたところを總て確かめるものである。[*]然し强いヒステリイ症の有し來つた要素は、此の例では此の見地からはよくわからぬ。だから余

は此の患者の性的發育への瞥見を完結せしめ、このうちで短かい閃光をその後年の變化に投げて見なくてはならぬ。思春期から彼には、正常と稱してよかるべき强い肉體的の男性的の、性的統帥編成の性慾目的を持つた潮流が生じて來た。そしてその運命は、後年の病氣にかかるまでの間續いた。これも亦直接にグルーシャ情景に結合して居り、この情景からその强迫的な、常に熱し易くさめ易い惚れ込みの性格を引出して居つたもので、尙小兒神經症の殘物として持つてゐる制止 Hemmung と戰はねばならなかつた。女性に對する强制的の發動によつて彼は遂に完全なる男性たることを得た。然し此の性的對象は今からずつと確保するであらうと思はれたが、然し彼はこの所有に安んぜず、何故ならば强い、全く無意識的なる男性への傾倒が、彼の早期の總ての力を擧げて、彼を常に益〻この女性的對象から引き離さんとし、彼をして中間的に女性への關心を驅逐せしめてゐたのである。故に彼は治療に當つて、彼は女で滿足することが出來ず、從つて常に彼には無意識的に同性への關係を何とかこぢつけようとしてその全力を向けねばならぬと訴へてゐる。彼の小兒時代は形式的にこれを總括すれば、能動性と受動性との間の動搖であると表現せられるであらう。そして彼の思春期は彼の男子性を求めての力鬪であり、彼の發病以來

は、男性的努力の對象を求めての爭鬪であつた。彼の病氣の素質は余が「拒絕」Versagung と言ふ論文のうちに書いた特殊例として綜括した神經症的發病型とは一致しない。**が此のやうな分類では尙缺くるところがあるのは注意すべきである。此の場合には性器に於ける器質的の疾患として彼の去勢恐怖を復活せしめ、彼の自己愛症にも亦分裂が來、又彼は運命に依つて特別の個人的の優性があるとの期待を捨てしめること等が同時に一緖にやつて來た。だから彼は自己愛的「拒絕」narzisstische Versagung に罹患したわけである。彼の自己愛症の此の如き超强度は他に性的發育が制止せられてゐるとの徵候とは完全に一致する。卽ち彼の異種性的戀愛選擇 heterosexuelle Liebeswahl が心理的努力のエネルギイを自らのうちに集中出來ないこと、自己愛症に殆ど近い同性愛的態度が、無意識なる力として彼にあつては爾く頑强に主張したこと等はこれとよく一致する。勿論精神分析學的治療と雖も此の如き潮流にとつては、決して瞬間的の劇變などを與へて直ちに正常發育と同樣に癒すなどと言ふことは出來ない。唯その障礙を除き、道を步き得るやうにし、以て人生の影響が、發育を更によき方向に向けることが出來るやうにしてやるだけのことである。

* 國際醫事精神分析雜誌、第一卷、一九一三年、五二五頁（全集第五卷にあり）參照。

* * 精神分析學中央雜誌、第二卷六號、一九一二年、神經症的罹患型式に就て。（全集第五卷にあり）參照。

精神分析學的治療に依つて發見せられたとは言へ、更に明らかにせられたわけではないし又直接に影響を與へたわけでもないが、彼の心理的本質の特別なるものとしては次のやうに綜括することが出來るであらう。既に述べた定着現象の頑強さ、對立兩存的傾向の特別なる形成、及び第三の特徴としては古代的と名付けて宜しかるべき構成、卽ち種々雜多なる、互ひに相反するリビド的充塡を、總てが作用のあるやうにごつちやに保存し得る能力等の點である。この特徴の間の永續的の動搖、その動搖に依つて輕快も、進捗も永い間全く出來なかつた動搖が、此處にはほんの輕く觸れることしか出來ない後年の病像を支配してゐたものであつた。疑ひもなく總てこれ等のものは無意識の特徴のうちの一つ一つであつた。この特徴は彼にあつては意識になりゆく過程を續けて居つたものである。但しこれ等の特徴はその情緒的興奮の結果のみ示し、純粹の病理的領域についてはそれは矛盾と不調和を示す事に於て特に甚だしかつたのである。故に彼の精神生活については、人は古いエヂプトの宗敎のやうな感じを受け取る。だから我々には殆ど表象し

難いもので、即ち最終産物をも、その途中の發育階級にあるものをも同時に保存し、太古の神々や、太古の神々の意義と共に、最新の神々をも持つて居り、これ等が一平面の上に働き、他の方面の發育に於ても一つの深い形像となつてゐるものをも含んでゐるとの感じを受け取る。

さて余はこの病例について余が語らんとするところを終りに近づかしめた。然し尙二つ或は多數の彼が與へてくれた問題を提出するのは特別の意義があると考へる。第一は宗族發生的に持ち來たされた、哲學では「範疇」Kategorien と稱してゐるものの如き人生印象の區別整理に役立つところの模型 Schemata についてである。余はこの如きものは人類文化史の沈澱物であるとの見解を提出して見度い。エディプス複合、これは子供の兩親に對する關係であるがこれは確かにこの模型の一つに屬するもので、この種の最もよき例であらう。經驗が遺傳的模型にあて嵌らない時には、これは空想のうちで改作せられて確かに利用し得可きものとするが、この空想の仕事こそ個々別々のものを追求することである。正に此の如き例は模型なるものが實際存在してゐることを示すことが出來る例である。我々は屢々、この模型が個人的の經驗に打ち勝つものであることを見る。例へば此の例では父親が小兒期性慾の去勢者であり、脅威者となつてゐる。若し

さうでなかつたとすれば全く逆のエディプス複合と見ゆる例である。若し乳母が母親の代りに入つて來てゐ、又は母親と混溶して了つてゐたらこれは他の作用をなしたものと言はねばならぬ。斯く模型について實際の經驗が矛盾するところに小兒性葛籐がその材料を豐富に持つてゐることになるのである。

さて第二の問題はやはりこれと似てゐる問題であるが、比較にならぬやうに意義深いものである。即ち若しも四歳の子供が、二度目に賦活せられた原情景についてとつた態度*を觀察して見れば、然り此の情景の經驗に際して滿一歳六箇月の小兒がなしたはるかに單純な反應を考へ合せて見て、どんな種類であるか定かにはわからぬが、とに角一種の知識が、何かこの理解の準備をなすやうな働きを子供に與へてゐるのではないかとの見解を、强く示してゐるであらう。何處にこれを成立せしめる根據があるかと考へるに、必然的に下の如き表象が出て來る。即ち我々は動物の間に廣く見られる本能的知識 instinktives Wissen なるのを指標として仰がねばならぬと言ふ著しい類推に到達するであらう。

* 余はこの態度は二十年の後初めて言葉に捕捉することが出來たことを考へに入れてゐない。何故なら

ば此の情景から知り得る總ての作用は症狀、强迫等の形で旣に小兒期にあるものであり、永く分析の前にもあつたものであるからである。だからこれを原情景としても考へてもそれはどうでもよい事である。

**新しく余は此處で力說せねばならぬ。卽ち此の如き考察は勿論夢や神經症が小兒時代にはないものとすれば餘計なことであると。

此の如き本能的の能力を人類の場合にもありと假定すれば、これが性的生活の過程に對しては全く特別に適用せられるとしても又、假令それが唯性的生活にのみ限るなどと言ふことであつても驚くには當らぬのである。此の如き本能的なるもの Instinktives が無意識の核であり、第一次的の精神活動であるとしたならば、後年に至つてこれから獲得的の人類認識が生じ來つてこれに君臨し、恐らくは力を有する總てのより高い精神過程もこれに歸せられるのであらう。壓迫現象と稱するは此の如き本能的の段階への復歸であり、又人間は神經症になり易い性質に、爾く大なるこの新しい獲物を算するであらうし、神經症の可能性によつて早期の本能的の前段階なるものの存在が信じ得るであらう。早期小兒期の夢の意義は、それが此の無意識に材料を提供し、これ

より後の發育によつてもそれが消失し去るのを妨げられてゐる點に存在するのである。

余は亦、遺傳的の宗族發生的に得られた精神生活のうちの動機を力說すべき、これと同樣なる思考が、種々なる方面より言はれ得ることを知つてゐる。然り、余は人間には、精神分析學的價値に一つの場所を與へる用意があつたのだとすら思ふのである。此等の思考は、若しも精神分析學が遺傳せられたものの痕跡の上に正しい審判法廷の特徵を嚴守することにあり、これが後に個人的の獲得の堆積に依つて推しのけられるのであるとするならば、余にとつては初めて許容されるものとなるのである。*

*〔一九二三年になつて追加〕余は此の病歴に述べられた個々の出來事の年代記を、此處にもう一度綜括して置き度い。

誕生。　クリスマスの日

滿一歲六箇月。マラリヤ病。兩親の××を目擊。又は兩親の同衾を目擊、これは後に性交空想として現れて來た。

滿二歲六箇月の少し前。 グルーシャとの情景。

滿二歲六箇月。 兩親が姉娘と旅に行つたと言ふ假托記憶。この假托記憶では、彼はひとりナーニャと留守したもので、グルーシャも姉もゐなかつたと言ふ。

滿三歲三箇月の少し前。 母親が醫師に見て貰うたこと。

滿三歲三箇月。 姉娘による誘惑の初め、これより後幾何もなく、このことについてナーニャより去勢脅威を受く。

滿三歲六箇月。 英國女の家庭教師。性格變化の初め。

滿四歲。 狼の夢。恐怖症の成立。

滿四歲六箇月。 繪本の影響。强迫神經症の發病。

滿五歲の少し前。 指を喪失した幻覺。

滿五歲。 第一の領地より移轉。

滿六歲より後。 病める父親を訪問。

滿八歲 滿十歲︶ 强迫神經症の最後の發作。

余の此の描寫から、患者が露西亞人であることは容易く知られるであらう。余は此の患者を全治として余の保護より去らしめて、數週にして豫期せざりし世界大戰が勃發した。そして戰爭の幾盛衰が、主力隊をして南露に侵入せしめた時に、初めて二度目に彼を見た。此の時彼はウイーンに來り、治療の終つた日の直後に、自分を醫師の影響よりどうかして離さうとの努力が湧き上つて來たことを報告した。尙數箇月の治療により尙未だ打ち勝たれてゐなかつた轉授現象の殘りの部分が征服せられ、それ以來、患者は戰爭によつてその祖國も財產も、又總ての家族的係累も奪はれて了つたが、自らは正常健康の人として感じ、且罪過なく振舞ふやうになつた。恐らくは彼の貧乏となつたことも、その罪惡感の滿足によつて、健康の恢復を確立するに與つて力あつたことであらう。

異常性慾の分析

昭和八年八月三十日印刷
昭和八年九月四日發行

譯著者 林髞 小沼十寸穗

發行者 北原鐵雄
東京市神田區今川小路二ノ一

印刷者 宮下桃太郎
東京市淀橋區戸塚町一ノ一〇九

定價金貳圓

發行所 東京市神田區今川小路二ノ一
アルス
電話九段 二一七五番 二一七六番
振替東京二四八八八番

Freud

Narzissmus Homosexualität Sadismus Masochismus und Infantile Neurose

異常性慾の分析

FREUD

異常性慾の分析

フロイド著

林髞・小沼十寸穂訳

ARS

フロイド精神分析大系

最近の學界を悪魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學說『精神分析』とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜在意識の摘抉である。

こは……神と悪魔とを同時に忌憚なく暴露し人間内奥の眞を示す新しき哲學である。

こは……勃起恐怖、中絕性交、潜在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪悪意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

フロイド精神分析大系

フロイド精神分析大系は始祖フロイドの全集により其の全學說を譯出せるもの、その譯者は悉く我が學界の最高權威者！　現代において求め得べき最適者のみであります

第一卷　ヒステリー
ヒステリー研究・ヒステリーの病理
醫學博士　安田德太郎

第二卷　夢判斷（上）
第三卷　夢判斷（下）
學習院教授　東京帝大講師　新關良三

第四卷　日常生活の異常心理
東北帝大教授　醫學博士　丸井清泰

第五卷　戀愛生活の心理
リビド說・文化的性道德と近代生活・戀愛生活ノ心理
醫學士　新潟?學士　木村顯吉

第六卷　快感原則の彼岸
快感原則の彼岸・集團心理
廣島文理大教授　文學博士　久保良英

第七卷　精神分析入門（上）
第八卷　精神分析入門（下）
醫學博士　安田德太郎

第九卷　洒落の精神分析
醫學博士　正木不如丘

第十卷　藝術の分析
レオナルド・ゲーテ・シエークスピヤ・ミケランゼロ
獨大教授　篠田英雄
文學士　濱野修

第十一卷　トーテムとタブー
トーテムとタブー・精神分析運動史
大倉高商講師　關榮吉

第十二卷　幻想の未來
幻想の未來・素人分析・自傳
東京帝大教授　文學博士　木村謹治
新潟高校教授　内藤好文

第十三卷　超意識心理學
慶大助教授　醫學博士　林髞

第十四卷　戰爭と死の精神分析
浪速高校教授　菊池榮一
文學士　石中象治

第十五卷　異常性慾の分析
慶大助教授　醫學博士　林髞
醫學士　小沼十寸穗

今後の文藝、美術、哲學、凡そ人生活を基礎とする萬般の諸問題は精神分析に依つてのみ解釋される。心の不可思議、性の祕密を知らんとする人は讀め！

赤刷は既刊

豫約に非ず選擇隨意